福翁自伝

福翁自伝

福澤諭吉

青空文庫

目次

幼少の時 4
長崎遊学 21
大阪修業 37
緒方の塾風 56
大阪を去て江戸に行く 88
始めて亜米利加に渡る 98
欧羅巴各国に行く 116
攘夷論 130
再度米国行 152
王政維新 162
暗殺の心配 205
雑記 216
一身一家経済の由来 235
品行家風 265
老余の半生 281

慶應義塾の社中にては、西洋の学者に往々自から伝記を記すの例あるを以て、兼てより福澤先生自伝の著述を希望して、親しく之を勧めたるものありしかども、先生の平生甚だ多忙にして執筆の閑を得ずその儘に経過したりしに、一昨年の秋、或る外国人の需に応じて維新前後の実歴談を述べたる折、風と思い立ち、幼時より老後に至る経歴の概略を速記者に口授して筆記せしめ、自から校正を加え、福翁自伝と題して、昨年七月より本年二月までの時事新報に掲載したり。本来この筆記は単に記憶に存したる事実を思い出ずるまゝに語りしものなれば、恰も一場の談話にして、固より事の詳細を悉くしたるに非ず。左れば先生の考にては、新聞紙上に掲載を終りたる後、更らに自から筆を執てその遺漏を補い、又後人の参考の為めにとて、幕政の当時親しく見聞したる事実に拠り、我国開国の次第より幕末外交の始末を記述して別に一編と為し、自伝の後に付するの計画にして、既にその腹案も成りたりしに、昨年九月中、遽に大患に罹りてその事を果すを得ず。誠に遺憾なれども、今後先生の病いよ〳〵全癒の上は、兼ての腹案を筆記せしめて世に公にし、以て今日の遺憾を償うことあるべし。

明治三十二年六月

時事新報社　石河幹明　記

幼少の時

福澤諭吉の父は豊前中津奥平藩の士族福澤百助、母は同藩士族、橋本浜右衛門の長女、名を於順と申し、父の身分はヤット藩主に定式の謁見が出来ると云うのですから足軽よりは数等宜しいけれども士族中の下級、今日で云えば先ず判任官の家でしょう。藩で云う元締役を勤めて大阪にある中津藩の倉屋敷に長く勤番して居ました。夫れゆえ家内残らず大阪に引越して居て、私共は皆大阪で生れたのです。兄弟五人、総領の兄の次に女の子が三人、私は末子。私の生れたのは天保五年十二月十二日、父四十三歳、母三十一歳の時の誕生です。ソレカラ天保七年六月、父が不幸にして病死。跡に遺るは母一人に子供五人、兄は十一歳、私は数え年で三つ。斯くなれば大阪にも居られず、兄弟残らず母に連れられて藩地の中津に帰りました。兄弟五人中津の風に合わず扨中津に帰てから私の覚えて居ることを申せば、私共の兄弟五人はドウシテも中津人と一所に混和することが出来ない、その出来ないと云うのは深い由縁も何もないが、従兄弟が沢山ある、父方の従兄弟もあれば母方の従兄弟もある。マア何十人と云う従兄弟がある。又近所の小供も幾許もある、あるけれどもその者等とゴチャクチャになることは出来ぬ。第一言葉が可笑しい。私の兄弟は皆大阪言葉で、中津の人が「そうじゃちこ」と云う所を、私共は「そうでおます」なんと云うような訳けで、お互に可笑しいから先ず話が少ない。

夫れから又母は素と中津生れであるが、長く大阪に居たから大阪の風に慣れて、小供の髪の塩梅式、着物の塩梅式、一切大阪風の着物より外にない。有合の着物を着せるから自然中津の風とは違わなければならぬ。着物が違い言葉が違うと云う外には何も原因はないが、子供の事だから何だか人中に出るのを気恥かしいように思て、自然、内に引込んで兄弟同士遊んで居ると云うような風でした。

儒教主義の教育夫れから最う一つ之に加えると、私の父は学者であった。普通の漢学者であって、大阪の藩邸に在勤してその仕事は何かというと、大阪の金持、加島屋、鴻ノ池というような者に交際して藩債の事を司どる役であるが、元来父はコンナ事が不平で堪らない。金銭なんぞ取扱うよりも読書一偏の学者になって居たいという考であるに、存じ掛もなく算盤を執て金の数を数えなければならぬとか、藩借延期の談判をしなければならぬとか云う仕事で、今の洋学者とは大に違って、昔の学者は銭を見るも汚れると云うて居た純粋の学者が、純粋の俗事に当ると云う訳けであるから、不平も無理はない。ダカラ子供を育てるのも全く儒教主義で育てたものであろうと思うその一例を申せば、斯う云うことがある。私は勿論幼少だから手習どころの話でないが、最う十歳ばかりになる兄と七、八歳になる姉などが手習をするには、倉屋敷の中に手習の師匠があって、其家には町家の小供も来る。其処でイロハニホヘトを教えるのは宜しいが、大阪の事だから九々の声を教える。二二が四、二三が六。これは当然の話であるが、その事を父が聞て、怪しからぬ事を教える。幼少の小供に勘定の事を知らせると云う

のは以ての外だ。斯う云う処に小供は遣て置かれぬ。何を教えるか知れぬ。早速取返せと云て取返した事があると云うことは、後に母に聞きました。何でも大変喧ましい人物であったことは推察が出来る。その書遺したものなどを見れば真実正銘の漢儒で、殊に堀河の伊藤東涯先生が大信心で、誠意誠心、屋漏に愧じずということ許り心掛たものと思われるから、その遺風は自から私の家には存して居なければならぬ。一母五子、他人を交えず世間の附合は少く、明ても暮れても唯母の話を聞く許り、父は死んでも生きてるような者です。ソコデ中津に居て、言葉が違い着物が違うと同時に、私共の兄弟は自然に一団体を成して、言わず語らずの間に高尚に構え、中津人は俗物であると思て、骨肉の従兄弟に対してさえ、心の中には何となく之を目下に見下して居て、夫等の者のすることは一切咎もせぬ、多勢に無勢、咎立をしようと云ても及ぶ話でないと諦めて居ながら、心の底には丸で歯牙に掛けずに、云わば人を馬鹿にして居たようなものです。今でも覚えて居るが、私が少年の時から家に居て、能く饒舌りもし、飛び廻わり刎ね廻わりして、至極活溌にてありながら、木に登ることが不得手で、水を泳ぐことが皆無出来ぬと云うのも、兎角同藩中の子弟と打解けて遊ぶことが出来ずに孤立した所為でしょう。

厳ならずして家風正し今申す通り私共の兄弟は、幼少のとき中津の人と言語風俗を殊にして、他人の知らぬ処に随分淋しい思いをしましたが、その淋しい間にも家風は至極正しい。厳重な父があるでもないが、母子睦じく暮して兄弟喧嘩など唯の一度もしたことがない。のみか、仮

初にも俗な卑陋な事はしられないものだと育てられて、別段に教える者もない、母も決して喧しい六かしい人でないのに、自然に爾うなったのは、矢張り父の遺風と母の感化力でしょう。その事実に現われたことを申せば、鳴物などの一条で、三味線とか何とか云うものを、聞こうとも思わなければ何とも思わぬ。斯様なものは全体私なんぞの聞くべきものでない、矧や玩ぶべき者でないと云う考を持て居るから、遂ぞ芝居見物など念頭に浮んだこともない。例えば、夏になると中津に芝居がある。祭の時には七日も芝居を興行して、田舎役者が芸をするその時には、藩から布令が出る。芝居は何日の間あるが、藩士たるものは決して立寄ることは相成らぬ、住吉の社の石垣より以外に行くことならぬと云うその布令の文面は、甚だ厳重なようにあるが、唯一片の御布令だけの事であるから、俗士族は脇差を一本挟して頬冠りをして颯々と芝居の矢来を破て這入る。若しそれを咎めれば却て叱り飛ばすと云うから、誰も怖がって咎める者はない。町の者は金を払て行くに、士族は忍姿で却て威張て只這入て観る。然るに中以下俗士族の多い中で、その芝居に行かぬのは凡そ私のところ一軒位でしょう。決して行かない。此処から先きは行くことはならぬと云えば、一足でも行かぬ、どんな事があっても。私の母は女ながらも遂ぞ一口でも芝居の事を子供に云わず、兄も亦行こうと云わず、家内中一寸でも話がない。夏、暑い時の事であるから涼には行く。併しその近くで芝居をして居るからと云て見ようともしない、どんな芝居を遣て居るとも噂にもしない、平気で居ると云うような家風でした。

成長の上、坊主にする前申す通り、亡父は俗吏を勤めるのが不本意であったに違いない。左れば中津を蹴飛して外に出れば宜い。所が決してソンナ気はなかった様子だ。如何なる事にも不平を呑んで、チャント小禄に安んじて居たのは、時勢の為めに進退不自由なりし故でしょう。私は今でも独り気の毒で残念に思います。例えば父の生前に斯う云う事がある。今から推察すれば父の胸算に、福澤の家は総領に相続させる積りで宜しい、所が子供の五人目に私が生れた、その生れた時は大きな療せた骨太な子で、産婆の申すに、この子は乳さえ沢山呑ませれば必ず見事に育つと云うのを聞て、父が大層喜んで、是れは好い子だ、この子が段々成長して十か十一になれば寺に遣て坊主にすると、毎度母に語ったそうです。その事を母が又私に話して、アノ時阿父さんは何故坊主にすると仰っしゃったか合点が行かぬが、今御存命なればお前は寺の坊様になってる筈じゃと、何かの話の端には母が爾う申して居ましたが、私が成年の後その父の言葉を推察するに、中津は封建制度でチャント物を箱の中に詰めたように秩序が立て居て、何百年経ても一寸とも動かぬと云う有様、家老の家に生れた者は家老になり、足軽の家に生れた者は足軽になり、先祖代々、家老は家老、足軽は足軽、その間に挟まって居る者も同様、何年経ても一寸とも変化と云うものがない。ソコデ私の父の身になって考えて見れば、到底どんな事をしたって名を成すことは出来ない、世間を見れば茲に坊主と云うものが一つある、何でもない魚屋の息子が大僧正になったと云うような者が幾人もある話、それゆえに父が私を坊主にすると云たのは、その意味であろうと推察したことは間違いなかろう。

門閥制度は親の敵如斯なことを思えば、父の生涯、四十五年のその間、封建制度に束縛せられて何事も出来ず、空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ。又初生児の行末を謀り、之を坊主にしても名を成さしめんとまでに決心したるその心中の苦しさ、その愛情の深さ、私は毎度この事を思出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。私の為めに門閥制度は親の敵で御座る。

年十四、五歳にして始めて読書に志す私は坊主にならなかった。坊主にならずに家に居たのであるから学問をすべき筈である。所が誰も世話の為人がない。私の兄だからと云て兄弟の長少僅か十一しか違わぬので、その間は皆女の子、母も亦たった一人で、下女下男を置くと云うことの出来る家ではなし、母が一人で飯を焚いたりお菜を拵えたりして五人の小供の世話をしなければならぬから、中々教育の世話などは存じ掛もない。云わばヤリ放しである。藩の風で幼少の時から論語を続むとか大学を読む位の事は遺らぬことはないけれども、奨励する者とては一人もない。殊に誰だって本を読むことの好な子供はない。私一人本が嫌いと云うこともなかろう、天下の小供みな嫌いだろう。私は甚だ嫌いであったから休でばかり居て何もしない。手習もしなければ本も読まない。根っから何にもせずに居た所が、十四か十五になって見ると、近処に知て居る者は皆な本を読で居るのに、自分独り読まぬと云うのは外聞が悪いとか恥かしいとか思たのでしょう。夫れから自分で本当に読む気になって、田舎の塾へ行始めました。どうも十四、五になって始めて学ぶのだから甚だきまりが悪い。外の者は詩経を読むの書経を

読むのと云うのに、私は孟子の素読をすると云う次第である。所が茲に奇な事は、その塾で蒙求とか孟子とか論語とかの会読講義をすると云うことになると、私は天稟、少し文才があったのか知らん、能く其の意味を解して、朝の素読に教えて呉れた人と、昼からになって蒙求などの会読をすれば、必ず私がその先生に勝つ。先生は文字を読む許りでその意味は受取の悪い書生だから、之を相手に会読の勝敗なら訳けはない。

左伝通読十一偏その中、塾も二度か三度か更えた事があるが、最も多く漢書を習たのは、白石と云う先生である。其処に四、五年ばかり通学して漢書を学び、その意味を解することは何の苦労もなく存外早く上達しました。白石の塾に居て漢書は如何なるものを読だかと申すと、経書を専らにして論語、孟子は勿論、すべて経義の研究を勉め、殊に先生が好きと見えて詩経に書経と云うものは本当に講義をして貰て善く読みました。ソレカラ蒙求、世説、左伝、戦国策、老子、荘子と云うようなものも能く講義を聞き、その先きは私独りの勉強、歴史は史記を始め前後漢書、晋書、五代史、元明史略と云うようなものも読み、殊に私は左伝が得意で、大概の書生は左伝十五巻の内三、四巻で仕舞うのを、私は全部通読、凡そ十一度び読返して、面白い処は暗記して居た。夫れで一ト通り漢学者の前座ぐらいになって居たが、一体の学流は亀井風で、私の先生は亀井が大信心で、余り詩を作ることなどは教えずに寧ろ冷笑して居た。広瀬淡窓などの事は、彼奴は発句師、俳諧師で、詩の題さえ出来ない、書くことになると漢文が書けぬ、何でもない奴だと云て居られました。先生が爾う云えば門弟子も亦爾う云う気になるのが

不思議だ。淡窓ばかりでない、頼山陽なども甚だ信じない、誠に目下に見下して居て、「何だ粗末な文章、山陽などの書いたものが文章と云われるなら誰でも文章の出来ぬ者はあるまい。仮令い舌足らずで吃た所が意味は通ずると云うようなものだなんて大造な剣幕で、先生から爾う教込まれたから、私共も山陽外史の事をば軽く見て居ました。白石先生ばかりでない。私の父が又その通りで、父が大阪に居るとき山陽先生は京都に居り、是非交際しなければならぬ筈であるに一寸とも付合わぬ。野田笛浦と云う人が父の親友で、野田先生はどんな人か知らない、けれども山陽を疎外して笛浦を親しむと云えば、笛浦先生は浮気でない学者と云うような意味でしたか、筑前の亀井先生なども朱子学を取らずに経義に一説を立てたと云うから、その流を汲む人々は何だか山陽流を面白く思わぬのでしょう。

手端器用なり以上は学問の話しですが、尚お此の外に申せば、私は旧藩士族の小供に較べて見ると手の先きの器用な奴で、物の工夫をするような事が得意でした。例えば井戸に物が墜ちたと云えば、如何云う塩梅にして之を揚げるとか、箪笥の錠が明かぬと云えば、釘の尖などを色々に拵げて遂に見事に之を明けるとか云う工風をして面白がって居る。又た障子を張ることも器用で、自家の障子は勿論、親類へ雇われて張りに行くこともある。兎に角に何をするにも手先が器用でマメだから、自分にも面白かったのでしょう。ソレカラ段々年を取るに従て仕事も多くなって、固より貧士族のことであるから、自分で色々工風して、下駄の鼻緒もたてれば雪駄の剥れたのも縫うと云うことは私の引受けで、自分のばかりでない、母のものも兄弟のもの

も繕うて遣る。或は畳針を買て来て畳の表を附け替え、又或は竹を割って桶の箍を入れるような事から、その外、戸の破れ屋根の漏りを繕うまで当前の仕事で、皆私が一人でして居ました。ソレカラ進んで本当の内職を始めて、下駄を拵えたこともあれば、刀剣の細工をしたこともある。刀の身を磨ぐことは知らぬが、鞘を塗り柄を巻き、その外、金物の細工は田舎ながらドウヤラコウヤラ形だけは出来る。今でも私の塗た虫喰塗りの脇差の鞘が宅に一本あるが、随分不器用なものです。都てコンナ事は近処に内職をする士族があってその人に習いました。鋸鑢に驚く金物細工をするに鑢は第一の道具で、是れも手製に作って、その製作には随分苦心して居た所が、その後、年経て私が江戸に来て先ず大に驚いたことがある、と申すは只の鑢は鋼鉄を斯うして斯う遣れば私の手にもヲシ〳〵出来るが、鋸鑢ばかりは六かしい。ソコデ江戸に這入たとき、今思えば芝の田町、処も覚えて居る、江戸に這入て往来の右側の家で、小僧が鋸の鑢の目を叩て居る。皮を鑢の下に敷いて鏨で刻んで颯々と出来る様子だから、私は立留て之を見て、心の中で扨々大都会なる哉、途方もない事が出来るもの哉、自分等は夢にも思わぬ、鋸の鑢を拵えようと云うことは全く考えたこともない、然るに小供がアノ通り遣て居るとは、途方もない工芸の進んだ場所だと思て、江戸に這入たその日に感心したことがあると云うような訳けで、少年の時から読書の外は俗な事ばかりして俗な事ばかり考えて居て、年を取ても兎角手先きの細工事が面白くて、動もすれば鉋だの鑿だの買集めて、何か作って見よう、繕うて見ようと思うその物は皆な俗な物ばかり、所謂美術と云う思想は少しもない。平生万事至

極殺風景で、衣服住居などに一切頓着せず、如何いう家に居てもドンナ着物を着ても何とも思わぬ。着物の上着か下着かソレモ構わぬ。況して流行の縞模様など考えて見たこともない程の不風流なれども、何か私に得意があるかと云えば、刀剣の拵えとなれば、是れは善く出来たとか、小道具の作柄釣合が如何とか云う考はある。是れは田舎ながら手に少し覚えのある芸から自然に養うた意匠でしょう。

青天白日に徳利夫れから私が世間に無頓着と云うことは少年から持て生れた性質、周囲の事情に一寸とも感じない。藩の小士族などは酒、油、醤油などを買うときは、自分自から町に使に行かなければならぬ。所がその頃の士族一般の風として、頬冠をして宵出掛て行く。私は頬冠は大嫌いだ。生れてからしたことはない。物を買うに何だ、銭を遣て買うに少しも構うことはないと云う気で、顔も頭も丸出しで、士族だから大小は挟すが、徳利を提て、夜は扨置き白昼公然、町の店に行く。銭は家の銭だ、盗んだ銭じゃないぞと云うような気位で、却て藩中者の頬冠をして見栄をするのを可笑しく思たのは少年の血気、自分独り自惚て居たのでしょう。ソレカラ又家に客を招く時に、大根や牛蒡を煮て喫せると云うことに就て、必要があるから母の指図に従て働て居た。所で私は客などがウヂャ〳〵酒を呑むのは大嫌い。俗な奴等だ、呑むなら早く呑で帰て仕舞えば宜いと思うのに、中々帰らぬ。家は狭くて居処もない。仕方ないから客の呑でる間は、私は押入の中に這入て寝て居る。何時でも客をする時には、客の来る迄は働く、けれども夕方になると、自分も酒が好だから颯々と酒を呑で飯を喰て押入に這入て仕舞い、

客が帰た跡で押入から出て、何時も寝る処に寝直すのが常例でした。

夫れから私の兄は年を取て居て色々の朋友がある。時勢論などをして居たのを聞たこともある、けれども私は夫れに就て喙を容れるような地位でない。只追使れる許り。その時、中津の人気は如何かと云えば、学者は挙て水戸の御隠居様、即ち烈公の事と、越前の春嶽様の話が多い。学者は水戸の老公と云い、俗では水戸の御隠居様と云う。御三家の事だから譜代大名の家来は大変に崇めて、仮初にも隠居などゝ呼棄にする者は一人もない。水戸の御隠居様、水戸の老公と尊称して、天下一の人物のように話して居たから、私も左様思て居ました。ソレカラ江川太郎左衛門も幕府の旗本だから、江川様と蔭でも屹と様付にして、之も中々評判が高い。或時兄などの話に、江川太郎左衛門と云う人は近世の英雄で、寒中袷一枚着て居ると云うような話をして居るのを、私が側から一寸と聞て、何にその位の事は誰でも出来ると云うような気になって、ソレカラ私は誰にも相談せずに、毎晩掻巻一枚着て敷蒲団も敷かず畳の上に寝ることを始めた。スルト母は之を見て、何の真似か、ソンナ事をすると風邪を引くと云て、頻りに止めるけれども、トウ〳〵聴かずに一冬通したことがあるが、是れも十五、六歳の頃、唯人に負けぬ気で遣たので身体も丈夫であったと思われる。

兄弟問答又当時世間一般の事であるが、学問と云えば漢学ばかり、私の兄も勿論漢学一方の人で、只他の学者と違うのは、豊後の帆足万里先生の流を汲んで、数学を学んで居ました。帆足先生と云えば中々大儒でありながら数学を悦び、先生の説に、鉄砲と算盤は士流の重んずべき

ものである、その算盤を小役人に任せ、鉄砲を足軽に任せて置くと云うのは大間違いと云うその説が中津に流行して、士族中の有志者は数学に心を寄せる人が多い。兄も矢張り先輩に倣うて算盤の高尚な所まで進んだ様子です。この辺は世間の儒者と少し違うようだが、その他は所謂孝悌忠信で、純粋の漢学者に相違ない。或時兄が私に問を掛けて、「お前は是れから先き何になる積りかと云うから、私が答えて、「左様さ、先ず日本一の大金持になって思うさま金を使うて見ようと思いますと云うと、兄が苦い顔して叱ったから、私が返問して、「兄さんは如何なさると尋ねると、真面目に、「死に至るまで孝悌忠信と唯一言で、私は「ヘーイと云た切りそのまゝになった事があるが、先ず兄はソンナ人物で、又妙な処もある。或時私に向て、「乃公は総領で家督をして居るが、如何かして六かしい家の養子になって見たい。何とも云われない頑固な、ゴク喧しい養父母に事えて見たい。決して風波を起させないと云うのは、畢竟養父母と養子との間柄の悪いのは養子の方の不行届だと説を極めてたのでしょう。所が私は正反対で、「養子は忌な事だ、大嫌いだ。親でもない人を誰が親にして事える者があるかと云うような調子で、折々は互に説が違て居ました。是れは私の十六、七の頃と思います。

母も亦随分妙な事を悦んで、世間並には少し変わって居たようです。一体下等社会の者に附合うことが数寄で、出入りの百姓町人は無論、穢多でも乞食でも颯々と近づけて、軽蔑もしなければ忌がりもせず言葉など至極丁寧でした。又宗教に就て、近処の老婦人達のように普通の信心はないように見える。例えば家は真宗でありながら説法も聞かず、「私は寺に参詣して阿

弥陀様を拝むこと許りは可笑しくてキマリが悪くて出来ぬと常に私共に云いながら、毎月米を袋に入れて寺に持て行て墓参りは欠かしたことはない（その袋は今でも大事に保存してある）。阿弥陀様は拝まぬが坊主には懇意が多い。旦那寺の和尚は勿論、又私が漢学塾に修業して、その塾中に諸国諸宗の書生坊主が居て、毎度私処に遊びに来れば、母は悦んで之を取持て馳走でもすると云うような風で、コンナ所を見れば唯仏法が嫌いでもないようです。兎に角に慈善心はあったに違いない。

乞食の虱をとる茲に誠に穢い奇談があるから話しましょう。中津に一人の女乞食があって、馬鹿のような狂者のような至極の難渋者で、自分の名か、人の付けたのか、チエ〳〵と云て、毎日市中を貰て廻わる。所が此奴が穢いとも臭いとも云いようのない女で、着物はボロ〳〵、髪はボウ〳〵、その髪に虱がウヤ〳〵して居るのが見える。母が毎度の事で天気の好い日などには、おチエ此方に這入て来いと云て、表の庭に呼込んで土間の草の上に坐らせて、自分は襷掛けに身構えをして乞食の虱狩を始めて、私は加勢に呼出される。拾うように取れる虱を取ては庭石の上に置き、マサカ爪で潰すことは出来ぬから、私を側に置いて、この石の上のを石で潰せと申して、私は小さい手ごろな石を以て構えて居る。母が一疋取て台石の上に置くと私はコツリと打潰すと云う役目で、五十も百も先ずその時に取れる丈け取て仕舞い、ソレカラ母も私も着物を払うて糠で手を洗うて、乞食には虱を取らせて呉れた褒美に飯を遣ると云う極りで、是れは母の楽みでしたろうが、私は穢なくて穢なくて堪らぬ。今思出しても胸が悪いよう

です。

反故を踏みお札を踏む又私の十二、三歳の頃と思う。兄が何か反古を揃えて居る処を、私がドタバタ踏んで通った所が兄が大喝一声、コリャ待てと酷く叱り付けて、「お前は眼が見えぬか、之を見なさい、何と書いてある、奥平大膳大夫と御名があるではないかと大造な権幕だから、「アヽ左様で御在ましたか、私は知らなんだと云うと、「知らんと云ても眼があれば見える筈じゃ、御名を足で踏むとは如何云う心得である、臣子の道はと、何か六かしい事を並べて厳しく叱るから謝らずには居られぬ。「私が誠に悪う御在ましたから堪忍して下さいと御辞儀をして謝ったけれども、心の中では謝りも何もせぬ。「何の事だろう、殿様の頭でも踏みはしなかろう、名の書いてある紙を踏んだからッて構うことはなさそうなものだと甚だ不平で、ソレカラ子供心に独り思案して、兄さんの云うように殿様の名の書いてある反古を踏んで悪いと云えば、神様の名のある御札を踏んだら如何だろうと思て、人の見ぬ処で御札を踏んで見た所が何ともない。「ウム何ともない、コリャ面白い、今度は之を洗手場に持て行て遣ろうと、一歩を進めて便所に試みて、その時は如何かあろうかと少し怖かったが、後で何ともない。「ソリャ見たことか、兄さんが余計な、あんな事を云わんでも宜いのじゃと独り発明したようなものだが、是れ許りは母にも云われず姉にも云われず、云えば屹と叱られるから、一人で窃と黙って居ました。

稲荷様の神体を見るソレカラ一つも二つも年を取れば自から度胸も好くなったと見えて、年寄

などの話にする神罰冥罰なんと云うことは大嘘だと独り自から信じ切て、今度は一つ稲荷様を見て遣ろうと云う野心を起して、私の養子になって居た叔父様の家の稲荷の社の中には何が這入て居るか知らぬと明けて見たら、石が這入て居るから、その石を打擲って仕舞て代りの石を拾うて入れて置き、又隣家の下村と云う屋敷の稲荷様を明けて見れば、神体は何か木の札で、之も取て棄てゝ仕舞い平気な顔して居ると、間もなく初午になって、幟を立てたり大鼓を叩いたり御神酒を上げてワイ〳〵して居るから、私は可笑しい。「馬鹿め、乃公の入れて置いた石に御神酒を上げて拝んでるとは面白いと、独り嬉しがって居たと云うような訳けで、幼少の時から神様が怖いだの仏様が有難いだの云うことは一寸ともない。卜筮呪詛一切不信仰で、狐狸が付くと云うようなことは初めから馬鹿にして少しも信じない。小供ながらも精神は誠にカラリとしたものでした。或時に大阪から妙な女が来たことがあるその女と云うのは、私共が大阪に居る時に邸に出入をする上荷頭の伝法寺屋松右衛門と云うものゝ娘で、年の頃三十位でもあったかと思う。その女が中津に来て、お稲荷様を使うことを知て居ると吹聴するその次第は、誰にでも御幣を持たして置て何か祈ると、その人に稲荷様が憑拠くとか何とか云て、頻りに私の家に来て法螺を吹て居る。夫れからその時に私は十五、六の時だと思う。「ソリャ面白い、遣て貰おう、乃公がその御幣を持とう、持て居る御幣が動き出すと云うのは面白い、サア持たして呉れろと云うと、その女がつく／〃 ＼と私を見て居て、「坊さんはイケマヘンと云うから、私は承知しない。「今誰にでもと云たじゃないか、サア遣て見せろと、酷くその女を

弱らして面白かった事がある。

門閥の不平ソレカラ私が幼少の時から中津に居て、始終不平で堪らぬと云うのは無理でない。一体中津の藩風と云うものは、士族の間に門閥制度がチャンと定まって居て、その門閥の堅い事は啻に藩の公用に就てのみならず、今日私の交際上、小供の交際に至るまで、貴賤上下の区別を成して、上士族の子弟が私の家のような下士族の者に向ては丸で言葉が違う。私などが上士族に対して、アナタが如何なすって、斯うなすってと云えば、先方では貴様が爾う為やって、斯う為やれと云うような風で、万事その通りで、何でもない只小供の戯れの遊びにも門閥が付て廻るから、如何しても不平がなくては居られない。その癖今の貴様とか何とか云う上士族の子弟と学校に行て、読書会読と云うような事になれば、何時でも此方が勝つ。学問ばかりでない、腕力でも負けはしない。夫れがその交際、朋友互に交って遊ぶ小供遊の間にも、ちゃんと門閥と云うものを持て横風至極だから、小供心に腹が立て堪らぬ。

下執事の文字に叱かられる況して大人同士、藩の御用を勤めて居る人々に貴賤の区別は中々喧ましいことで、私が覚えて居るが、或時私の兄が家老の処に手紙を遣て、少し学者風でその表書に何々様下執事と書いて遣たら大に叱られ、下執事とは何の事だ、御取次衆と認めて来いと云て、手紙を突返して来た。私は之を見ても側から独り立腹して泣たことがある。馬鹿々々しい、こんな処に誰が居るものか、如何したって是れはモウ出るより外に仕様がないと、始終心の中に思て居ました。ソレカラ私も次第に成長して、少年ながらも少しは世の中の事が分るよ

うになる中に、私の従兄弟などにも随分一人や二人は学者がある。能く書を読む男がある。固より下士族の仲間だから、兄なぞと話のときには藩風が善くないとか何とかいろ〳〵不平を洩らして居るのを聞いて、私は始終ソレを止めて居ました。「よしなさい、馬鹿々々しい。この中津に居る限りは、そんな愚論をしても役に立つものでない。不平があれば出て仕舞が宜い、出なければ不平を云わぬが宜と、毎度止て居たことがあるが、是れはマア私の生付きの性質とでも云うようなものでしょう。

喜怒色に顕わさず或時私が何か漢書を読む中に、喜怨色に顕さずと云う一句を読で、その時にハット思うて大に自分で安心決定したことがある。「是れはドウモ金言だと思い、始終忘れぬようにして独りこの教を守り、ソコデ誰が何と云て賞めて呉れても、唯表面に程よく受けて心の中には決して喜ばぬ。又何と軽蔑されても決して怒らない。どんな事があっても怒った事はない。矧や朋輩同士で喧嘩をしたと云うことは只の一度もない。ツイゾ人と掴合ったの、打ったの、打たれたのと云うことは一寸ともない。是れは少年の時ばかりでない。少年の時分から老年の今日に至るまで、私の手は怒に乗じて人の身体に触れたことはない。所が先年二十何年前、塾の書生に何とも仕方のない放蕩者があって、私が多年衣食を授けて世話をして遣るにも拘わらず、再三再四の不埒、或るときそのものが何処に何をしたか夜中酒に酔て生意気な風をして帰て来たゆえ、貴様は今夜寝ることはならぬ、起きてチャント正座して居ろと申渡して置て、少して行て見ればグウ〳〵〃＼鼾をして居る。この不埒者めと云て、その肩の処をつら

まえて引起して、目の醒めてるのを尚おグン／〃＼ゆたぶって遣たことがある。その時跡で独り考えて、「コリャ悪い事をした、乃公は生涯、人に向て此方から腕力を仕掛けたようなことはなかったに、今夜は気に済まぬ事をしたと思て、何だか坊主が戒律でも破たような心地がして、今に忘れることが出来ません。その癖私は少年の時から能く饒舌り、人並よりか口数の多い程に饒舌って、爾うして何でも為ることは甲斐々々しく遣て、決して人に負けないけれども、書生流儀の議論と云うことをしない。似合い議論すればと云ても、ほんとうに顔を赧めて如何あっても勝たなければならぬと云う議論をしたことはない。何か議論を始めて、ひどく相手の者が躍起となって来れば、此方はスラリと流して仕舞う。「彼の馬鹿が何を馬鹿を云て居るのだと斯う思て、頓と深く立入ると云うことは決して遣らなかった。ソレでモウ自分の一身は何処に行て如何な辛苦も厭わぬ、唯この中津に居ないで如何かして出て行きたいものだと、独り夫ればかり祈って居た処が、とうと長崎に行くことが出来ました。

長崎遊学

それから長崎に出掛けた。頃は安政元年二月、即ち私の年二十一歳（正味十九歳三箇月）の時である。その時分には中津の藩地に横文字を読む者がないのみならず、横文字を見たものもなかった。都会の地には洋学と云うものは百年も前からありながら、中津は田舎の事であるか

ら、原書は扨置き、横文字を見たことがなかった。所がその頃は丁度ペルリの来た時で、亜米利加の軍艦が江戸に来たと云うことは田舎でも皆知て、同時に砲術と云うことが大変喧しくなって来て、ソコデ砲術を学ぶものは皆和蘭流に就て学ぶので、その時私の兄が申すに、「和蘭の砲術を取調べるには如何しても原書を読まなければならぬと云うから、私には分らぬ。「原書とは何の事ですと兄に質問すると、兄の答に、「原書と云うは、和蘭出版の横文字の書だ。今、日本に飜訳書と云うものがあって、西洋の事を書いてあるけれども、真実に事を調べるにはその大本の蘭文の書を読まなければならぬ。夫れに就ては貴様はその原書を読む気はないかと云う。所が私は素と漢書を学んで居るとき、同年輩の朋友の中では何時も出来が好くて、読書講義に苦労がなかったから、自分にも自然頼にする気があったと思われる。「人の読むものなら横文字でも何でも読みましょうと、ソコデ兄弟の相談は出来て、その時丁度兄が長崎に行く序に任せ、兄の供をして参りました。長崎に落付き、始めて横文字のabcと云うものを習うたが、今では日本国中到る処に、徳利の貼紙を見ても横文字は幾許もある。目に慣れて珍しくもないが、始めての時は中々六かしい。廿六文字を習うて覚えて仕舞うまでには三日も掛りました。けれども段々読む中には又左程でもなく、次第々々に易くなって来たが、その蘭学修業の事は扨置き、抑も私の長崎に往たのは、唯田舎の中津の窮屈なのが忌で〳〵堪らぬから、文学でも武芸でも何でも外に出ることが出来さえすれば難有いと云うので出掛けたことだから、故郷を去るに少しも未練はない、如斯処に誰が居るものか、一度出たらば鉄砲玉で、再び帰て

来はしないぞ、今日こそ宜い心地だと独り心で喜び、後向て唾して颯々と足早にかけ出したのは今でも覚えて居る。

活動の始まり夫れから長崎に行て、そうして桶屋町の光永寺と云うお寺を便ったと云うのは、その時に私の藩の家老の倅で奥平壹岐と云う人はそのお寺と親類で、其処に寓居して居るのを幸いに、その人を使ってマアお寺の居候になって居るその中に、小出町に山本物次郎と云う長崎両組の地役人で砲術家があって、其処に奥平が砲術を学んで居るその縁を以て、奥平の世話で山本の家に食客に入込みました。抑も是れが私の生来活動の始まり。有らん限りの仕事を働き、何でもしない事はない。その先生が眼が悪くて書を読むことが出来ないから、私が色々な時勢論など、漢文で書いてある諸大家の書を読んで先生に聞かせる。又その家に十八、九の倅が在て独息子、余りエライ少年でない、けれども本は読まなければならぬと云うので、ソコでその倅に漢書を教えて遣らなければならぬ。是れが仕事の一つ。それから家は貧乏だけれども活計は大きい。借金もある様子で、その借金の云延し、新に借用の申込みに行き、又金談の手紙の代筆もする。其処の家に下婢が一人に下男が一人ある。〔所で〕動もするとその男が病気とか何とか云う時には、男の代をして水も汲む。朝夕の掃除は勿論、先生が湯に這入る時は背中を流したり湯を取たりして遣らなければならぬ。又その内儀さんが猫が大好き、狆が大好き、生物が好きで、猫も狆も犬も居るその生物一切の世話をしなければならぬ。上中下一切の仕事、私一人で引受けて遣て居たから、酷く調法な男だ、何とも云われない調法な血気の

少年であり乍ら、その少年の行状が甚だ宜しい、甚だ宜しくて甲斐々々しく働くと云うので、ソコデ以て段々その山本の家の気に入て、仕舞には先生が養子にならないかと云う。私は前にも云う通り中津の士族で、遂ぞ自分は知りはせぬが少さい時から叔父の家の養子になって居るから、その事を云うと、先生が夫れなら尚更ら乃公の家の養子になれ、如何でも乃公が世話をして遣るからと度々云われた事がある。

その時の一体の砲術家の有様を申せば、写本の蔵書が秘伝で、その本を貸すには相当の謝物を取て貸す。写したいと云えば、写す為めの謝料を取ると云うのが、先ず山本の家の臨時収入で、その一切の砲術書を貸すにも写すにも、先生は眼が悪いから皆私の手を経る。それで私は砲術家の一切の元締になって、何もかも私が一切取扱て居る。その時分の諸藩の西洋家、例えば宇和島藩、五島藩、佐賀藩、水戸藩などの人々が来て、或は出島の和蘭屋敷に行て見たいとか、或は大砲を鋳るから図を見せて呉れとか、そんな世話をするのが山本家の仕事で、その実は皆私が遣る。私は本来素人で、鉄砲を打つのを見た事もないが、図を引くのは訳けはない。颯々と図を引いたり、説明を書いたり、諸藩の人が来れば何に付けても独り罷り出て、丸で十年も砲術を学んで立派に砲術家と見られる位に挨拶をしたり世話をしたりすると云う調子である。処で私を山本の居候に世話をして入れて呉れた人、即ち奥平壹岐だ。壹岐と私とは主客処を易えて、私が主人見たようになったから可笑しい。壹岐は元来漢学者の才子で局量が狭い。小藩でも大家の子だから如何も我儘だ。もう一つは私の目的は原書を読むに在て、蘭学医の家

に通うたり和蘭通詞の家に行ったりして一意専心原書を学ぶ。原書と云うものは始めて見たのであるが、五十日、百日とおい〳〵日を経るに従て、次第に意味が分るようになる。所が奥平壹岐はお坊さん、貴公子だから、緻密な原書などの読める訳けはない。その中に此方は余程エラクなったのが主公と不和の始まり。全体奥平と云う人は決して深い巧みのある悪人ではない。唯大家の我儘なお坊さんで智恵がない度量がない。その時に旨く私を籠絡して生捕って仕舞えば譜代の家来同様に使えるのに、却てヤッカミ出したとは馬鹿らしい。歳は私より十ばかり上だが、何分気分が子供らしくて、ソコデ私を中津に還えすような計略を運らしたのが、私の身には一大災難。

長崎に居ること難しソリャ斯う云う次第になって来た。その奥平壹岐と云う人に与兵衛と云う実父の隠居があって、私共は之を御隠居様と崇めて居た。ソコデ私の父は二十年前に死んで居るのですけれども、私の兄が成長の後に父のするような事をして、又大阪に行て勤番をして居て、中津には母一人で何もない。姉は皆嫁いて居て、身寄りの若い者の中には私の従兄の藤本元岱と云う医者が唯一人、能く事が分り書も能く読める学者であるが、そこで中津に在る彼の御隠居様が無法な事をしたと云うは、何れ長崎の倅壹岐の方から打合のあったものと見えて、その隠居が従兄の藤本を呼に来て、隠居の申すに、諭吉を呼還せ、アレが居ては倅壹岐の妨げになるから早々呼還せ、但しソレに就ては母が病気だと申遣わせと云う御直の厳命が下ったから、固より否むことは出来ず、唯畏りましたと答えて、母にもそのよしを話して、ソレカラ

従兄が私に手紙を寄送して、母の病気に付き早々帰省致せと云う表向の手紙と、又別紙に、実は隠居から斯う〳〵云う次第、余儀なく手紙を出したが、決して母の身を案じるなと詳に事実を書いて呉れたから、私は之を見て実に腹が立った。何だ、鄙劣千万な、計略を運らして母の病気とまで偽を云わせる、ソンナ奴があるものか、モウ焼けだ、大議論をして遣ろうかと思たが、イヤ〳〵左様でない、今アノ家老と喧嘩をした所が、負けるに極って居る、戦わずして勝負は見えてる、一切喧嘩はしない、アンナ奴と喧嘩をするよりも自分の身の始末が大事だと思直して、夫れからシラバクレて胆を潰した風をして奥平の処に行て、扨中津から箇様申して参りました、母が俄に病気になりました、平生至極丈夫な方でしたが、実に分らぬものです、今頃は如何云う容体でしょうか、遠国に居て気になりますなんて、心配そうな顔してグチャ〳〵述立てると、奥平も大に驚いた顔色を作り、左様か、ソリャ気の毒な事じゃ、嘸心配であろう、兎に角に早く帰国するが宜かろう、併し母の病気全快の上は又再遊の出来るようにして遣るからと、慰さめるように云うのは、狂言が旨く行われたと心中得意になって居るに違いない。ソレカラ又私は言葉を続けて、唯今御指図の通り早々帰国しますが、御隠居様に御伝言は御在ませんか、何れ帰れば御目に掛ります、又何か御品があれば何でも持て帰りますと云て、一ト先ず別れて翌朝又行て見ると、主公が家に遣る手紙を出して、之を屋敷に届けて呉れ、親仁に斯う〳〵伝言をして呉れと云い、又別に私の母の従弟の大橋六助と云う男に遣る手紙を渡して、これを六助の処に持て行け、爾うすると貴様の再遊に都合が宜かろうと云て、故意とそ

の手紙に封をせずに明けて見よがしにしてあるから、何もかも委細承知して丁寧に告別して、宿に帰て封なしの手紙を開て見れば、「諭吉は母の病気に付き是非帰国と云うからその意に任せて還すが、修業勉強中の事ゆえ再遊の出来るようその方にて取計らえと云う文句。私は之を見てます〳〵癪に障る。「この猿松め馬鹿野郎めと独り心の中で罵り、ソレカラ山本の家にも事実は云われぬ、若し是れが顕われて奥平の不面目にもなれば、禍は却て私の身に降て来て如何な目に逢うか知れない、ソレガ怖いから唯母の病気とばかり云て暇乞をしました。

江戸行を志す丁度そのとき中津から鉄屋惣兵衛と云う商人が長崎に来て居て、幸いその男が中津に帰ると云うから、兎も角も之と同伴と約束をして置て、ソコデ私の胸算は固より中津に帰る気はない。何でも人間の行くべき処は江戸に限る、是れから真直に江戸に行きましようと決心はしたが、この事に就ては誰かに話して相談をせねばならぬ。所が江戸から来た岡部同直と云う蘭学書生がある。是れは医者の子で至極面白い慨かな人物と見込んだから、この男に委細の内情を打明けて、「斯う〳〵云う次第で僕は長崎に居られぬ、余り癪に障るからこのまゝ江戸に飛出す積りだが、実は江戸に知る人はなし、方角が分らぬ。君の家は江戸ではないか、大人は開業医と開いたが、君の家に食客に置て呉れる事は出来まいか。僕は医者でないが丸薬を丸める位の事は屹と出来るから、何卒世話をして貰いたいと云うと、岡部も私の身の有様を気の毒に思うたか、私と一緒になって腹を立てゝ容易く私の云う事を請合い、「ソレは出来よう、何でも江戸に行け。僕の親仁は日本橋檜物町に開業して居るから、手紙を書いて遣ろ

うと云て、親仁名当の一封を呉れたから私は喜んで之を請取り、「ソコデ今この事が知れると大変だ、中津に帰らなければならぬようになるから、是ればかりは奥平にも山本にも一切誰にも云わずに、君一人で呑込んで居て外に洩らさぬようにして、僕は是れから下ノ関に出て船に乗て先ず大阪に行く、凡そ十日か十五日も掛れば着くだろう。その時を見計ろうて中村（諭吉、当時は中村の姓を冒す）は初めから中津に帰る気はなかった、江戸に行くと云て長崎を出たと、奥平にも話して呉れ。是れも聊か面当だと互に笑て、朋友と内々の打合せは出来た。

諫早にて鉄屋と別るそれから奥平の伝言や何かをすっかり手紙に認めて仕舞い、是れは例の御隠居様に遣らなければならぬ。「私は長崎を出立して中津に帰る所存で諫早まで参りました処が、その途中で不図江戸に行きたくなりましたから、是れから江戸に参ります。就ては壹岐様から斯様々々の御伝言で、お手紙は是れですからお届け申すと丁寧に認めて遣って、ソレカラ封をせずに渡した即ち大橋六助に宛た手紙を本人に届ける為めに、私が手紙を書添えて、「この通りに封をせぬのは可笑しい、こんな馬鹿な事はないがこの儘御届け申します。原はと云えば自分の方で呼還すように企てゝ置きながら、表べに人を欺くと云うのは卑劣至極な奴だ。私はもう中津に帰らず江戸に行くからこの手紙を御覧下さいと云うような塩梅に認めて、万事の用意は出来て、鉄屋惣兵衛と一処に長崎を出立して諫早まで——この間は七里ある——来た。丁度夕方着たが何でも三月の中旬、月の明るい晩であった。「扨鉄屋、乃公は長崎を出る時は中津に帰る所存であったが、是れから中津に帰るは忌になった。貴様の荷物と一処に乃

公のこの葛籠も序に持て帰て呉れ。乃公はもう着換が一、二枚あれば沢山だ。是れから下ノ関に出て大阪へ行て、夫れから江戸に行くのだと云うと、惣兵衛殿は呆れて仕舞い、「それは途方もない、お前さんのような年の若い旅慣れぬお坊さんが一人で行くと云うのは。「馬鹿云うな、口があれば京に上る、長崎から江戸に一人行くのに何のことがあるか。「けれども私は中津に帰てお母さんにいい様がない。「なあに構うものか、乃公は死にも何もせぬから内のおッ母さんに宜しく云て呉れ、唯江戸に参りましたと云えば夫れで分る。鉄屋も何とも云うことが出来ぬ。「時に鉄屋、乃公は是から下ノ関に行こうと思うが、実は下ノ関を知らぬ。貴様は諸方を歩くが下ノ関に知てる船宿はないか。「私の懇意な内で船場屋寿久右衛門と云う船宿があります、其処へお入来なされば宜しいと云う。抑もこの事を態々鉄屋に聞かねばならぬと云うのは、実はその時私の懐中に金がない。内から呉れた金が一歩もあったか、その外に和蘭の字引の訳鍵と云う本を売て、掻集めた所で二歩二朱か三朱しかない。それで大阪まで行くには如何しても船賃が足らぬと云う見込だから、そこで一寸と船宿の名を聞て置て、夫れから鉄屋に別れて、諫早から丸木船と云う船が天草の海を渡る。五百八十文出してその船に乗れば明日の朝佐賀まで着くと云うので、その船に乗た所が、浪風なく朝佐賀に着て、佐賀から歩いたが、案内もなければ何もなく真実一身で、道筋の村の名も知らず宿々の順も知らずに、唯東の方に向て、小倉には如何行くかと道を聞て、筑前を通り抜けて、多分太宰府の近所を通ったろうと思いますが、小倉には三日めに着た。

贋手紙を作るその間の道中と云うものは随分困りました。一人旅、殊に何処の者とも知れぬ貧乏そうな若侍、若し行倒になるか暴れでもすれば宿屋が迷惑するから容易に泊めない。もう宿の善悪は択ぶに暇なく、只泊めて呉れさえすれば宜しいと云うので無暗に歩行いて、何か斯うか二晩泊って三日目に小倉に着きました。その道中で私は手紙を書いて即ち鉄屋惣兵衛の贋手紙を拵えて、「この御方は中津の御家中、中村何様の若旦那で、自分は始終そのお屋敷に出入して決して間違なき御方だから厚く頼むと鹿爪らしき手紙の文句で、下ノ関船場屋寿久右衛門へ宛て鉄屋惣兵衛の名前を書いてちゃんと封をして、明日下ノ関に渡てこの手紙を用に立てんと思い、小倉までたどり付て泊った時はおかしかった。彼方此方マゴマゴして、小倉中、宿を捜したが、何処でも泊めない。ヤット一軒泊めて呉れた所が薄汚ない宿屋で、相宿の同間に人が寝て居る。スルト夜半に枕辺で小便する音がする。何だと思うと中風病の老爺が、しびんに遣てる。実は客ではない、その家の病人でしょう。その病人と並べて寝かされたので、汚くて堪らなかったのは能く覚えて居ます。

それから下ノ関の渡場を渡て、船場屋を捜し出して、兼て用意の贋手紙を持て行た所が、成程鉄屋とは懇意な家と見える、手紙を一見して早速泊めて呉れて、万事能く世話をして呉れて、大阪まで船賃が一分二朱、賄の代は一日若干、ソコデ船賃を払うた外に二百文か三百文しか残らぬ。併し大阪に行けば中津の倉屋敷で賄の代を払う事にして、是れも船宿で心能く承知して呉れる。悪い事だが全く贋手紙の功徳でしょう。

馬関の渡海小倉から下ノ関に船で来る時は怖い事がありました。途中に出た所が少し荒く風が吹て浪が立て来た。スルトその纜を引張て呉れ、其方の処を如何して呉れと、船頭が何か騒ぎ立て乗組の私に頼むから、ヨシ来たと云うので纜を引張たり柱を起したり、面白半分に様々加勢をして先ず滞りなく下ノ関の宿に着て、「今日の船は如何したのか、斯う〳〵云う浪風で、斯う云う目に遇た、潮を冠って着物が濡れたと云うと、宿の内儀さんが「それはお危ない事じや、彼れが船頭なら宜いが実は百姓です。この節暇なものですから内職にそんな事をします。百姓が農業の間に慣れぬ事をするから、少し浪風があると毎度大きな間違いを仕出来しますと云うのを聞て、実に怖かった。成程奴等が一生懸命になって私に加勢を頼んだのも道理だと思いました。

馬関より乗船夫れから船場屋寿久右衛門の処から乗た船には、三月の事で皆上方見物、夫れは〳〵種々様々な奴が乗て居る。間抜けな若旦那も乗て居れば、頭の禿た老爺も乗て居る、上方辺の茶屋女も居れば、下ノ関の安女郎も居る。坊主も、百姓も、有らん限りの動物が揃うて、其奴等が狭い船の中で、酒を飲み、博奕をする。下らぬ事に大きな声をして、聞かれぬ話をして、面白そうにしてる中に、私一人は真実無言、丸で取付端がない。船は安芸の宮島へ着た。私は宮島に用はない。唯来たから唯島を見に上る。外の連中はお互に朋友だから宜いだろう。皆酒を飲む。私も飲みたくて堪らぬけれども、金がないから只宮島を見たばかりで、船に帰て来てむしゃ〳〵船の飯を喰てるから、船頭もこんな客は忌やだろう、妙な顔をして私を睨んで

居たのは今でも覚えて居る。その前に岩国の錦帯橋も余儀なく見物して、夫れから宮島を出て讃岐の金比羅様だ。多度津に船が着て金比羅まで三里と云う。行きたくないことはないが、金がないから行かれない。外の奴は皆船から出て行て、私一人で船の番をして居る。爾うすると一晩泊て、どいつもこいつもグデン〳〵に酔て陽気になって帰て来る。癪に障るけれども何としても仕様がない。

明石より上陸爾う云う不愉快な船中で、如何やら斯うやら十五日目に播州明石に着た。朝五ツ時、今の八時頃、明旦順風になれば船が出ると云う、けれどもコンナ連中のお供をしては際限がない。是れから大阪までは何里と聞けば、十五里と云う。「ヨシ、それじゃ乃公は是れから大阪まで歩いて行く。就ては是迄の勘定は、大阪に着たら中津の倉屋敷まで取りに来い、この荷物だけは預けて行くからと云うと、船頭が中々聞かない。「爾う旨くは行かぬ、一切勘定を払て行けと云う。云われても払う金は懐中にない。その時に私は更紗の着物と絹紬の着物と二枚あって、それを風呂敷に包んで持て居るから、「茲に着物が二枚ある、是れで賄の代位はあるだろう、外に書籍もあるが、是れは何にもならぬ。この着物を売ればその位の金にはなるではないか。大小を預ければ宜いが、是れは挟して行かねばならぬ。何時でも宜しい、船が大阪に着次第に中津屋敷で払て遣るから取りに来いと云うも、船頭は頑張て承知しない。

「中津屋敷は知てるが、お前さんは知らぬ人じゃ。何でも船に乗て行きなさい。賄の代金は大阪で請取ると云う約束がしてあるからそれは宜しい。何日掛ても構わぬ、途中から上ることは

出来ぬと云う。此方は只管頼むと小さくなって訳けを云えば、船頭は何でも聞かぬと剛情を張て段々声が大きくなる。喧嘩にもならず実に当惑して居た処に、同船中、下ノ関の商人風の男が出て来て、乃公が請合うと先ず発言して船頭に向い、「コレお前も爾う、いんごうな事を云うものじゃない。賄代の抵当に着物があるじゃないか。このお方はお侍じゃ、貴様達を騙す所存ではないように見受ける。若し騙したら乃公が払う、サアお上りなさいと云て、船頭も是れに安心して無理も云わず、ソレカラ私はその下ノ関の男に厚く礼を述て船を飛出し、地獄に仏と心の中にこの男を拝みました。

そこで明石から大阪まで十五里の間と云うものは、私は泊ることが出来ぬ。財布の中はモウ六、七十文、百に足らぬ銭で迚も一晩泊ることは出来ぬから、何でも歩かなければならぬ。途中何と云う処か知らぬが、左側の茶店で、一合十四文の酒を二合飲んで、大きな筍の煮たのを一皿と、飯を四、五杯喰て、夫れからグン／〃＼歩いて、今の神戸辺は先だか後だか、どう通たか少しも分らぬ。爾うして大阪近くなると、今の鉄道の道らしい川を幾川も渡て、有難い事にお侍だから船賃は只で宜かったが、日は暮れて暗夜で真暗、人に逢わなければ道を聞くことが出来ず、夜中淋しい処で変な奴に逢えば却て気味が悪い。その時私の指してる大小は、脇差は祐定の丈夫な身であったが、刀は太刀作りの細身でどうも役に立ちそうでなくて心細かった。実を云えば大阪近在に人殺しの無暗に出る訳けもない、ソンナに怖がる事はない筈だが、独旅の夜道、真暗ではあるし臆病神が付いてるから、ツイ腰の物を便りにするような気になる。

後で考えれば却て危ない事だと思う。ソレカラ始終道を聞くには、幼少の時から中津の倉屋敷は大阪堂島玉江橋と云うことを知てるから、唯大阪の玉江橋へはどう行くかとばかり尋ねて、ヤット夜十時過ぎでもあろう、中津屋敷に着て兄に逢たが、大変に足が痛かった。

大阪着大阪に着て久振で兄に逢うのみならず、屋敷の内外に幼ない時から私を知てる者が沢山ある。私は三歳の時に国に帰て二十二歳に再び行たのですから、私の生れた時に知てる者は沢山。私の面が何処か幼顔に肖て居ると云うその中には、私に乳を呑まして呉れた仲仕の内儀さんもあれば、又今度兄の供をして中津から来て居る武八と云う極質朴な田舎男は、先年も大阪の私の家に奉公して私のお守をした者で、私が大阪に着た翌日、この男を連れて堂島三丁目か四丁目の処を通ると、男の云うに、お前の生れる時に我身夜中にこの横町の彼の産婆さんの処に迎いに行たことがある、その産婆さんは今も達者にし居る、それからお前が段々大きくなって、此身お前をだいて毎日々々湊の部屋（勧進元）に相撲の稽古を見に行た、その産婆さんの家は彼処じや湊の稽古場は此処の方じやと、指をさして見せたときには、私も旧を懐うて胸一杯になって思わず涙をこぼしました。都て如斯な訳けで私はどうも旅とは思われぬ、真実故郷に帰た通りで誠に宜い心地。それから兄が私に如何して貴様は出し抜けに此処に来たのかという。兄の事であるから構わず斯う云う次第で参りましたと云たら、「乃公が居なければ宜いが、道の順序を云て見れば貴様は長崎から来るのに中津の方が順路だ。その中津を横に見ておツ母さんの処を避て来たではないか。それも乃公が此処に居なければ兎も角、乃公が此

処で貴様に面会しながら之を手放して江戸に行けと云えば兄弟共謀だ。如何にも済まぬではないか。おッ母さんは夫程に思わぬだろうが、如何しても乃公が済まぬ。それよりか大阪でも先生がありそうなものじゃ、大阪で蘭学を学ぶが宜いと云うので、兄の処に居て先生を捜したら緒方と云う先生のある事を聞出した。

長崎遊学中の逸事鄙事多能は私の独得、長崎に居る間は山本先生の家に食客生と為り、無暗に勉強して蘭学も漸く方角の分るようになるその片手に、有らん限り先生家の家事を勤めて、上中下の仕事なんでも引請けて、是れは出来ない、其れは忌だと云たことはない。丁度上方辺の大地震のとき、私は先生家の息子に漢書の素読をして遣た跡で、表の井戸端で水を汲んで、大きな荷桶を担いで一足跡出すその途端にガタ〳〵〳〵と動揺て足が滑り、誠に危ない事がありました。

寺の和尚、今は既に物故したそうですが、是れは東本願寺の末寺、光永寺と申して、下寺の三ヶ寺も持て居る先ず長崎では名のある大寺、そこの和尚が京に上って何か立身して帰て来て、長崎の奉行所に廻勤に行くその若党に雇われてお供をした所が、和尚が馬鹿に長い衣か装束か妙なものを着て居て、奉行所の門で駕籠を出ると、私が後からその裾を持てシヅ〳〵〳〵と附いて歩いて行く。吹出しそうに可笑しい。又その和尚が正月になると大檀那の家に年礼に行くそのお供をすれば、坊さんが奥で酒でも飲でる供待の間に、供の者にも膳を出して雑煮など喰わせる。是れは難有く戴きました。

又節分に物貰いをしたこともある。長崎の風に、節分の晩に法螺の貝を吹て何か経文のような事を怒鳴って廻わる、東京で云えば厄払い、その厄払をして市中の家の門に立てば、銭を呉れたり米を呉れたりすることがある。所が私の居る山本の隣家に杉山松三郎（杉山徳三郎の実兄）と云う若い男があって、面白い人物。「どうだ今夜行こうじゃないかと私を誘うから、勿論同意。ソレカラ何処かで法螺の貝を借りて来て、面を隠して二人で出掛けて、杉山が貝を吹く、お経の文句は、私が少年の時に暗誦して居た蒙求の表題と千字文で請持ち、王戎簡要 天地玄黄なんぞ出鱈目に怒鳴り立てゝ、誠に上首尾、銭だの米だの随分相応に貰て来て、餅を買い鴨を買い雑煮を拵えてタラフク喰た事がある。

師弟アベコベ私が始めて長崎に来て始めて横文字を習うと云うときに、薩州の医学生に松崎鼎甫と云う人がある。その時に藩主薩摩守は名高い西洋流の人物で、藩中の医者などに蘭学を引立て、松崎も蘭学修業を命ぜられて長崎に出て来て下宿屋に居るから、その人に頼んで教えて貰うが宜かろうと云うので行た所が、松崎がabcを書いて仮名を附けて呉れたのには先ず驚いた。是れが文字とは合点が行かぬ。二十何字を覚えて仕舞うにも余程手間が掛たが、学べば進むの道理で、次第々々に蘭語の綴も分るようになって来た。ソコデ松崎と云う先生の人相を見て応対の様子を察するに、決して絶倫の才子でない。依て私の心中窃に、「是れは高の知れた人物だ。今でも漢書を読で見ろ、自分の方が数等上流の先生だ。漢蘭等しく字を読み義を解することゝすれば、左までこの先生を恐るゝことはない。如何かしてアベコベにこの男に蘭書を

教えて呉れたいものだと、生々の初学生が無鉄砲な野心を起したのは全く少年の血気に違いない。ソレはそれとしてその後私は大阪に行き、是れまで長崎で一年も勉強して居たから緒方でも上達が頗る速くて、両三年の間に同窓生八、九十人の上に頭角を現わした。所が人事の廻り合せは不思議なもので、その松崎と云う男が九州から出て来て緒方の塾に這入り、私はその時ズット上級で、下級生の会頭をして居るその会読に、松崎も出席することになって、三、四年の間に今昔の師弟アベコベ。私の無鉄砲な野心が本当な事になって、固より人には云われず、又云うべきことでないから黙て居たが、その時の愉快は堪らない。独り酒を飲で得意がって居ました。左れば軍人の功名手柄、政治家の立身出世、金持の財産蓄積なんぞ、孰れも熱心で、一寸と見ると俗なようで、深く考えると馬鹿なように見えるが、決して笑うことはない。ソンナ事を議論したり理窟を述べたりする学者も、矢張り同じことで、世間並に俗な馬鹿毛た野心があるから可笑しい。

大阪修業

兄の申すことには私も逆らうことが出来ず、大阪に足を止めまして、緒方先生の塾に入門したのは安政二年卯歳の三月でした。その前長崎に居る時には勿論蘭学の稽古をしたので、その稽古をした所は楢林と云う和蘭通詞の家、同じく楢林と云う医者の家、それから石川桜所と

云う蘭法医師、この人は長崎に開業して居て立派な門戸を張て居る大家であるから、中々入門することは出来ない。ソコで其処の玄関に行て調合所の人などに習って居たので、爾う云うように彼方此方にちょい〳〵と教えて呉れるような人があれば其処へ行く。何処の何某に便り誰の門人になってミッチリ蘭書を読だと云うことはないので、ソコで大阪に来て緒方に入門したのは是れが本当に蘭学修業の始まり、始めて規則正しく書物を教えて貰いました。その時にも私は学業の進歩が随分速くて、塾中には大勢書生があるけれども、その中ではマア出来の宜い方であったと思う。

兄弟共に病気ソコで安政二年も終り三年の春になると、新春早々茲に大なる不仕合な事が起って来たと申すは、大阪の倉屋敷に勤番中の兄が僂麻質斯に罹り病症が甚だ軽くない。トウ〳〵手足も叶わぬと云う程になって、追々全快するが如く全快せざるが如くして居る間に、右の手は使うことが出来ずに左の手に筆を持て書くと云うような容体。ソレと同時にその歳の二月頃であったが、緒方の塾の同窓、私の先輩で、予て世話になって居た加州の岸直輔と云う人が、腸窒扶斯に罹って中々の難症。ソコデ私は平生の恩人だから、コンナ時に看病しなければならぬ。又加州の書生に鈴木儀六と云う者があって、是れも岸と同国の縁で、私と鈴木と両人、昼夜看病して、凡そ三週間も手を尽したけれども、如何しても悪症でとう〳〵助からぬ。一体この人は加賀人で宗旨は真宗だから、火葬にしてその遺骨を親元に送て遣ろうと両人相談の上、遺骸を大阪の千日の火葬場に持て行て焼て、骨を本国に送り、先ず事は済んだ所が、私が千日

から帰て三、四日経つとヒョイと煩い付た。容体がドウも只の風邪でない。熱があり気分が甚だ悪い。ソコデ私の同窓生は皆医者だから、誰かに見て貰た所が、是れは腸窒扶斯だ、岸の熱病が伝染したのだと云て居る間に、その事が先生に聞えて、その時私は堂嶋の倉屋敷の長屋に寝て居た所が、先生が見舞に見えまして、愈よ腸窒扶斯に違いない、本当に療治しなければ是れは馬鹿にならぬ病気であると云う。

緒方先生の深切夫れから私はその時に今にも忘れぬ事のあると云うのは、緒方先生の深切。「乃公はお前の病気を屹と診て遣る。診て遣るけれども乃公が自分で処方することは出来ない。何分にも迷うて仕舞う。此の薬彼の薬と迷うて、後になって爾うでもなかったと云て又薬の加減をすると云うような訳けで、仕舞には何の療治をしたか訳けが分らぬようになると云うのは人情の免れぬ事であるから、病は診て遣るが執匙は外の医者に頼む。そのつもりにして居れと云て、先生の朋友、梶木町の内藤数馬と云う医者に執匙を託し、内藤の家から薬を貰て、先生は只毎日来て容体を診て病中の摂生法を指図するだけであった。マア今日の学校とか学塾とか云うものは、人数も多く迚も手に及ばない事で、その師弟の間は自から公なものになって居る、けれども昔の学塾の師弟は正しく親子の通り、緒方先生が私の病を見て、どうも薬を授るに迷うと云うのは、自分の家の子供を療治して遣るに迷うと同じ事で、その扱は実子と少しも違わない有様であった。後世段々に世が開けて進んで来たならば、こんな事はなくなって仕舞ましょう。私が緒方の塾に居た時の心地は、今の日本国中の塾生に較べて見て大変に違う。私は

真実緒方の家の者のように思い又思わずには居られません。ソレカラ唯今申す通り実父同様の緒方先生が立会で、内藤数馬先生の執匙で有らん限りの療治をして貰いましたが、私の病気も中々軽くない。煩い付て四、五日目から人事不省、凡そ一週間ばかりは何も知らない程の容体でしたが、幸にして全快に及び、衰弱はして居ましたれども、歳は若し、平生身体の強壮なその為めでしょう、恢復は中々早い。モウ四月になったら外に出て歩くようになり、その間に兄は僂麻質斯を煩て居り、私は熱病の大病後である、如何にも始末が付かない。

兄弟中津に帰るその中に丁度兄の年期と云うものがあって、二ヶ年居れば国に帰ると云う約束で、今年の夏が二年目になり、私も亦病後大阪に居て書物など読むことも出来ず、兎に角に帰国が宜かろうと云うので、兄弟一緒に船に乗て中津に帰ったのがその歳の五、六月頃と思う。所が私は病後ではあるが日々に恢復して、兄の僂麻質斯も全快には及ばないけれども別段に危険な病症でもない。夫れでは私は又大阪に参りましょうと云て出たのがその歳、即ち安政三年の八月。モウその時は病後とは云われませぬ、中々元気が能くて、大阪に着たその時に、私は中津屋敷の空長屋を借用して独居自炊、即ち土鍋で飯を焚て喰て、毎日朝から夕刻まで緒方の塾に通学して居ました。

家兄の不幸再遊困難所が又不幸な話で、九月の十日頃であったと思う。国から手紙が来て、九月三日に兄が病死したから即刻帰て来いと云う急報。どうも驚いたけれども仕方がない。取るものも取り敢えずスグ船に乗て、この度は誠に順風で、速に中津の港に着て、家に帰て見れば

モウ葬式は勿論、何も斯も片が付て仕舞た後の事で、ソレカラ私は叔父の処の養子になって居た、所が自分の本家、即ち里の主人が死亡して、娘が一人あれども女の子では家督相続は出来ない、是れは弟が相続する、当然の順序だと云うので、親類相談の上、私は知らぬ間にチャント福澤の主人になって居て、当人の帰国を待て相談なんと云うことはありはしない。貴様は福澤の主人になったと知らせて呉れる位の事だ。扨てその跡を襲だ以上は、実は兄でも親だから、五十日の忌服を勤めねばならぬ。夫れから家督相続と云えば其れ相応の勤がなくてはならぬ、藩中小士族相応の勤を命ぜられて居る、けれども私の心と云うものは天外万里、何もかも浮足になって一寸とも落付かぬ。何としても中津に居ようなど云うことは思いも寄らぬ事であるけれども、藩の正式に依ればチャント勤をしなければならぬから、その命を拒むことは出来ない。唯言行を謹み、何と云われてもハイ〳〵と答えて勤めて居ました。自分の内心には如何しても再遊と決して居るけれども、周囲の有様と云うものは中々寄付かれもしない。藩中一般の説は姑く差措き、近い親類の者までも西洋は大嫌で、何事も話し出すことが出来ない。ソコデ私に叔父があるから、其処に行て何か話をして、序ながら夫れとなく再遊の事を少しばかり言掛けて見ると、夫れは〳〵恐ろしい剣幕で頭から叱られた。「怪からぬ事を申すではないか。兄の不幸で貴様が家督相続した上は、御奉公大事に勤をする筈のものだ。ソレに和蘭の学問とは何たる心得違いか、呆返った話だとか何とか叱られたその言葉の中に、叔父が私を冷かして、貴様のような奴は負角力の痩鎹と云うものじやと苦々しく睨み付けたのは、身の程知

らずと云う意味でしょう。迚も叔父さんに賛成して貰おうと云うことは出来そうにもしないが、私が心に思って居れば自から口の端にも出る。出れば狭い所だから直ぐ分る。近処辺りに何処となく評判する。平生私の処に能く来るお婆さんがあって、私の母より少し年長のお婆さんで、お八重さんと云う人。今でも其の人の面を覚えて居る。つい向うのお婆さんで、或るとき私方に来て、「何か聞けば諭吉さんは又大阪に行くと云う話じゃが、マサカお順さん（私の母）そんな事はさせなさらんじゃろう、再び出すなんと云うのはお前さんは気が違うて居はせぬかと云うような、世間一般先ずソンナ風で、その時の私の身の上を申せば寄辺汀の捨小舟、まるで唄の文句のようだ。

母と直談ソコデ私は独り考えた。「是れは迚も仕様がない。唯頼む所は母一人だ。母さえ承知して呉れば誰が何と云うても怖い者はないと。ソレカラ私は母にとっくり話した。「おッ母さん。今私が修業して居るのは斯う云う有様、斯う云う塩梅で、長崎から大阪に行て修業して居ります。自分で考えるには、如何しても修業は出来て何か物になるだろうと思う。この藩に居た所が何としても頭の上る気遣はない。真に朽果つると云うものだ。どんな事があっても私は中津で朽果てようとは思いません。アナタはお淋しいだろうけれども、何卒私を手放して下さらぬか。私の産れたときにお父ッさんは坊主にすると仰しゃったそうですから、私は今から寺の小僧になったと諦めて下さい」。その時私が出れば、母と死んだ兄の娘、産れて三つになる女の子と五十有余の老母と唯の二人で、淋しい心細いに違いないけれども、とっくり話して、

「どうぞ二人で留主をして下さい、私は大阪に行くから」と云たら、母も中々思切りの宜い性質で、「ウム宜しい。「アナタさえ左様云て下されば、誰が何と云ても怖いことはない。「オーそうとも。兄が死んだけれども、死んだものは仕方がない。お前も亦余所に出て死ぬかも知れぬが、死生の事は一切言うことなし。何処へでも出て行きなさい」。ソコデ母子の間と云うものはちゃんと魂胆が出来て仕舞て、ソレカラ愈よ出ようと云うことになる。

四十両の借金家財を売る出るには金の始末をしなければならぬ。その金の始末と云うのは、兄の病気や勤番中の其れ是れの入費、凡そ四十両借金がある。この四十両と云うものは、その時代に私などの家に取ては途方心ない大借。これをこの儘にして置ては迚も始末が付かぬから、何でも片付けなければならぬ。如何しよう。外に仕方がない。何でも売るのだ。一切万物売るより外なしと考えて、聊か頼みがあると云うのは、私の父は学者であったから、藩中では中々蔵書を持て居る。凡そ冊数にして千五百冊ばかりもあって、中には随分世間に類の少ない本もある。例えば私の名を諭吉と云うその諭の字は天保五年十二月十二日の夜、私が誕生したその日に、父が多年所望して居た明律の上諭条例と云う全部六、七十冊ばかりの唐本を買取て、大造喜んで居る処に、その夜男子が出生して重ね〳〵〳〵の喜びと云う所から、その上諭の諭の字を取て私の名にしたと母から聞いた事がある位で、随分珍らしい漢書があったけれども、母と相談の上、蔵書を始め一切の物を売却しようと云うことになって、先ず手近な物から売れるだけ売ろうと云うので、軸物のような物から売り始めて、目ぼしい物を申せば頼山陽の半切

の掛物を金二分に売り、大雅堂の柳下人物の掛物を二両二分、徂徠の書、東涯の書もあったが、誠に値がない、見るに足らぬ。その他はごた〳〵した雑物ばかり。覚えて居るのは大雅堂と山陽。刀は天正祐定二尺五寸拵付、能く出来たもので四両。ソレカラ蔵書だ。中津の人で買う者はありはせぬ。如何したって何十両と云う金を出す藩士はありはせぬ。所で私の先生、白石と云う漢学の先生が、藩で何か議論をして中津を追出されて豊後の臼杵藩の儒者になって居たから、この先生に便って行けば売れるだろうと思て、臼杵まで態々出掛けて行て、先生に話をした処が、先生の世話で残らずの蔵書を代金十五両で臼杵藩に買て貰い、先ず一口に大金十五両が手に入り、その他有らん限り皿も茶碗も丼も猪口も一切売て、漸く四十両の金が揃い、その金で借金は奇麗に済だが、その蔵書中に易経集註十三冊に伊藤東涯先生が自筆で細々と書入をした見事なものがある。是れは亡父が存命中大阪で買取て殊の外珍重したものと見え、蔵書目録に父の筆を以て、この東涯先生書入の易経十三冊は天下稀有の書なり、子孫謹で福澤の家に蔵むべしと、恰も遺言のようなことが害いてある。私も之を見ては何としても売ることが出来ません。是れ丈けはと思うて残して置たその十三冊は今でも私の家にあります。夫れと今に残って居るのは唐焼の丼が二つある。是れは例の雑物売払のとき道具屋が直を付けて丼二つ三分と云うその三分とは中津の藩札で銭にすれば十八文のことだ。余り馬鹿々々しい、十八文ばかり有ても無くても同じことだと思うて売らなかったのが、その後四十何年無事で、今は筆洗になって居るのも可笑しい。

築城書を盗写す夫れは夫れとして、私が今度不幸で中津に帰て居るその間に一つ仕事をしました、と云うのはその時に奥平壹岐と云う人が長崎から帰て居たから、勿論私は御機嫌伺に出なければならぬ。或日奥平の屋敷に推参して久々の面会、四方山の話の序に、主人公が一冊の原書を出して、「この本は乃公が長崎から持て来た和蘭新版の築城書であると云うその書を見た所が、勿論私などは大阪に居ても緒方の塾は医学塾であるから、医書、窮理書の外に遂ぞそんな原書を見たことはないから、随分珍書だと先ず私は感心しなければならぬ、と云うのはその時は丁度ペルリ渡来の当分で、日本国中、海防軍備の話が中々喧しいその最中に、この築城書を見せられたから誠に珍しく感じて、その原書が読で見たくて堪らない。けれども是れは貸せと云た所が貸す気遣はない。夫れからマア色々話をする中に、主人が「この原書は安く買うた。二十三両で買えたから」なんと云うたのには、実に貧書生の胆を潰すばかり。迚も自分に買うことは出来ず、左ればとてゆるりと貸す気遣はないのだから、私は唯原書を眺めて心の底で独り貧乏を歎息して居るその中に、ヒョイと胸に浮んだ一策を遣て見た。「成程是れは結構な原書で御在ます。迚も之を読で仕舞うと云うことは急な事では出来ません。責めては図と目録とでも一通り拝見したいものですが、四、五日拝借は叶いますまいかと手軽に触って見たらば、「よし貸そう」と云て貸して呉れたこそ天与の僥倖、ソレカラ私は家に持て帰て、即刻鵞筆と墨と紙を用意してその原書を初から写掛けた。凡そ二百頁余のものであったと思う。それを写すに就ては誰にも言われぬのは勿論、写す処を人に見られては大変だ。家の奥の方に引込ん

で一切客に遇わずに、昼夜精切り一杯、根のあらん限り写した。そのとき私は藩の御用で城の門の番をする勤があって、二、三日目に一昼夜当番する順になるから、その時には昼は写本を休み、夜になれば窃と写物を持出して、朝、城門の明くまで写して、一目も眠らないのは毎度のことだが、又この通りに勉強しても、人間世界は壁に耳あり眼もあり、既に人に悟られて今にも原書を返せとか何とか云て来はしないだろうか、いよ〳〵露顕すれば唯原書を返したばかりでは済まぬ、御家老様の剣幕で中々六かしくなるだろうと思えば、その心配は堪らない。生れてから泥坊をしたことはないが、泥坊の心配も大抵こんなものであろうと推察しながら、とう〳〵写し終りて、図が二枚あるその図も写して仕舞て、サア出来上った。出来上ったが読合せに困る。是れが出来なくては大変だと云うと、妙な事もあるもので、中津に和蘭のスペルリングの読めるものが只た一人ある。それは藤野啓山と云う医者で、この人は甚だ私の処に縁がある、と云うのは私の父が大阪に居る時に、啓山が医者の書生で、私の家に寄宿して、母も常に世話をして遣たと云う縁故からして、固より信じられる人に違いないと見抜いて、私は藤野の処に行て、「大秘密をお前に語るが、実は斯う〳〵云うことで、奥平の原書を写して仕舞た。所が困るのはその読合せだが、お前はどうか原書を見て居て呉れぬか、私が写したのを読むから。実は昼遣りたいが、昼は出来られない。ヒヨッと分っては大変だから、夜分私が来るから御苦労だが見て居て呉れよと頼んだら、藤野が宜しいと快く請合って呉れて、ソレカラ私は其処の家に三晩か四晩読合せに行て、ソックリ出来て仕舞た。モウ連城の璧を手に握った

ようなもので、夫れから原書は大事にしてあるから如何にも気遣はない。しらばくれて奥平壹岐の家に行て、「誠に難有うございます。お蔭で始めてこんな兵書を見ました。斯う云う新舶来の原書が翻訳にでもなりましたら、嘸マア海防家には有益の事でありましょう。併しこんな結構なものは貧書生の手に得らるゝものでない。有難うございました。返上致しますと云て奇麗に済んだのは嬉しかった。この書を写すに幾日かゝったか能く覚えないが、何でも二十日以上三十日足らずの間に写して仕舞うて、原書の主人に毛頭疑うような顔色もなく、マンマとその宝物の正味を偸み取て私の物にしたのは、悪漢が宝蔵に忍び入たようだ。

医家に砲術修業の願書その時に母が、「お前は何をするのか。そんなに毎晩夜を更かして碌に寝もしないじゃないか。何の事だ。風邪でも引くと宜くない。勉強にも程のあったものだと喧しく云う。「なあに、おツ母さん、大丈夫だ。私は写本をして居るのです。この位の事で私の身体は何ともなるものじゃない。御安心下さい。決して煩いはしませぬと云うたことがありましたが、ソレカラ愈よ大阪に出ようとすると、茲に可笑しい事がある。今度出るには藩に願書を出さなければならぬ。可笑しいとも何とも云いようがない。是れまで私は部屋住だから外に出るからと云て届も願も要らぬ、颯々と出入したが、今度は仮初にも一家の主人であるから願書を出さなければならぬ。夫れから私は兼て母との相談が済んで居るから、叔父にも叔母にも相談は要りはしない。出抜けに蘭学の修業に参りたいと願書を出すと、懇意なその筋の人が内々知らせて呉れるに、「それはイケない。蘭学修業と云うことは御家に先例のない事だと云う。

「そんなら如何すれば宜いかと尋れば、「左様さ。砲術修業と書いたならば済むだろうと云う。「けれども緒方と云えば大阪の開業医師だ。お医者様の処に鉄砲を習いに行くと云うのは、世の中に余り例のない事のように思われる。是れこそ却て不都合な話ではござらぬか。「イヤ、それは何としても御例のない事は仕方がない。事実相違しても宜しいから、矢張り砲術修業でなければ済まぬと云うから、「エー宜しい。如何でも為ましょうと云て、ソレカラ私儀大阪表緒方洪庵の許に砲術修業に罷越したい云々と願書を出して聞済になって、大阪に出ることになった。大抵当時の世の中の塩梅式が分るであろう、と云うのは是れは必ずしも中津一藩に限らず、日本国中悉く漢学の世の中で、西洋流など云うことは仮初にも通用しない。俗に云う鼻掴みの世の中に、唯ペルリ渡来の一条が人心を動かして、砲術だけは西洋流儀にしなければならぬと、云わば一線の血路が開けて、ソコで砲術修業の願書で穏に事が済んだのです。母の病気願が済んで愈よ船に乗て出掛けようとする時に母の病気、誠に困りました。ソレカラ私は一生懸命、此の医者を頼み彼の医者に相談、様々に介抱した所が虫だと云う。虫なれば如何なる薬が一番の良剤かと医者の話を聞くと、その時にはまだサントニーネと云うものはない、セメンシーナが妙薬だと云う。この薬は至極価の高い薬で田舎の薬店には容易にない。中津に只た一軒ある計りだけれども、母の病気に薬の価が高いの安いのと云て居られぬ。私は今こそ借金を払った後でなけなしの金を何でも二朱か一歩出して、そのセメンシーナを買て母に服用させて、其れが利いたのか何か分らぬ、田舎医者の言うことも固より信ずるに足らず、私は唯

運を天に任せて看病大事と昼夜番をして居ましたが、幸に難症でもなかったと見えて日数凡そ二週間ばかりで快くなりましたから、愈よ大阪へ出掛けると日を定めて、出立のとき別を惜しみ無事を祈って呉れる者は母と姉とばかり、知人朋友、見送は扨置き見向く者もなし、逃げるようにして船に乗りましたが、兄の死後、間もなく家財は残らず売払うて諸道具もなければ金もなし、赤貧洗うが如くにして、他人の来て訪問て呉れる者もなし、寂々寥々、古寺見たような家に老母と小さい姪とタッタ二人残して出て行くのですから、流石磊落書生も是れには弱りました。

先生の大恩、緒方の食客となる船中無事大阪に着たのは宜しいが、唯生きて身体が着た計りで、扨て修業をすると云う手当は何もない。ハテ如何したものかと思た所が仕方がない。何しろ先生の処へ行てこの通り言おうと思て、夫から、大阪着はその歳の十一月頃と思う、その足で緒方へ行て、「私は兄の不幸、斯う〳〵云う次第で又出て参りましたと先ず話をして、夫から私は先生だからほんとうの親と同じ事で何も隠すことはない、家の借金の始末、家財を売払うた事から、一切万事何もかも打明けて、彼の原書写本の一条まで真実を話して、「実は斯う云う築城書を盗写してこの通り持て参りましたと云た所が、先生は笑て、「爾うか、ソレは一寸との間に怪しからぬ悪い事をしたような又善い事をしたような事じゃ。何は扨置き貴様は大造見違えたように丈夫になった。「左様で御在ます。身体は病後ですけれども、今歳の春大層御厄介になりましたその時の事はモウ覚えませぬ。元の通り丈夫になりました。「それは結構だ。

ソコデお前は一切聞て見ると如何しても学費のないと云うことは明白に分ったから、私が世話をして遣りたい、けれども外の書生に対して何かお前一人に贔屓するようにあっては宜くない。待て〳〵。その原書は面白い。就ては乃公がお前に云付けてこの原書を訳させると、斯う云うことに仕よう、そのつもりで居なさいと云て、ソレカラ私は緒方の食客生になって、医者の家だから食客生と云うのは調合所の者より外にありはしませぬが、私は医者でなくて只飜訳と云う名義で医家の食客生になって居るのだから、その意味は全く先生と奥方との恩恵好意のみ、実際に飜訳はしてもしなくても宜いのであるけれども、嘘から出た誠で、私はその原書を飜訳して仕舞いました。

書生の生活酒の悪癖私は是れまで緒方の塾に這入らずに屋敷から通って居たのであるが、安政三年の十一月頃から塾に這入て内塾生となり、是れが抑も私の書生生活、活動の始まりだ。元来緒方の塾と云うものは真実日進々歩主義の塾で、その中に這入て居る書生は皆活溌有為の人物であるが、一方から見れば血気の壮年、乱暴書生ばかりで、中々一筋縄でも二筋縄でも始末に行かぬ人物の巣窟、その中に私が飛込で共に活溌に乱暴を働いた、けれども又自から外の者と少々違って居ると云うこともお話しなければならぬ。先ず第一に私の悪い事を申せば、生来酒を嗜むと云うのが一大欠点、成長した後には自からその悪い事を知ても、悪習既に性を成して自から禁ずることの出来なかったと云うことも、敢て包み隠さず明白に自首します。自分の悪い事を公けにするは余り面白くもないが、正味を言わねば事実談にならぬから、先ず一ト通

り幼少以来の飲酒の歴史を語りましょう。抑も私の酒癖は、年齢の次第に成長するに従て飲覚え、飲慣れたと云うでなくして、生れたまゝ物心の出来た時から自然に数寄でした。今に記憶して居る事を申せば、幼少の頃、月代を剃るとき、頭の盆の窪を剃ると痛いから嫌がる。スルト剃て呉れる母が、「酒を給べさせるから此処を剃らせろと云うその酒が飲みたさ計りに、痛いのを我慢して泣かずに剃らして居た事は幽に覚えて居ます。天性の悪癖、誠に愧ずべき事です。その後、次第に年を重ねて弱冠に至るまで、外に何も法外な事は働かず行状は先ず正しい積りでしたが、俗に云う酒に目のない少年で、酒を見ては殆んど廉恥を忘れるほどの意気地なしと申して宜しい。

　ソレカラ長崎に出たとき、二十一歳とは云いながらその実は十九歳余り、マダ丁年にもならぬ身で立派な酒客、唯飲みたくて堪らぬ。所が兼ての宿願を達して学問修業とあるから、自分の本心に訴えて何としても飲むことは出来ず、滞留一年の間死んだ気になって禁酒しました。山本先生の家に食客中も、大きな宴会でもあればその時に盗んで飲むことは出来る。又銭さえあれば町に出て一寸と升の角から遣るのも易いが、何時か一度は露顕すると思て、トウ〳〵辛抱して一年の間、正体を現わさずに、翌年の春、長崎を去て諫早に来たとき始めてウント飲んだ事がある。その後程経て文久元年の冬、洋行するとき、長崎に寄港して二日ばかり滞在中、山本の家を尋ねて先年中の礼を述べ、今度洋行の次第を語り、そのとき始めて酒の事を打明け、下戸とは偽り実は大酒飲だと白状して、飲んだも飲んだか、恐ろしく飲んで、先生夫婦を驚か

した事を覚えて居ます。

血に交わりて赤くならずこの通り幼少の時から酒が数寄で酒の為めには有らん限りの悪い事をして随分不養生も犯しましたが、又一方から見ると私の性質として品行は正しい。是れだけは少年時代、乱暴書生に交っても、家を成して後、世の中に交際しても、少し人に変って大きな口が利かれる。滔々たる濁水社会にチト変人のように窮屈なようにあるが、左ればとて実際浮気な花柳談と云うことは大抵事細に知て居る。何故と云うに他人の夢中になって汚ない事を話して居るのを能く注意して聞て心に留めて置くから、何でも分らぬことはない。例えば、私は元来囲碁を知らぬ、少しも分らないけれども、塾中の書生仲間に囲碁が始まると、ジャ／〃＼張り出て巧者なことを云て、ヤア黒のその手は間違いだ、夫れ又やられたではないか、油断をすると此方の方が危いぞ、馬鹿な奴だあれを知らぬかなどゝ、宜い加減に饒舌れば、書生の素人の拙囲碁で、助言は固より勝手次第で、何方が負けそうなと云う事は双方の顔色を見て能く分るから、勝つ方の手を誉めて負ける方を悪くさえ云えば間違いはない。ソコデ私は中々囲碁が強いように見えて、「福澤一番遣ろうかと云われると、「馬鹿云うな、君達を相手にするのは手間潰しだ、そんな暇はないと、高くとまって澄し込んで居るから、いよ／＼上手のように思われて凡そ一年ばかりは胡摩化して居たが、何かの拍子にツイ化の皮が現われて散々罵られたことがある、と云うようなもので、花柳社会の事も他人の話を聞きその様子を見て大抵こまかに知て居る、知て居ながら自分一身は鉄石の如く大丈夫である。マア申せば血に交わり

て赤くならぬとは私の事でしょう。自分でも不思議のようにあるが、是れは如何しても私の家の風だと思います。幼少の時から兄弟五人、他人まぜずに母に育てられて、次第に成長しても、汚ない事は仮初にも蔭にも日向にも家の中で聞たこともなければ話した事もない。清浄潔白、自から同藩普通の家族とは色を異にして、ソレカラ家を去て他人に交わっても、その風をチャント守て、別に慎むでもない、当然な事だと思て居た。ダカラ緒方の塾に居るその間も、遂ぞ茶屋遊をするとか云うような事は決してない、と云いながら前にも云う通り何も偏屈で夫れを嫌って恐れて逃げて廻って蔭で理屈らしく不平な顔をして居ると云うような事も頓としない。遊廓の話、茶屋の話、同窓生と一処になってドシ〳〵話をして問答して、而して私は夫れを又冷かして、「君達は誠に野暮な奴だ。茶屋に行てフラレて来ると云うような馬鹿があるか。僕は登楼は為ない。為ないけれども、僕が一度び奮発して楼に登れば、君達の百倍被待て見せよう。君等のようなソンナ野暮な事をするなら止して仕舞え。ドウセ登楼などの出来そうな柄でない。田舎者めが、都会に出て来て茶屋遊のABCを学んで居るなんて、ソンナ鈍いことでは生涯役に立たぬぞと云うような調子で哦鳴り廻って、実際に於てその哦鳴る本人は決して浮気でない。ダカラ人が私を馬鹿にすることは出来ぬ。能く世間にある徳行の君子なんて云う学者が、ムヅ〳〵してシント考えて、他人の為ることを悪い〳〵と心の中で思て不平を呑で居る者があるが、私は人の言行を見て不平もなければ心配もない、一緒に戯れて洒蛙々々として居るから却て面白い。

書生を懲らしめる酒の話は幾らもあるが、安政二年の春、始めて長崎から出て緒方の塾に入門したその即日に、在塾の一書生が始めて私に遇て云うには、「君は何処から来たか。「長崎から来たと云うのが話の始まりで、その書生の云うに、「爾うか、以来は懇親にお交際したい。就ては酒を一献酌もうではないかと云うから、私が之に答えて、「始めてお目に掛て自分の事を云うようであるが、私は元来の酒客、然かも大酒だ。一献酌もうとは有難い、是非お供致したい、早速お供致したい。だが念の為めに申して置くが、私には金はない、実は長崎から出て来たばかりで、塾で修業するその学費さえ甚だ怪しい。有るか無いか分らない。矧や酒を飲むなどゝ云う金は一銭もない。是れだけは念の為めにお話して置くが、酒を飲みにお誘とは誠に辱ない。是非お供致そうと斯う出掛けた。所がその書生の云うに、「そんな馬鹿げた事があるものか、酒を飲みに行けば金の要るのは当然の話だ。夫ればかりの金のない筈はないじゃないかと云う。「何と云われても、ない金はないが、折角飲みに行こうと云うお誘だから是非行きたいものじゃと云うのが物分れでその日は仕舞い、翌日も屋敷から通って塾に行てその男に出遇い、「昨日のお話は立消になったが、如何だろうか。私は今日も酒が飲みたい連れて行て呉れないか、どうも行きたいと此方から促した処が、馬鹿云うなと云うような事で、お別れになって仕舞た。

ソレカラ一月経ち二月、三月経って、此方もチャント塾の勝手を心得て、人の名も知れば顔も知ると云うことになって当り前に勉強して居る。一日その今の男を引捕まえた。引捕まえて

面談、「お前は覚えて居るだろう、乃公が長崎から来て始めて入門したその日に何と云た、酒を飲みに行こうと云たじゃないか。その意味は新入生と云うものは多少金がある、之を誘出して酒を飲もうと斯う云う考だろう。言わずとも分て居る。彼の時に乃公が何と云た、乃公は酒は飲みたくて堪らないけれども金がないから飲むことは出来ないと刎付けて、その翌日は又此方から促した時に、お前は半句の言葉もなかったじゃないか。能く考えて見ろ。憚り乍ら論吉だからその位に強く云たのだ。乃公はその時には自から決する処があった。お前が愚図々々云うなら即席に叩倒して先生の処に引摺て行て遣ろうと思ったその決心が顔色に顕れて怖かったのか何か知らぬが、お前はどうもせずに引込んで仕舞た。如何にしても済まない奴だ。斯う云う奴のあるのは塾の為めには獅子身中の虫と云うものだ。こんな奴が居て塾を卑劣にするのだ。以来新入生に遇て仮初にも左様な事を云うと、乃公は他人の事とは思わぬぞ。直ぐにお前を捕まえて、誰とも云わず先生の前に連れて行て、先生に裁判して貰うが宜しいか。心得て居ろと酷く懲しめて遣た事があった。

塾長になるその後私の学問も少しは進歩した折柄、先輩の人は国に帰る、塾中無人にて遂に私が塾長になった。扨塾長になったからと云て、元来の塾風で塾長に何も権力のあるではなし、唯塾中一番六かしい原書を会読するときその会頭を勤める位のことで、同窓生の交際に少しも軽重はない。塾長殿も以前の通りに読書勉強して、勉強の間にはあらん限りの活動ではないどうかと云えば先ず乱暴をして面白がって居ることだから、その乱暴生が徳義を以て人を感化

するなど云う鹿爪らしい事を考える訳けもない。又塾風を善くすれば先生に対しての御奉公、御恩報じになると、そんな老人めいた心のあろう筈もないが、唯私の本来仮初にも弱い者いじめをせず、仮初にも人の物を貪らず、人の金を借用せず、唯の百文も借りたることはないその上に、品行は清浄潔白にして俯仰天地に愧ずと云う、自から外の者と違う処があるから、一緒になってワイ〳〵云て居ながら、マア一口に云えば、同窓生一人も残らず自分の通りになれ、又自分の通りにして遣ろうと云うような血気の威張りであったろうと今から思うだけで、決して道徳とか仁義とか又大恩の先生に忠義とか、そんな奥ゆかしい事は更らに覚えはなかったのです。併し何でも爾う威張り廻って暴れたのが、塾の為めに悪い事もあろう、又自から役に立たこともあるだろうと思う。若し役に立て居れば夫れは偶然で、決して私の手柄でも何でもありはしない。

緒方の塾風

左様云えば何か私が緒方塾の塾長で頻りに威張て自然に塾の風を矯正したように聞ゆるけれども、又一方から見れば酒を飲むことでは随分塾風を荒らした事もあろうと思う。塾長になっても相替らず元の貧書生なれども、その時の私の身の上は、故郷に在る母と姪と二人は藩から貰う少々ばかりの家禄で暮して居る、私は塾長になってから表向に先生家の賄を受けて、

その上に新書生が入門するとき先生家に束脩を納めて同時に塾長へも金貳朱を呈すると規則があるから、一箇月に入門生が三人あれば塾長には一分二朱の収入、五人あれば二分二朱にもなるから小遣銭には沢山で、是れが大抵酒の代になる。衣服は国の母が手織木綿の品を送て呉れて夫れには心配がないから、少しでも手許に金があれば直に飲むことを考える。是れが為めには同窓生の中で私に誘われてツイ〳〵飲だ者も多かろう。扨その飲みようも至極お粗末、殺風景で、銭の乏しいときは酒屋で三合か五合買て来て塾中で独り飲む。夫れから少し都合の宜い時には一朱か二朱以て一寸と料理茶屋に行く、是れは最上の奢で容易に出来兼ねるから、先ず度々行くのは鶏肉屋、夫れよりモツト便利なのは牛肉屋だ。その時大阪中で牛鍋を喰わせる処は唯二軒ある。一軒は難波橋の南詰、一軒は新町の廓の側にあって、最下等の店だから、凡そ人間らしい人で出入する者は決してない。文身だらけの町の破落戸と緒方の書生ばかりが得意の定客だ。何処から取寄せた肉だか、殺した牛やら、病死した牛やら、そんな事には頓着なし、一人前百五十文ばかりで牛肉と酒と飯と十分の飲食であったが、牛は随分硬くて臭かった。

塾生裸体当時は士族の世の中だから皆大小は挟して居る、けれども内塾生五、六十人の中で、私は元来物を質入れしたことがないから、双刀はチャント持て居るその外、塾中に二腰か三腰もあったが、跡は皆質に置て仕舞て、塾生の誰か所持して居るその刀が恰も共有物で、是れでも差支のないと云うは、銘々倉屋敷にでも行くときに二本挟すばかりで、不断は脇差一本、

たゞ丸腰にならぬ丈けの事であったから。夫れから大阪は暖い処だから冬は難渋な事はないが、夏は真実の裸体、褌も襦袢も何もない真裸体。勿論飯を喫う時と会読をする時には自から遠慮するから何か一枚ちょいと引掛ける、中にも紹の羽織を真裸体の上に着てる者が多い。是れは余程おかしな風で、今の人が見たら、さぞ笑うだろう。食事の時には迚も座って喰うなんと云うことは出来た話でない。足も踏立てられぬ板敷だから、皆上草履を穿て立て喰う。一度は銘々に別けてやったこともあるけれども、爾うは続かぬ。お鉢が其処に出してあるから、銘々に茶碗に盛て百鬼立食。ソンナ訳けだから食物の価も勿論安い。お菜は一六が葱と薩摩芋の難波煮、五十が豆腐汁、三八が蜆汁と云うようになって居て、今日は何か出ると云うことは極って居る。

裸体の奇談失策裸体の事に就て奇談がある。或る夏の夕方、私共五、六名の中に飲む酒が出来た。すると一人の思付に、この酒を彼の高い物干の上で飲みたいと云うに、全会一致で、サア屋根づたいに持出そうとした処が、物干の上に下婢が三、四人涼んで居る。是れは困た、今彼処で飲むと彼奴等が奥に行て何か饒舌るに違いない、邪魔な奴じゃと云う中に、長州生に松岡勇記と云う男がある。至極元気の宜い活溌な男で、この松岡の云うに、僕が見事に彼の女共を物干から逐払て見せようと云いながら、真裸体で一人ツカ〳〵と物干に出て行き、お松どんお竹どん、暑いじゃないかと言葉を掛けて、そのまゝ傾向きに大の字なりに成て倒れた。この風体を見ては流石の下婢も其処に居ることが出来ぬ。気の毒そうな顔をして皆下りて仕舞た。

すると松岡が物干の上から蘭語で上首尾早く来いと云う合図に、塾部屋の酒を持出して涼しく愉快に飲だことがある。

又或るとき是れは私の大失策、或る夜私が二階に寝て居たら、下から女の声で福澤さん〳〵と呼ぶ。私は夕方酒を飲で今寝たばかり。うるさい下女だ、今ごろ何の用があるかと思うけれども、呼べば起きねばならぬ。夫れから真裸体で飛起て、階子段を飛下りて、何の用だとふんばたかった所が、案に相違、下女ではあらで奥さんだ。何うにも斯うにも逃げようにも逃げられず、真裸体で座ってお辞儀も出来ず、進退窮して実に身の置処がない。奥さんも気の毒だと思われたのか、物をも云わず奥の方に引込で仕舞た。翌朝御託に出て昨夜は誠に失礼仕りましたと陳べる訳けにも行かず、到頭末代御挨拶なしに済で仕舞た事がある。是ればかりは生涯忘れることが出来ぬ。先年も大阪に行て緒方の家を尋ねて、この階子段の下だったと四十年前の事を思出して、独り心の中で赤面しました。

不潔に頓着せず塾員は不規則と云わんか不整頓と云わんか乱暴狼藉、丸で物事に無頓着。その無頓着の極は世間で云うように潔不潔、汚ないと云うことを気に止めない。例えば、塾の事であるから勿論桶だの丼だの皿などの、あろう筈はないけれども、緒方の塾生は学塾の中に居ながら七輪もあれば鍋もあって、物を煮て喰うと云うような事を不断遣て居る、その趣は恰も手鍋世帯の台所見たような事を机の周囲で遣て居た。けれども道具の足ると云うことのあろう筈はない。ソコで洗手盥も金盥も一切食物調理の道具になって、暑中など何処からか素麺

を貰うと、その素麺を奥の台所で湯煮て貰うて、その素麺を冷すには、毎朝、顔を洗う洗手盥を持て来て、その中で冷素麺にして、汁を拵えるに調合所の砂糖でも盗み出せば上出来、その外、肴を拵えるにも野菜を洗うにも洗手盥は唯一のお道具で、ソンナ事は少しも汚ないと思わなかった。

夫れ所ではない。虱は塾中永住の動物で、誰れ一人も之を免かれることは出来ない。一寸と裸体になれば五疋も十疋も捕るに造作はない。春先き少し暖気になると羽織の襟に匍出すことがある。或る書生の説に、ドウダ、吾々の虱は大阪の焼芋に似て居る。冬中が真盛りで、春になり夏になると次第に衰えて、暑中二、三箇月蚤と交代して引込み、九月頃新芋が町に出ると吾々の虱も復た出て来るのは可笑しいと云た事がある。私は一案を工風し、抑も虱を殺すに熱湯を用うるは洗濯婆の旧筆法で面白くない、乃公が一発で殺して見せようと云て、厳冬の霜夜に襦袢を物干に洒して虱の親も玉子も一時に枯らしたことがある。この工風は私の新発明ではない、曾て誰れかに聞たことがあるから遣て見たのです。

豚を殺すそんな訳けだから塾中の書生に身なりの立派な者は先ず少ない。そのくせ市中の縁日など云えば夜分屹度出て行く。行くと往来の群集、就中娘の子などは、アレ書生が来たと云て脇の方に避けるその様子は、何か穢多でも出て来て夫れを穢ながるようだ。如何も仕方がない。往来の人から見て穢多のように思う筈だ。或るとき難波橋の吾々得意の牛鍋屋の親爺が豚を買出して来て、牛屋商売であるが気の弱い奴で、自分に殺すことが出来ぬからと云て、緒方

の書生が目指された。夫れから親爺に逢て、「殺して遣るが、殺す代りに何を呉れるか」――「左様ですな」――「頭を呉れるか」――「頭なら上げましょう。」夫れから殺しに行た。此方は流石に生理学者で、動物を殺すに窒塞させれば訳けはないと云うことを知て居る。幸いその牛屋は河岸端であるから、其処へ連て行て四足を縛て水に突込て直ぐ殺した。そこでお礼として豚の頭を貰って来て、奥から鉈を借りて来て、先ず解剖的に脳だの眼だの能く〳〵調べて、散々いじくった跡を煮て喰たことがある。是れは牛屋の主人から穢多のように見込れたのでしよう。

熊の解剖それから又或時には斯う云う事があった。道修町の薬種屋に丹波か丹後から熊が来たと云う触込み。或る医者の紹介で、後学の為め解剖を拝見致したいから誰か来て熊を解剖して呉れぬかと塾に云て来た。「それは面白い」。当時緒方の書生は中々解剖と云うことに熱心であるから、早速行て遣ろうと云うので出掛けて行く。私は医者でないから行かぬが、塾生中七、八人行きました。夫から解剖して是れが心臓で是れが肺、是れが肝と説明して遣た所が、「誠に有難い」と云て薬種屋も医者もふっと帰って仕舞た。その実は彼等の考に、緒方の書生に解剖して貰えば無疵に熊胆が取れると云うことを知て居るものだから、解剖に託して熊胆が出るや否や帰て仕舞たと云う事がチャンと分たから、書生さん中々了簡しない。是れは一番こねくって遣ろうと、塾中の衆議一決、直にそれ〳〵〳〵掛りの手分けをした。塾中に雄弁滔々と能く喋舌て誠に剛情なシツコイ男がある、田中発太郎（今は新吾と改名して加賀金沢に居る）と

云う、是れが応接掛、それから私が掛合手紙の原案者で、信州飯山から来て居る書生で菱湖風の書を善く書く沼田芸平と云う男が原案の清書する。夫れから先方へ使者に行くのは誰れ、脅迫するのは誰れと、どうにも斯うにも手に余る奴ばかりで、動もすれば手短に打毀しに行くと云うような風を見せる奴もある。又彼方から来れば捏くる奴が控えて居る。何でも六、七人手勢を揃えて拈込で、理屈を述べることは筆にも口にも隙はない。応接掛りは不断の真裸体に似ず、袴羽織にチャント脇差を挟して緩急剛柔、ツマリ学医の面目云々を楯にして剛情な理屈を云うから、サア先方の医者も困て仕舞い、そこで平あやまりだと云う。只謝るだけで済めば宜いが、酒を五升に鶏と魚か何かを持て来て、それで手を拍て塾中で大に飲みました。

芝居見物の失策それに引換えて此方から取られたことがある。道頓堀の芝居に与力や同心のような役人が見廻りに行くと、スット桟敷に通て、芝居の者共が茶を持て来る菓子を持て来るなどして、大威張りで芝居をたゞ見る。兼てその様子を知て居るから、緒方の書生が、気味の悪い話サ、大小を挟して宗十郎頭巾を冠て、その役人の真似をして度々行て、首尾能く芝居見物して居た。所が度重なれば顕われるの諺に洩れず、或る日、本者が来た。サア此方は何とも云われないだろう、詐欺だから、役人を偽造したのだから。その時はこねくられたとも何とも、進退谷まり大騒ぎになって、夫れから玉造の与力に少し由縁を得て、ソレに泣付て内済を頼で、ヤット無事に収まった。そのとき酒を持て行たり肴を持て行たりして、何でも金にして三歩ばかり取られたと思う。この詐欺の一件は丹後宮津の高橋順益と云う男が頭取であったが、

私は元来芝居を見ない上に、この事を不安心に思うて、「それは余り宜くなかろう、マサカの時は大変だからと云たが肯ない。「何に訳けはない、自から方便ありなんてヅウ〳〵〳〵しく遣て居たが、とう〳〵捕まったのが可笑しい所か一時大心配をした。

喧嘩の真似それから時としては斯う云う事もあった。その乱暴さ加減は今人の思寄らぬことだ。警察がなかったから云わば何でも勝手次第である。元来大阪の町人は極めて臆病だ。江戸で喧嘩をすると野次馬が出て来て滅茶苦茶にして仕舞うが、大阪では野次馬は迚ても出て来ない。夏の事で夕方飯を喰てブラ〳〵出て行く。申合をして市中で大喧嘩の真似をする。お互に痛くないように大造な剣幕で大きな声で怒鳴て掴合い打合うだろう。爾うするとその辺の店はバタ〳〵片付けて戸を締めて仕舞うて寂りとなる。喧嘩と云た所が唯それだけの事で外に意味はない。その法は同類が二、三人ずつ分れて一番繁昌な賑やかな処で双方から出逢うような仕組にするから、賑やかな処と云えば先ず遊廓の近所、新町九軒の辺で常極りに遣て居たが、併し余り一箇所で遣て化の皮が顕れるとイカヌから、今夜は道頓堀で遣ろう、順慶町で遣ろうと云て遣たこともある。信州の沼田芸平などは余ほど喧嘩の上手であった。

弁天小僧それから一度は斯う云う事があった。私と先輩の同窓生で久留米の松下元芳と云う医者と二人連で、御霊と云う宮地に行て夜見世の植木を冷かしてる中に、植木屋が、「旦那さん悪さをしてはいけまへんと云たのは、吾々の風体を見て万引をしたと云う意味だから、サア了簡しない。丸で弁天小僧見たように拈繰返した。「何でもこの野郎を打殺して仕舞え。理屈

を云わずに打殺して仕舞えと私が怒鳴る。松下は慰めるような風をして、「マア殺さぬでも宜いじゃないか。「ヤア面倒だ、一打に打殺して仕舞うから止めなさんなと、夫れ是れする中に往来の人は黒山のように集まって大混雑になって来たから、此方は尚お面白がって威張て居ると、御霊の善哉屋の餅搗か何かして居る角力取が仲裁に這入て来て、「どうか宥して遣て下さいと云うから、「よし貴様が中に這入れば宥して遣る。併し明日の晩此処に見世を出すと打殺して仕舞うぞ。折角中に這入たから今夜は宥して遣るからと云て、翌晩行て見たら、正直な奴だ、植木屋の処だけ土場見世を休んで居た。今のように一寸も警察と云うものがなかったから乱暴は勝手次第、けれども存外に悪い事をしない、一寸この植木見世位の話で実のある悪事は決してしない。

チボと呼ばれる私が一度大に恐れたことは、是れも御霊の近処で上方に行われる砂持と云う祭礼のような事があって、町中の若い者が百人も二百人も灯籠を頭に掛けてヤイ〳〵云て行列をして町を通る。書生三、四人して之を見物して居る中に、私が如何いう気であったか、何れ酒の機嫌でしょう、杖か何かでその頭の灯籠を打落して遣た。スルトその連中の奴と見える。チボじゃ〳〵と怒鳴り出した。大阪でチボ（スリ）と云えば、理非を分たず打殺して川に投り込む習わしだから、私は本当に怖かった。何でも逃げるに若かずと覚悟をして、跣になって堂島の方に逃げた。その時私は脇差を一本挟して居たから、若し追付かるようになれば後向て進で斬るより外仕方がない。斬ては誠に不味い。仮初にも人に疵を付ける了簡はないから、唯

一生懸命に駈けて、堂島五丁目の奥平の倉屋敷に飛込でホット呼吸をした事がある。

無神無仏又大阪の東北の方に葭屋橋と云う橋があるその橋手前の処を築地と云て、在昔は誠に如何な家ばかり並んで居て、マア待合をする地獄屋とでも云うような内実穢ない町であったが、その築地の入口の角に地蔵様か金比羅様か知らん小さな堂がある。中々繁昌の様子で、其処に色々な額が上げてある。或は男女の拝んでる処が描いてある、何か封書が順に貼付けてある、又は髻が切て結い付けてある。夫れを昼の中に見て置て、夜になるとその封書や髻のあるのを引さらえて塾に持て帰て開封して見ると、種々様々の願が掛けてあるから面白い。「ハヽア是れは博奕を打た奴が止ると云うのか。是れは禁酒だ。是れは難船に助かったお礼。此方のは女狂にこり〳〵した奴だ。夫れは何歳の娘が妙な事を念じて居るなどゝ、唯それを見るのが面白くて毎度遣た事だが、兎に角に人の一心を籠めた祈願を無茶苦茶にするとは罪の深いことだ。無神無仏の蘭学生に逢ては仕方がない。

遊女の贋手紙夫れから塾中の奇談を云うと、そのときの塾生は大抵みな医者の子弟だから、頭は坊主か総髪で国から出て来るけれども、大阪の都会に居る間は半髪になって天下普通の武家の風がして見たい。今の真宗坊主が毛を少し延ばして当前の断髪の真似をするような訳けで、内実の医者坊主が半髪になって刀を挟して威張るのを嬉しがって居る。その時、江戸から来て居る手塚と云う書生があって、この男は或る徳川家の藩医の子であるから、親の拝領した葵の紋付を着て、頭は塾中流行の半髪で太刀作の刀を挟てると云う風だから、如何にも見栄があっ

て立派な男であるが、如何も身持が善くない。ソコデ私が或る日、手塚に向て、「君が本当に勉強すれば僕は毎日でも講釈をして聞かせるから、何は扨置き北の新地に行くことは止しなさいと云たら、当人もその時は何か後悔した事があると見えて「アヽ新地か、今思出しても忌だ。決して行かない。「それなら屹度君に教えて遣るけれども、マダ疑わしい。行かないと云う証文を書け。「宜しい如何な事でも書くと云うから、云々今後屹度勉強する、若し違約をすれば坊主にされても苦からずと云う証文を書かせて私の手に取て置て、約束の通りに毎日別段に教えて居た所が、その後手塚が真実勉強するから面白くない。斯う云うのは全く此方が悪い。人の勉強するのを面白くないとは怪しからぬ事だけれども、何分興がないから窃と両三人に相談して、「彼奴の馴染の遊女は何と云う奴か知ら。「それは直ぐに分る、何々という奴。「よし、それならば一つ手紙を遣ろうと、夫れから私が遊女風の手紙を書く。片言交りに彼等の云いそうな事を並べ立て、何でも彼の男は無心を云われて居るに相違ないその無心は、屹度麝香を呉れろとか何とか云われた事があるに違いないと推察して、文句の中に「ソレあのとき役足のじゃこはどておますと云うような、判じて読まねば分らぬような事を書入れて、鉄川様何々よりと記して手紙は出来たが、併し私の手蹟じや不味いから長州の松岡勇記と云う男が御家流で女の手に紛らわしく書いて、ソレカラ玄関の取次をする書生に云含めて、「是れを新地から来たと云て持て行け。併し事実を云えば打撲るぞ。宜しいかと脅迫して、夫れから取次が本人の処に持て行て、「鉄川と云う人は塾中にない、多分手塚君のことゝ思うから持て来たと云て

渡した。手紙偽造の共謀者はその前から見え隠れに様子を窺うて居た所が、本人の手塚は一人で頻りにその手紙を見て居る。麝香の無心があった事か如何か分らないが、手塚の二字を大阪なまりにテツカと云うそのテツカを鉄川と書いたのは、高橋順益の思付で余ほど善く出来てる。そんな事で如何やら斯うやら遂に本人をしゃくり出して仕舞たのは罪の深い事だ。二、三日は止まって居たが果して行たから、ソリヤ締めたと共謀者は待て居る。翌朝帰て平気で居るから、此方も平気で、私が鋏を持て行てひょいと引捕えた所が、手塚が驚いて「どうすると云うから、「どうするも何もない、坊主にするだけだ。坊主にされて今のような立派な男になるには二年ばかり手間が掛るだろう。往生しろと云て、髻を捕えて鋏をガチャ〳〵云わせると、当人は真面目になって手を合せて拝む。そうすると共謀者中から仲裁人が出て来て、「福澤、余り酷いじゃないか。「何も文句なしじゃないか、坊主になるのは約束だと問答の中に、馴合の中人が段々取持つような風をして、果ては坊主の代りに酒や鶏を買わして、一処に飲みながら又冷かして、「お願いだ、もう一度行て呉れんか、又飲めるからとワイワイ云たのは随分乱暴だけれども、それが自から切諫になって居たこともあろう。

御幣担ぎを冷かす同窓生の間には色々な事のあるもので、肥後から来て居た山田謙輔と云う書生は極々の御幣担で、しの字を言わぬ。その時、今の市川団十郎の親の海老蔵が道頓堀の芝居に出て居るときで、芝居の話をすると、山田は海老蔵のよばいを見るなんて云う位な御幣担だから、性質は至極立派な人物だけれとも、如何も蘭学書生の気に入らぬ筈だ。何か話の端には

之を愚弄して居ると、山田の云うに「福澤々々、君のように無法な事ばかり云うが、マア能く考えて見給え。正月元日の朝、年礼に出掛けた時に、葬礼に逢うと鶴を台に戴せて担で来るのを見ると何方が宜いかと云うから、私は、「夫れは知れた事だ。死人は喰われんから鶴の方が宜い。けれども鶴だって乃公に喰わせなければ死人も同じ事だと答えたような塩梅式で、何時も冷かして面白がって居る中に、或るとき長与専斎が誰れかと相談して、彼奴を一番大に遣てやろうじゃないかと一工風して、当人の不在の間にその硯に紙を巻いて位牌を拵えて、長与の書が旨いから立派に何々院何々居士と云う山田の法名を書いて机の上に置て、当人の飯を喰う茶碗に灰を入れて線香を立てゝ位牌の前にチャント供えて置た所が、帰て来て之を見て忌な顔をしたとも何とも、真青になって腹を立てゝ居たが、私共は如何も怖かった。若しも短気な男なら切付けて来たかも知れないから。

欺て河豚を喰わせる夫れから又一度遣た後で怖いと思たのは人をだまして河豚を喰わせた事だ。私は大阪に居るとき颯々と河豚も喰えば河豚の肝も喰て居た。或る時、芸州仁方から来て居た書生、三刀元寛と云う男に、鯛の味噌漬を貰て来たが喰わぬかと云うと、「有難い、成程宜い味がすると、悦んで喰て仕舞て二時間ばかり経てから、「イヤ可愛そうに、今喰たのは鯛でも何でもない、中津屋敷で貰た河豚の味噌漬だ。食物の消化時間は大抵知てるだろう、今吐剤を飲でも無益だ。河豚の毒が嘔かれるなら嘔て見ろと云たら、三刀も医者の事だから能く分て居る。サア気を揉で私に武者振付くように腹を立てたが、私も後になって余り洒落に念が入

過ぎたと思て心配した。随分間違の生じ易い話だから。

料理茶屋の物を盗む前に云う通り御霊の植木見世で万引と疑われたが、疑われる筈だ、緒方の書生は本当に万引をして居たその万引と云うは、呉服店で反物なんど云う念の入た事ではない、料理茶屋で飲だ帰りに猪口だの小皿だの色々手ごろな品を窃と盗んで来るような万引である。同窓生互に夫れを手柄のようにして居るから、送別会などゝ云う大会のときには穫物も多い。中には昨夜の会で団扇の大きなのを背中に入れて帰る者もあれば、平たい大皿を懐中し吸物椀の蓋を袂にする者もある。又或る奴は、君達がそんな半端物を挙げて来るのはまだ拙ない。乃公の獲物を拝見し給えと云て、小皿を十人前揃えて手拭に包んで来たこともある。今思えば是れは茶屋でもトックに知て居ながら黙って通して、実はその盗品の勘定も払の内に這入て居るに相違ない、毎度の事でお極りの盗坊だから。

難波橋から小皿を投ずその小皿に縁のある一奇談は、或る夏の事である、夜十時過ぎになって酒が飲みたくなって、嗚呼飲みたいと一人が云うと、僕も爾うだと云う者が直に四、五人出来た。所がチャント門限があって出ることが出来ぬから、当直の門番を脅迫して無理に開けさして、鍋島の浜と云う納涼の葭簀張で、不味いけれども芋蛸汁か何かで安い酒を飲で、帰りに例の通りに小皿を五、六枚挙げて来た。夜十二時過でもあったか、難波橋の上に来たら、下流の方で茶船に乗てジャラ〳〵三味線を鳴らして騒いで居る奴がある。「あんな事をして居やがる。此方は百五十か其処辺の金を見付出して漸く一盃飲で帰る所だ。忌々敷い奴等だ。あんな奴が

あるから此方等が貧乏するのだと云いさま、私の持てる小皿を二、三枚投付けたら、一番仕舞の一枚で三味線の音がプッツリ止んだ。その時は急いで逃げたから人が怪我をしたかどうか分らなかった。所が不思議にも一箇月ばかり経て其れが能く分った。塾の一書生が北の新地に行て何処かの席で芸者に逢うたとき、その芸者の話に、「世の中には酷い奴もある。一箇月ばかり前の夜に私がお客さんと舟で難波橋の下で涼んで居たら、橋の上からお皿を投げて、丁度私の三味線に中って裏表の皮を打抜きましたが、本当に危ない事で、先ず〳〵怪我をせんのが仕合でした。何処の奴か四、五人連れでその皿を投げて置て南の方にドン／〃＼逃げて行きました。実に憎らしい奴もあればあるものと、斯う〳〵芸者が話して居たと云うのを、私共は夫れを聞て下手人にはチャント覚えがあるけれども、云えば面倒だからその同窓の書生にもその時には隠して置いた。

禁酒から煙草又私は酒の為めに生涯の大損をして、その損害は今日までも身に附て居ると云うその次第は、緒方の塾に学問修業しながら兎角酒を飲で宜いことは少しもない。是れは済まぬ事だと思い、恰も一念こゝに発起したように断然酒を止めた。スルト塾中の大評判ではない大笑で、「ヤア福澤が昨日から禁酒した。コリャ面白い、コリャ可笑しい。何時まで続くだろう。迚も十日は持てまい。三日禁酒で明日は飲むに違いないなんて冷かす者ばかりであるが、私も中々剛情に辛抱して十日も十五日も飲まずに居ると、親友の高橋順益が、「君の辛抱はエライ。能くも続く。見上げて遣るぞ。所が凡そ人間の習慣は、仮令い悪い事でも頓に禁ずる

ことは宜しくない。到底出来ない事だから、君がいよ〳〵禁酒と決心したらば、酒の代りに烟草を始めろ。何か一方に楽しみが無くては叶わぬと親切らしく云う。所が私は烟草が大嫌いで、是れまでも同塾生の烟草を喫むのを散々に悪く云うて、「こんな無益な不養生な訳の分らぬ物を喫む奴の気が知れない。何は扨置き臭くて穢なくて堪らん。乃公の側では喫んで呉れるなんて、愛想づかしの悪口を云て居たから、今になって自分が烟草を始めるのは如何もきまりが悪いけれども、高橋の説を聞けば亦無理でもない。「そんなら遣て見ようかと云てそろ〳〵試ると、塾中の者が烟草を呉れたり、烟管を貸したり、中には是れは極く軽い烟草だと云て態々買て来て呉れる者もあると云うような騒ぎは、何も本当な深切でも何でもない。実は私が不断烟草の事を悪くばかり云て居たものだから、今度は彼奴を喫烟者にして遣ろうと、寄って掛って私を愚弄するのは分って居るけれども、此方は一生懸命禁酒の熱心だから、忌な烟を無理に吹かして、十日も十五日もそろ〳〵慣らして居る中に、臭い辛いものが自然に臭くも辛くもなく、段々風味が善くなって来た。凡そ一箇月ばかり経て本当の喫烟客になった。処が例の酒だ。何としても忘れられない。卑怯とは知りながら一寸と一盃遣て見ると堪らない。モウ一盃、これでお仕舞と力んでも、徳利を振て見て音がすれば我慢が出来ない。とう〳〵三合の酒を皆飲で仕舞て、又翌日は五合飲む。五合、三合、従前の通りになって、去らば烟草の方は喫まぬむかしの通りにしようとしても是れも出来ず、馬鹿々々しいとも何とも訳けが分らない。迚も叶わぬ禁酒の発心、一箇月の大馬鹿をして酒と烟草と両刀遣いに成り果て、六十余歳の今年に至

るまで、酒は自然に禁じたれども烟草は止みそうにもせず、衛生の為め自から作せる損害と申して一言の弁解はありません。

桃山から帰て火事場に働く塾中兎角貧生が多いので料理茶屋に行て旨い魚を喰うことは先ず六かしい。夜になると天神橋か天満橋の橋詰に魚市が立つ。マア云わば魚の残物のようなもので直が安い。夫れを買て来て洗水盥で洗て、机の毀れたのか何かを俎にして、小柄を以て捌えると云うような事は毎度遣て居たが、私は兼て手の先きが利いてるから何時でも魚洗の役目に廻って居た。頃は三月、桃の花の時節で、大阪の城の東に桃山と云う処があって、盛りだと云うから花見に行こうと相談が出来た。迚も彼方に行て茶屋で飲食いしようと云うことは叶わぬから、例の通り前の晩に魚の残物を買て来て、その外、氷豆腐だの野菜物だの買調えて、朝早くから起きて怨々に捌えて、それを折か何かに詰めて、それから酒を買て、凡そ十四、五人も同伴があったろう、弁当を順持にして桃山に行て、さん／〃＼飲食いして宜い機嫌になって居るその時に、不図西の方を見ると大阪の南に当て大火事だ。日は余程落ちて昔の七ツ過。サア大変だ。丁度その日に長与専斎が道頓堀の芝居を見に行て居る。吾々花見連中は何も大阪の火事に利害を感ずることはないから、焼けても焼けぬでも構わないけれども、長与が行て居る。若しや長与が焼死はせぬか。何でも長与を枚い出さなければならぬと云うので、桃山から大阪迄、二、三里の道をどん／〃＼駈けて、道頓堀に駈付けて見た所が、疾うに焼けて仕舞い、三芝居あったが三芝居とも焼けて、段々北の方に焼延びて居る。長与は如何したろうかと

心配したものゝ、迚も捜す訳けに行かぬ。間もなく日が暮れて夜になった。もう夜になっては長与の事は仕方がない。「火事を見物しようじゃないかと云て、その火事の中へどん〳〵這入て行た。所が荷物を片付けるので大騒ぎ。それからその荷物を運んで遣ろうと云うので、夜具包か何の包か、風呂敷包を担いだり箪笥を担いだり中々働いて、段々進で行くと、その時大阪では焼ける家の柱に綱を付けて家を引倒すと云うことがあるその綱を引張って呉れと云う。「よし来たとその綱を引張る。所が握飯を喰せる、酒を飲ませる。如何も堪えられぬ面白い話だ。散々酒を飲み握飯を喰て八時頃にもなりましたろう。夫れから一同塾に帰た。所がマダ焼けて居る。「もう一度行こうではないかと又出掛けた。その時の大阪の火事と云うものは誠に楽なもので、火の周囲だけは大変騒々しいが、火の中へ這入ると誠に静なもので、一人も人が居らぬ位。どうもない。只その周囲の処に人がドヤ〳〵群集して居るだけである。夫れゆえ大きな声を出して蹴破って中へ飛込みさえすれば誠に楽な話だ。中には火消の黒人と緒方の書生だけで大に働いた事があると云うような訳けで、随分活溌な事をやったことがありました。

一体塾生の乱暴と云うものは是れまで申した通りであるが、その塾生同士相互の間柄と云うものは至て仲の宜いもので、決して争などをしたことはない。勿論議論はする、いろ〳〵の事に就て互に論じ合うと云うことはあっても、決して喧嘩をするような事は絶てない事で、殊に私は性質として朋友と本気になって争うたことはない。仮令い議論をすればとて面白い議論のみをして、例えば赤穂義士の問題が出て、義士は果して義士なるか不義士なるかと議論が

始まる。スルト私はどちらでも宜しい、義不義、口の先きで自由自在、君が義士と云えば僕は不義士にする、君が不義士と云えば僕は義士にして見せよう、サア来い、幾度来ても苦くないと云て、敵に為り味方に為り、散々論じて勝たり負けたりするのが面白いと云う位な、毒のない議論は毎度大声で遣て居たが、本当に顔を赧らめて如何あっても是非を分って了わなければならぬと云う実の入た議論をしたことは決してない。

塾生の勉強凡そ斯う云う風で、外に出ても亦内に居ても、乱暴もすれば議論もする。ソレ故一寸と一目見た所では――今までの話だけを開た所では、如何にも学問どころの事ではなく唯ワイ〳〵して居たのかと人が思うでありましょうが、其処の一段に至ては決して爾うでない。学問勉強と云うことになっては、当時世の中に緒方塾生の右に出る者はなかろうと思われるその一例を申せば、私が安政三年の三月、熱病を煩うて幸に全快に及んだが、病中は括枕で坐蒲団か何かを括って枕にして居たが、追々元の体に恢復して来た所で、只の枕をして見たいと思い、その時に私は中津の倉屋敷に兄と同居して居たので、兄の家来が一人あるその家来に、只の枕をして見たいから持て来いと云たが、枕がない、どんなに捜してもないと云うので、不図思付いた。是れまで倉屋敷に一年ばかり居たが遂ぞ枕をしたことがない、と云うのは時は何時でも構わぬ、殆んど昼夜の区別はない、日が暮れたからと云て寝ようとも思わず頻りに書を読んで居る。読書に草臥れ眠くなって来れば、机の上に突臥して眠るか、或は床の間の床側を枕にして眠るか、遂ぞ本当に蒲団を敷いて夜具を掛けて枕をして寝るなどゝ云うことは只の一度

もしたことがない。その時に始めて自分で気が付て、「成程枕はない筈だ、是れまで枕をして寝たことがなかったからと始めて気が付きました。是れでも大抵趣が分りましょう。是れは私一人が別段に勉強生でも何でもない、同窓生は大抵皆そんなもので、凡そ勉強と云うことに就ては実にこの上に為ようはないと云う程に勉強して居ました。

それから緒方の塾に這入てからも私は自分の身に覚えがある。夕方食事の時分に若し酒があれば酒を飲で初更に寝る。一寝して目が覚ると云うのが今で云えば十時か十時過、それからヒヨイと起きて書を読む。夜明まで書を読んで居て、台所の方で塾の飯炊がコト〳〵飯を焚く仕度をする音が聞えると、それを相図に又寝る。寝て丁度飯の出来上った頃起きて、その儘湯屋に行て朝湯に這入て、それから塾に帰て朝飯を給べて又書を読むと云うのが、大抵緒方の塾に居る間殆んど常極りであった。勿論衛生など丶云うことは頓と構わない。全体は医者の塾であるから衛生論も喧しく言いそうなものであるけれども、誰も気が付かなかったのか或は思出さなかったのか、一寸でも喧しく云たことはない。それで平気で居られたと云うのは、考えて見れば身体が丈夫であったのか、或は又衛生々々と云うようなことを無闇に喧しく云えば却て身体が弱くなると思て居たのではないかと思われる。

原本写本会読の法それから塾で修行するその時の仕方は如何云う塩梅であったかと申すと、先ず始めて塾に入門した者は何も知らぬ。何も知らぬ者に如何して教えるかと云うと、その時江戸で飜刻になって居る和蘭の文典が二冊ある。一をガランマチカと云い、一をセインタキスと

云う。初学の者には先ずそのガランマチカを教え、素読を授る傍に講釈をもして聞かせる。之を一冊読了るとセインタキスを又その通にして教える。如何やら斯うやら二冊の文典が解せるようになった所で会読をさせる。会読と云うことは生徒が十人なら十人、十五人なら十五人に会頭が一人あって、その会読するのを聞て居て、出来不出来に依て白玉を附けたり黒玉を付けたりすると云う趣向で、ソコで文典二冊の素読も済めば講釈も済み会読も出来るようになると、夫れから以上は専ら自身自力の研究に任せることにして、会読本の不審は一字半句も他人に質問するを許さず、又質問を試みるような卑劣な者もない。緒方の塾の蔵書と云うものは物理書と医書とこの二種類の外に何もない。ソレモ取集めて僅か十部に足らず、固より和蘭から舶来の原書であるが、一種類唯一部に限ってあるから、文典以上の生徒になれば如何してもその原書を写さなくてはならぬ。銘々に写して、その写本を以て毎月六才位会読をするのであるが、之を写すに十人なら十人一緒に写す訳けに行かないから、誰が先に写すかと云うことは籤で定めるので、扨その写しようは如何すると云うに、その時には勿論洋紙と云うものはない、皆日本紙で、紙を能く磨て真書で写す。それはどうも埒が明かないから、その紙に礬水をして、夫れから筆は鵞筆で以て写すのが先ず一般の風であった。その鵞筆と云うのは如何云うものであるかと云うと、その時大阪の薬種屋か何かに、鶴か雁かは知らぬが、三寸ばかりに切た鳥の羽の軸を売る所が幾らもある。是れは鰹の釣道具にするものとやら聞て居た。価は至極安い物で、それを買て、磨澄ました小刀で以てその軸をペンのように削って使えば役に立つ。夫れから墨

も西洋インキのあられよう訳けはない。日本の墨壺と云うのは、磨た墨汁を綿か毛氈の切布に浸して使うのであるが、私などが原書の写本に用うるのは、只墨を磨たまゝ墨壺の中に入れて今日のインキのようにして貯えて置きます。斯う云う次第で、塾中誰でも是非写さなければならぬから写本は中々上達して上手である。一例を挙ぐれば、一人の人が原書を読むその傍で、その読む声がちやんと耳に這入て、颯々と写してスペルを誤ることがない。斯う云う塩梅に読むと写すと二人掛りで写したり、又一人で原書を見て写したりして、出来上れば原書を次の人に廻す。その人が写了ると又その次の人が写すと云うように順番にして、一日の会読分は半紙にして三枚か或は四、五枚より多くはない。

自身自力の研究扨その写本の物理書、医書の会読を如何するかと云うに、講釈の為人もなければ読んで聞かして呉れる人もない。内証で教えることも聞くことも書生間の恥辱として、万々一も之を犯す者はない。唯自分一人で以てそれを読砕かなければならぬ。読砕くには文典を土台にして辞書に便る外に道はない。その辞書と云うものは、此処にヅーフと云う写本の字引が塾に一部ある。是れは中々大部なもので、日本の紙で凡そ三千枚ある。之を一部拵えると云うことは中々大きな騒ぎで容易に出来たものではない。是れは昔長崎の出島に在留して居た和蘭のドクトル・ヅーフと云う人が、ハルマと云う独逸和蘭対訳の原書の字引を飜訳したもので、蘭学社会唯一の宝書と崇められ、夫れを日本人が伝写して、緒方の塾中にもたった一部しかないから、三人も四人もヅーフの周囲に寄合て見て居た。夫れからモウ一歩立上るとウエーラン

ドと云う和蘭の原書の字引が一部ある。それは六冊物で和蘭の註が入れてある。ヅーフで分らなければウエーランドを見る。所が初学の間はウエーランドを見ても分る気遣はない。夫ゆえ便る所は只ヅーフのみ。会読は一六とか三八とか大抵日が極って居て、いよ〳〵明日が会読だと云うその晩は、如何な懶惰生でも大抵寝ることはない。ヅーフ部屋と云う字引のある部屋に、五人も十人も群をなして無言で字引を引つゝ勉強して居る。夫れから翌朝の会読になる。会読をするにも籤で以て此処から此処までは誰と極めてする。会頭は勿論原書を持て居るので、五人なら五人、十人なら十人、自分に割当てられた所を順々に講じて、若しその者が出来なければ次に廻す。又その人も出来なければその次に廻す。その中で解し得た者は白玉、解し傷うた者は黒玉、夫れから自分の読む領分を一寸でも滞りなく立派に読んで了ったと云う者は白い三角を付ける。是れは只の丸玉の三倍ぐらい優等な印で、凡そ塾中の等級は七、八級位に分けてあった。而して毎級第一番の上席を三ヶ月占て居れば登級すると云う規則で、会読以外の書なれば、先進生が後進生に講釈もして聞かせ不審も聞て遣り至極深切にして兄弟のようにあるけれども、会読の一段になっては全く当人の自力に任せて構う者がないから、塾生は毎月六度ずつ試験に逢うようなものだ。爾う云う訳けで次第々々に昇級すれば、殆んど塾中の原書を読尽して云わば手を空うするような事になる、その時には何か六かしいものはないかと云うので、実用もない原書の緒言とか序文とか云うような者を集めて、最上等の塾生だけで会読をしたり、又は先生に講義を願たこともある。私などは即ちその講義聴聞者の一人でありしが、之を聴聞

する中にも様々先生の説を聞て、その緻密なることその放胆なること実に蘭学界の一大家、名実共に違わぬ大人物であると感心したことは毎度の事で、講義終り、塾に帰て朋友相互に、「今日の先生の彼の卓説は如何だい。何だか吾々は頓に無学無識になったようだなどゝ話したのは今に覚えて居ます。

市中に出て大に酒を飲むとか暴れるとか云うのは、大抵会読を仕舞たその晩か翌日あたりで、次の会読までにはマダ四日も五日も暇があると云う時に勝手次第に出て行たので、会読の日に近くなると所謂月に六回の試験だから非常に勉強して居ました。書物を能く読むと否とは人々の才不才にも依りますけれども、兎も角も外面を胡魔化して何年居るから登級するの卒業するのと云うことは絶えてなく、正味の実力を養うと云うのが事実に行われて居たから、大概の塾生は能く原書を読むことに達して居ました。

写本の生活ヅーフの事に就て序ながら云うことがある。如何かするとその時でも諸藩の大名がそのヅーフを一部写して貰いたいと云う注文を申込で来たことがある。ソコでその写本と云うことが又書生の生活の種子になった。当時の写本代は半紙一枚十行二十字詰で何文と云う相場である。処がヅーフ一枚は横文字三十行位のもので、夫れだけの横文字を写すと一枚十六文、夫れから日本文字で入れてある註の方を写すと八文、只の写本に較べると余程割りが宜しい。一枚十六文であるから十枚写せば百六十四文になる。註の方ならばその半値八十文になる。註を写す者もあれば横文字を写す者もあった。ソレを三千枚写すと云うのであるから、合計して

見ると中々大きな金高になって、自から書生の生活を助けて居ました。今日より考れば何でもない金のようだけれども、その時には決してそうでない。一例を申せば白米一石が三分二朱、酒が一升百六十四文から二百文で、書生在塾の入費は一箇月一分貳朱から一分三朱あれば足る。一分貳朱はその時の相場で凡そ二貫四百文であるから、一日が百文より安い。然るにヅーフを一日に十枚写せば百六十四文になるから、余る程あるので、凡そ尋常一様の写本をして塾に居られるなどゝ云うことは世の中にないことであるが、その出来るのは蘭学書生に限る特色の商売であった。ソレに就て一例を挙げれば斯う云うことがある。江戸は流石に大名の居る処で、啻にヅーフ計りでなく蘭学書生の為めに写本の注文は盛にあったもので自から価が高い。大阪と較べて見れば大変高い。加賀の金沢の鈴木儀六と云う男は、江戸から大阪に来て修業した書生であるが、この男が元来一文なしに江戸に居て、辛苦して写本で以て自分の身を立てたその上に金を貯えた。凡そ一、二年辛抱して金を二十両ばかり拵えて、大阪に出て来て到頭その二十両の金で緒方の塾で学問をして金沢に帰た。是れなどは全く蘭書写本のお蔭である。その鈴木の考では、写本をして金を取るのは江戸が宜いが、修業するには如何しても大阪でなければ本当な事が出来ないと目的を定めて、ソレでその金を持て来たのであると話して居ました。工芸伎術に熱心夫れから又一方では今日のように都て工芸技術の種子と云うものがなかった。蒸気機関などは日本国中で見ようと云てもありはせぬ。化学の道具にせよ、何処にも揃ったものはありそうにもしない。揃うた物どころではない、不完全な物もありはせぬ。けれども爾う

云う中に居ながら、器械の事にせよ化学の事にせよ大体の道理は知て居るから、如何かして実地を試みたいものだと云うので、原書を見てその図を写して似寄の物を拵えると云うことに就ては中々骨を折りました。私が長崎に居るとき塩酸亜鉛があれば鉄にも錫を附けることが出来ると云うことを聞て知て居る。夫れまで日本では松脂ばかりを用いて居たが、松脂では銅の類に錫を流して鍍金することは出来る。唐金の鍋に白みを掛けるようなもので、鋳掛屋の仕事であるが、塩酸亜鉛があれば鉄にも錫が着くと云うので、同塾生と相談してその塩酸亜鉛を作ろうとした所が、薬店に行ても塩酸のある気遣はない。自分で拵えなければならぬ。塩酸を拵える法は書物で分る。その方法に依て何うやら斯うやら塩酸を拵えて、之に亜鉛を溶かして鉄に錫を試みて、鋳掛屋の夢にも知らぬ事が立派に出来たと云うようなことが面白くて堪らぬ。或は又ヨジユムを作って見ようではないかと、色々書籍を取調べ、天満の八百屋市に行て昆布荒布のような海草類を買て来て、夫れを炮烙で煎て如何云う風にすれば出来ると云うので、真黒になって遣たけれども是れは到頭出来ない。それから今度は※砂製造の野心を起して、先ず第一の必要は塩酸暗謨尼亜であるが、是れも勿論薬店にある品物でない。その暗謨尼亜を造るには如何するかと云えば、骨……骨よりもっと世話なしに出来るのは鼈甲屋などに馬爪の削屑がいくらもあって只呉れる。肥料にするかせぬか分らぬが行きさえすれば呉れるから、それをドッサリ貰て来て徳利に入れて、徳利の外面に土を塗り、又素焼の大きな瓶を買て七輪にして沢山火を起し、その瓶の中に三本も四本も徳利を入れて、徳利の口には瀬戸物の管を附けて瓶

の外に出すなど色々趣向して、ドシ／〃＼火を扇ぎ立てると管の先きからタラ〳〵液が出て来る。即ち是れが暗謨尼亜である。至極旨く取れることは取れるが、爰に難渋はその臭気だ。臭いにも臭くないにも何とも云いようがない。那の馬爪、あんな骨類を徳利に入れて蒸焼にするのであるから実に鼻持もならぬ。それを緒方の塾の庭の狭い処で遣るのであるから奥で以て堪らぬ。奥で堪らぬばかりではない。流石の乱暴書生も是れには辟易して迚も居られない。夕方湯屋に行くと着物が臭くって犬が吠えると云う訳け。仮令い真裸体で遣ても身体が臭いと云て人に忌がられる。勿論製造の本人等は如何でも斯うでもして※砂と云う物を拵えて見ましょうと云う熱心があるから、臭いのも何も構わぬ、頻りに試みて居るけれども、何分周辺の者が喧しい。下女下男迄も胸が悪くて御飯が給べられないと訴える。其れ是れの中でヤット妙な物が出来たは出来たが、粉のような物ばかりで結晶しない。如何しても完全な※砂にならない、加うるに喧しくて〳〵堪らぬから一旦罷めにした。けれども気強い男はマダ罷めない。折角仕掛った物が出来ないと云ては学者の外聞が悪いとか何とか云うような訳けで、私だの久留米の松下元芳、鶴田仙庵等は思切たが、二、三の人は尚お遣た。如何したかと云うと、淀川の一番粗末な船を借りて、船頭を一人雇うて、その船に例の瓶の七輪を積込んで、船中で今の通りの臭い仕事を遣るは宜いが、矢張り煙が立て風が吹くと、その煙が陸の方へ吹付けられるので、陸の方で喧しく云う。喧しく云えば船を動かして、川を上ったり下ったり、川上の天神橋、天満橋から、ズット下の玉江橋辺まで、上下に逃げて廻て遣たことがある。その男は中村恭安と

云う讃岐の金比羅の医者であった。この外にも犬猫は勿論、死刑人の解剖その他製薬の試験は毎度の事であったが、シテ見ると当時の蘭学書生は如何にも乱暴なようであるが、人の知らぬ処に読書研究、又実地の事に就ても中々勉強したものだ。

製薬の事に就ても奇談がある。或るとき硫酸を造ろうと云うので、様々大骨折て不完全ながら色の黒い硫酸が出来たから、之を精製して透明にしなければならぬと云うので、その日は先ず茶碗に入れて棚の上に上げて置た処が、鶴田仙庵が自分で之を忘れて、何かの機にその茶椀を棚から落して硫酸を頭から冠り、身体に左までの径我はなかったが、丁度旧暦四月の頃で一枚の袷をヴタ〳〵にした事がある。

製薬には兎角徳利が入用だから、丁度宜しい、塾の近所の丼池筋に米藤と云う酒屋が塾の御出入、この酒屋から酒を取寄せて、酒は飲で仕舞て徳利は留置き、何本でもみんな製薬用にして返さぬと云うのだから、酒屋でも少し変に思たと見え、内々塾僕に聞合せると、この節書生さんは中実の酒よりも徳利の方に用があると云うので、酒屋は大に驚き、その後何としても酒を持て来なくなって困た事がある。

黒田公の原書を引取る又筑前の国主、黒田美濃守と云う大名は、今の華族、黒田のお祖父さんで、緒方洪庵先生は黒田家に出入して、勿論筑前に行くでもなければ江戸に行くでもない、只大阪に居ながら黒田家の御出入医と云うことであった。故に黒田の殿様が江戸出府、或は帰国の時に大阪を通行する時分には、先生は屹度中ノ嶋の筑前屋敷に伺候して御機嫌を伺うと云う

常例であった。或歳、安政三年か四年と思う。筑前侯が大阪通行になると云うので、先生は例の如く中ノ嶋の屋敷に行き、帰宅早々私を呼ぶから、何事かと思て行て見ると、先生が一冊の原書を出して見せて、「今日筑前屋敷に行たら、斯う云う原書が黒田侯の手に這入ったと云て見せて呉れられたから、一寸と借りて来たと云う。之を見ればワンダーベルトと云う原書で、最新の英書を和蘭に翻訳した物理書で、書中は誠に新らしい事ばかり、就中エレキトルの事が如何にも詳に書いてあるように見える。私などが大阪で電気の事を知たと云うのは、只纔に和蘭の学校読本の中にチラホラ論じてあるより以上は知らなかった。所がこの新舶来の物理書は英国の大家フハラデーの電気説を土台にして、電池の構造法などがちゃんと出来て居るから、新奇とも何とも唯驚くばかりで、一見直に魂を奪われた。夫れから私は先生に向て、「是れは誠に珍らしい原書で御在ますが、何時まで此処に拝借して居ることが出来ましょうかと云うと、「左様さ。何れ黒田侯は二晩とやら大阪に泊ると云う。御出立になるまでは、彼処に入用もあるまい。「左様でございますか、一寸と塾の者にも見せとう御在ますと云て、塾へ持て来て、「如何だ、この原書はと云ったら、塾中の書生は雲霞の如く集って一冊の本を見て居るから、私は二、三の先輩と相談して、何でもこの本を写して取ろうと云うことに一決して、「この原書を唯見たって何にも役に立たぬ。見ることは止めにして、サア写すのだ。併し千頁もある大部の書を皆写すことは迚も出来られないから、末段のエレキトルの処丈け写そう。一同筆紙墨の用意して懲掛りだと云た所で茲に一つ困る事には、大切な黒田様の蔵書を毀すことが出来な

い。毀して手分て遣れば、三十人も五十人も居るから瞬く間に出来て仕舞うが、それは出来ない。けれども緒方の書生は原書の写本に慣れて妙を得て居るから、一人が原書を読むと一人は之を耳に聞て写すことが出来る。ソコデ一人は読む、一人は写すとして、写す者が少し疲れて筆が鈍て来ると直に外の者が交代して、その疲れた者は朝でも昼でも直に寝ると斯う云う仕組にして、昼夜の別なく、飯を喰う間も煙草を喫む間も休まず、一寸とも隙なしに、凡そ二夜三日の間に、エレキトルの処は申すに及ばず、図も写して読合まで出来て仕舞て、紙数は凡そ百五、六十枚もあったと思う。ソコデ出来ることなら外の処も写したいと云たが時日が許さない。マア〳〵是れだけでも写したのは有難いと云うばかりで、先生の話に、黒田侯はこの一冊を八十両で買取られたと聞て、貧書生等は唯驚くのみ。固より自分に買うと云う野心も起りはしない。愈よ今夕、侯の御出立と定まり、私共はその原書を撫くり廻し誠に親に暇乞をするように別を惜んで還したことがございました。夫れから後は塾中にエレキトルの説が全く面目を新にして、当時の日本国中最上の点に達して居たと申して憚りません。私などが今日でも電気の話を聞て凡そその方角の分るのは、全くこの写本の御蔭である。誠に因縁のある珍らしい原書だから、その後度々今の黒田侯の方へ、ひょっと彼の原書はなかろうかと問合せましたが、彼方でも混雑の際であったから如何なったか見当らぬと云う。可惜い事で御在ます。

大阪書生の特色只今申したような次第で、緒方の書生は学問上の事に就ては一寸とも怠ったことはない。その時の有様を申せば、江戸に居た書生が折節大阪に来て学ぶ者はあったけれども、

大阪から態々江戸に学びに行くと云うものはない。行けば則ち教えると云う方であった。左れば大阪に限て日本国中粒選のエライ書生の居よう訳けはない。又江戸に限て日本国中の鈍い書生ばかり居よう訳けもない。然るに何故ソレが違うかと云うことに就ては考えなくてはならぬ。勿論その時には私なども大阪の書生がエライ〳〵と自慢をして居たけれども、夫れは人物の相違ではない。江戸と大阪と自から事情が違て居る。江戸の方では開国の初とは云いながら、幕府を始め諸藩大名の屋敷と云う者があって、西洋の新技術を求むることが広く且つ急である。従て聊かでも洋書を解すことの出来る者を雇うとか、或は飜訳をさせればその返礼に金を与えるとか云うような事で、書生輩が自から生計の道に近い。極都合の宜い者になれば大名に抱えられて、昨日までの書生が今日は何百石の侍になったと云うことも稀にはあった。夫れに引換て大阪は丸で町人の世界で、何も武家と云うものはない。従て砲術を遣ろうと云う者もなければ原書を取調べようと云う者もありはせぬ。夫れゆえ緒方の書生が幾年勉強して何程エライ学者になっても、頓と実際の仕事に縁がない。即ち衣食に縁がない。縁がないから縁を求めると云うことにも思い寄らぬので、然らば何の為めに苦学するかと云えば一寸と説明はない。前途自分の身体は如何なるであろうかと考えた事もなければ、名を求める気もない。名を求めぬどころか、蘭学書生と云えば世間に悪く云われるばかりで、既に已に焼けに成て居る。唯昼夜苦しんで六かしい原書を読んで面白がって居るようなもので実に訳けの分らぬ身の有様とは申しながら、一歩を進めて当時の書生の心の底を叩いて見れば、自から楽しみがある。之を一言す

れば――西洋日進の書を読むことは日本国中の人に出来ない事だ、自分達の仲間に限て斯様事が出来る、貧乏をしても難渋をしても、粗衣粗食、一見看る影もない貧書生でありながら、智力思想の活溌高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すと云う気位で、唯六かしければ面白い、苦中有楽、苦即楽と云う境遇であったと思われる。喩えばこの薬は何に利くか知らぬけれども、自分達より外にこんな苦い薬を能く呑む者はなかろうと云う見識で、病の在る所も問わずに唯苦ければもっと呑で遣ると云う位の血気であったに違いはない。

漢家を敵視す若しも真実その苦学の目的如何なんて問う者あるも、返答は唯漠然たる議論ばかり。医師の塾であるから政治談は余り流行せず、国の開鎖論を云えば固より開国なれども、甚だしく之を争う者もなく、唯当の敵は漢法医で、医者が憎ければ儒者までも憎くなって、何でも蚊でも支那流は一切打払いと云うことは何処となく定まって居たようだ。儒者が経史の講釈しても聴聞しようと云う者もなく、漢学書生を見れば唯可笑しく思うのみ。殊に漢医書生は之を笑うばかりでなく之を罵詈して少しも許さず、緒方塾の近傍、中ノ島に花岡と云う漢医の大家があって、その塾の書生は孰れも福生と見え服装も立派で、中々以て吾々蘭学生の類でない。毎度往来に出逢うて、固より言葉も交えず互に睨合うて行違うその跡で、「彼の様ア如何だい。着物ばかり奇麗で何をして居るんだ。空々寂々チンプンカンの講釈を聞て、その中で古く手垢の附てる奴が塾長だ。こんな奴等が二千年来垢染みた傷寒論を土産にして、国に帰て人を殺すとは恐ろしいじゃないか。今に見ろ、彼奴等を根絶やしにして呼吸の音を止めて遣る

からなんてワイ〳〵云たのは毎度の事であるが、是れとても此方に如斯と云う成算も何もない。唯漢法医流の無学無術を罵倒して蘭学生の気焔を吐くばかりの事である。

目的なしの勉強兎に角に当時緒方の書生は十中の七、八、目的なしに苦学した者であるが、その目的のなかったのが却て仕合で、江戸の書生よりも能く勉強が出来たのであろう。ソレカラ考えて見ると、今日の書生にしても余り学問を勉強すると同時に始終我身の行先ばかり考えて居るようでは、修業は出来なかろうと思う。左ればと云て只迂闊に本ばかり見て居るのは最も宜しくない。宜しくないとは云いながら、又始終今も云う通り自分の身の行末のみ考えて、如何したらば立身が出来るだろうか、如何したらば金が手に這入るだろうか、立派な家に住むことが出来るだろうか、如何すれば旨い物を喰い好い着物を着られるだろうかと云うような事にばかり心を引かれて、齷齪勉強すると云うことでは決して真の勉強は出来ないだろうと思う。就学勉強中は自から静にして居らなければならぬと云う理屈が茲に出て来ようと思う。

大阪を去て江戸に行く

私が大阪から江戸へ来たのは安政五年、二十五歳の時である。同年、江戸の奥平の邸から、御用があるから来いと云て、私を呼に来た。それは江戸の邸に岡見彦曹と云う蘭学好の人があって、この人は立派な身分のある上士族で、如何かして江戸藩邸に蘭学の塾を開きたいと云う

ので、様々に周旋して、書生を集めて原書を読む世話をして居た。所で奥平家が私をその教師に使うので、その前、松木弘庵、杉亨二と云うような学者を雇うて居たような訳けで、私が大阪に居ると云うことが分たものだから、他国の者を雇うことはない、藩中にある福澤を呼べと云うことになって、ソレで私を呼びに来たので、その時江戸詰の家老には奥平壹岐が来て居る。壹岐と私との関係に就ては、私は自から自慢をしても宜いことがある。是れは如何しても悪感情がなければならぬ筈、衝突がなければならぬ筈、けれども私はその人と一寸とも戦たことがない。彼は私を敵視し愚弄して居ると云うことは長崎を出た時の様でチャント分って居る。長崎を立つ時に、「貴様は中津に帰れ。帰たら誰にこの手紙を渡せ。誰に斯う伝言せよと命ずるからヘイ〳〵と畏りながら、心の中では舌を出して、「馬鹿言え、乃公は国に帰りはせぬぞ、江戸に行くぞと云わぬばかりに、席を蹴立てゝ出たことも、後になれば先方でも知て居る。けれどもその後私は毎度本人に逢うて仮初にも怨言を云た事のない所ではない、態と旧恩を謝すると云う趣ばかり装うて居る中に、又もやその大切な原書を盗写したこともある。先方も悪ければ此方も十分悪い。けれども唯私がその事を人に語らず顔色にも見せずに、御家老様と尊敬して居たから、所謂国家老のお坊さんで、今度私を江戸に呼寄せる事に就ても、家老に異議なく直に決して幸であったが、実を申せば壹岐よりも私の方が却て罪が深いようだ。

三人同行大阪から江戸に来るに就ては、何は扨置き中津に帰て一度母に逢うて別を告げて来ましょうと云うので、中津に帰たその時は虎列拉の真盛りで、私の家の近処まで病人だらけ、バ

タ〳〵〵〵死にました。その流行病最中、船に乗て大阪に着て暫時逗留、ソレカラ江戸に向て出立と云うことにした所が、凡そ藩の公用で勤番するに、私などの身分なれば道中並に在勤中家来を一人呉れるのが定例で、今度も私の江戸勤番に付て家来一人振の金を渡して呉れた。けれども家来なんぞと云うことは思いも寄らぬ事で何も要らぬ。けれども茲に旅費がある。待て〳〵、塾中に誰か江戸に行きたいと云う者はないか、江戸に行きたければ連れて行くが如何だ、実は斯う云う訳けで金はあるぞと云うと、即席にどうぞ連れて行て呉れと云たが岡本周吉、即ち古川節蔵である（広島の人）。よし連れて行て遣ろう。連れて行くが、君は飯を炊かなければならぬが宜しいか。江戸へ行けば米もあれば長屋もある。鍋釜も貸して呉れるが、本当の家来を止めにすれば飯炊がない。その代に連れて行くのだが如何だ。「飯を炊く位の事は何でもない、飯を炊こう。「それじゃ一緒に来いと云て、夫れから私の荷物は同藩の人に頼んで、道連は私と岡本、もう一人備中の者で原田磊蔵と云う矢張り緒方の塾生、都合三人の道中で、勿論歩く。その時は丁度十月下旬で少々寒かったが小春の時節、一日も川止など云う災難に遇わず滞おりなく江戸に着て、先ず木挽町汐留の奥平屋敷に行た所が、鉄砲洲に中屋敷がある、其処の長屋を貸すと云うので、早速岡本と私とその長屋に住込で、両人自炊の世帯持になった、夫れから同行の原田は下谷練塀小路の大医大槻俊斎先生の処へ入込だ。江戸へ参れば知己朋友は幾人も居て、段々面白くなって来た。

江戸に学ぶに非ず教るなり扨私が江戸に参て鉄砲洲の奥平中屋敷に住て居ると云う中に、藩中

の子弟が三人、五人ずつ学びに来るようになり、又他から五、六人も来るものが出来たので、その子弟に教授して居たが、前にも云う通り大阪の書生は修業する為に江戸に行くのではない、行けば教えに行くのだと云う自から自負心があった。私も江戸に来て見た処で、全体江戸の蘭学社会は如何云うものであるか知りたいものだと思て居る中に、或る日島村鼎甫の家に尋ねて行たことがある。勿論緒方門下の医者で、江戸に来て蘭書の飜訳などして居た。私も甚だ能く知て居るので、尋ねて参れば何時も学問の話ばかりで、その時に主人は生理書の飜訳最中、その原書を持出して云うには、この文の一節が如何しても分らないと云う。夫れから私が之を見た所が、成程解し悪い所だ。依て主人に向て、是れは外の朋友にも相談して見たかと云えば、イヤもう親友誰々四、五人にも相談をして見たが如何しても分らぬと云うから、面白い、ソレじゃ僕が之を解して見せようと云て、本当に見た所が中々六かしい。凡そ半時間ばかりも無言で考えた所で、チャント分った。一体是れは斯う云う意味であるが如何だ、物事は分て見ると造作のないものだと云て、主客共に喜びました。何でもその一節は光線と視力との関係を論じ、蝋燭を二本点けてその灯光をどうかすると影法師が如何とかなると云う随分六かしい処で、島村の飜訳した生理発蒙と云う訳書中にある筈です。この一事で私も窃に安心して、先ず是れならば江戸の学者も左まで恐れることはないと思うたことがある。

それから又原書の不審な処を諸先輩に質問して窃にその力量を試したこともある。大阪に居る中に毎度人の読損うた処か人の読損いそうな処を選出して、そうして其れを私は分らない

顔して不審を聞きに行くと、毎度の事で、学者先生と称して居る人が読損うて居るから、此方は却て満足だ。実は欺て人を試験するようなもので、徳義上に於て相済まぬ罪なれども、壮年血気の熱心、自から禁ずることが出来ない。畢竟私が大阪に居る間は同窓生と共に江戸の学者を見下だして取るに足らないものだと斯う思うて居ながらも、只ソレを空に信じて宜い気になって居ては大間違が起るから、大抵江戸の学者の力量を試さなければならぬと思て、悪いことは知りながら試験を遣て見たのです。

英学発心ソコデ以て蘭学社会の相場は大抵分て先ず安心ではあったが、扨又此処に大不安心な事が生じて来た。私が江戸に来たその翌年、即ち安政六年、五国条約と云うものが発布になったので、横浜は正しく開けた訳りの処、ソコデ私は横浜に見物に行た。その時の横浜と云うものは外国人がチラホラ来て居る丈けで、堀立小屋見たような家が諸方にチョイ〳〵出来て、外国人が其処に住で店を出して居る。其処へ行て見た所が一寸とも言葉が通じない。此方の云うことも分らなければ、彼方の云うことも勿論分らない。店の看板も読めなければ、ビンの貼紙も分らぬ。何を見ても私の知て居る文字と云うものはない。英語だか仏語だか一向訝らない。居留地をブラ〳〵歩く中に独逸人でキニツフルと云う商人の店に打当た。その商人は独逸人でこそあれ蘭語蘭文が分る。此方の言葉はロクに分らないけれども、蘭文を書けばどうか意味が通ずると云うので、ソコで色々な話をしたり、一寸と買物をしたりして江戸に帰て来た。御苦労な話で、ソレも屋敷に門限があるので、前の晩の十二時から行てその晩の十二時に帰たか

ら、丁度一昼夜歩いて居た訳けだ。

小石川に通う横浜から帰て、私は足の疲れではない、実に落胆して仕舞た。是れは〳〵どうも仕方がない、今まで数年の間、死物狂いになって和蘭の書を読むことを勉強した、その勉強したものが、今は何にもならない、商売人の看板を見ても読むことが出来ない、左りとは誠に詰らぬ事をしたわいと、実に落胆して仕舞た。けれども決して落胆して居られる場合でない。彼処に行れて居る言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。所で今世界に英語の普通に行れて居ると云うことは予て知て居る。何でもあれは英語に違いない、今我国は条約を結んで開けかゝって居る、左すればこの後は英語が必要になるに違いない、洋学者として英語を知らなければ迚も何にも通ずることが出来ない、この後は英語を読むより外に仕方がないと、横浜から帰た翌日だ、一度は落胆したが同時に又新に志を発して、夫れから以来は一切万事英語と覚悟を極めて、扨その英語を学ぶと云うことに就て如何して宜か取付端がない。江戸中に何処で英語を教えて居ると云う所のあろう訳けもない。けれども段々聞て見ると、その時に条約を結ぶと云うが為めに、長崎の通詞の森山多吉郎と云う人が、江戸に来て幕府の御用を勤めて居る。その人が英語を知て居ると云う噂を聞出したから、ソコで森山の家に行て習いましょうと斯う思うて、その森山と云う人は小石川の水道町に住居して居たから、早速その家に行て英語教授の事を頼入ると、森山の云うに、昨今御用が多くて大変に忙しい、けれども折角習おうと云うならば教えて進ぜよう、就ては毎日出勤前、朝早く来いと云うことになって、その時私は

鉄砲洲に住て居て、鉄砲洲から小石川まで頓て二里余もありましょう、毎朝早く起きて行く。所が今日はもう出勤前だから又明朝来て呉れ、明くる朝早く行くと、人が来て居て行かないと云う。如何しても教えて呉れる暇がない。ソレは森山の不親切と云う訳けではない、条約を結ぼうと云う時だから中々忙くて実際に教える暇がありはしない。そうすると、こんなに毎朝来て何も教えることが出来んでは気の毒だ、晩に来て呉れぬかと云う。ソレじゃ晩に参りましょうと云て、今度は日暮から出掛けて行く。あの往来は丁度今の神田橋一橋外の高等商業学校のある辺で、素と護持院ヶ原と云う大きな松の樹などが生繁って居る恐ろしい淋しい処で、追剥でも出そうな処だ。其処を小石川から帰途に夜の十一時十二時ごろ通る時の怖さと云うものは今でも能く覚えて居る。所がこの夜稽古も矢張り同じ事で、今晩は客がある、イヤ急に外国方（外務省）から呼びに来たから出て行かなければならぬと云うような訳けで、頓と仕方がない。凡そ其処に二月か三月通うたけれども、どうにも暇がない。迚もこんな事では何も覚えることも出来ない。加うるに森山と云う先生も何も英語を大層知て居る人ではない、漸く少し発音を心得て居ると云う位。迚も是れは仕方ないと、余儀なく断念。

蕃書調所に入門その前に私が横浜に行た時にキニツフルの店で薄い蘭英会話書を二冊買て来た。ソレを独で読んとした所で字書がない。英蘭対訳の字書があれば先生なしで自分一人で解することが出来るから、どうか字書を欲いものだと云た所で横浜に字書などを売る処はない。何とも仕方がない。所がその時に九段下に蕃書調所と云う幕府の洋学校がある。其処には色々な字

書があると云うことを聞出したから、如何かしてその字書を借りたいものだ、借りるには入門しなければならぬ、けれども藩士が出抜けに公儀（幕府）の調所に入門したいと云ても許すものでない、藩士の入門願にはその藩の留守居と云うものが願書に奥印をして然る後に入門を許すと云う。夫れから藩の留守居の処に行て奥印の事を頼み、私は※着て蕃書調所に行て入門を願うた。その時には箕作麟祥のお祖父さんの箕作阮甫と云う人が調所の頭取で、早速入門を許して呉れて、入門すれば字書を借ることが出来る。直に拝借を願うて、英蘭対訳の字書を手に請取て、通学生の居る部屋があるから其処で暫く見て、夫れから懐中の風呂敷を出してその字書を包で帰ろうとすると、ソレはならぬ、此処で見るならば許して苦しくないが、家に持帰ることは出来ませぬと、その係の者が云う。こりや仕方がない、鉄砲洲から九段阪下まで毎日字引を引きに行くと云うことは迚も間に合ぬ話だ。ソレも漸く入門してたった一日行た切で断念。

扨如何したら宜かろうかと考えた。所で段々横浜に行く商人がある。何か英蘭対訳の字書はないかと頼んで置た所が、ホルトロップと云う英蘭対訳発音付の辞書一部二冊物がある。誠に小さな字引だけれども価五両と云う。夫れから私は奥平の藩に歎願して買取て貰て、サアもう是れで宜しい、この字引さえあればもう先生は要らないと、自力研究の念を固くして、唯その字引と首引で、毎日毎夜独り勉強、又或は英文の書を蘭語に飜訳して見て、英文に慣れる事ばかり心掛けて居ました。

英学の友を求むそこで自分の一身は爾う定めた所で、是れは如何しても朋友がなくてはならぬ。私が自分で不便利を感ずる通りに、今の蘭学者は悉く不便を感じて居るに違いない。迚も今まで学だのは役に立たない。何でも朋友に相談をして見ようと斯う思うたが、この事も中々易くないと云うのは、その時の蘭学者全体の考は、私を始として皆、数年の間刻苦勉強した蘭学が役に立たないから、丸で之を棄てゝ仕舞て英学に移ろうとすれば、新に元の通りの苦みをもう一度しなければならぬ、誠に情ない、つらい話である、譬えば五年も三年も水練を勉強して漸く泳ぐことが出来るようになった所で、その水練を罷めて今度は木登りを始めようと云うのと同じ事で、以前の勉強が丸で空になると、斯う考えたものだから如何にも決断が六かしい。ソコデ学友の神田孝平に面会して、如何しても英語を遣ろうじゃないかと相談を掛けると、神田の云うに、イヤもう僕も疾うから考えて居て実は少し試みた。試みたが如何にも取付端がない。何処から取付て宜いか実に訳けが分らない。併し年月を経れば何か英書を読むと云う小口が立つに違いないが、今の処では何とも仕方がない。マア君達は元気が宜いから遣て呉れ、大抵方角が付くと僕も屹と遣るから、ダガ今の処では何分自分で遣ろうと思わないと云う。夫れから番町の村田造六（後に大村益次郎）の処へ行て、その通りに勧めた所が、是れは如何しても遣らぬと云う考で、神田とは丸で説が違う。「無益な事をするな。僕はそんな物は読まぬ。要らざる事だ。何もそんな困難な英書を辛苦して読むがものはないじゃないか。必要な書は皆和蘭人が飜訳するから、その飜訳書を読めばソレで沢山じゃないかと云う。「成程それも一説だが、

けれども和蘭人が何も角も一々飜訳するものじゃない。僕は先頃横浜に行て呆れて仕舞た。この塩梅では迚も蘭学は役に立たぬ。是非英書を読まなくてはならぬではないかと勧むれども、村田は中々同意せず、「イヤ読まぬ。僕は一切読まぬ。遣るなら君達は遣り給え。僕は必要があれば蘭人の飜訳したのを読むから構わぬと威張て居る。是れは迚も仕方がないと云うので今度は小石川に居る原田敬策にその話をすると、原田は極熱心で、何でも遣ろう。誰がどう云うても構わぬ。是非遣ろうと云うから、「爾うか、ソレは面白い。そんなら二人で遣ろう。どんな事があっても遣遂げようではないかと云うので、原田とは極説が合うて、愈よ英書を読むと云う時に、長崎から来て居た小供があって、その小供が英語を知て居ると云うので、そんな小供を呼で来て発音を習うたり、又或は漂流人で折節帰るものがある、長く彼方へ漂流して居た者が、開国になって船の便があるものだから、折節帰る者があるから、そんな漂流人が着くとその宿屋に訪ねて行て聞たこともある。その時に英学で一番六かしいと云うのは発音で、私共は何もその意味を学ぼうと云うのではない、只スペルリングを学ぶのであるから、小供でも宜ければ漂流人でも構わぬ、爾う云う者を捜し廻ては学んで居ました。始めは先ず英文を蘭文に飜訳することを試み、一字々々字を引てソレを蘭文に書直せば、ちゃんと蘭文になって文章の意味を取ることに苦労はない。唯その英文の語音を正しくするのに苦んだが、是れも次第に緒が開けて来れば夫れはどの難渋でもなし、詰る処は最初私共が蘭学を棄てゝ英学に移ろうとするときに、真実に蘭学を棄てゝ仕舞い、数年勉強の結果を空うして生涯二度の艱難辛苦と思い

しは大間違の話で、実際を見れば蘭と云い英と云うも等しく横文にして、その文法も略相同じければ、蘭書読む力は自から英書にも適用して決して無益でない。水を泳ぐと木に登ると全く別のように考えたのは一時の迷であったと云うことを発明しました。

始めて亜米利加に渡る

咸臨丸ソレカラ私が江戸に来た翌年、即ち安政六年冬、徳川政府から亜米利加に軍艦を遣ると云う日本開闢以来、未曾有の事を決断しました。扨その軍艦と申しても至極小さなもので、蒸気は百馬力、ヒユルプマシーネと申して、港の出入に蒸気を焚くばかり、航海中は唯風を便りに運転せねばならぬ。二、三年前、和蘭から買入れ、価は小判で二万五千両、船の名を咸臨丸と云う。その前、安政二年の頃から幕府の人が長崎に行て、蘭人に航海術を伝習してその技術も漸く進歩したから、この度使節がワシントンに行くに付き、日本の軍艦もサンフランシスコまで航海と斯う云う訳けで幕議一決、艦長は時の軍艦奉行木村摂津守、これに随従する指揮官は勝麟太郎、運用方は佐々倉桐太郎、浜口興右衛門、鈴藤勇次郎、測量は小野友五郎、伴鉄太郎、松岡磐吉、蒸気は肥田浜五郎、山本金次郎、公用方には吉岡勇平、小永井五八郎、通弁官は中浜万次郎、少年士官には根津欽次郎、赤松大三郎、岡田井蔵、小杉雅之進と、医師二人、水夫火夫六十五人、艦長の従者を併せて九十六人。船の割にしては多勢の乗組人でありし

が、この航海の事に就ては色々お話がある。

今度咸臨丸の航海は日本開闢以来、初めての大事業で、乗組士官の面々は固より日本人ばかりで事に当ると覚悟して居た処が、その時亜米利加の甲比丹ブルツクと云う人が、太平洋の海底測量の為めに小帆前船ヘネモコパラ号に乗て航海中、薩摩の大島沖で難船して幸に助かり、横浜に来て徳川政府の保護を受けて、甲比丹以下、士官一人、医師一人、水夫四、五人、久しく滞留の折柄、日本の軍艦がサンフランシスコに航海と聞き、幸便だから之に乗て帰国したいと云うので、その事が定まろうとすると、日本の乗組員は米国人と一緒に乗るのは厭だと云う。何故かと云うに、若しその人達を連れて帰れば、却て銘々共が亜米利加人に連れて行て貰たように思われて、日本人の名誉に係るから乗せないと剛情を張る。夫れ是れで政府も余程困た様子でありしが、到頭ソレを無理圧付けにして同船させたのは、政府の長老も内実は日本士官の伎倆を覚束なく思い、一人でも米国の航海士が同船したらばマサカの時に何かの便利になろうと云う老婆心であったと思われる。

木村摂津守艦長木村摂津守と云う人は軍艦奉行の職を奉じて海軍の長上官であるから、身分相当に従者を連れて行くに違いない。夫れから私はどうもその船に乗て亜米利加に行て見たい志はあるけれども、木村と云う人は一向知らない。去年大阪から出て来た計りで、そんな幕府の役人などに縁のある訳けはない。所が幸に江戸に桂川と云う幕府の蘭家の侍医がある。その家は日本国中蘭学医の総本山とでも名を命けて宜しい名家であるから、江戸は扨置き日本国中、

蘭学社会の人で桂川と云う名前を知らない者はない。ソレ故私なども江戸に来れば何は扨置き桂川の家には訪問するので、度々その家に出入して居る。その桂川の家と木村の家とは親類——極近い親類である。夫れから私は桂川に頼で、如何かして木村さんの御供をして亜米利加に行きたいが紹介して下さることは出来まいかと懇願して、桂川の手紙を貰て木村の家に行てその願意を述べた所が、木村では即刻許して呉れて、連れて行て遣ろうと斯う云うことになった。と云うのは、案ずるに、その時の世態人情に於て、外国航海など云えば、開闢以来の珍事と云おうか、寧ろ恐ろしい命掛けの事で、木村は勿論軍艦奉行であるから家来はある、あるけれどもその家来と云う者も余り行く気はない所に、仮初にも自分から進で行きたいと云うのであるから、実は彼方でも妙な奴だ、幸と云う位なことであったろうと思う。直に許されて私は御供をすることになった。

浦賀に上陸して酒を飲む咸臨丸の出帆は万延元年の正月で、品川沖を出て先ず浦賀に行た。同時に日本から亜米利加に使節が立て行くので、亜米利加からその使節の迎船が来た。ポーハタンと云うその軍艦に乗て行くのであるが、そのポーハタンは後から来ることになって、咸臨丸は先に出帆して先ず浦賀に泊た。浦賀に居て面白い事がある。船に乗組で居る人は皆若い人で、もう是れが日本の訣別であるから浦賀に上陸して酒を飲もうではないかと云出した者がある。何れも同説で、夫れから陸に上て茶屋見たような処に行て、散々酒を飲でサア船に帰ると云う時に、誠に手癖の悪い話で、その茶屋の廊下の棚の上に嗽茶椀が一つあった、是れは船

の中で役に立ちそうな物だと思て、一寸と私が夫を盗で来た。その時は冬の事で、サア出帆した所が大嵐、毎日々々の大嵐、なか〳〵茶椀に飯を盛て本式に喫べるなんと云うことは容易な事ではない。所が私の盗だ嗽茶椀が役に立て、その中に一杯飯を入れて、その上に汁でも何でも皆掛けて、立て喰う。誠に世話のない話で、大層便利を得て、亜米利加まで行て、帰りの航海中も毎日用いて、到頭日本まで持て帰て、久しく私の家にゴロチャラして居た。程経て聞けばその浦賀で上陸して飲食いした処は遊女屋だと云う。夫れはその当時私は知らなかったが、そうして見ると彼の大きな茶椀は女郎の嗽茶椀であったろう。思えば穢ないようだが、航海中は誠に調法、唯一の宝物であったのが可笑しい。

銀貨狼藉扨それから船が出てずっと北の方に乗出した。その咸臨丸と云うのは百馬力の船であるから、航府中、始終石炭を焚くと云うことは出来ない。只港を出るとき這入るときに焚く丈けで、沖に出れば丸で帆前船、と云うのは石炭が積まれますまい、石炭がなければ帆で行かなければならぬ。その帆前船に乗て太平海を渡るのであるから、それは〳〵毎日の暴風で、艀船が四艘あったが激浪の為めに二艘取られて仕舞うた。その時は私は艦長の家来であるから、艦長の為めに始終左右の用を弁じて居た。艦長は船の艫の方の部屋に居るので、或る日、朝起きていつもの通り用を弁じましょうと思て艫の部屋に行た、所がその部屋に弗が何百枚か何千枚か知れぬ程散乱して居る。如何したのかと思うと、前夜の大嵐で、袋に入れて押入の中に積上げてあった弗、定めし錠も卸してあったに違いないが、劇しい船の動揺で、弗の袋が戸を

押破て外に散乱したものと見える。是れは大変な事と思て、直に引返して舳の方に居る公用方の吉岡勇平にその次第を告げると、同人も大に驚き、場所に駈付け、私も加勢してその弗を拾集めて袋に入れて元の通り戸棚に入れたことがあるが、元来船中にこんな事の起るその次第は、当時外国為替と云う事に就て一寸とも考えがないので、旅をすれば金が要る、金が要れば金を持て行くと云う極簡単な話で、何万弗だか知れない弗を、袋などに入れて艦長の部屋に蔵めて置たその金が、嵐の為めに溢れ出たと云うような奇談を生じたのである。夫れでも大抵四十年前の事情が分りましょう。今ならば一向訳けはない。為替で一寸と送て遣れば、何も正金を船に積で行く必要はないが、商売思想のない昔の武家は大抵こんなものである。航海中は毎日の嵐で、始終船中に波を打上げる。今でも私は覚えて居るが、甲板の下に居ると上に四角な窓があるので、船が傾くとその窓から大洋の立浪が能く見える。それは大層な波で、船体が三十七、八度傾くと云うことは毎度の事であった。四十五度傾くと沈むと云うけれども、幸に大きな災もなく只その航路を進で行く。進で行く中に、何も見えるものはないその中で以て、一度帆前船に遇うたことがあった。ソレは亜米利加の船で、支那人を乗せて行くのだと云うその船を一艘見た切り、外には何も見ない。

牢屋に大地震の如し所で三十七日掛て桑港に着た。航海中私は身体が丈夫だと見えて怖いと思うたことは一度もない。始終私は同船の人に戯れて、「是れは何の事はない、生れてからマダ試みたことはないが、牢屋に這入て毎日毎夜大地震に遇て居ると思えば宜いじゃないかと

笑て居る位な事で、船が沈もうと云うことは一寸とも思わない。と云うのは私が西洋を信ずるの念が骨に徹して居たものと見えて、一寸とも怖いと思たことがない。夫れから途中で水が乏しくなったので布哇に寄るか寄らぬかと云う説が起た。辛抱して行けば布哇に寄らないでも間に合うであろうが、極用心をすれば寄港して水を取て行く、如何しようかと云うが、遂に布哇に寄らずに桑港に直航と斯う決定して、夫れから水の倹約だ。何でも飲むより外は一切水を使うことはならぬと云うことになった。所でその時に大に人を感激せしめた事がある、と云うのは船中に亜米利加の水夫が四、五人居ましたその水夫等が、動もすると水を使うので、甲比丹ブルックに、どうも水夫が水を使うて困ると云たら甲比丹の云うには、水を使うたら直に鉄砲で撃殺して呉れ、是れは共同の敵じゃから説諭も要らなければ理由を質問するにも及ばぬ、即刻銃殺して下さいと云う。理屈を云えば、その通りに違いない。夫れから水夫を呼で、水を使えは鉄砲で撃殺すから爾う思えと云うような訳けで水を倹約したから、如何やら斯うやら水の尽きると云うことがなくて、同勢合せて九十六人無事に亜米利加に着た。船中の混雑は中々容易ならぬ事で、水夫共は皆筒袖の着物は着て居るけれども穿物は草鞋だ。草鞋が何百何千足も貯えてあったものと見える。船中はもうビショ〳〵で、カラリとした天気は三十七日の間に四日か五日あったと思います。誠に船の中は大変な混雑であった（桑港着船の上、艦長の奮発で水夫共に長靴を一足ずつ買て遣て夫れから大に体裁が好くなった）。

日本国人の大胆併しこの航海に就ては大に日本の為めに誇ることがある、と云うのは抑も日本

の人が始めて蒸気船なるものを見たのは嘉永六年、航海を学び始めたのは安政二年の事で、安政二年に長崎に於て和蘭人から伝習したのが抑も事の始まりで、その業成て外国に船を乗出そうと云うことを決したのは安政六年の冬、即ち目に蒸気船を見てから足掛け七年目、航海術の伝習を始めてから五年目にして、夫れで万延元年の正月に出帆しようと云うその時、少しも他人の手を藉らずに出掛けて行こうと決断したその勇気と云いその伎倆と云い、是れだけは日本国の名誉として、世界に誇るに足るべき事実だろうと思う。前にも申した通り、航海中は一切外国人の甲比丹ブルックの助力は仮らないと云うので、測量するにも日本人自身で測量する。亜米利加の人も亦自分で測量して居る。互に測量したものを後で見合せる丈けの話で、決して亜米利加人に助けて貰うと云うことは一寸でもなかった。ソレ丈けは大に誇ても宜い事だと思う。今の朝鮮人、支那人、東洋全体を見渡した所で、航海術を五年学で太平海を乗越そうと云うその事業、その勇気のある者は決してありはしない。ソレ所ではない。昔々露西亜のペートル帝が和蘭に行て航海術を学んだと云うが、ペートル大帝でもこの事は出来なかろう。仮令い大帝は一種絶倫の人傑なりとするも、当時の露西亜に於て日本人の如く大胆にして且つ学問思想の緻密なる国民は容易になかろうと思われる。

米国人の歓迎祝砲海上恙なく桑港に着た。着くやいなや土地の重立たる人々は船まで来て祝意を表し、之を歓迎の始めとして、陸上の見物人は黒山の如し。次で陸から祝砲を打つと云うことになって、彼方から打てば咸臨丸から応砲せねばならぬと、この事に就て一奇談がある。

勝麟太郎と云う人は艦長木村の次に居て指揮官であるが、至極船に弱い人で、航海中は病人同様、自分の部屋の外に出ることは出来なかったが、着港になれば指揮官の職として万端差図する中に、彼の祝砲の事が起た。所で勝の説に、ソレは迚も出来る事でない、ナマジ応砲などして遣り傷うよりも此方は打たぬ方が宜いと云う。爾うすると運用方の佐々倉桐太郎は、イヤ打てないことはない、乃公が打て見せる。「馬鹿云え、貴様達に出来たら乃公の首を遣ると冷かされて、佐々倉はいよ〳〵承知しない。何でも応砲して見せると云うので、夫れから水夫共を差図して大砲の掃除、火薬の用意して、砂時計を以て時を計り、物の見事に応砲が出来た。サア佐々倉が威張り出した。首尾克く出来たから勝の首は乃公の物だ。併し航海中、用も多いから暫く彼の首を当人に預けて置くと云て、大に船中を笑わした事がある。兎も角もマア祝砲だけは立派に出来た。

　ソコで無事に港に着たらば、サアどうも彼方の人の歓迎と云うものは、それは〳〵実に至れり尽せり、この上の仕様がないと云う程の歓迎。亜米利加人の身になって見れば、亜米利加人が日本に来て始めて国を開いたと云うその日本人が、ペルリの日本行より八年目に自分の国に航海して来たと云う訳けであるから、丁度自分の学校から出た生徒が実業に着て自分と同じ事をすると同様、乃公がその端緒を開いたと云わぬ計の心持であったに違いない。ソコでもう日本人を掌の上に乗せて、不自由をさせぬように不自由をさせぬようにとばかり、桑港に上陸するや否や馬車を以て迎いに来て、取敢えず市中のホテルに休息と云うそのホテルには、

市中の役人か何かは知りませぬが、市中の重立た人が雲霞の如く出掛けて来た。様々の接待饗応。ソレカラ桑港の近傍に、メールアイランドと云う処に海軍港附属の官舎を咸臨丸一行の止宿所に貸して呉れ、船は航海中なか〳〵損所が出来たからとて、船渠に入れて修覆をして呉れる。逗留中は勿論彼方で賄も何もそっくり為て呉れる筈であるが、水夫を始め日本人が洋食に慣れない、矢張り日本の飯でなければ喰えないと云うので、自分賄と云う訳けにした所が、亜米利加の人は兼て日本人の魚類を好むと云うことを能く知て居るので、毎日々々魚を持て来て呉れたり、或は日本人は風呂に這入ることが好きだと云うので、毎日風呂を立てゝ呉れると云うような訳け。所でメールアイランドと云う処は町でないものですから、折節今日は桑港に来いと云て誘う。夫れから船に乗て行くと、ホテルに案内して饗応すると云うような事が毎度ある。

敷物に驚く所が此方は一切万事不慣れで、例えば馬車を見ても始めてだから実に驚いた。其処に車があって馬が付て居れば乗物だと云うことは分りそうなものだが、一見したばかりでは一寸と考が付かぬ。所で戸を開けて這入ると馬が駈出す。成程是れは馬の挽く車だと始めて発明するような訳け。何れも日本人は大小を挟して穿物は麻裏草履を穿て居る。ソレでホテルに案内されて行て見ると、絨氈が敷詰めてあるその絨氈はどんな物かと云うと、先ず日本で云えば余程の贅沢者が一寸四方幾千と云て金を出して買うて、紙入にするとか莨入にするとか云うようなソンナ珍らしい品物を、八畳も十畳も恐ろしい広い処に敷詰めてあって、その上を靴

で歩くとは、扨々途方もない事だと実に驚いた。けれども亜米利加人が往来を歩いた靴の儘で颯々と上るから此方も麻裏草履でその上に上た。上ると突然酒が出る。徳利の口を明けると恐ろしい音がして、先ず変な事だと思うたのはシャンパンだ。そのコップの中に何か浮て居るのも分らない。三、四月暖気の時節に氷があろうとは思いも寄らぬ話で、ズーッと銘々の前にコップが並んで、その酒を飲む時の有様を申せば、列座の日本人中で、先ずコップに浮いて居るものを口の中に入れて胆を潰して吹出す者もあれば、口から出さずにガリ〳〵〳〵噛む者もあると云うような訳けで、漸く氷が這入て居ると云うことが分った。ソコで又煙草を一服と思た所で、煙草盆がない、灰吹がないから、そのとき私はストーヴの火で一寸と点けた。マッチも出て居たろうけれどもマッチも何も知りはせぬから、ストーヴで吸付けた所が、どうも灰吹がないので吸殻を棄る所がない。夫れから懐中の紙を出してその紙の中に吸殻を吹出して、念を入れて揉で〳〵火の気のないように捩付けて袂に入れて、暫くして又後の一服を遣ろうとするその時に、袂から煙が出て居る。何ぞ図らん、能く消したと思たその吸殻の火が紙に移て煙が出て来たとは大に胆を潰した。

磊落書生も花嫁の如し都てこんな事ばかりで、私は生れてから嫁入をしたことはないが、花嫁が勝手の分らぬ家に住込んで、見ず知らずの人に取巻かれてチヤフヤ云われて、笑う者もあれば雑談を云う者もあるその中で、お嫁さんばかり独り静にしてお行儀を繕い、人に笑われぬようにしようとして却てマゴツイて顔を赤くするその苦しさはこんなものであろうと、凡そ推察

が出来ました。日本を出るまでは天下独歩、眼中人なし怖い者なしと威張て居た磊落書生も、始めて亜米利加に来て花嫁のように小さくなって仕舞たのは、自分でも可笑しかった。夫れから彼方の貴女紳士が打寄りダンシングとか云て踊りをして見せると云うのは毎度の事で、扨行て見た処が少しも分らず、妙な風をして男女が座敷中を飛廻るその様子は、どうにも斯うにも唯可笑くて堪らない、けれども笑ては悪いと思うから成るたけ我慢して笑わないようにして見て居たが、是れも初めの中は随分苦労であった。

女尊男卑の風俗に驚一寸した事でも右の通りの始末で、社会上の習慣風俗は少も分らない。或る時にメールアイランドの近処にバレーフォーと云う処があって、其処に和蘭の医者が居る。和蘭人は如何しても日本人と縁が近いので、その医者が艦長の木村さんを招待したいから来て呉れないかと云うので、その医者の家に行た所が、田舎相応の流行家と見えて、中々の御馳走が出る中に、如何にも不審な事には、お内儀さんが出て来て座敷に坐り込んで頻りに客の取持をすると、御亭主が周旋奔走して居る。是れは可笑しい。丸で日本とアベコベな事をして居る。御亭主が客の相手になってお内儀さんが周旋奔走するのが当然であるに、左りとはどうも可笑しい。ソコで御馳走は何かと云うと、豚の子の丸煮が出た。是れにも胆を潰した。如何だ、マア呆返たな、丸で安達ヶ原に行たような訳けだと、斯う思うた。散々馳走を受けて、その帰りに馬に乗らないかと云う。ソレは面白い、久振りだから乗ろうと云て、その馬を借りて乗て来た。艦長木村は江戸の旗本だから、馬に乗ることは上手だ。江戸に居れば毎日馬に乗ら

ぬことはない。夫れからその馬に乗てどん〳〵駆けて来ると、亜米利加人が驚いて、日本人が馬に乗ることを知て居ると云うて不思議の顔をして居る。爾う云う訳けで双方共に事情が少しも分らない。

事物の説明に隔靴の歎あり夫れから又、亜米利加人が案内して諸方の製作所などを見せて呉れた。その時は桑港地方にマダ鉄道が出来ない時代である。工業は様々の製作所があって、ソレを見せて呉れた。其処がどうも不思議な訳けで、電気利用の電灯はないけれども、電信はある。夫れからガルヴァニの鍍金法と云うものも実際に行れて居た。亜米利加人の考に、そう云うものは日本人の夢にも知らない事だろうと思て見せて呉た所が、此方はチャント知て居る。是れはテレグラフだ。是れはガルヴァニの力で斯う云うことをして居るのだ。又砂糖の製造所があって、大きな釜を真空にして沸騰を早くすると云うことを遣て居る。ソレを懇々と説くけれども、此方は知て居る、真空にすれば沸騰が早くなると云うことは。且つその砂糖を清浄にするには骨炭で漉せば清浄になると云うこともチャント知て居る。先方では爾う云う事は思いも寄らぬ事だと斯う察して、懇ろに数えて呉れるのであろうが、此方は日本に居る中に数年の間そんな事ばかり穿鑿して居たのであるから、ソレは少しも驚くに足らない。只驚いたのは、掃溜に行て見ても浜辺に行て見ても、鉄の多いには驚いた。申さば石油の箱見たような物とか、色々な缶詰の空※などが沢山棄てゝある。是れは不思議だ。江戸に火事があると焼跡に釘拾いがウヤ〳〵出て居る。所で亜米利加に行て見ると、鉄は丸で塵埃同様に棄てゝあるので、どう

も不思議だと思うたことがある。

夫れから物価の高いにも驚いた。牡蠣を一罎買うと、半弗、幾つあるかと思うと二十粒か三十粒位しかない。日本では二十四文か三十文と云うその牡蠣が、亜米利加では一分二朱もする勘定で、恐ろしい物の高い所だ、呆れた話だと思たような次第で、社会上、政治上、経済上の事は一向分らなかった。

ワシントンの子孫如何と問う所で私が不図胸に浮かんで或人に聞て見たのは外でない、今華盛頓の子孫は如何なって居るかと尋ねた所が、その人の云うに、華盛頓の子孫には女がある筈だ、今如何して居るか知らないが、何でも誰かの内室になって居る容子だと如何にも冷淡な答で、何とも思て居らぬ。是れは不思議だ。勿論私も亜米利加は共和国、大統領は四年交代と云うことは百も承知のことながら、華盛頓の子孫と云えば大変な者に違いないと思うたのは、此方の脳中には源頼朝、徳川家康と云うような考があって、ソレから割出して聞た所が、今の通りの答に驚いて、是れは不思議と思うたことは今でも能く覚えて居る。理学上の事に就ては少しも胆を潰すと云うことはなかったが、一方の社会上の事に就ては全く方角が付かなかった。或時にメールアイランドの海軍港に居る甲比丹のマツキヅガルと云う人が、日本の貨幣を見たいと云うので、艦長は予てそんな事の為めに用意したものと見え、新古金銀が数々あるから、慶長小判を始めとして万延年中迄の貨幣を揃えて甲比丹の処へ送て遣た。所が珍らしい〳〵と計りで、宝を貰たと云う考は一寸とも顔色に見えない。昨日は誠に有難うと云てその翌朝お内

儀さんが花を持て来て呉れた。私はその取次をして独り窃に感服した。人間と云うものはアヽありたい、如何にも心の置き所が高尚だ、金や銀を貰たからと云てキョト〳〵悦ぶと云うのは卑劣な話だ、アヽありたいものだ、大きに感心したことがある。

軍艦の修繕に価を求めず前に云うた通り亜米利加人は誠に能く世話をして呉れた。軍艦を船渠に入れて修覆して呉れたのみならず、乗組員の手元に入用な箱を拵えて呉れるとか云うことまでも親切にして呉れた。いよ〳〵船の仕度も出来て帰ると云う時に、軍艦の修覆その他の入用を払いたいと云うと、彼方の人は笑て居る。代金などゝは何の事だと云うような調子で一寸とも話にならない。何と云うても勘定を取りそうにもしない。

始めて日本に英辞書を入るその時に私と通弁の中浜万次郎と云う人と両人がウエブストルの字引を一冊ずつ買て来た。是れが日本にウエブストルと云う字引の輸入の第一番、それを買てモウ外には何も残ることなく、首尾克く出帆して来た。

義勇兵所で私が二度目に亜米利加に行たとき、甲比丹ブルックに再会して八年目に聞た話がある。それは最初日本の咸臨丸が亜米利加に着たとき、桑港で中々議論があった。今度日本の軍艦が来たからその接待を盛にしなければならぬと云うので、彼処に陸軍の出張所を見たようなものがある。其処へ甲比丹ブルックが行て、大に歓迎しようではないかと相談を掛けると、華盛頓に伺うた上でなければ出来ないと云う。「そんな事をして居ては間に合わないから、何でも出張所の独断で遣れと談じても、兎角埒が明かないから、甲比丹は少し立腹して、いよ〳

丶政府の筋で出来なければ此方に仕様があると云て、夫れから方向を転じて桑港の義勇兵に持込んで、どうだ斯う云う訳けであるから接待せぬかと云うと、義勇兵は大悦びで直に用意が出来た。全体この義勇兵と云うものは不断軍役のあるではなし、大将は御医者様で、少将は染物屋の主人と云うような者で組立てゝあるけれども、チャント軍服も持て居れば鉄砲も何もすっかり備えて居て、日曜か何か暇な時か又は月夜などに操練をして、イザ戦争と云う時に出て行くと云うばかりで、太平の時は先ず若い者の道楽仕事であるから、折角拵えた軍服も滅多に着ることがない所に、今度甲比丹ブルックの話を聞て千歳一遇の好機会と思い、晴れの軍服を光らして日本の軍艦咸臨丸を歓迎したのであると、甲比丹が話して居ました。

布哇寄港祝砲と共に目出度桑港を出帆して、今度は布哇寄港と定まり、水夫は二、三人亜米利加から連れて来たけれども、甲比丹ブルックは居らず、本当の日本人ばかりで、何やら斯うやら布哇を捜出して、其処へ寄港して三、四日逗留した。逗留中、布哇の風俗に就ては物珍しく云う程の要用はないだろう、と思うのは、三十年前の布哇も今も変たことはなかろう、その土人の風俗は汚ない有様で、一見蛮民と云うより外仕方がない。王様にも遇うたが、是れも国王陛下と云えば大層なようだけれども、其処へ行て見れば驚く程の事はない。夫婦連で出て来て、国王は只羅紗の服を着て居ると云う位な事、家も日本で云えば中位の西洋造り、宝物を見せると云うから何かと思たら、鳥の羽で拵えた敷物を持て来て、是れが一番のお宝物だと云う。あれが皇弟か、その皇弟が笊を提げて買物に行くような訳けで、マア村の漁師の親

方ぐらいの者であった。

少女の写真それから布哇で石炭を積込んで出帆した。その時に一寸した事だが奇談がある。私は予て申す通り一体の性質が花柳に戯れるなどゝ云うことは仮初にも身に犯した事のないのみならず、口でもそんな如何わしい話をした事もない。ソレゆえ同行の人は妙な男だと云う位には思うて居たろう。夫れから布哇を出帆したその日に、船中の人に写真を出して見せた。是れはどうだ（その写真は此処に在りと、福澤先生が筆記者に示されたるものを見るに、四十年前の福澤先生の傍に立ち居るは十五、六の少女なり）。その写真と云うのはこの通りの写真だろう。ソコでこの少女が芸者か女郎か娘かは勿論その時に見さかいのある訳けはない——お前達は桑港に長く逗留して居たが、婦人と親しく相並んで写真を撮るなぞと云うことは出来なかったろう、サアどうだ、朝夕口でばかり下らない事を云て居るが、実行しなければ話にならないじゃないかと、大に冷かして遣た。是れは写真屋の娘で、歳は十五とか云た。その写真屋には前にも行たことがあるが、丁度雨の降る日だ、その時私独りで行た所が娘が居たから、お前さん一緒に取ろうではないかと云うと、亜米利加の娘だから何とも思いはしない、取りましようと云うて一緒に取たのである。この写真を見せた所が、船中の若い士官達は大に驚いたけれども、口惜しくも出来なかろう、と云うのは桑港でこの事を云出すと直に真似をする者があるから黙て隠して置て、いよ〳〵布哇を離れてもう亜米利加にも何処にも縁のないと云う時に見せて遣て、一時の戯に人を冷かしたことがある。

不在中桜田の事変帰る時は南の方を通たと思う。行くときとは違て至極海上は穏かで、何でもその歳には閏があって、閏を覚めて五月五日の午前に浦賀に着した。浦賀には是非錨を卸すと云うのがお極りで、浦賀に着するや否や、船中数十日のその間は勿論湯に這入ると云うことの出来る訳けもない、口嗽をする水がヤット出来ると云う位な事で、身体は汚れて居るし、髪はクシャ〳〵になって居る、何は扨置き一番先に月代をして夫れから風呂に這入ろうと思うて、小舟に乗て陸に着くと、木村のお迎が数十日前から浦賀に詰掛けて居て、木村の家来に島安太郎と云う用人がある、ソレが海岸まで迎いに来て、私が一番先に陸に上てその島に遇うた。正月の初に亜米利加に出帆して浦賀に着くまでと云うものは風の便りもない、郵便もなければ船の交通と云うものもない。その間は僅に六箇月の間であるが、故郷の様子は何も聞かないから、殆んど六ヶ年も遇わぬような心地。ヒョイと浦賀の海岸で島に遇て、イヤ誠にお久振り、時に何か日本に変た事はないかと尋ねた所が、島安太郎が顔色を変えて、イヤあったとも〳〵大変な事が日本にあったと云うその時、私が、一寸と島さん待て呉れ、云うて呉れるな、私が中てゝ見せよう、大変と云えば何でも是れは水戸の浪人が掃部様の邸に暴込んだと云うような事ではないかと云うと、島は更らに驚き、どうしてお前さんはそんな事を知て居る、何処で誰れに聞た、聞たって聞ないたって分るじゃないか、私はマア雲気を考えて見るに、そんな事ではないかと思う、イヤ是れはどうも驚いた、邸に暴込んだ所ではない、斯う〳〵云う訳けだと云て、桜田騒動の話をした。その歳の三月三日に桜田に大騒動のあった時であるから、その事を

話したので、天下の治安と云うものは大凡そ分るもので、私が出立する前から世の中の様子を考えて見るとゞうせ騒動がありそうな事だと思て居たから、偶然にも中たので誠に面白かった。

その前年から徐々攘夷説が行れると云う世の中になって来て、亜米利加に逗留中、艦長が玩具半分に蝙蝠傘を一本買た。珍しいものだと云て皆寄て拈くって見ながら、如何だろう之を日本に持て帰てさして廻たら、イヤそれは分切て居る、新銭座の艦長の屋敷から日本橋まで行く間に浪人者に斬られて仕舞うに違いない、先ず屋敷の中で折節ひろげて見るより外に用のない品物だと云たことがある。凡そこのくらいな世の中で、帰国の後は日々に攘夷論が盛になって来た。

幕府に雇わる亜米利加から帰てから塾生も次第に増して相替らず教授して居る中に、私は亜米利加渡航を幸に彼の国人に直接して英語ばかり研究して、帰てからも出来るだけ英書を読むようにして、生徒の教授にも蘭書は教えないで悉く英書を教える。所がマダなか〳〵英書が六かしくて自由自在に読めない。読めないから便る所は英蘭対訳の字書のみ。教授とは云いながら、実は教うるが如く学ぶが如く、共に勉強して居る中に、私は幕府の外国方（今で云えば外務省）に雇われた。その次第は外国の公使領事から政府の閣老又は外国奉行へ差出す書翰を飜訳する為めである。当時の日本に英仏等の文を読む者もなければ書く者もないから、諸外国の公使領事より来る公文には必ず和蘭の飜訳文を添うるの慣例にてありしが、幕府人に横文字読む者とては一人もなく、止むを得ず吾々如き陪臣（大名の家来）の蘭書読む者を雇うて用を弁じたこ

とであるが、雇われたに就ては自から利益のあると云うのは、例えば英公使、米公使と云うような者から来る書翰の原文が英文で、ソレに和蘭の訳文が添うてある。如何かしてこの飜訳文を見ずに直接に英文を飜訳してやりたいものだと思て試みる、試みて居る間に分らぬ処がある、分らぬと蘭訳文を見る、見ると分ると云うような訳けで、なか〳〵英文研究の為めになりました。ソレからもう一つには幕府の外務省には自から書物がある、種々様々な英文の原書がある。役所に出て居て読むのは勿論、借りて自家へ持て来ることも出来るから、ソンな事で幕府に雇われたのは身の為めに大に便利になりました。

欧羅巴各国に行く

私が亜米利加から帰たのは万延元年、その年に華英通語と云うものを飜訳して出版したことがある。是れが抑も私が出版の始まり、先ずこの両三年間と云うものは、人に教うると云うよりも自分で以て英語研究が専業であった。所が文久二年の冬、日本から欧羅巴諸国に使節派遣と云うことがあって、その時に又私はその使節に附て行かれる機会を得ました。この前亜米利加に行く時には私に木村摂津守に懇願して、その従僕と云うことにして連れて行て貰たが、今度は幕府に雇われて居て欧羅巴行を命ぜられたのであるから、自から一人前の役人のような者になって、金も四百両ばかり貰たかと思う。旅中は一切官費で、只手当として四百両の金を貰

たから、誠に世話なし。ソコで私は平生頓と金の要らない男で、徒に金を費すと云うことは決してない。四百両貰たその中で百両だけ国に居る母に送てやった。如何にも母に対して気の毒だと云うのは、亜米利加から帰てマダ国へ親の機嫌を聞きに行きもせずに、重ねて欧羅巴に行くと云うのだから、如何にも済まない。而已ならず私が亜米利加旅行中にも、郷里中津の者共が色々様々な風聞を立てゝ、亜米利加に行て彼の地で死んだと云い、甚だしきに至れば現在の親類の中の一人が私共の母に向て、誠に気の毒な事じや、諭吉さんもとう〳〵亜米利加で死んで、身体は醢けにして江戸に持て帰たそうだなんと、威すのか冷すのかソンな事まで云て母を魘て居たと云うような事で、是れも時節柄で我慢して黙て居るより外に仕方がないとして居ながら、母に対しては如何にも気が済まない。金をやったからと云てソレで償える訳けのものではないけれども、マア〳〵百両だの二百両だのと云う金は生れてから見たこともない金だから、ソレでも送て遣ろうと思て、幕府から請取た金を分けて送りました。

それから欧羅巴に行くと云うことになって、船の出発したのは文久元年十二月の事であった。この度の船は日本の使節が行くと云う為めに、英吉利から迎船のようにして来たオーヂンと云う軍艦で、その軍艦に乗て香港、新嘉堡と云うような印度洋の港々に立寄り、紅海に這入て、蘇士から上陸して蒸気車に乗て、埃及のカイロ府に着て二晩ばかり泊り、それから地中海に出て、其処から又船に乗て仏蘭西の馬塞耳、ソコデ蒸汽車に乗て里昂に一泊、巴里に着て滞在凡そ二十日、使節の事を終り、巴里を去て英吉利に渡り、英吉利から和蘭、和蘭から普魯西の都

の伯林に行き、伯林から露西亜のペートルスボルグ、夫れから再び巴里に帰て来て、仏蘭西から船に乗て、葡萄牙に行き、ソレカラ地中海に這入て、元の通りの順路を経て帰て来たその間の年月は凡そ一箇年、即ち文久二年一杯、推詰てから日本に帰て来ました。

扨今度の旅行に就て申せば、私もこの時にはモウ英書を読み英語を語ると云うことが徐々出来て、夫れから前に申す通りに金も聊か持て居るその金は何も遣い所はないから、只日本を出る時に尋常一様の旅装をした丈けで、その当時は物価の安い時だから何もそんなに金の要る訳けがない、その余た金は皆携えて行て竜動に逗留中、外に買物もない、唯英書ばかりを買て来た。是れが抑も日本へ輸入の始まりで、英書の自由に使われるようになったと云うのも是れからの事である。

夫れから彼の国の巡回中色々観察見聞したことも多いが、是れは後の話にして、先ず使節一行の有様を申さんに、その人員は、

竹内下野守　正使　松平石見守　副使京極能登守御目付柴田貞太郎組頭日高圭三郎御勘定福田作太郎御徒士目付水品楽太郎調役岡崎藤左衛門同高嶋祐啓御医師但し漢方医なり川崎道民雇医益頭駿次郎御普請役上田友助定役元締森鉢太郎定役福地源一郎通弁立広作同太田源三郎同斎藤大之進同心高松彦三郎御小人目付山田八郎同松木弘安反訳方箕作秋坪同福澤諭吉同

右の外に三使節の家来両三人ずつと、賄小使六、七人、この小使の中には内証で諸藩から頼

んで乗込んだ立派な士人もある。松木、箕作、福澤等は先ず役人のような者ではあるが、大名の家来、所謂陪臣の身分であるから、一行中の一番下席で惣人数凡そ四十人足らず、孰れも日本服に大小を横えて巴里、竜動を闊歩したも可笑しい。

旅行中用意の品々失策又失策日本出発前に外国は何でも食物が不自由だからと云うので、白米を箱に詰めて何百箱の兵糧を貯え、又旅中止宿の用意と云うので、廊下に灯す金行灯＝二尺四方もある鉄網作りの行灯を何十台も作り、その外提灯、手燭、ボンボリ、蝋燭等に至るまで一切取揃えて船に積込んだその趣向は、大名が東海道を通行して宿駅の本陣に止宿する位の胸算に違いない。夫れからいよ〳〵巴里に着して、先方から接待員が迎いに出て来ると、一応の挨拶終りて先ず此方よりの所望は、随行員も多勢なり荷物も多いことゆえ、下宿は成るべく本陣に近い処に頼むと云うのは、万事不取締不安心だから、一行の者を使節の近処に置きたいと云う意味でしょう。スルト接待員はいさい承知して、先ず人数を聞糺し、惣勢三十何人と分て、「是ればかりの人数なれば一軒の旅館に十組や二十組は引受けますとの答に、何の事やら訳けが分らぬ。ソレカラ案内に連られて止宿した旅館は、巴里の王宮の門外にあるホテルデロウブルと云う広大な家で、五階造り六百室、婢僕五百余人、旅客は千人以上差支なしと云うので、日本の使節などは何処に居るやら分らぬ。唯旅館中の廊下の道に迷わぬように、当分はソレガ心配でした。各室には温めた空気が流通するから、ストーヴもなければ蒸気もなし、無数の瓦斯灯は室内廊下を照らして日の暮るゝを知らず、食堂には山海の珍味を並べて、如何

なる西洋嫌いも口腹に攘夷の念はない、皆喜んで之を味うから、爰に手持不沙汰なるは日本から脊負て来た用意の品物で、ホテルの廊下に金行灯を点けるにも及ばず、ホテルの台所で米の飯を炊くことも出来ず、とう〳〵仕舞には米を始め諸道具一切の雑物を、接待掛りの下役のランベヤと云う男に進上して、唯貰て貰うたのも可笑しかった。

先ずこんな塩梅式だから、吾々一行の失策物笑いは数限りもない。シガーとシュガーを間違えて烟草を買いに遣て砂糖を持て来るもあり、医者は人参と思て買て来て生姜の粉であったこともある。又或るときに三使節中の一人が便所に行く、家来がボンボリを持て御供をして、便所の二重の戸を明放しにして、殿様が奥の方で日本流に用を達すその間、家来は袴着用、殿様の御腰の物を持て、便所の外の廊下に平き直てチャント番をして居るその廊下は旅館中の公道で、男女往来織るが如くにして、便所の内外瓦斯の光明昼よりも明なりと云うから堪らない。私は丁度其処を通り掛て、驚いたとも驚くまいとも、先ず表に立塞がって物も言わずに戸を打締めて、夫れからそろ〳〵その家来殿に話したことがある。

欧洲の政風人情政治上の事に就ては竜動、巴里等に在留中、色々な人に逢うて色々な事を聞たが、固よりその事柄の由来を知らぬから能く分る訳けもない。当時は仏蘭西の第三世ナポレヲンが欧洲第一の政治家と持囃されてエライ勢力であったが、隣国の普魯士も日の出の新進国で油断はならぬ。墺地利との戦争、又アルサス、ローレンスの事なども国交際の問題として、何れ後年には云々の変乱が生ずるであろうなんと云うことは朝野政通の予言する所で、私の日記

覚書にもチョイ〳〵記してある。又竜動に居るとき、或る社中の人が社名を以て議院に建言したと云うて、その草稿を日本使節に送て来た。建言の趣意は、在日本英国の公使アールコツクが新開国たる日本に居て乱暴無状、恰も武力を以て征服したる国民に臨むが如し云々とて、種々様々の証拠を挙げて公使の罪を責るその証拠の一つに、公使アールコツクが日本国民の霊場として尊拝する芝の山内に騎馬にて乗込たるが如き言語に絶えたる無礼なりと痛論したる節もある。私はこの建言書を見て大に胸が下った。成るほど世界は鬼ばかりでない、是れまで外国政府の仕振を見れば、日本の弱身に付込み日本人の不文殺伐なるに乗じて無理難題を仕掛けて真実困て居たが、その本国に来て見れば「自から」公明正大、優しき人もあるものだと思て、ます〳〵平生の主義たる開国一偏の説を堅固にしたことがある。

土地の売買勝手次第又各国巡回中、待遇の最も濃なるは和蘭の右に出るものはない。是れは三百年来特別の関係で爾うなければならぬ。殊に私を始め同行中に横文字読む人で蘭文を知らぬ者はないから、文書言語で云えば欧羅巴中第二の故郷に帰たような訳けで自然に居心が宜い。夫れは扨置き和蘭滞留中に奇談がある。或るとき使節がアムストルダムに行て地方の紳士紳商に面会、四方八方の話の序に、使節の問に、「このアムストルダム府の土地は売買勝手なるかと云うに、彼の人答えて、「固より自由自在。「外国人へも売るか。「値段次第、誰にでも、又何ほどにても。「左れば爰に外国人が大資本を投じて広く土地を買占め、之に城廓砲台でも築くことがあったら、夫れでも勝手次第かと云うに、彼の人も妙な顔をして、「ソンナ事は是

れまで考えたことはない。如何に英仏その他の国々に金満家が多いとて、他国の地面を買て城を築くような馬鹿気た商人はありますまいと答えて、双方共に要領を得ぬ様子で、私共は之を見て実に可笑しかったが、当時日本の外交政略は凡そこの辺から割出したものであるから堪らない訳けさ。

見物自由の中又不自由夫れは扨居き、私がこの前亜米利加に行たときには、カリフヲルニヤ地方にマダ鉄道がなかったから、勿論鉄道を見たことがない、けれども今度は蘇士に上て始めて鉄道に乗り、ソレカラ欧羅巴各国を彼方此方と行くにも皆鉄道ばかり、到る処に歓迎せられて、海陸軍の場所を始めとして、官私の諸工場、銀行会社、寺院、学校、倶楽部等は勿論、病院に行けば解剖も見せる、外科手術も見せる、或は名ある人の家に晩餐の饗応、舞踏の見物など、誠に親切に案内せられて、却て招待の多いのに草臥れると云う程の次第であったが、唯こゝに一つ可笑しいと云うのは、日本はその時丸で鎖国の世の中で、外国に居ながら兎角外国人に遇うことを止めようとするのが可笑しい。使節は竹内、松平、京極の三使節、その中の京極は御目附と云う役目で、ソレには又相応の属官が幾人も附て居る。ソレが一切の同行人を目ツ張子で見て居るので、なか〳〵外国人に遇うことが六かしい。同行者は何れも幕府の役人連で、その中に先ず同志同感、互に目的を共にすると云うのは箕作秋坪と松木弘安と私と、この三人は年来の学友で互に往来して居たので、彼方に居てもこの三人だけは自然別なものにならぬ。何でも有らん限りの物を見ようと計りして居る、ソレが役人連の目に面白くないと見え、

殊に三人とも陪臣で、然かも洋書を読むと云うから中々油断をしない。何か見物に出掛けようとすると、必ず御目附方の下役が附いて行かなければならぬと云う御定まりで始終附て廻る。此方は固より密売しようではなし、国の秘密を洩らす気遣いもないが、妙な役人が附て来れば只蒼蠅い。蒼蠅いのはマダ宜いが、その下役が何か外に差支があると、私共も出ることが出来ない。ソレは甚だ不自由でした。私はその時に＝＝是れはマア何の事はない、日本の鎖国をそのまゝ担いで来て、欧羅巴各国を巡回するようなものだと云て、三人で笑たことがあります。血を恐れるソレでも私共は見ようと思うものは見、聞こうと思う事は聞たが、序ながらこの見聞のことに就て私の身の恥を云わねばならぬ。私は少年の時から至極元気の宜い男で、時として大言壮語したことも多いが、天禀気の弱い性質で、殺生が嫌い、人の血を見ることが大嫌い。例えば緒方の塾に居るときは刺※流行の時代で、同窓生は勿論私も腕の脈に針をして血を取たことがある。所が私は自分でも他人でもその血の出るのを見て心持が善くないから、刺と云えばチャント眼を閉じて見ないようにして居る。腫物が出来ても針をすることは先ず見合せたいと云い、一寸とした怪我でも血が出ると顔色が青くなる。毎度都会の地にある行倒、首縊、変死人などは何としても見ることが出来ない。見物どころか、死人の話を聞ても逃げて廻ると云うような臆病者である。所が露西亜に滞留中、或る病院に外科手術があるから見物せよとの案内に箕作も松木も医者だから直ぐに出掛ける。私にも一処に行けと無理に勧めて連れて行かれて、外科室に這入て見れば石淋を取出す手術で、執刀の医師は合羽を着て、病人を

ば俎のような台の上に寝かして、コロヽホルムを臭がせて先ず之を殺して、夫れからその医師が光り燿く刀を執てグット制すと、大造な血が迸って医者の合羽は真赤になる、夫れから刀の切口に釘抜のようなものを入れて膀胱の中にある石を取出すとか云う様子であったが、その中に私は変な心持になって何だか気が遠くなった。スルト同行の山田八郎と云う男が私を助けて室外に連出し、水など呑まして呉れてヤット正気に返た。その前独逸の伯林の眼病院でも、欹目の手術とて子供の眼に刀を刺す処を半分ばかり見て、私は急いでその場を逃出してその時には無事に済んだことがある。松木も箕作も私に意気地がないと云て頻りに冷かすけれども、持て生れた性質は仕方がない、生涯これで死ぬことでしょう。

事情探索の胸算夫れは扨置き私の欧羅巴巡回中の胸算は、凡そ書籍上で調べられる事は日本に居ても原書を読で分らぬ処は字引を引て調べさえすれば分らぬ事はないが、外国の人に一番分り易い事で殆んど字引にも載せないと云うような事が此方では一番六かしい。だから原書を調べてソレで分らないと云う事だけをこの逗留中に調べて置きたいものだと思て、その方向で以て是れは相当の人だと思えばその人に就て調べると云うことに力を尽して、聞くに従て一寸々々斯う云うように（この時先生細長くして古々しき一小冊子を示す）記して置て、夫れから日本に帰てからソレを台にして尚お色々な原書を調べ又記憶する所を綴合せて西洋事情と云うものが出来ました。凡そ理化学、器械学の事に於て、或はエレキトルの事、蒸汽の事、印刷の事、諸工業製作の事などは必ずしも一々聞かなくても宜しいと云うのは、元来私が専門学者

ではなし、聞た所が真実深い意味の分る訳けはない、唯一通りの話を聞くばかり、一通りの事なら自分で原書を調べて容易に分るから、コンナ事の詮索は先ず二の次にして、外に知りたいことが沢山ある。例えばコヽに病院と云うものがある、所でその入費の金はどんな塩梅にして誰が出して居るのか、又銀行と云うものがあってその金の支出入は如何して居るか、郵便法が行れて居てその法は如何云う趣向にしてあるのか、仏蘭西では徴兵令を※行して居るが英吉利には徴兵令がないと云う、その徴兵令と云うのは、抑も如何云う趣向にしてあるのか、その辺の事情が頓と分らない。ソレカラ又政治上の選挙法と云うような事が皆無分らない。分らないから選挙法とは如何な法律で議院とは如何な役所かと尋ねると、彼方の人は只笑て居る、何を聞くのか分り切た事だと云う様な訳。ソレが此方では分らなくてどうにも始末が付かない。又党派には保守党と自由党と徒党のような者があって、双方負けず劣らず鎬を削て争うて居ると云う。何の事だ、太平無事の天下に政治上の喧嘩をして居ると云う。サア分らない。コリャ大変なことだ、何をして居るのか知らん。少しも考の付こう筈がない。彼の人と此の人とは敵だなんと云うて、同じテーブルで酒を飲で飯を喰て居る。少しも分らない。ソレが略分るようになろうと云うまでには骨の折れた話で、その謂れ因縁が少しずつ分るようになって来て、入組んだ事柄になると五日も十日も掛てヤット胸に落ると云うような訳で、ソレが今度洋行の利益でした。

樺太の境界談判それからその逗留中に誠に情けなく感じたことがあると申すは、私共の出立前

からして日本国中、次第々々に攘夷論が盛になって、外交は次第々々に不始末だらけ、今度の使節が露西亜に行た時に此方から樺太の境論を持出して、その談判の席には私も出て居たので、日本の使節がソレを云出すと先方は少しも取合わない。或は地図などを持出して、地図の色は斯う〳〵云う色ではないか、自から此処が境だと云うと、露西亜人の云うには、地図の色で境が極れば、この地図を皆赤くすれば世界中露西亜の領分になって仕舞うだろう、又これを青くすれば世界中日本領になるだろうと云うような調子で漫語放言、迚も寄付かれない。マア兎にも角にもお互に実地を調べたその上の事に為ようと云うので、樺太の境は極めずに宜加減にして談判は罷になりましたが、ソレを私が傍から聞て居て、是れは迚も仕様がない、一切万事便る所なし、日本の不文不明の奴等が※威張りして攘夷論が盛になればなる程、日本の国力は段々弱くなる丈けの話で、仕舞には如何云うようになり果てるだろうかと思て、実に情けなくなりました。

露政府の厚遇国交際の談判は右の通りに水臭い次第であるが、使節に対する私の待遇は爾うでない。ペートルスボルグ滞在中は日本使節一行の為めに特に官舎を貸渡して、接待委員と云う者が四、五人あってその官舎に詰切りで、いろ〳〵饗応するその饗応の仕方と云うは頗る手厚く、何に一つ遺憾はないと云う有様。ソレで御用がない時は名所旧跡を始め諸所の工場と云うような所に案内して見せて呉れる。その中に段々接待委員の人々と懇意になって種々様々な話もしたが、その節露西亜に日本人が一人居ると云う噂を聞たその噂は、どうも間違ない事実

であろうと思われる。名はヤマトフと唱えて、日本人に違いないと云う。勿論その噂は接待委員から聞たのではない。その外の人から洩れたのであるが、先ず公然の秘密と云う位な事で、チャント分て居た。そのヤマトフに遇て見たいと思うけれどもなか〳〵遇われない。到頭逗留中出て来ない。出て来ないがその接待中の模様に至ては動もすると日本風の事がある。例えば室内に刀掛があり、寝床には日本流の木の枕があり、湯殿には糠を入れた糟袋があり、食物も勉めて日本調理の風にして箸茶椀なども日本の物に似て居る。どうしても露西亜人の思付く物でない。シテ見ると噂の通り何処にか日本人の居るのは間違いない、明に分て居るけれども、到頭分らずに帰て仕舞いました。私の西航日記にこの事を記して、その傍に詩のようなものが一寸と書てある。

　起来就食々終眠、飽食安眠過一年、
　他日若遇相識問、欧天不異故郷天

今日になって一々記憶もないが、余程日本流の事が多かったと思われます。

露国に止まることを勧む夫れから或日の事で、その接待委員の一人が私の処に来て、一寸こちらに来て呉れろと云て、一間に私を連れて行た。何だと云て話をすると、私の一身上の事に及んで、お前はこの度使節に付て来たが、是れから先は日本に帰て何をする所存かソリャ勿論知らないが、お前は大層金持かと尋ねるから、「イヤ決して金持ではない、マア幾らか日本の政府の用をして居る、用をして居れば自らその報酬と云うものがあるから衣食の道に差支はな

いものだと、斯う私は答えた。所が接待委員の云うに、「日本の事だから我々に委しい事情の分る訳けはない、分りはしないけれども、どうも大体を考えて見た所で日本は小国だ、アヽ云う小さな国に居て男子の仕事の出来るものじゃない。ソレよりかお前はヒョイと茲に心を変えてこの露西亜に止まらないかと云うから、私は答えて、「自分の身は使節に随従して来て居るものであるから、爾う勝手に止まられる訳けのものじゃないと有りのまゝに云うと、「イヤ夫れは造作もない話だ、お前さえ今から決断して隠れる気になれば直ぐに私が隠して遣る。どうせ使節は長く此処に居る気遣はない、間もなく帰る。帰ればソレ切だ。そうしてお前は露西亜人になって仕舞いなさい。この露西亜には外国の人は幾らも来て居る、就中独逸の人などは大変に多い、その外和蘭人も来て居れば英吉利人も来て居る。だから日本人が来て居たからと云て何も珍しい事はない、是非此処に止まれ。いよ〳〵止ると決すれば、その上はどんな仕事でも為ようと思えば面白い愉快な仕事は沢山ある。衣食住の安心は勿論、随分金持になる事も出来るから止まれと懇に説いたのは、決して尋常の戯れでない。チャント一間の中に差向いで真面目になって話したのである。けれども私がその時に止まると云う必要もなければ、又止まろうと云う気もない。宜い加減に返答をして置くと、その後二、三度同じような事を云て来たが、固より話は纏らず。その時に私は大に心付きました、成程露西亜は欧羅巴の中で一種風俗の変た国だと云うが、ソレに違いない。例えば今度英仏にも暫く滞留し、又前年亜米利加に行たときにも、人に逢いさえすれば日本に行こう〳〵と云う者が多い。何か日本に仕事はないか、

どうかして一緒に連れて行て呉れないかと、ソリャもう行く先々でうるさいように云う者はあれども、遂ぞ止まれと云うことを只の一度も云た人はない。露西亜に来て始めて止まれと云う話を聞た、その趣を推察すれば、決して是れは商売上の話ではない、如何しても政治上又国交際上の意味を含んで居るに違いない。こりゃどうも気の知れない国だ、言葉に意味を含んで止まれと云う所を見れば、或は陰険の手段を施す為めではないか知らんと思うた事があった。けれどもそんな事を聞たと云うことを同行の人に語ることも出来ない、語ればどんな嫌疑を蒙るまいものでもないから、その時に語らぬのは勿論、日本に帰て来ても人に云わずに黙て居ました。或は爾う云うことを云われたのは私一人でなく、同行の者も同じ事を云われて、私と同じ考えで黙て居た者があったかも知れない。兎に角に気の知れぬ国だと思われる。

生麦の報道到来して使節苦しむ夫れから露西亜を去て仏蘭西に帰り、いよ〳〵出発と云うその時は生麦の大騒動、即ち生麦で英人のリチヤードソンと云うものを薩摩の侍が斬たと云うことが丁度彼方に報告になった時で、サア仏蘭西のナポレオン政府が吾々日本人に対して気不味くなって来た。人民はどうか知らないが政府の待遇の冷淡不愛相になった事は甚だしい。主人の方でその通りだから、客たる吾々日本人のキマリの悪いこと如何にも云い様がない。日本の使節が港から船に乗ろうと云うその道は十町余りもあったかと思う、道の両側に兵隊をずっと並べて見送らした。是れは敬礼を尽すのではなくして日本人を威かしたに違いない。兵士を幾ら並べたって鉄砲を撃つ訳けでないから、怖くも何ともありはしないけれども、その苦々しい有

様と云うものは実に堪らない訳けであった。私の西航記中の一節に、

閏八月十三日文久二年朝八時ロシフォルトに着。ロシフォルトは巴里より仏里にて九十里の処にある仏蘭西の海軍港なり。蒸気車より下り船に乗るまでの路十余町、この間盛に護衛の兵卒千余人を列せり。敬礼を表するに似て或は威を示すなり。日本人は昨夜蒸気車に乗り車中安眠するを得ず大に疲れたるに、此処に着して暫時も休息せしめず車より下りて直に又船に乗らしむ。且つ船に乗るまで十余町の道、日本の一行には馬車を与えず徒歩にて船まで云々。

ソレカラ仏蘭西を出発して葡萄牙のリスボンに寄港し、使節の公用を済して又船に乗り、地中海に入り、印度洋に出て、海上無事、日本に帰て見れば攘夷論の真盛りだ。

攘夷論

攘夷論の鋒先洋学者に向う井伊掃部頭はこの前殺されて、今度は老中の安藤対馬守が浪人に疵を付けられた。その乱暴者の一人が長州の屋敷に駈込んだとか何とか云う話を聞て、私はその時始めて心付いた、成るほど長州藩も矢張り攘夷の仲間に這入て居るのかと斯う思たことがある。兎にも角にも日本国中攘夷の真盛りでどうにも手の着けようがない。所で私の身にして見ると、是れまでは世間に攘夷論があると云う丈けの事で、自分の身に就て危いことは覚えなか

った。大阪の塾に居る中に勿論暗殺などゝ云うことのあろう筈はない。又江戸に出て来たからとて怖い敵もなければ何でもないと計り思て居た所が、サア今度欧羅巴から帰て来たその上はなか〳〵爾うでない。段々喧しくなって、外国貿易をする商人が俄に店を片付けて仕舞うなどゝ云うような事で、浪人と名くる者が盛に出て来て、何処に居て何をして居るのか分らない。丁度今の壮士と云うようなもので、ヒョコ〳〵妙な処から出て来る。外国の貿易をする商人さえ店を仕舞うと云うのであるから、況して外国の書を読で欧羅巴の制度文物を夫れ是れと論ずるような者は、どうも彼輩は不埒な奴じゃ、畢竟彼奴等は虚言を吐て世の中を瞞着する売国奴だと云うような評判がソロ〳〵行れて来て、ソレから浪士の鋒先が洋学者の方に向いて来た。是れは誠に恐入た話で、何も私共は罪を犯した覚えはない。是れはマア何処まで小さくなれば免るゝかと云うと、幾ら小さくなっても免れない。到頭仕舞には洋書を読むことを罷めて仕舞うて攘夷論でも唱えたらば、ソレはお詫が済むだろうが、マサカそんな事も出来ない。此方が無頓着に思う事を遣ろうとすれば、浪人共は段々きつくなって来る。既に私共と同様幕府に雇われて居る飜訳方の中に手塚律蔵と云う人があって、その男が長州の屋敷に行て何か外国の話をしたら、屋敷の若者等が斬て仕舞うと云うので、手塚はドン／〃＼駈出す、若者等は刀を抜て追蒐る、手塚は一生懸命に逃げたけれども逃切れずに、寒い時だが日比谷外の濠の中へ飛込んで漸く助かった事もある。夫れから同じ長州の藩士で東条礼蔵と云う人も矢張り私と同僚飜訳方で、小石川の素と蜀山人の住居と云う家に住で居た。所がその家に所謂浮浪の徒が

暴込んで、東条は裏口から逃出して漸と助ったと云うような訳けで、いよ〳〵洋学者の身が甚だ危くなって来て油断がならぬ。左ればとて自分の思う所、為す仕事は罷められるものじゃない。夫れから私は構わない、構おうと云た所が構われもせず、罷めようと云た所が罷められる訳けでない、マア〳〵言語挙動を柔かにして決して人に逆わないように、社会の利害と云うような事は先ず気の知れない人には云わないようにして、慎める丈け自分の身を慎んで、ソレと同時に私は専ら著書飜訳の事を始めた。その著訳の一条に就ては今コヽで別段に云う事はない、私の今年開版した福澤全集の緒言に詳に書てあるから是れは見合せるとして、その著訳事業中、即ち攘夷論全盛の時代に、洋学生徒の数は次第々々に殖えるからその教授法に力を尽し、又家の活計は幕府に雇われて扶持米を貰てソレで結構暮らせるから、世間の事には頓と頓着せず、怖い半分、面白い半分に歳月を送て居る。或時可笑い事があった。私が新銭座に一寸住居の時（新銭座塾に非ず）、誰方か知らないが御目に掛りたいと云てお侍が参りましたと下女が取次するから、「ドンナ人だと聞くと、「大きな人で、眼が片眼で、長い刀を挟して居ますと云うから、コリャ物騒な奴だ、名は何と云う。「名はお尋ね申したが、お目に掛れば分ると云て被仰しゃいません＝＝どうも気味の悪い奴だと思て、夫れから私は窃と覗いて見ると、何でもない、筑前の医学生で原田水山、緒方の塾に一緒に居た親友だ。思わず罵た。この馬鹿野郎、貴様は何だ、何ぜ名を云て呉れんか、乃公は怖くて堪らなかったと云て、奥に通して色々世間話をして、共々に大笑した事がある。爾う云う世の中で洋学者もつまらぬ事に驚かされて居ま

した。

英艦来る夫れから攘夷論と云うものは次第々々に増長して、徳川将軍家茂公の上洛となり、続いて御親発として長州征伐に出掛けると云うような事になって、全く攘夷一偏の世の中となった。ソコで文久三年の春、英吉利の軍艦が来て、去年生麦にて日本の薩摩の侍が英人を殺したその罪は全く日本政府にある、英人は只懇親を以て交ろうと思うて是れまでも有らん限り柔かな手段ばかりを執て居た、然るに日本の国民が乱暴をして剰え人を殺した、如何にしてもその責は日本政府に在て免るべからざる罪であるから、この後二十日を期して決答せよと云う次第は、政府から十万磅の償金を取り、尚お二万五千磅は薩摩の大名から取り、その上罪人を召捕て眼の前で刑に処せよとの要求、その手紙の来たのがその歳の二月十九日、長々とした公使の公文が来た。その時に私共が飜訳する役目に当て居るので、夜中に呼びに来て、赤坂に住て居る外国奉行　松平石見守　の宅に行たのが、私と杉田玄端、高畑五郎、その三人で出掛けて行て、夜の明けるまで飜訳したが、是れはマアどうなる事だろうか、大変な事だと窃に心配した所が、その翌々二十一日には将軍が危急存亡の大事を眼前に見ながら其れを棄てゝ置て上洛して仕舞うた。爾うするとサア二十日の期限がチャント来た。十九日に手紙が来たのだから丁度翌月十日、所がもう二十日待て呉れろ、ソレは待つの待たないのと捫着の末、どうやら斯うやら待て貰うことになった。所でいよ〳〵償金を払うか払わないかと云う幕府の評議がなか〳〵決しない。その時の騒動と云うものは、江戸市中そりゃモウ今に戦争が始まるに違いない、何日に

戦争がある抔と云う評判、その二十日の期間も既に過去て、又十日と云うことになって、始終十日と二十日の期限を以て次第々々に返辞を延して行く。私はその時に新銭座に住で居たから、迚もこりゃ戦争になりそうだ、なればどうも逃げるより外に仕様がないと、ソロ〳〵逃仕度をすると云うような事で、ソコで愈よ期日も差迫て、今度はもう掛値なし、一日も負からないと云う日になった、と云うのを私は政府の飜訳局に居て詳に知て居るから尚お堪らない。仏国公使無法に威張るその飜訳をする間に、時の仏蘭西のミニストル・ベレクルと云う者が、どう云う気前だか知らないが大層な手紙を政府に出して、今度の事に就て仏蘭西は全く英吉利と同説だ、愈よ戦端を開く時には英国と共々に軍艦を以て品川沖を暴れ廻ると、乱暴な事を云うて来た。誠に謂れのない話で、丸でその趣は今の西洋諸国の政府が支那人を威すと同じ事で、政府は唯英仏人の剣幕を見て心配する計り。私には能くその事情が分る、分れば分るほど気味が悪い。

事態いよ〳〵迫る是れはいよ〳〵遣るに違いないと鑑定して、内の方の政府を見れば何時迄も説が決しない。事が喧しくなれば閣老は皆病気と称して出仕する者がないから、政府の中心は何処に在るか訳が分らず、唯役人達が思い〳〵に小田原評議のグヅ〳〵で、愈よ期日が明後日と云うような日になって、サア荷物を片付けなければならぬ。今でも私の処に疵の付た箪笥がある。愈よ荷物を片付けようと云うので箪笥を細引で縛て、青山の方へ持て行けば大丈夫だろう、何も只の人間を害する気遣はないからと云うので、青山の穏田と云う処に呉黄石と云う芸

州の医者があって、その人は箕作の親類で、私は兼て知て居るから、呉の処に行てどうか暫く此処に立退場を頼むと相談も調い、愈よ青山の方と思うて荷物は一切拵えて名札を付けて担出す計りにして、そうして新銭座の海浜にある江川の調練場に行て見れば、大砲の口を海の方に向けて撃つような構えにしてある。是れは今明日の中にいよ〳〵事は始まると覚悟を定めた。その前に幕府から布令が出てある。愈よ兵端を開く時には浜御殿、今の延遼館で、火矢を挙げるから、ソレを相図に用意致せと云う市中に布令が出た。江戸ッ子は口の悪いもので、「瓢箪兵端の開け初めは冷火矢でやる」と川柳があったが、是れでも時の事情は分る。

米と味噌と大失策夫れから又可笑しい事がある。私の考えに、是れは何でも戦争になるに違いないから、マア米を買おうと思て、出入の米屋に申付けて米を三十俵買て米屋に預け、仙台味噌を一樽買て納屋に入れて置た。所が期日が切迫するに従て、切迫すればするほど役に立たないものは米と味噌、その三十俵の米を如何すると云うた所が、担いで行かれるものでもなければ、味噌樽を背負て駈けることも出来なかろう。是れは可笑しい、昔は戦争のとき米と味噌があれば宜いと云たが、戦争の時ぐらい米と味噌の邪魔になるものはない、是れはマア逃げる時はこの米と味噌樽は棄てゝ行くより外はないと云て、その騒動の真盛りに大笑いを催した事がある。その時にも新銭座の家に学生が幾人か居て、私はその時二分金で百両か百五十両持て居たから、この金を独りで持て居ても策でない、イザと云えば誰が何処にどう行くか分らない、金があれば先ず餓えることはないから、この金は私が一人で持て居るよりか、家内が一人で持

て居るよりか、是れは銘々に分けて持つが宜かろうと云うので、その金を四つか五つに分けて、頭割にして銘々ソレを腰に巻て行こうと、用意金の分配まで出来て、明日か明後日は愈よ戦争の始まり、外に道はないと覚悟した所が、茲に幸な事があると云うのは、その時に唐津の殿様で小笠原壱岐守と云う閣老がある。夫れから横浜に浅野備前守と云う奉行がある。小笠原壱岐守ソレ等の人が極秘密に云合せた事と見えて、五月の初旬、十日前後と思いますが、愈よ今日と云う日に、前日まで大病だと云て寝て居た小笠原壱岐守がヒョイとその朝起きて、日本の軍艦に乗て品川沖を出て行く。スルト英吉利の砲艦が壱岐守の船の尻に尾いて走ると云うのは、壱岐守は上方に行くと云て品川湾を出発したから、若し本当にその方針を取て本牧の鼻を廻れば英人は後から砲撃する筈であったと云う。所が壱岐守は本牧を廻らずに横浜の方へ這入て、自分の独断で即刻に償金を払うて仕舞た。十万磅を時の相場にすればメキシコ弗で四十万になるその正銀を、英公使セント・ジョン・ニールに渡して先ず一段落を終りました。鹿児島湾の戦争幕府に要求した十万磅の償金は五月十日に片付て、夫れから今度はその英軍艦が鹿児島に行て、被害者遺族の手当として二万五千磅を要求し、且つその罪人を英国人の見て居る所で死刑に処せよと云う掛合の為めに、六艘の軍艦は鹿児島湾に廻て錨を卸した。スルト薩摩藩から直ちに来意訪問の使者が来る。英の旗艦の水師提督はクーパー、司令長官はウヰルモット、船長はジヨスリングと云う人で、書翰を薩摩の役人に渡し、応否の返答如何と待て居る。所がなか〳〵容易な事に返辞が出来ない。ソレコレする中に薩摩に西洋形の船、即ち西洋

から薩摩藩に買取た船が二艘あるその二艘の船を談判の抵当に取ると云う趣意で、桜島の側に碇泊してあった二艘の船を英の軍艦が引張て来ると云う手詰の場合になった。スルト陸の方からこの様子を見ていよ〳〵発砲し始めて、陸から発砲すれば海からも発砲して、ドン〳〵大合戦になった、と云うのが丁度文久三年五月下旬、何でも二十八、九日頃である。その時に英の旗艦はマダ陸からは発砲しないこと丶思て錨を挙げずに居た所が、俄に陸の方で撃始めたものだから、サア錨を上げようとすると生憎その時は大変な暴風、加うるに海が最も深いからドウも錨を上げる遑がないと云うので、錨の鎖を切て夫れから運動するようになった。是れが例の英吉利の軍艦の錨が薩摩の手に入た由来である。ソコで陸から打つ鉄砲もなか〳〵エライ、専ら旗艦を狙うて命中するものも多いその中に、大きな丸い破裂弾が旨く発して怪我人が出来た中に、司令長官と甲比丹と二人の将官が即死して船中の騒動、又船から陸に向ての砲撃もなか〳〵劇しく、海岸の建物は大抵焼払うて是れも容易ならぬ損害であったが、詰る所、勝負なしの戦争と云うのは、薩摩の方は英吉利の軍艦を撃て二人の将官まで殺したけれどもその船を如何することも出来ない、又軍艦の方でも陸を焼払うて随分荒したことは荒したけれども上陸することは出来ない、双方共に勝ちも負けもせずに、英の軍艦が横浜に帰たのは六月十日前の頃であったが、その時に面白い話がある。戦争の済んだ後で彼の旗艦に命中した破裂弾の砕片を見て、船中の英人等が頻りに語り合うに、「こんな弾丸が日本で出来る訳はない。イヤ能く見れば露西亜製のものじゃ。露西亜から日本に送ったのであろうなど丶評議区々なりしと云う。

当時クリミヤ戦争の当分ではあるし、元来英吉利と露西亜との間柄は犬と猿のようで、相互に色々な猜疑心がある。今日に至るまでも仲は好くないように見える。

松木、五代、英艦に投ずそれは扨置き茲に薩摩の船を二艘此方に引張て来ると云う時に、その船長の松木弘安（後に寺嶋陶蔵又後に宗則）、五代才助（後に五代友厚）の両人が、船奉行と云う名義で云わば船長である。ソコで英の軍艦が二艘の船を引張て来ようと云うその時に、乗込の水夫などは其処から上陸させたが、船長二人だけは英艦の方に投じた。投じたけれども自分の船から出るときに、実は松木と五代と申し談じて窃にその船の火薬車に導火を点けて置たから、間もなく船は二艘とも焼けて仕舞た。夫れは夫れとして、扨松木に五代と云うものは捕虜でもなければ御客でもない、何しろ英の軍艦に乗込んで横浜に来たに違はない。その事は横浜の新聞紙にも出て居たのであるが、ソレ切り少しも消息が分らない。私はその前年松木と欧羅巴に一緒に行たのみならず、以前から私と箕作と松木と云うものは甚だ親しい朋友の間柄で、ソコで松木が英船に乗たと云うが如何したろうかと只その噂をするばかりで尋ねる所もない。英人が若しこの両人を薩摩の方へ還せば、ソリャもう若武者共が直ぐに殺すに極て居る。然ればと云て之を幕府の方に渡せば、殺さぬまでもマア嫌疑の筋があるとか取調べる廉があるとか云て取敢えず牢には入れるだろう。所が今日まで薩摩に還したと云う沙汰もなければ、幕府に引渡したと云う様子もない。如何したろうか、如何にも不審な事じゃと唯箕作と私と始終その話をして居た。所が凡そこの事が済んで一年ばかり経てから、不意とその松木を見付け出した

こそ不思議の因縁である。

薩人、英人と談判松木の話は次にして置て、横浜に英吉利の軍艦が帰て来た跡で、薩摩から談判の為めに江戸に人が出て来た。その江戸に人の出て来たと云うのは、岩下佐治右衛門、重野孝之丞（後に安繹）、その外に黒幕見たような役目を帯びて来たのが大久保市蔵（後に利通）、その三人が出て来た処で、第一番に薩摩の望む所は兎にも角にもこの戦争を暫く延引して貰いたいと云う注文なれども、その周旋を誰に頼むと云う手掛りもなく当惑の折柄、こゝに一人の人があるその一人と云うのは清水卯三郎（瑞穂屋卯三郎）と云う人で、この人は商人ではあるけれども英書も少し読み西洋の事に付ては至極熱心、先ず当時に於てはその身分に不似合な有志者である。初め英艦が薩摩に行こうと云うときに、若し薩摩の方から日本文の書翰を出されたときには之を読むに困る。通弁にはアレキサンドル・シーボルトがあるから差支ないけれども、日本文の書翰を颯々と読む人がない、と云うので英人から同行を頼まれた。清水は平生勇気もあり随分そんな事の好きな人で、夫れは面白い行て見ようと容易承諾し、横浜税関の免状を申受けて旗艦に乗込み、先方に着して親しく戦争をも見物したその縁があるので、今度薩州の人が江戸に来て英人との談判に付き、黒幕の大久保市蔵は取敢えず清本卯三郎を頼み、兎に角にこの戦争を暫く延引して貰いたいと云う事を、在横浜の英公使ジョン・ニールに掛合うことにした。ソコで清水は大久保の依託を受けて横浜の英公使館に出掛けてその話を申込んだ所が、取次の者の言うに、斯る重大事件を談ずるに商人などでは不都合なり、モット大きな人

が来たら宜かろうと云うから、清水は之を押し返し、人に大小軽重はない、談判の委任を受けて居れば沢山だ、夫れでも拙者と話は出来ないかと少しく理屈を云た所が、そう云う訳ないら直ぐに遇うと云うので、夫れから公使に面会して戦争中止の事を話掛けると、なか〳〵聞きそうにも為ない。イヤもう既に印度洋から軍艦を増発して何千の兵士は唯今支度最中、然るにこの戦争の時期を延して待つなどゝは謂れのない話だ云々と、思うさま威嚇して聞きそうな顔色がない。ソコで清水はその挨拶を承って薩人に報告すると、重野が、迚もこりや六かしそうだ、兎に角に自分達が自から談判して見ようと云て、遂に薩英談判会を開き、種々様々問答の末、とう〳〵要求通りの償金を払う事になり、高は二万五千磅、時の相場にして凡そ七万両ぐらいに当り、その七万両の金は内実幕府から借用して、そうして島津薩摩守の名義では払われないと云うので、分家の島津淡路守の名を以て金を渡すことにして、且つ又リチャルドソンを殺した罪人は何分にも何処にか逃げて分らないから、若し分たらば死刑と云うことで以て事が収まった。その談判の席には大久保市蔵は出ない。岩下と重野の両人、それから幕府の外国方から鵜飼弥市、監察方から斎藤金吾と云う人が立会い、いよ〳〵書面を取換して事のすっかり収まったのが、文久三年の十一月の朔日か二日頃であった。

松木、五代、埼玉郡に潜む拠夫れから私の気になる松木、即ち寺島の話は斯う云う次第である。松木、五代が薩摩の船から英の軍艦に乗移た所が、清水が居たので松木も驚いた。清水と云う男は以前江戸にて英書の不審を松木に聞て居たこともある至極懇意な間柄で、その清水が英

の軍艦に居るから松木の驚くも無理はない。「イヤ如何して此処に居るか。「お前さんは如何して又此処に来たと云うような訳けで、大変好都合であった。ソコで横浜に来たけれども、この儘に何時迄もこの船の中に居られるものでない。マア如何かして上陸したい、と云うその事に付ては清水卯三郎が一切引受ける。それは松木と五代は極々日蔭者で、青天白日の身と云うのは清水一人、そこで清水が先ず横浜に上て、夫れから亜米利加人のヴエンリートと云う人にその話をした所が、如何でも周旋しよう、兎に角に艀船に乗て神奈川の方に上る趣向に為よう、その船も何も世話をして遣ろうと云うことになった。所でアドミラルが如何云うかソレに聞て見なければならぬので、アドミラルにその事を話すと至極寛大で、上陸差支なしと云うので、ソレカラ一切万事、清水とヴエンリートと諜し合せて、落人両人の者は夜分窃にその艀船に乗り移り、神奈川以東の海岸から上る積りに用意した所が、その時には横浜から江戸に来る街道一町か二町目毎に今の巡査交番所見たようなものがずっと建て居て、一人でも径しいものは通行を咎めると云うことになって居るから、なか〳〵大小などを挟して行かれるものでない。ソコで大小も陣笠も一切の物はヴエンリートの家に預けて、丸で船頭か百姓のような風をして、小舟に乗込み、舟は段々東に下てとう〳〵羽根田の浜から上陸して、ソレカラ道中は忍び忍んで江戸に這入るとした所で、マダ幕府の探偵が甚だ恐ろしい。只の宿屋には泊られないから、江戸に這入たらば堀留の鈴木と云う船宿に清水が先へ行て待て居るから其処へ来いと云う約束がしてある。ソコで両人は夜中勝手も知れぬ海浜に上陸して、探り〳〵に江戸の方に

向て足を進める中に夜が明けて仕舞い、コリャ大変と夫れから駕籠に乗て面を隠して堀留の船宿に来たのがその翌日の昼であった。清水は昨夜から待て居るので万事の都合宜く、その船宿に二晩窃に泊て、夫れから清水の故郷武州埼玉郡羽生村まで二人を連れて来て、其処も何だか気味が悪いと云うので、又その清水の親類で奈良村に吉田一右衛門と云う人がある、その別荘に移して、此処は極淋しい処で見付かるような気遣いはないと安心して二人とも収め込んで仕舞い、五代はその後五、六ヶ月して窃に長崎の方に行き、松木は凡そ一年ばかりも其処に居る中に、本藩の方でも松木の事を心頭に掛けてその所在を探索し、大久保、岩下、重野を始めとして、江戸の薩州屋敷には肥後七左衛門、南部弥八など云う人が様々周旋の末、これは清水卯三郎が知て居はしないかと思い付て、清水の処に尋ねに来た。所が清水はドウも怖くて云われない、不意と捕まえられて首を斬られるのではなかろうかと思て真実が吐かれない。一応は唯知らぬと答えたれども、薩摩の方では中々疑て居る様子。爾うかと思うと時としては幕府の方からも清水の家に尋ねに来る。ソコで清水も当惑して、如何しようとも考えが付かない。殺さないなら早く出して遣りたいが、殺すような事なら今まで助けて置たものだから出したくないと、自分の思案に余て、夫れから江戸の洋学の大家川本幸民先生は松木の恩師であるから、この大先生の意見に任せようと思て相談に行た所が、先生の説に、「ソリャ出すが宜かろう、薩藩人が爾う云うなら有のまゝに明して渡して遣るが宜かろう、マサカ殺しもしなかろうと云うので、ソコで始めて決断して清水の方から薩人に通知して、実は初めから何も斯も自分が世話

をした事で一切知て居る、早速御引渡し申すが、只約束は決して本人を殺さぬようにと念を押して、ソコデ松木が始めて薩人に面会して、この時から松木弘安を改めて寺島陶蔵と化けたのです。右の一条は薩州の方でも甚だ秘密にして、事実を知て居る者は藩中に唯七人しかないと清水が聞たそうだが、その七人とは多分大久保、岩下なぞでしょう。

始めて松木に逢うその時は既に文久四年となり、四年の何月かドウモ覚えない、寒い時ではなかった、夏か秋だと思いますが、或日肥後七左衛門が不意と私方に来て、松木が居るが、お前の処に来ても差支はないかと云う。私は実に驚いた。去年からモウ気になって居て、箕作と遇いさえすればその噂をして居たが、生きて居たか。「確かに生きて居る。「何処に居るか。「江戸に居る、兎に角に此処に来て宜いか。「宜いとも、大宜しだ。何も憚ることはない、少しも構わない、直ぐに逢いたいと云うと、その翌日松木が出て来た。誠に冥土の人に遭たような気がして、ソレカラいろ〳〵な話を聞て、清水と一緒になったと云うことも分れば何も箇も分て仕舞た。その時、私は新銭座に居ましたが、マア久振りで飲食を共にして、何処に居るかと聞けば、白銀台町に曹某と云う医者がある、その家は寺島の内君の里なので、その縁で曹の家に潜んで居ると云う。その日は先ずその儘分れて、夫れから私は直ぐに箕作の処に事の次第を云て遣て、箕作も直ぐその翌日出て来て両人同道して白銀の曹の家に行き、三友団座昼から晩までいろ〳〵な事を話すその中に、例の麕島戦争の話などもあって、その戦争の事に就ては〃マダ〳〵〃いろ〳〵面白い事があるけれども、長くなるから此処で之を略し、扨寺島の身の上

は如何だと云うに、薩摩の方は大抵是れで宜しいがマダ幕府の意向が分らない、けれども是れとても別段に幕府の罪人でもないから爾う恐れる事もない訳け。ソコで寺島は何をして喰て居るかと聞けば、今は本藩の飜訳などして居ると云う。それこれの話の中に寺島が云うには、モウ〳〵鉄砲は嫌だ〳〵、今でも乃公は鉄砲の音がドーンと鳴ると頭の中がズーンとして来る、モウ嫌だぜ〳〵、乃公は思い出しても身がブル〳〵ッとする、夫れから又その船の火薬庫に導火を点けるときは随分気味の悪い話だった、だが命拾いをしたその時、懐中に金が二十五両あったからその金を持て上陸したと云う。いろ〳〵の話の中に英人が薩摩湾に碇泊中菓物が欲しいと云うと、薩摩人が之を進上する風をしてその機に乗じて斬込もうとして出来なかったと云うような種々様々な話がありますが、それはマア止めにして錨の話。

夢中で錨を還すその錨を切たと云うことは清水卯三郎が船に乗て見て居たばかりで薩摩の人は多分知らない。ソレカラ清水が薩摩の人に遇て、那の時に英艦の方では錨を切たのだから拾い挙げて置たら宜かろうと云た所が、薩摩でも余り気に留めなかったと見えて、その錨は何でも漁夫が挙げたと云う話だ。ソレで錨は薩摩の手に這入たが、二万五千磅の金を渡して和睦をしたその時に、英人が手軽に錨を還して貰いたいと云うと、易い事だと云て何とも思わずに古鉄でも渡す積りで返して仕舞た様子だが、前にも云う通り戦争の負勝は分らなかったのでしょう、何方が勝たでもない、錨を切て将官が二人死んで水兵は上陸も出来ずに帰たと云えばマア負師、夫れから又薩摩の方も陸を荒されて居ながら帰て行く船を追蒐けて行くこともせず打遣

って置たのみならず、戦争の翌朝英艦から陸に向て発砲しても陸から応砲もせぬと云えばこりや薩摩の負師のように当る、勝たと云えば何方も勝た、負けたと云えば何方も負けた、詰り勝負なしとした所で、何でも錨と云うものは大事な物である、ソレを浮か〳〵と還して仕舞たと云うのは誠に馬鹿げた話だけれども、当時の日本人が国際法と云うことを知らないのはマアこの位なもので、加之ならず本来今度の生麦事件で英国が一私人殺害の為めに大層な事を日本政府に云掛けて、到頭十二万五千磅取たと云うのは理か非か、甚だ疑わしい。三十余年前の時節柄とは云え、吾々日本人は今日に至るまでも不平である。夫れから薩摩から戦の日延べを云出したその時に、英公使の云振りが威嚇したにも威嚇さぬにもマア大変な剣幕で、悪く云えば日本人はその威嚇を喰たようなもので、必竟何も知らずに夢中でこの事が終て仕舞た。今ならばこんな馬鹿げた事は勿論なかろうが、既にその時にも亜米利加人などは日本政府で払わなければ宜いがと云て居たことがある。英公使は威嚇し抜て、その上に仏蘭西のミニストルなどが横合から出て威張るなんと云うのは、丸で狂気の沙汰で訳けが分らない。ソレで事が済んだのは今更ら何とも評論のしようがない。

緒方先生の急病村田蔵六の変態所で京都の方では愈よ五月十日（文久三年）が攘夷の期限だと云う。ソレで和蘭の商船が下ノ関を通ると、下ノ関から鉄砲を打掛けた。けれども幸に和蘭船は沈みもせずに通たが、ソレがなか〳〵大騒ぎになって、世の中は益々恐ろしい事になって来た。所でその歳の六月十日に緒方洪庵先生の不幸。その前から江戸に出て来て下谷に居た緒方

先生が、急病で大層吐血したと云う急使に、私は実に胆を潰した。その二、三日前に先生の処へ行てチャント様子を知て居るのに、急病とは何事であろうと、取るものも取敢えず即刻宅を駈出して、その時分には人力車も何もありはしないから、新銭座から下谷まで駈詰で緒方の内に飛込んだ所が、もう綽切れて仕舞た跡。是れはマア如何したら宜かろうかと丸で夢を見たような訳け。道の近い門人共は疾く先に来て、後から来る者も多い。三十人も五十人も詰掛けて、外に用事もなし、今夜は先ずお通夜として皆起きて居る。所が狭い家だから大勢坐る処もないような次第で、その時は恐ろしい暑い時節で、坐敷から玄関から台所まで一杯人が詰て、私は夜半玄関の敷台の処に腰を掛けて居たら、その時に村田蔵六（後に大村益次郎）が私の隣に来て居たから、「オイ村田君――君は何時長州から帰て来たか。「この間帰た。「ドウダエ馬関では大変な事を遣たじゃないか。何をするのか気狂共が、呆返た話じゃないかと云うと、村田が眼に角を立て、「何だと、遣たら如何だ。「如何だッて、この世の中に攘夷なんて丸で気狂いの沙汰じゃないか。「気狂いとは何だ、怪しからん事を云うな。長州ではチャント国是が極まってある。あんな奴原に我儘をされて堪るものか。殊に和蘭の奴が何だ、小さい癖に横風な面して居る。之を打攘うのは当然だ。モウ防長の士民は悉く死尽しても許しはせぬ、何処までも遣るのだと云うその剣幕は以前の村田ではない。実に思掛けもない事で、是れは変なことだ、妙なことだと思うたから、私は宜加減に話を結んで、夫れから箕作の処に来て、大変だ〳〵、村田の剣幕は是れ〳〵の話だ、実に驚いた、と云うのはその前から村田が長州に行た

と云うことを聞て、朋友は皆心配して、あの攘夷の真盛りに村田がその中に呼込まれては身が危い、どうか径我のないようにしたいものだと、寄ると触ると噂をして居る其処に、本人の村田の話を聞て見れば今の次第、実に訳けが分らぬ。一体村田は長州に行て如何にも怖いと云うことを知て、そうして攘夷の仮面を冠て態とりきんで居るのだろうか、本心からあんな馬鹿を云う気遣はあるまい、どうも彼の気が知れない。「そうだ、実に分らない事だ。兎にも角にも一切彼の男の相手になるな。下手な事を云うとどんな間違いになるか知れぬから、暫く別ものにして置くが宜いと、箕作と私と二人云合して、夫れから外の朋友にも、村田は変だ、滅多な事を云うな、何をするか知れないからと気を付けた。是れがその時の実事談で、今でも不審が晴れぬ。当時村田は自身防禦の為めに攘夷の仮面を冠て居たのか、又は長州に行て、どうせ毒を舐めれば皿までと云うような訳けで、本当に攘夷主義になったのか分りませぬが、何しろ私を始め箕作秋坪その外の者は、一時彼に驚かされてその儘ソーッと棄置たことがあります。外交機密を写取る文久三年癸亥の歳は一番喧しい歳で、日本では攘夷をすると云い、又英の軍艦は生麦一件に就て大造な償金を申出して幕府に迫ると云う、外交の難局と云うたらば、恐ろしい怖い事であった。その時に私は幕府の外務省の飜訳局に居たから、その外国との往復書翰は皆見て悉く知て居る。即ち英仏その他の国々から斯う云う書翰が来た、ソレに対して幕府から斯う返辞を遣た。又此方から斯う云う事を諸外国の公使に掛合付けると、彼方から斯う返答して来たと云う次第、即ち外交秘密が明に分て居なければならぬ筈。勿論その外交秘密の

書翰を宅に持て帰ることは出来ない、けれども役所に出て飜訳するか或は又外国奉行の宅に行て飜訳するときに、私はちゃんとソレを諳記して置て、宅に帰てからその大意を書て置く。例えば生麦の一件に就て英の公使から来たその書翰の大意は斯様々々、ソレに向て此方から斯う返辞を遣わしたと云うその大意、一切外交上往復した書翰の大意を、宅に帰ては薄葉の罫紙に書記して置た。ソレは勿論ザラに人に見せられるものでない。唯親友間の話の種にする位の事にして置たが、随分面白いものである。所が私はその書付を一日不意と焼て仕舞た。

脇屋卯三郎の切腹焼て仕舞たと云うことに就て話がある。その時に何とも云われぬ恐ろしい事が起た、と云うのは神奈川奉行組頭、今で云えば次官と云うような役で、脇屋卯三郎と云う人があった。その人は次官であるから随分身分のある人で、その人の親類が長州に在て、之に手紙を遣た所が、その手紙を不意と探偵に取られた。その手紙は普通の親類に遣る手紙であるから何でもない事で、その文句の中に、誠に穏かならぬ御時節柄で心配の事だ、どうか明君賢相が出て来て何とか始末をしなければならぬ云々と書てあった。ソコで幕府の役人がこの手紙を見て、何々、天下が騒々敷い、ドウカ明君が出て始末を付けて貰うようにしたいと云えば、是れは公方様を蔑ろにしたものだ、即ち公方様を無きものにして明君を欲すると云う所謂謀反人だと云う説になって、直ぐに脇屋を幕府の城中で捕縛して仕舞た。丁度私が城中の外務省に出て居た日で、大変だ、今脇屋が捕縛されたと云う中に、縛られては居ないが同心を見たような者が付て脇屋が廊下を通て行た。何れも皆驚いて、神奈川の組頭が捕まえられたと云うは何

事だと云て、その翌日になって聞た所が、今の手紙の一件で斯う〳〵云う嫌疑だそうだと云う。夫れから脇屋を捕まえると同時に家捜しをして、そうしてその儘当人は伝馬町に入牢を申付けられ、何かタワイもない吟味の末、牢中で切腹を申付られた。その時に検視に行た高松彦三郎と云う人は御小人目付で私の知人だ。伝馬町へ検視には行たが誠に気の毒であったと、後で彦三郎が私に話しました。ソコで私も脇屋卯三郎がいよ〳〵殺されたと云うことを聞て酷く恐れた、その恐れたと云うのは外ではない、明君云々と云た丈けの話で彼が伝馬町の牢に入れられて殺されて仕舞た、爾うすると私の書記して置たものは外交の機密に係る恐ろしいものである、若しこれが分りでもすれば直ぐに牢に打込まれて首を斬られて仕舞うに違いないと斯う思たから、その時は私は鉄砲洲に居たが、早々その書付を焼て仕舞たけれども、何分気になって堪らぬと云うのは、私がその書付の写しか何かを親類の者に遣たことがある、夫れから又肥後の細川藩の人にソレを貸したことがある、貸したその時にアレを写しはしなかったろうかと如何も気になって堪らない、と云て今頃からソレを荒立てゝ聞きに遣れば又その手紙が邪魔になる、既に原本は焼て仕舞たがその写しなどが出て呉れなければ宜いが、出て来られた日には大変な事になると思て誠に気懸りであった。所が幸に何事もなく王政維新になったので、大きに安堵して、今では颯々とそんな事を人に話したりこの通りに速記することも出来るようになったけれども、幕府の末年には決して爾うでない、自分から作た災で、文久三年亥歳から明治元年まで五、六年の間と云うものは、時の政府に対して恰も首の負債を背負ながら、他人に言わ

れず家内にも語らず、自分で自分の身を窘めて居たのは随分悪い心持でした。脇屋の罪に較べて五十歩百歩でない、外交機密を漏した奴の方が余程の重罪なるに、その罪の重い方は旨く免かれて、何でもない親類に文通した者は首を取られたこそ気の毒ではないか、無惨ではないか。人間の幸不幸は何処に在るか分らない、所謂因縁でしょう。この一事でも王政維新は私の身の為めに難有い。夫れは扨置き、今日でも彼の書たものを見れば、文久三年の事情はよく分て、外交歴史の材料にもなり、頗る面白いものであるが、何分にも首には易えられず焼て仕舞たが、若しも今の世の中に誰か持て居る人があるなら見たいものと思います。

下ノ関の攘夷夫れから世の中はもう引続いて攘夷論ばかり、長州の下ノ関では只和蘭船を撃つばかりでなく、その後亜米利加の軍艦にも発砲すれば、英吉利の軍艦にも発砲すると云うような訳けで、到頭その尻と云うものは英仏蘭米四ヶ国から幕府に捩込んで、三百万円の償金を出せと云うことになって、捫着の末、遂にその償金を払うことになった。けれども国内の攘夷論はなか〳〵収まりが付かないで、到頭仕舞には鎖国攘夷と云うことを云わずに新に鎖港と云う名を案じ出して、ソレで幕府から態々池田播磨守と云う外国奉行を使節として仏蘭西まで鎖港の談判に遣わすと云うような騒ぎで、一切滅茶苦茶、暗殺は殆んど毎日の如く、実に恐ろしい世の中になって仕舞た。爾う云う時勢であるから、私は唯一身を慎んでドウでもして災を※れさえすれば宜いと云うことに心掛けて居ました。

剣術の全盛兎に角に癸亥の前後と云うものは、世の中は唯無闇に武張るばかり。その武張ると

云うのも自から由来がある。徳川政府は行政外交の局に当て居るから拠ろなく開港説――開国論を云わなければならぬ、又行わなければならぬ、けれどもその幕臣全体の有様はドウだと云うと、ソリャ鎖国家の巣窟と云ても宜い有様で、四面八方ドッチを見ても洋学者などの頭を擡げる時代でない。当時少しく世間に向くような人間は悉く長大小を横える。夫れから江戸市中の剣術家は幕府に召出されて巾を利かせて、剣術大流行の世の中になると、その風は八方に伝染して坊主までも体度を改めて来た。元来その坊主と云うものは城内に出仕して大名旗本の給仕役を勤める所謂茶道坊主であるから、平生は短い脇差を挟して大名に貰た縮緬の羽織を着てチョコ〳〵歩くと云うのが是れが坊主の本分であるのに、世間が武張るとこの茶道坊主までが妙な風になって、長い脇差を挟して坊主頭を振り立てゝ居る奴がある。又当時流行の羽織はどうだと云うと、御家人旗本の間には黄平の羽織に漆紋、それは昔し〳〵家康公が関ヶ原合戦の時に着て夫れから水戸の老公が始終ソレを召して居たとかと云うような云伝えで、ソレが武家社会一面の大流行。ソレカラ江戸市中七夕の飾りには、笹に短冊を付けて西瓜の切とか瓜の張子とか団扇とか云うものを吊すのが江戸の風である。所が武道一偏、攘夷の世の中であるから、張子の太刀とか兜とか云うようなものを吊すようになって、全体の人気がすっかり昔の武士風になって仕舞た。迚も是れでは寄付きようがない。

刀剣を売払うソコで私は只独りの身を慎むと同時に、是れはドウしたって刀は要らない、馬鹿々々しい、刀は売て仕舞えと決断して、私の処にはそんなに大小などは大層もありはしないが、

ソレでも五本や十本はあったと思う、神明前の田中重兵衛と云う刀屋を呼で、悉く売払て仕舞た。けれどもその時分はマダ双刀を挟さなければならぬ時であるから、私の父の挟して居た小刀、即ち※着るとき挟す脇差の鞘を少し長くして刀に仕立て、夫れから神明前の金物屋で小刀を買て短刀作りに拵えて、唯印し丈けの脇差に挟すことにして、アトは残らず売払て、その代金は何でも二度に六、七十両請取たことは今でも覚えて居る。即ち家に伝わる長い脇差の刀に化けたのが一本、小刀で拵えた短い脇差が一本、それ切で外には何もない。そうして小さくなって居るばかり。私は少年の時から大阪の緒方の塾に居るときも、戯に居合を抜て、随分好きであったけれども、世の中に武芸の話が流行すると同時に、居合刀はすっかり奥に仕舞い込んで、刀なんぞは生れてから挟すばかりで抜たこともなければ抜く法も知らぬと云うような風をして、唯用心に用心して夜分は決して外に出ず、凡そ文久年間から明治五、六年まで十三、四年の間と云うものは、夜分外出したことはない。その間の仕事は何だと云うと、唯著書飜訳にのみ屈託して歳月を送て居ました。

再度米国行

夫から慶応三年になって又私は亜米利加に行た。是れで三度目の外国行。慶応三年の正月二十三日に横浜を出帆して、今度の亜米利加行に就ても亦なか〳〵話がある。と云うのは、先年

亜米利加の公使ロペルト・エーチ・プラインと云う人が来て居て、その時に幕府で軍艦を拵えなければならぬと云うことで、亜米利加の公使にその買入方を頼んで、数度に渡したその金高は八十万弗、そうして追々にその軍艦が出来て来る筈。ソレで文久三、四年の頃、富士山と云う船が一艘出来て来て、その価は四十万弗。所がその後幕府はなか〳〵な混雑、又亜米利加にも南北戦争と云う内乱が起たと云うような訳で、その後一向便りもない。何しろ金は八十万弗渡したその中で、四十万弗の船が来た丈けでその後は何も来ない。左りとは埒が明かぬから、アトの軍艦は此方から行て請取ろう。その序に鉄砲も買て来ようと云うような事で、そのとき派遣の委員長に命ぜられたのは小野友五郎、この人は御勘定吟味役と云う役目で御勘定奉行の次席、なか〳〵時の政府に於ては権力もあり地位も高い役人である。その人が委員長を命ぜられて、その副長には松本寿太夫と云う人が命ぜられたと云うことは、その前年の冬に定まった。夫れから私もモウ一度行て見たいものだと思て、小野の家に度々行て頼んだ。何卒一緒に連れて行て呉れないかと云た所が、連れて行こうと云うことになって、私は小野に随従して行くことになりました。その外同行の人は、船を請取るのですから海軍の人も両人ばかり、又通弁の人も行きました。

太平海の郵便汽船始めて通ずこの時には亜米利加と日本との間に太平海の郵便船が始めて開通したその歳で、第一着に日本に来たのがコロラドと云う船で、その船に乗込む。前年亜米利加に行た時には小さな船で海上三十七日も掛たと云うのが、今度のコロラドは四千噸の飛脚船、

船中の一切万事、実に極楽世界で、廿二日目に桑港に着た。着たけれども今とは違てその時分はマダ鉄道のないときで、パナマに廻らなければならぬから、桑港に二週間ばかり逗留して、其処で太平洋汽船会社の別の船に乗替えてパナマに行て、蒸気車に乗てあの地峡を踰えて、向側に出て又船に乗て、丁度三月十九日に紐育に着き、華聖頓に落付て、取敢ず亜米利加の国務卿に遇うて例の金の話を始めた。その時の始末でも幕府の模様が能く分る。此方を出立する時から、先方の談判には八十万弗渡したと云う請取がなければならぬと云うことは能く分て居る。所がどうも丸で一寸とした紙切に十万とか五万とか書てあるものが何でも十枚もある、その中には而かも三角の紙切に僅に何万弗請取りと記して唯プラインと云う名ばかり書てあるのが何枚もある。何の為めにどうして請取たと云う約定もなければ何にもない。只金を請取たと云う丈けの印ばかりである。代言流義に行けば誠に薄弱な殆んど無証拠と云ても宜い位。ソコでその事に就ては出発前に随分議論しました。却て是れが宜しい、此方では一切万事、亜米利加の公使と云うものを信じ抜て、イヤ亜米利加の公使を信じたのではない、日本の政府が亜米利加の政府を信じたのだ、書付も要らなければ条約も要らない、只口で請取たら請取たと云うた丈けで沢山だ、是れは只覚書に数を記した丈けの事、固よりこんな物は証拠にしないと云う風に出ようと相談を極めて、彼方へ行てからその話に及ぶと、直ぐに前の公使プラインが出て来た。出て来て何とも云わない、ドウですか船を渡すなり金を渡すなりドウでも宜いと、文句なしに立派に出掛けて来た。

吾妻艦を買う先ず是れで安心であるとした所で、此方では軍艦一艘欲しい。夫れから諸方の軍艦を見て廻て、是れが宜かろうと云て、ストーンウオールと云う船、ソレが日本に来て東艦となりましたろう、この甲鉄艦を買うことにして、その外小銃何百挺か何千挺か買入れたけれども、ソレでもマダ金が彼方に七、八万弗残て居る。是れは亜米利加の政府に預けて置て、その船を廻航するに付て、私共は先に帰たが、海軍省から行た人はアトに残て、そうして亜米利加の船長を一人雇うて此方に廻航することになって、夫れで事が済んだ。丁度船の日本に着たのは王政維新の明治政府になってから、即ち明治元年であるが、その事に就て当時会計を司って居た由利公正さんに遇て後に聞た所が、ドウもあの時金を払うには誠に困た、明治政府には金がない。如何やら斯うやらヤット何十万弗拵えて払たと云う話を私が聞て、ソレは大間違いだ、マダ幾らか金が余て彼方に預けてある筈だと云うたら、爾うかと云って、由利は大造驚いて居ました。何処にドウなったか、二重に金を払たことがある。亜米利加人が取る訳けはない、何処かに舞込んで仕舞たに違いない。

幕府人の無法を厭う、安いドルラルそれは扨置き、私の一身に就てその時甚だ穏かならぬ事があった、と云うのは私は幕府の用をして居るけれども、如何なこと幕府を佐けなければならぬとか云うような事を考えたことがない。私の主義にすれば第一鎖国が嫌い、古風の門閥無理圧制が大嫌いで、何でもこの主義に背く者は皆敵のように思うから、此方が思う通りに、先方の鎖国家古風家も亦洋学者を外道のように悪むだろう。所で私が幕府の様子を見るに、全く古風

のそのまゝで、少しも開国主義と思われない、自由主義と見えない。例えば年来、政府の御用達は三井八郎右衛門で、政府の用を聞くのみならず、役人等の私用をも周旋するの慣行でした。ソコで今度の米国行に付ても、役人が幕府から手当の金を一歩銀で請取れば、亜米利加に行くときには之を洋銀の弗に替えなければならぬ。然るにその時は弗相場の毎日変化する最中で、両替が甚だ面倒である。スルト一行中の或る役人が三井の手代を横浜の旅宿に呼出し、色々弗の相場を聞糺して扨云うよう、「成程昨今の弗は安くない、併し三井にはズットその前安い時に買入れた弗もあるだろう、拙者のこの一歩銀はその安い弗と両替して貰いたいと云うと、三井の手代は平伏して、畏りました、お安い弗と両替いたしましょうと云て、幾らか割合を安くして弗を持て来た。私は傍に居てこの様子を見て居て「ドウモ無鉄砲な事を言う奴だ、金の両替をするに、安いときに買入れた金と云て、ドウ云う印があるか、安いも高いもその日の相場に定まったものを、夫れを相場外れにせよと云いながら、愧る気色もなく平気な顔をして居るのみならず、その人の平生も賤しからぬ立派な士君子であるとは驚いた。又三井の手代も算盤を知るまいことか、チャント知て居ながら平気で損をして何とも云わぬ。畢竟人の罪でない、時の気風の然らしむる所、腐敗の極度だ、こんな政府の立行こう筈はないと思たことがある。御国益論に抵抗す夫れから私共が亜米利加に行た所で、その時に日本は国事多端の折柄、徳川政府の方針に万事倹約は勿論、仮令い政府であろうとも利益あることには着手せねばならぬと云うので、その掛の役人を命じて御国益掛と云うものが出来た。種々様々な新工夫の新策を奉

る者があれば、ソレを政府に採用していろ〳〵な工夫をする。例えば江戸市中の何処の所に掘割をして通船の運上を取るが宜しいと云う者もあり、又或は新川に這入る酒に税を課したら宜かろうとか、何処の原野の開墾を引受けてソレで幾らかの運上を納めようと云う者もあり、又或る時江戸市中の下肥を一手に任せてその利益を政府に占めようではないかと云う説が起た。スルト或る洋学者が大に気※を吐て、政府が差配人を無視して下肥の利を専らにせんとは、是れは所謂圧制政府である、昔し〳〵亜米利加国民はその本国英の政府より輸入の茶に課税したるを憤り、貴婦人達は一切茶を喫ずして茶話会の楽しみをも廃したと云うことを聞た、左れば吾々もこの度は米国人の顰に倣い、一切上※を廃して政府を困らして遣ろうではないか、この発案の可否如何とて、一座大笑を催したことがある。政府の事情が凡そ斯う云う風であるから、今度の一行中にも例の御国益掛の人が居て、その人の腹案に、今後日本にも次第に洋学が開けて原書の価は次第に高くなるに違いない、依て今この原書を買て持て帰て売たら何分かの御国益になろうと云うので、私にその買入方を内命したから、私が容易に承知しない。「原書買入は甚だ宜しい。日本には原書が払底であるから一冊でも余計に輸入したいと思う所に、幸なる哉、今度米国に来て官金を以て沢山に買入れ、日本に持て帰て原価でドシ〳〵売て遣ろう、左様なれば誠に難有い。如何ようにも勉強して、安いもの適当なものを買入れよう。この儀は如何で御座ると尋れば、「イヤ左様でない、自から御国益にする積りだと云う。「左すれば政府は商売をするのだ。私は商売の宰取りをする為めに来たのではない、けれども政府が既に商

売をすると切て出れば、私も商人になりましょう。左る代りにコンミツション（手数料）を思うさま取るがドウだ。何れでも宜しい、政府が買た儘の価で売て呉れると云えば、私はどんなにでも骨を折て、本を吟味して値切り値切て安く買うて売て遣るようにするが、政府が儲けると云えば、政府にばかり儲けさせない、私も一緒に儲ける。サア爰が官商分れ目だ。如何で御座ると捩り込んで、大変喧しい事になって、大に重役の歓心を失うて仕舞たが、今日より考えれば事の是非に拘わらず、随行の身分にして甚だ宜くない事だと思います。

幕府を倒せ夫れから又斯う云う事がある。同行の尺振八などゝ飲みながら壮語快談、ソリャもう官費の酒だから、船中の事で安くはないが何に構うものか、ドシ〳〵飲み次第喰い次第で、颯々と酒を注文して部屋に取て飲む。サアそれからいろ〳〵な事を語出して、「ドウしたってこの幕府と云うものは潰さなくてはならぬ。抑も今の幕政の様を見ろ。政府の御用と云えば、何品を買うにも御用だ。酒や魚を買うにも自分で勝手な値を付けて買て居るではないか、上総房州から船が這入ると、幕府の御用だと云て一番先にその魚を只持て行くようなことをして居る。ソレも将軍様が喰うならばマア宜いとするが、爾うではない、料理人とか云うような奴が只取て来て、その魚を又売て居るではないか。この一事推して他を知るべし、実に鼻持のならぬ政府だ。ソレも宜いとして置て、この攘夷はドウだ。自分がその局に当て居るから拠ろなく渋々開国論を唱えて居ながら、その実を叩いて見ると攘夷論の張本だ。彼の品川の海鼠台場、マダあれでも足りないと云て拵え掛けて居るではないか。夫れから又勝麟太郎が兵庫に行て、

七輪見たような丸い白い台場を築くなんて何だ。攘夷の用意をするのではないか。そんな政府なら叩き潰して仕舞うが宜いじゃないかと云うと、尺振八が、爾うだ、その通りに違いない。けれども斯うして船に乗て亜米利加に往来するのも、幕府から入用を出して居ればこそだ。御同前に喰て居るものも着て居るものも幕府の物ではないか。夫れを衣食して居ながら、ソレを潰すと云うのは何だか少し気に済まないようではないか。「それは構わぬ。御同前に此身等が政府の御用をすると云うのは、何も人物がエライと云て用いられて居るのではない、是れは横文字を知て居るからと云うに過ぎない。

穢多に革細工之を喩えば革細工だから穢多にさせると云うと同じ事で、マア御同前は雪駄直しを見たような者だ。幕府の殿様方は汚い事が出来ない、幸い此処に革細工をする奴が居るからソレにさせろと云うので、デイ〳〵が大きな屋敷の御出入になったのと少しも変ったことはない。ソレに遠慮会釈も糸瓜も要るものか、颯々と打毀して遣れ。只此処で困るのは、誰が之を打毀すか、ソレに当惑して居る。乃公等は自分でその先棒になろうとは思わぬ。誰が之を打毀すか、之が大問題である。今の世間を見るに、之を毀そうと云て騒いで居るのは所謂浮浪の徒、即ち長州とか薩州とか云う攘夷藩の浪人共であるが、若しも彼の浪人共が天下を自由にするようになったら、ソレこそ徳川政府の攘夷に上塗りをする奴じゃないか。ソレよりもマダ今の幕府の方が勝しだ。けれども如何したって幕府は早晩倒さなければならぬ、唯差当り倒す人間がないから仕方なしに見て居るのだ。困た話ではないかなどゝ、且つ飲み且つ語り、部屋の中と

は云いながら、人の出入りを止めるでもなし、傍若無人、大きな声でドシ〳〵論じて居たのだから、爾う云うような話もチラホラ重役の耳に聞えたことがあるに違いない。謹慎を命ぜらるサア夫れから江戸に帰た所が、前にも云う通り私は幕府の外務省に出て飜訳をして居たのであるが、外国奉行から咎められた。ドウも貴様は亜米利加行の御用中不都合があるから引込んで謹慎せよと云う。勿論幕府の引込めと云うのは誠に楽なもので、外に出るのは一向構わぬ。只役所に出さえしなければ宜しいのであるから、一身の為めには何ともない。却て暇になって難有い位のことだから、命令の通り直ぐ引込んで、その時に西洋旅案内と云う本を書て居ました。

福澤の実兄薩州に在り亜米利加から帰て日本に着たのはその歳の六月下旬、天下の形勢は次第に切迫してなか〳〵喧しい。私は唯家に引籠て生徒に教えたり著書飜訳したりして何も騒ぎはしないが、世間ではいろ〳〵な評判をして居る。段々聞くと、福澤の実兄は鹿児島に行て居るとか何とか云う途方もない評判をして居る。兄が薩藩に与みして居るから弟も変だと云うのは、私が動もすれば幕府の攘夷論を冷評して、こんな政府は潰すが宜い杯云うから、自からそんな評判も立つのであろうが、何は扨置き十余年前にこの世を去た兄が鹿児島に居る訳けもなし、俗世界の流言として聊か弁解もせず、又幕府に対しても所謂有志者中には種々様々の奇策妙案を建言する者が多い様子なれども、私は一切関係せず、唯独り世の中を眺めて居る中に、段々時勢が切迫して来て、或日中嶋三郎助と云う人が私の処に来て、ドウして引込んで居るか。

「斯う〳〵云う次第で引込で居る。「ソリャアどうも飛んだ事だ、この忙しい世の中にお前達が引込で居ると云うことがあるか、直ぐ出ろ。「出ろッたって出さぬものを出られないじゃないか。「宜しい、拙者がすぐに出して遣ると云て、夫れからその時に稲葉美濃守と云う老中があって、ソコへ中嶋が行て、福澤を引込まして置かないで出すようにしたら宜かろうと云うような事になって、夫れから再び出ることになった。その美濃守と云うのは旧淀藩士で、今日は箱根塔沢に隠居して居るあの老爺さんのことで、中嶋三郎助は旧浦賀の与力、箱館の戦争に父子共に討死した立派な武士で、その碑は今浦賀の公園に立てある。

長官に対して不従順全体今度の亜米利加行に就て斯く私が擯斥されたと云うのは、何か私が独り宜いようにあるけれども、実を申せば左様でない、と云うのは元と私は亜米利加に行きたい〳〵と云て小野友五郎に頼み、同人の信用を得て随行員となった一人であれば、一切万事長者の命令に従いその思う通りの事をしなければ済まない訳けだ。所が実際は爾うでなく、始終逆らうような事をするのみか、明に命令に背いたこともある。例えば彼の在留中、小野も立腹したと見え、私に向て、最早や御用も済みたれればお前は今から先きに帰国するが宜しいと云うと、私が不服だ。「此処まで連れて来て散々御用を勤めさせて、用が少なくなったからと云て途中で帰れと云う権力は長官にもなかろう。私は日本を出るとき閣老にお暇乞をして出て来た者である、早く云えば御老中から云付けられて来たのだ。お前さんが帰れと云ても私は帰らないとリキンダのは、私の方が無法であろう。又或日食事の時に私が何か話の序に、全体今の幕府

の気が知れない、攘夷鎖港とは何の趣意だ、之が為めに品川の台場の増築とは何の戯れだ、その台場を築いた者はこのテーブルの中にも居るではないか、こんな事で日本国が保てると思うか、日本は大切な国だぞなどゝ、公衆の前で公言したような事は、私の方こそ気違いの沙汰である。成程小野は頑固な人に違いない、けれども私の不従順と云うことも十分であるから、始終嫌われたのは尤も至極、少しも怨む所はない。

王政維新

その歳も段々迫て、とう〳〵慶応三年の暮になって、世の中が物騒になって来たから、生徒も自然にその影響を蒙らなければならぬ。国に帰るもあれば方々に行くもあると云うような訳けで、学生は次第々々に少くなると同時に、今まで私の住で居た鉄砲洲の奥平の邸は、外国人の居留地になるので幕府から上地を命ぜられ、既に居留地になれば私も其処に居られなくなる。ソコで慶応三年十二月の押詰めに、新銭座の有馬と云う大名の中屋敷を買受けて、引移るや否や鉄砲洲は居留地になり、明くれば慶応四年、即ち明治元年の正月早々、伏見の戦争が始まって、将軍慶喜公は江戸へ逃げて帰り、サアそこで又大きな騒ぎになって仕舞た。即ち是れが王政維新の始まり、その時に私は少しも政治上に関係しない。抑も王政維新が政治の始まりであるから、話が少し前に戻って長くなりますけれども、一通り私が少年のときからの話をし

て、政治に関係しない顛末を明にしなければならぬ。

維新の際に一身の進退素と私は小士族の家に生れ、その頃は封建時代の事で日本国中何れも同様、藩の制度は守旧一偏の有様で、藩士銘々の分限がチャント定まって、上士は上士、下士は下士と、箱に入れたようにして、その間に少しも融通があられない。ソコで上士族の家に生れた物は親も上士族であれば子も上士族、百年経てもその分限は変らない。従て小士族の家に生れた者は、自から上流士族の者から常に軽蔑を受ける。人々の智愚賢不肖に拘わらず、上士は下士を目下に見下すと云う風が専ら行われて、私は少年の時からソレに就て如何にも不平で堪らない。

門閥の人を悪まずしてその悪習を悪む所がその不平の極は、人から侮辱されるその侮辱の事柄を悪み、遂には人を忘れて唯その事柄を見苦しきことゝ思い、門閥の故を以て漫に威張るは男子の愧ずべき事である、見苦しきことであると云う観念を生じ、例えば上士下士相対して上士が横風である、私は之を見てその上士の傲慢無礼を憤ると同時に、心の中では思直して、この馬鹿者めが、何も知らずに夢中に威張て居る、見苦しい奴だと却て気の毒に思うて、心中却て此方から軽蔑して居ました。私がその時老成人であるか又は仏者であったら、人道世教の為めに如何とか、又は平等を愛して差別を排するとか何とか云う説もあろうが、十歳以上十九か二十歳の少年にそんな六かしい奥ゆかしい考のあるべき筈はない。唯人間の殻威張は見苦しいものだ、威張る奴は恥知らずの馬鹿だとばかり思て居たから、夫れゆえ藩中に居て人に軽蔑さ

れても侮辱されても、その立腹を他に移して他人を辱かしめると云うことはドウしても出来ない。例えば私が小士族の身分で上流に対しては小さくなって居なければならぬけれども、順を云えば又私より以下の者が幾らもあるから、その以下の者に向て自分が軽蔑された丈けソレ丈け軽蔑して遣れば、所謂江戸の敵を長崎で討て、勘定の立つようなものだが、ソレが出来ない。出来ない所ではない、その反対に私は下の方に向て大変丁寧にして居ました。

父母の遺伝是れは私独りの発明でない、私の父母共に爾う云う風があったと推察が出来ます。前にも云た通り、私の父は勿論漢学者で、身分は私と同じ事であるから、定めて上流士族から蔑視されて居たでしょう。所が私の父は決して他人を軽蔑しない。例えば江州水口の碩学中村栗園は父の実弟のように親しくして居ましたが、元来栗園の身分は豊前中津の染物屋の息子で、所謂素町人の子だから、藩中士族は誰も相手になるものがない、けれども私の父はその人物を愛して、身分の相違を問わず大層丁寧に取扱うて、大阪の倉屋敷の家に寄寓させて尚お種々に周旋して、とう〳〵水口の儒者になるように取持ち、その間柄と云うものは真に骨肉の兄弟にも劣らず、父の死後私の代になって、栗園先生は福澤の家を第二の実家のような塩梅にして、死ぬまで交際して居ました。シテ見ると是れは決して私の発明でない、父母から譲られた性質であると思う。ソレで私は中津に居て上流士族から蔑視されて居ながら、私の身分以下の藩士は勿論、町人百姓に向ても、仮初にも横風に構えてその人々を目下に見下して、威張るなどゝ云うことは一寸ともしたことがない。勿論上の者に向て威張りたくも威張ることが出来な

い、出来ないから唯モウ触らぬように相手にならぬようと、独り自から安心決定して居る。本藩に対して功名心なし既に心に決定して居れば、藩に居て功名心と云うものは更らにない、立身出世して高い身分になって錦を故郷に着て人を驚かすと云うような野心は少しもないのみか、私にはその錦が却て恥かしくて着ることが出来ない。グヅ／〃＼云えば唯この藩を出て仕舞う丈けの事だと云うのが若い時からの考えで、人にこそ云わね、私の心では眼中藩なしと斯う安心を極めて居ましたので、夫れから長崎に行き大阪に出て修業して居るその中に、藩の御用で江戸に呼ばれて藩中の子弟を教うると云うことをして居ながらも、藩の政庁に対しては誠に淡泊で、長い歳月の間只の一度も建白なんと云うことをしたことはない。能く世間にある事で、イヤどうも藩政を改革して洋学を盛にするが宜いとか、兵制を改革するが宜いとか云うことは書生の能く遣ることだ、けれども私に限り只の一度も云出したことがない。ソレと同時に自分の立身出世を藩に向て求めたことがない。ドウ云うように身分を取立てゝ貰いたい、ドウ云うようにして禄を増して貰いたいと云うような事は、陰にも陽にもどんな事があっても藩の長老に内願などしたことがない。ソコで江戸に参てからも、本藩の様子を見れば種々な事を試みて居る。兵制で申せば西洋流の操練を採用したことがある。けれども私はソレを宜いと云て誉めもしなければ悪いと云て止めたこともなし、又或は大に漢学を盛にすると云て頻りに学校の改革などを企てたこともある。或は兵制は甲州流が宜いと云て法螺の貝を吹て藩中で調練をしたこともある。ソレも私は只目前に見て居るばかりで、善いとも悪いとも一寸とも云たこと

がない。或時に家老の隠居があって、大層政治論の好きな人で、私が家老の家に行たらば、その隠居が、ドウも公武の間が甚だ穏かでない、全体どうも近衛様が爾うも有りそうもない事だとか、或は江戸の御老中が詰らないとか云うような慷慨談を頻りに云て居る。爾う云われると私も何か云いそうな事だ、所が私は決して云わない。如何にも爾うでしょう、ソリャ成程近衛様も爾うだろう、御老中も爾うだろうが、扨ソレが実地になると傍観者の思うようにはならぬもので、近くはこの奥平様の屋敷でも、マダして宜いこともあるだろう、為なくて宜いこともあるだろう、傍観者から之を見たらば嘸堪え難いことに思うでありましょうけれども、当局の御家老の身になって見れば又爾う思う通りに行かないもので、矢張り今の通りより外に仕様がない。余り人の事を批評しても詰らぬ事です。私は一体そんな事に就ては何を議論しようとも思わぬと云て、少しも相手にならなかった。

拝領の紋服をその日に売る爾う云う風に構えて、一切政治の事に就て口を出そうと思わない。思わないから奥平の邸で立身出世しようとも思わない。立身出世の野心がなければ人に依頼する必要もない。眼中人もなければ藩もなし、左ればとて藩の邪魔をしようとも思わず、唯屋敷の長屋を借りて安気に住居するばかり、誠に淡泊なもので、或時私が何かの事に就て御用があるから出て来いと云うから、上屋敷の御小納戸の処へ参た所が、之を貴様に下さると云て、奥平家の御紋の付て居る縮緬の羽織を呉れた。即ち御紋服拝領だ。左まで喜びもしなければ、品物が粗末だと云て苦情も云わず、只難有うございますと云て拝領して、その帰りに屋敷内

に国から来て居る亡兄の朋友菅沼孫右衛門と云う人の勤番長屋に何か用があって寄た所が、其処に出入りの呉服屋か知らん古着屋か知らん呉服商人が来て何か話をして居る。ソレを聞て居ると羽織を拵えると云うような様子。夫れから私が、アヽ孫右衛門さん、羽織をお拵えか。「左様さ。「爾うか、羽織には宜い縮緬の売物があるが買いなさらんか。「爾うかソリャ幸いだが、紋所は。「紋所は御紋付だから誰にでも着られる羽織だがドウだ。「ソリャ宜い、爾う云う売物があるなら兎も角も見たいものだ。「買うと云いなされば此処に持て居るこの羽織だがドウだ。「成程御紋付だから差支ない、買おう。就ては此処に呉服屋が来て居るが、価はドウだ。「値は呉服屋に付けて貰えば宜いと云て、夫れからどの位の価かと云たら、単羽織の事だから一両三分だと云う。スグ相談が出来て、その羽織を売て一両三分の金を持て、私は鉄砲洲の中屋敷に帰たことがあると云うような次第で、全体藩の一般の習慣にすれば、拝領の御紋服と云うものはその拝領した年月を系図にまで認めて家の名誉にすると云う位のものなれども、私はその御紋服の羽織を着ても着なくても何ともない。夫れよりか金の方が宜い。一両三分あれば昨日見た彼の原書も買われる、原書を買わなければ酒を飲むと云うような、至極無邪気な事であった。

主従の間も売言葉に買言葉爾う云う風であるから藩に対して甚だ淡白、淡白と云えば言葉が宜いけれども、同藩士族の眼から見れば不親切な薄情な奴と見えるも道理で、藩中の若い者等が酒席などで毎度議論を吹掛ることがあるその時に、私は答えて「不親切薄情と云うけれども、

私は何も奥平様に向て悪い事をしたことはない、一寸とでも藩政の邪魔をしたことはない、只命令の儘に堅く守て居るのだ。この上に親切と云てドウ云うことをするのか。私は厚かましい事は出来ない、之を不親切と云えば仕方がない。今も申す通り私は藩に向て悪い事をしないのみか、一寸とでも求めたことがなかろう、或は身分を取立て呉れろ、禄を増して呉れろと云うような事は、蔭にも日向にも一言でも云たことがあるか。その言葉を聞た人がこの藩中に在るかドウか、御家老以下の役人に聞て見るが宜い。厚かましく親切を尽して、厚かましく泣付くと云うことは、自分の性質に於て出来ない。是れで悪いと云うならば追出すより外に仕方はあるまい。追出せば謹んで命を奉じて出て行く丈けの話だ。凡そ人間の交際は売言葉に買言葉で、藩の方から数代御奉公を仰付けられて難有い仕合せであろうと酷く恩に被せれば、失敬ながら此方にも言葉がある、数代家来になって正直に勤めたぞ、そんなに恩に被せなくても宜かろうと云わねばならぬ。之に反して藩の方から手前達のような家来が数代神妙に奉公して呉れたからこの藩も行立つと斯う云えば、此方も亦言葉を改め、数代御恩を蒙て難有い仕合せに存じ奉ります、累代の間には役に立たぬ小供もありました、病人もありました、ソレにも拘わらず下さる丈けの家禄はチャンと下さって家族一同安楽に生活しました、主恩海より深し山より高しと、此方も小さくなってお礼を申上げる。是れが即ち売言葉に買言葉だ。ソレ丈けの事は私も能く知て居る。爾う無闇に恩に被せる事ばかり云て、只漠然と不親切と云うような事を云て貰いたくないと云うような調子で、始終問答をして居ました。

長州征伐に学生の帰藩を留める夫れから長州藩が穏かでない。朝敵と銘が付て、ソコで将軍御親発となり、又幕府から九州の諸大名にも長州に向て兵を出せと云う命令が下て、豊前中津藩からも兵を出す。就ては江戸に留学して居る学生、小幡篤次郎を始め十人も居ました、ソレを出兵の御用だから帰れと云て呼還しに来たその時にも、私は不承知だ。この若い者が戦争に出るとは誠に危ない話で、流丸に中ても死んで仕舞わなければならぬ、こんな分らない戦争に鉄砲を担がせると云うならば、領分中の百姓に担がせても同じ事だ、この大事な留学生に帰て鉄砲を担げなんて、ソンな不似合な事をするには及ばぬ、仮令い弾丸に中らないでも、足に踏抜きしても損だ、構うことはない病気と云て断て仕舞え、一人も還さない、ソレが罷り間違えば藩から放逐丈けの話だ、長州征伐と云う事の理非曲直はどうでも宜しい、兎に角に学者書生の関係すべき事でないから決して帰らせないと頑張た所が、藩の方でも因循であったのか、強いて呼返すと云うこともせずに、その罪は中津に居る父兄の身に降り来て、その方共の子弟が命に背いて帰藩せぬのは平生の教訓宜しからざるに由る云々の文句で、何でも五十日か六十日の閉門を申付けられたことがある。凡そ私の心事はこんな風で、藩に仕えて藩政を如何しようとも思わず、立身出世して威張ろうとも思わず、世間で云う功名心は腹の底から洗たように何にもなかった。

幕府にも感服せず藩に対しての身の成行、心の置どころは右の通りで、扨江戸に来て居る中に幕府に雇われて、後にはいよ〳〵幕府の家来になって仕舞えと云うので、高百五十俵、正味百

俵ばかりの米を貰て一寸と旗本のような者になって居たことがある。けれども是れ亦、藩に居るときと同様、幕臣になって功名手柄をしようと云うような野心はないから、随て自分の身分が何であろうとも気に留めたことがない。一寸とした事だが可笑しい話があるその次第は、江戸で御家人の事を旦那と云い、旗本の事を殿様と云うのが一般の慣例である、所が私が旗本になったけれども、固より自分で殿様なんて馬鹿気たことを考える訳けもなければ、家内の者もその通りで、平生と少しも変た事はない。爾うすると或日知己の幕人たしか福地源一郎であったかと覚ゆが玄関に来て殿様はお内か。「イーエそんな者は居ません。「お内においでなさらぬか、殿様は御不在か。「そんな人は居ませんと、取次の下女と頻に問答して居る様子、狭い家だからスグ私が聞付けて、玄関に出てその客を座敷に通したことがあるが、成るほど殿様と云て下女に分る訳けはない、私の家の中で云う者もなければ聞た者もない言葉だから。洋行船中の談話夫れでも私に全く政治思想のないではない。例えば文久二年欧行の船中で松木弘安と箕作秋坪と私と三人、色々日本の時勢論を論じて、その時私が「ドウだ迚も幕府の一手持は六かしい、先ず諸大名を集めて独逸聯邦のようにしては如何と云うに、松木も箕作も、マアそんな事が穏かだろうと云う。夫れから段々身の上話に及んで、今日吾々共の思う通りを云えば、正米を年に二百俵貰うて親玉（将軍の事）の御師匠番になって、思う様に文明開国の説を吹込んで大変革をさして見たいと云うと、松木が手を拍て、左様だ〳〵、是れは遣て見たいと云たのは、松木の功名心もその時には二百俵の米を貰うて将軍に文明説を吹込むぐらい

の事で、当時の洋学者の考は大抵皆大同小異、一身の為めに大きな事は考えない。後にその松木が寺島宗則となって、参議とか外務卿とか云う実際の国事に当たのは、実は本人の柄に於て商売違いであったと思います。

夫れは扨置き世の中の形勢を見れば、天下の浮浪即ち有志者は京都に集て居る。夫れから江戸の方では又幕府と云うものが勿論時の政府でリキンで居ると云う訳けで、日本の政治が東西二派に相分れて、勤王佐幕と云う二派の名が出来た。出来た所で、サア其処に至て私が如何するかと云うに、

第一、私は幕府の門閥圧制、鎖国士族が極々嫌いで之に力を尽す気はない。

第二、左ればとて彼の勤王家と云う一類を見れば、幕府より尚お一層甚だしい攘夷論で、こんな乱暴者を助ける気は固よりない。

第三、東西二派の理非曲直は姑く扨置き、男子が所謂宿昔青雲の志を達するは乱世に在り、勤王でも佐幕でも試みに当て砕けると云うが書生の事であるが、私にはその性質習慣がない。

今その次第を語りましょう。抑も私が始めて江戸に来た時からして幕府の人には感服しない。一寸と旗本御家人に出遇う所が、応接振りは上品で、田舎者と違い弁舌も好く行儀も立派であるが、何分にも外辺ばかりで、物事を微密に考える脳力もなければ又腕力も弱そうに見える、けれども先方は幕府の御直参、此方は又る影もない陪臣だから手の着けようもなく、旗本など

に対してはその人の居ない処でも何様々々と尊敬して居るその塩梅式は、京都の御公卿様を取扱うように、唯見た所ばかりを丁寧にして心の中では見縊り抜て居た。葵の紋の御威光所がその無脳力、無腕力と思う幕府人の剣幕は中々大造のものである。些細な事のようだが、当時最も癪に障るのは旅行の道中で、幕人の威張り方と云うものは迚も今時の人に想像は出来ない。私などは譜代大名の家来だから丸で人種違いの蛆虫同様、幕府の役人は勿論、凡そ葵の紋所の付て居る御三家と云い、夫れから徳川親藩の越前家と云うような大名か又はその家来が道中をして居る処に打付かろうものならソリャ堪らない。寒中朝寒い時に宿屋を出て、河を渡ろうと思て寒風の吹く処に立て一時間も船の来るのを待て居る、ヤツと船が着て、やれ嬉しやこの船に乗ろうと云う時に、不意と後ろから葵の紋の侍が来るとその者が先きへその船に乗て仕舞う、又アト一時間も待たなければならぬ。駕籠を舁ぐ人足でも無人のときには吾々は問屋場に行て頼んでヤツと出来た処に、アトから例の葵の紋が来ると、出来たその人足を横合から取られて仕舞う。如何なお心善でも腹を立てずには居られない。凡そ幕府の圧制殻張りは際限のない事ながら、私共が若い時に直接に侮辱軽蔑を受けたのは、道中の一事でも血気の熱心は自から禁ずることが出来ず、前後左右に深い考えもなく、唯癇癪の余りに、こんな悪政府は世界中にあるまいと腹の底から観念して居た。

幕府の攘夷主義幕政の殻威張りが癇癪に障ると云うのは、是れは此方の血気の熱心であるとして姑く差置き、扨この日本を開いて外国交際をドウするかと云うことになっては、如何も見て

居られない、と云うのは私は若い時から洋書を読で、夫れから亜米利加に行き、その次には欧羅巴に行き、又亜米利加に行て、只学問ばかりでなく実地を見聞して見れば、如何しても対外国是は斯う云うように仕向けなければならぬと、ボンヤリした処でも外国交際法と云うことに気の付くは当然の話であろう。ソコでその私の考から割出して、この徳川政府を見ると殆ど取所のない有様で、当時日本国中の輿論は都て攘夷で、諸藩残らず攘夷藩で徳川幕府ばかりが開国論のように見えもすれば聞えもするようでありますけれども、正味の精神を吟味すれば天下随一の攘夷藩、西洋嫌いは徳川であると云て間違いはあるまい。或は後年に至て大老井伊掃部頭は開国論を唱えた人であるとか開国主義であったとか云うような事を、世間で吹聴する人もあれば書に著わした者もあるが、開国主義なんて大嘘の皮、何が開国論なものか、存じ掛けもない話だ。井伊掃部頭と云う人は純粋無雑、申分のない参河武士だ。江戸の大城炎上のとき幼君を守護して紅葉山に立退き、周囲に枯草の繁りたるを見て非常の最中不用心なりとて、親から腰の一刀を抜てその草を切払い、手に幼君を擁して終夜家外に立詰めなりしと云う話がある。又この人が京都辺の攘夷論者を捕縛して刑に処したることはあれども、是れは攘夷論を悪む為めではない、浮浪の処士が横議して徳川政府の政権を犯すが故にその罪人を殺したのである。是等の事実を見ても、井伊大老は真実間違いもない徳川家の譜代、豪勇無二の忠臣ではあるが、開鎖の議論に至ては、真闇な攘実家と云うより外に評論はない。唯その徳川が開国であると云うのは、外国交際の衝に当て居るから余儀なく渋々開国論に従て居た丈けの

話で、一幕捲て正味の楽屋を見たらば大変な攘夷藩だ。こんな政府に私が同情を表することが出来ないと云うのも無理はなかろう。先ずその時の徳川政府の頑固な一例を申せば斯う云うことがある。私がチエーンバーの経済論を一冊持て居て、何か話の序に御勘定方の有力な人、即ち今で申せば大蔵省中の重要の職に居る人にその経済書の事を語ると、大造悦んで、ドウか目録だけでも宜いから是非見たいと所望するから、早速飜訳する中に、コンペチションと云う原語に出遭い、色々考えた末、競争と云う訳字を造り出して之に当箝め、前後二十条ばかりの目録を飜訳して之を見せた所が、その人が之を見て頻りに感心して居たようだが、「イヤ茲に争と云う字がある、ドウも是れが穏かでない、どんな事であるか。「どんな事ッて是れは何も珍らしいことはない、日本の商人のして居る通り、隣で物を安く売ると云えば此方の店ではソレよりも安くしよう、又甲の商人が品物を宜くすると云えば、乙はソレよりも一層宜くして客を呼ぼうと斯う云うので、又或る金貸が利息を下げれば、隣の金貸も割合を安くして店の繁昌を謀ると云うような事で、互に競い争うて、ソレで以てちゃんと物価も定まれば金利も極まる、之を名けて競争と云うので御座る。「成程、爾うか、西洋の流儀はキツイものだね。「何もキツイ事はない、ソレで都て商売世界の大本が定まるのである。「成程、爾う云えば分らないことはないが、何分ドウも争と云う文字が穏かならぬ。是れではドウモ御老中方へ御覧に入れることが出来ないと、妙な事を云うその様子を見るに、経済書中に人間互に相譲るとか云うような文字が見たいのであろう。例えば商売をしながらも忠君愛国、国家の為めには無代価でも売

るとか云うような意味が記してあったらば気に入るであろうが、夫れは出来ないから、「ドウも争と云う字が御差支ならば、外に飜訳の致しようもないから、丸で是れは削りましょうと云て、競争の文字を真黒に消して目録書を渡したことがある。この一事でも幕府全体の気風は推察が出来ましょう。夫れから又長州征伐のとき外国人は中々注意して居て、或時英人であったか米人であったか幕府に書翰を出し、長州の大名にドウ云う罪があって征伐するのだろうか、ソレを承りたいと云て来た。爾うするとその時の閣老役人達がいろ〳〵評議をしたと見え、長々と返辞を遣たその返辞の中に、開鎖論と云うことを頓と云わない。当りまえならば国を開いた今日、長州の大名は政府の命令を奉ぜずに外国人を敵視するとか、下ノ関で外国の船艦に発砲したからとか云いそうなものであるに、ソンな事は一言半句も云わないで、イヤどうも京都に暴れ込んだとか、或は勅命に戻り台命に背き、その罪南山の竹を尽すも数えがたしと云うような、漢学者流の文句をゴテ〳〵〝＼書て遣た。私はその返辞を見て、コリャどうも仕様がない、表面には開国を装うて居るも、幕府は真実自分も攘夷が為たくて堪らないのだ、迚もモウ手の着けようのない政府だと、実に愛想が尽きて同情を表する気がない。

然らば則ち之に取て代ろうと云う上方の勤王家はドウだと云うに、彼等が代たら却てお釣の出るような攘夷家だ。コリャ又幕府よりか一層悪い。勤王攘夷と佐幕攘夷と名こそ変れ、その実は双方共に純粋無雑な攘夷家でその攘夷に深浅厚薄の別はあるも、詰る所は双方共に尊攘の仕振りが善いとか悪いとか云うのが争論の点で、その争論喧嘩が遂に上方の攘夷家と関東の攘

夷家と鉄砲を打合うような事になるであろう。ドチラも頼むに足らず、その中にも上方の勤王家は、事実に於て人殺しもすれば放火もして居る、その目的を尋ねて見ると、仮令いこの国を焦土にしても飽くまで攘夷をしなければならぬと云う触込みで、一切万事一挙一動悉く攘夷ならざるはなし。然るに日本国中の人がワッとソレに応じて騒ぎ立て居るのであるから、何としても之に同情を表して仲間になるような事は出来られない。是れこそ実に国を滅す奴等だ、こんな不文不明な分らぬ乱暴人に国を渡せば亡国は限前に見える、情けない事だと云う考が始終胸に染込んで居たから、何としても上方の者に左袒する気にならぬ。その前後に緒方の隠居は江戸に居る。是れは故緒方洪庵先生の夫人で、私は阿母さんのようにして居る恩人である。或時に隠居が私と箕作を呼んで、ドウじゃい、お前さん方は幕府に雇われて勤めて居るけれども、馬鹿々々しい止しなさい、ソレよりか上方に行て御覧。ソリャどうもいろ〳〵な面白いことかあるぜ、と云う。段々聞て見ると村田造六即ち大村益次郎とか佐野栄寿（常民）とか云うような有志者が、皆緒方の家に出入をして居る。ソレを隠居さんが知て居て、私と箕作の事は自分の子のようにして居たものだから、江戸に居るな、上方に行けと勧めたのも無理はない。その時に私は、誠に難有うございます、大阪に行けば必ず面白い仕事がありましょうけれども、私はドウも首をもがれたッて攘夷のお供は出来ません、爾うじゃないかと、箕作と云て断わったことがありましたが、その位の訳けで、ドウしてもその上方勢に与みすることは出来なかった。

夫からモウ一つ私の身に就て云えば、少年の時から中津の藩を出て仕舞たので、所謂藩の役

人らしい公用を勤めたことがない。夫れから前にも云う通り、江戸に来て徳川の政府に雇われたからと云た所が、是れは云わば筆執る飜訳の職人で、政治に与かろう訳けもない。只職人の積りで居るのだから、政治の考と云うものは少しもない。自分でも仕ようとも思わなければ、又私は出来ようとも思わない。仮令い又私が奮発して、幕府なり上方なり何でも都合の宜い方に飛出すとした処が、人の下流に就て仕事をすることは固より出来ず、中津藩の小士族で他人に侮辱軽蔑されたその不平不愉快は骨に徹して忘れられないから、今更ら他人に屈してお辞儀をするのは禁物である。左れば大に立身して所謂政治界の大人とならんか、是れも甚だ面白くない。前にも申した通り私は儀式の箱に入れられて小さくなるのを嫌う通りに、その通りに儀式張て横風な顔をして人を目下に見下だすことも亦甚だ嫌いである。例えば私は少年の時から人を呼棄にしたことがない。車夫、馬丁、人足、小商人の如き下等社会の者は別にして、苟も話の出来る人間らしい人に対して無礼な言葉を用いたことはない。青年書生は勿論、家内の子供を取扱うにもその名を呼棄にすることは出来ない。左る代りに政治社会の歴々とか何とか云う人を見ても何ともない。夫れも白髪の老人とでも云えば老人相応に待遇はすれども、その人の官爵が高いなんて高慢な風をすれば唯可笑しいばかりで、話をするのも面白くない。是れは私が持て生れた性質か、又は書生流儀の習慣か、老年の今日に至るまでも同じ事で、之を要するに如何しても青雲の雲の上には向きの悪い男であるから、維新前後にも独り別物になって居たことゝ、自分で自分の事を推察して居ます。ソレはソレとして、

扨慶喜さんが京都から江戸に帰て来たと云うその時には、サア大変。朝野共に物論沸騰して、武家は勿論、長袖の学者も医者も坊主も皆政治論に忙しく、酔えるが如く狂するが如く、人が人の顔を見れば唯その話ばかりで、幕府の城内に規律もなければ礼儀もない。平生なれば大広間、溜の間、雁の間、柳の間なんて、大小名の居る処で中々喧ましいのが、丸で無住のお寺を見たようになって、ゴロ〳〵箕坐を掻て、怒鳴る者もあれば、ソット袂から小さいビンを出してブランデーを飲んでる者もあると云うような乱脈になり果てたけれども、私は時勢を見る必要がある、城中の外国方に飜訳抔の用はないけれども、見物半分に毎日のように城中に出て居ましたが、その政論流行の一例を云て見ると、或日加藤弘之と今一人、誰であったか名を覚えませぬが、二人が※着て出て来て外国方の役所に休息して居るから、私が其処へ行て、「イヤ加藤君、今日はお※何事に出て来たのかと云うと、「何事だッて、お逢いを願うと云うのは、此の時に慶喜さんが帰て来て城中に居るでしょう、ソコで色々な策士論客忠臣義士が躍気となって、上方の賊軍が出発したから何でも是れは富士川で防がなければならぬとか、イヤ爾うでない、箱根の嶮阻に拠て二子山の処で賊を鏖殺しにするが宜い、東照神君三百年の洪業は一朝にして棄つべからず、吾々臣子の分として義を知るの王臣となって生けるは恩を知るの忠臣となって死するに若かずなんて、種々様々の奇策妙案を献じ、悲憤慷慨の気焔を吐く者が多いから、云わずと知れた加藤等もその連中で、慶喜さんにお逢いを願う者に違いない。ソコデ私が、「今度の一件はドウなるだろう、いよ〳〵戦争になるか、ならないか、君達

には大抵分るだろうから、ドウぞ夫れを僕に知らして呉れ給え、是非聞きたいものだ。「ソレを聞いて何にするか。「何にするッて分てるではないか、是れがいよ〳〵戦争に極まれば僕は荷物を拵えて逸げなくてはならぬ、戦争にならぬと云えば落付て居る。その和戦如何はなか〳〵容易ならぬ大切な事であるから、ドウぞ知らして貰いたいと云うと、加藤は眼を丸くして、「ソンな気楽な事を云て居る時勢ではないぞ、馬鹿々々しい。「イヤ〳〵気楽な所ではない、僕は命掛けだ。君達は戦うとも和睦しようとも勝手にしなさい、僕は始まると即刻逃げて行くのだからと云たら、加藤がプリ〳〵怒て居たことがあります。

夫れから又或日に外国方の小役人が出て来て、時に福澤さんは家来は何人お召連れになるかと問うから、「家来とは何だと云うと、「イヤ事急なれば皆この城中に詰める方々にお賄を下さるので人数を調べて居る処です。「爾うかソレは誠に難有い、難有いが私は勿論家来もなければ主人もない。ドウぞ福澤のお賄だけはお止めにして下さい。弥々戦争が始まると云うのに、この城の中に来て悠々と弁当など喰て居られるものか、始まろうと云う気振りが見えれば何処かへ直ぐに逃出して行きます。先ず私のお賄は要らないものとして下さいと、笑て茶を呑んで居た。全体を云うと真実徳川の人に戦う気があれば、私がそんな放語漫言したのを許す訳はない、直ぐ一刀の下に首が夫くなる筈だけれども、是れが所謂幕末の形勢で、迚も本式に戦争などの出来る人気でなかった。

その前に慶喜さんが東帰して来たときに、政治上の改革とでも云うか種々様々な役人が出来

た。可笑しくて堪らない。新潟奉行に誰が命ぜられて、何処の代官に誰がなる。甚だしきに至ては逃去て来た後の兵庫奉行になった人さえあって、名義上の奉行だけは此方に出来て居る。夫れから又御目附になるもあれば、御使番になるものもある。何でも加藤弘之、津田真一（真道）なども御目附か御使番かになって居たと思う。私にも御使番になれと云う。奉書到来と云う儀式で、夜中差紙が来たが、真平御免だ、私は病気で御座ると云て取合わない。夫れから段々切迫して官軍（上方勢）が這入り込んで、ソロ〳〵鎮将府と云うようなものが江戸に出来て、慶喜さんは水戸の方に行くと斯うなったので、是れは慶応四年即ち明治元年春からの騒ぎで、その時に私は芝の新銭座に屋敷が買ってあったから引越さなければならぬ。その屋敷の地坪は四百坪、長屋が一棟に土蔵が一つある切りだから、生徒の為めに塾舎も拵えなければならず、又私の住居も拵えなければならぬ。扨その普請の一段になった所で、江戸市中大騒動の最中、却て都合が宜い。八百八町只の一軒でも普請をする家はない。ソレどころではない、荷物を搦げて田舎に引越すと云うような者ばかり、手廻しの宜い家では竈の銅壺まで外して仕舞て、自分は土竈を拵えて飯を焚て居る者もある。この最中に私が普請を始めた処が、大工や左官の悦びと云うものは一方ならぬ。安いにも〳〵、何でも飯が喰われさえすれば宜い、米の代さえあれば働くと云う訳けで、安い手間料で人手は幾らでもあるから、普請は颯々と出来る。その建物も新たに拵えるのではない。奥平屋敷の古長屋を貰て来て、凡そ百五十坪も普請したが、入費は僅か四百両ばかりで一切仕上げました。いよ〳〵普請の出来たのはその年（明治元年）

四月頃と覚ゆ。その時私の朋友などは態々止めに来て、「今頃普請をするものがあるか、何処でも家を毀わして立退くと云う時節に、君独り普請をしてドウする積りだと云うから、私は答えて、「ソリャ爾うでない、今僕が新に普請するから可笑しいように見えるけれども、去年普請をして置たらドウする。いよ〳〵戦争になって逃げる時にその家を担いで行かれるものでない。成程今戦争になれば焼けるかも知れない、又焼けないかも知れない、仮令い焼けても去年の家が焼けたと思えば後悔も何もしない、少しも惜しくないと云て颯々と普請をして、果して何の災もなかったのは投機商売の中たようなものです。何でも私の処で普請をした為めに、新銭座辺は余程立退きが寡かった。彼処の内で普請をする位だから戦争にならぬであろう、マア引越を見合せようと云て思止まった者も大分あったようだ。けれども実は私も心の中では怖いさ。何処から焼け始まってドンな事になるか知れぬと思うから、何処かに逃げる用意はして置かなければならぬ。屋敷の中に穴を掘て隠れて居ようか、ソレでは雨の降るときに困る。土蔵の椽の下に這入て居ようか、若し大砲で撃れると困る。ドウしようかと思う中に、近所に紀州の屋敷（今の芝離宮）があって、その紀州藩から幾人も生徒が来て居るを幸い、その人達に頼んで屋敷を見に行た所が、広い庭で土手が二重に喰違いになって居る処がある。此処が宜かろう、罷り違ていよ〳〵ドン〳〵〳〵〳〵遣るようにならば、此処へ逃げて来よう、けれども表から行かれない、行かれないから海岸から行くより外ないと云うので、いよ〳〵セッパ詰たその時に、私は伝馬船を五、六日の間雇て、新銭座の浜辺に繋いで置たことがある。サアいよ〳〵と云う

ときに、家内の者をその船に乗せて海の方からその紀州の屋敷へ行て、土手の間に隠れて居ようと云う覚悟。その時に私の処の子供が二人、一（総領の一太郎氏なり）と捨（次男の捨次郎氏なり）、家内と子供を連れて其処へ行こうと云う覚悟をして居た所が、ソレ程心配にも及ばず、追々官軍が入込んで来た所が存外優しい、決して乱暴な事をしない。既に奥平の屋敷が汐留にあって、彼処に居る（別室に居る年寄を指して）一太郎のお祖母さんがその屋敷に居るので、五歳ばかりの一太郎が前夜からお祖母さんの処に泊て居た所が、奥平屋敷のツヒ近所に増山と云う大名屋敷があって、その屋敷へ不逞の徒が何人とか籠て居ると云うので、長州の兵が取囲んで、サア戦争だ、ドン／〃＼遣て居る。夫れから捕まえられたとか斬られたとか、或は奥平屋敷の溝の中に人が斬倒されて、ソレを又上から鎗で突たと云うような大騒動。所で私の倅はお祖母さんの処に居る、奥平の屋敷も焼かれて仕舞うだろう、あの子とお祖母さんはドウなろうかと大変な心配で、迎いに遣ろうと云ても遣ることも出来ない。夫れ是れする中に夕方になった所で事は鎮まって仕舞たが、その時でも大変に優しくて、ジッとして居ればドウもしない、何もこの内に居る者に怪我をさせようともしなければ乱暴もしない、チャンと軍令と云うものがあって締りが付て居るから安心しなさいと頻りに和めて一寸とも手を触れないと云う一例でも、官軍の存外優しかったことが分る。前に思たとは大違い、何ともない。

義塾次第に繁昌扨四月になった所で普請も出来上り、塾生は丁度慶応三年と四年の境が一番諸方に散じて仕舞て、残た者は僅に十八人、夫れから四月になった所が段々帰て来て、追々塾の

姿を成して次第に盛になる。又盛になる訳もある、と云うのは今度私が亜米利加に行た時には、其以前、亜米利加に行た時よりも多く金を貰いました。所で旅行中の費用は都て官費であるから、政府から請取た金は皆手元に残る故、その金を以て今度こそは有らん限りの原書を買て来ました。大中小の辞書、地理書、歴史等は勿論、その外法律書、経済書、数学書などもその時殆めて日本に輸入して、塾の何十人と云う生徒に銘々その版本を持たして立派に修業の出来るようにしたのは、実に無上の便利でした。ソコデその当分十年余も亜米利加出版の学校読本が日本国中に行われて居たのも、畢竟私が始めて持て帰たのが因縁になったことです。その次第は生徒が始めて塾で学ぶ、その学んで卒業した者が方々に出て教師になる、教師になれば自分が今まで学んだものをその学校に用るのも自然の順序であるから、日本国中に慶應義塾に用いた原書が流布して広く行われたと云うのも、事の順序はよく分て居ます。

官賊の間に偏せず党せずそれで先ず官軍は存外柔かなものであって、何も心配はない。併し政治上の事は極めて鋭敏なもので、嫌疑と云うことがあっては是れは容易ならぬ訳けであるから、ソレを明にする為めに、私は一切万事何も斯も打明けて、一口に云えば塾も住居も殻明きにして仕舞い、何処を捜した所で鉄砲は勿論一挺もなし、刃物もなければ飛道具もない、一目明白、直に分るようにしました。始終爾う云う身構えにして居るから、私の処には官軍方の人も颯々と来れば、賊軍の人も颯々と出入りして居て、私は官でも賊でも一切構わぬ、何方に向ても依怙贔屓なしに扱て居るから、双方共に朋友でした。その時に斯う云う面白い事がありまし

た。官軍が江戸に乗込んでマダ賊軍が上野に籠らぬ前に、市川辺に小競合がありました。爾うすると賊軍方の者が夜は其処に行て戦て、昼は睡いからと云て塾に来て寝て居た者があったが、根から構わない。私はその人の話を聞て、「君はソンナ事をして居るのか、危ない事だ、マア止にした方が宜かろうと云たくらいのことである。

古川節蔵脱走夫れから古川節蔵は長崎丸と云う船の艦長であったが、榎本釜次郎よりも先駈けして脱走すると云うので、私にその事を話した。所が節蔵は先年私が大阪から連れて来た男で、弟のようにして居たから、私はその話を聞て親切に止めました。「ソリャ止すが宜い、迚も叶わない、戦争すれば必ず負けるに違いない。東西ドチラが正しいとか正しくないとか云うような理非曲直は云わないが、何しろ斯う云う勢になったからは、モウ船に乗て脱走したからとて勝てそうにもしないから、ソレは思い止まるが宜いと云た所が、節蔵はマダなか〳〵強気で、「ナアに屹度勝つ、是れから出掛けて行て、諸方に出没して居る同志者をこの船に乗せて便利の地に挙げて、官軍が江戸の方に遣て来るその裏を衝て、夫れから大阪湾に行て掻廻せば官軍が狼狽すると云うような事になって、屹度勝算はありますと云て、中々私の云うことを聞かないから、「爾うか、ソレならば勝手にするが宜い、乃公はモウ負けても勝ても知らないぞ。だが乃公は足下を助けようとは思わぬ。唯可哀そうなのはお政さんだ（節蔵氏の内君）、ソレ丈けは生きて居られるように世話をして遣る、足下は何としても云う事を聞かないから仕方がない、ドウでもしなさいと云て別れたことがあります。

発狂病人一条米国より帰来もう一ヶ条。この時に仙台の書生で、以前この塾に居て夫れから亜米利加に留学して居た一条某と云うものがあって、ソレが亜米利加から帰て来た。所がこの男が発狂して居ると云う。ソレを船中で親切に看病して呉れたと云うのは、矢張り一条と同時に塾に居た柳本直太郎、是れはこの間まで愛知県の書記官をして居たが、今では市長か何かになって居るそうだ。この柳本直太郎が親切に看病して、横浜に着船した。その時は丁度仙台藩がいよ〳〵朝敵になったときで、江戸中で仙台人と見れば見付次第捕縛と云うことになって居る。ソコで横浜に来た所が、正しく仙台人だ、捕縛しようかと云うに、紛う方なき発狂人だ、ドウにも手の着けようがない。その時に寺島（宗則）が横浜の奉行をして居て、発狂人は仕方がないから打遣て置けと云うような事でその儘にしてあるその中に、病人は人を疑う病症を発して、飲食物に毒があると云て一切受付けず、凡そ一週間余り何も飲食しない。飲食しないからその儘棄てゝ置けば餓死する。ソコでいろ〳〵と和めて勧めたけれども何としても喰わない。爾うすると、不意としたことで、その病人が福澤先生に遇いたいと云うことを云出した。福澤は江戸に居ましょう、ソコで横浜に置くなら宜いが江戸に連れて行くのはドウかと思て、御奉行（寺島）に伺た所が、御奉行様も福澤に行くと云うなら颯々と連れて行けと云うので、ソレから新銭座に連れて来た。ソレが面白い、来た所で先ず取敢えず久振りと云て茶を出して、茶も飲め、序に飯も喰えと勧めて、夫れから握飯を出して、私も喫べるから君も一つ喫べなさい、ソレが喫べられなければ私の喫べ掛けを半分喫べなさい、毒はないじゃないかと云うようなこ

とで試みた所が、ソコで喰出した。喰て見れば気狂いの事だから、今まで思て居たことは忘れて仕舞い、新銭座に来て安心したと見え、食気は回復して、ソレは宜いが、マダ〳〵＼病人が何を遣り出すか知れない、昼夜番が要る。所が可笑しい。その時に薩州の者も居れば土州の者も居る、その官軍一味の者が居て、朝敵だから捕縛しようと云う位な病人を扶けて看柄して居る。爾うすると仙台の者が忍んで来る。大槻の倅なども内々見舞に来て、官軍と賊軍と塾の中で混り合て、朝敵藩の病人を看病して居ながら、何も風波もなければ苦味もない。ソンナ事が塾の安全であった訳けでしょう。真実平等区別なし、疑わんとするも疑うべき種がない。一方には脱走して賊軍に投ずるがあるかと思えば、一方にはチャンと塾に這入て居る官軍もあると云うような不思議な次第柄で、斯う云う事は造たのじゃ出来ぬ、装うても出来ぬ、私は腹の底から偏頗な考がない、少しも幕府の事を感服しなければ、官軍の事をも感服しない、戦争するなら銘々勝手にしろと、裏も表もなくその趣意で貫いて居たから、私の身も塾も危い所を無難に過したこと丶思う。

新政府の御用召夫れからいよ〳〵＼王政維新と定まって、大阪に明治政府の仮政府が出来て、その仮政府から命令が下た。御用があるから出て来いと一番始めに沙汰のあったのが、神田孝平と柳川春三と私と三人。所が柳川春三はドウも大阪に行くのは嫌だ、だから命は奉ずるけれども御用があればドウゾ江戸に居て勤めたいと云う注文。神田孝平は命に応じて行くと云う。私は一も二もなく病気で出られませぬと断り。その後大阪の仮政府は江戸に遷って来て、江戸の

新政府から又御用召で度々呼びに来ましたけれども、始終断る計り。或時神田孝平が私の処へ是非出ろと云て勧めに来たから、私は之に答えて、「一体君は何う思うか、男子の出処進退は銘々の好む通りにするが宜いではないか、世間一般そうありたいものではないか、之に異論はなかろう。ソコデ僕の目から見ると、君が新政府に出たのは君の平生好む所を実行して居るのだから僕は甚だ賛成するけれども、僕の身には夫れが嫌いだ、嫌いであるから出ないと云うものも是亦自分の好む所を実行するのだから、君の出て居るのと同じ趣意ではないか。左れば今僕は君の進退を賛成して居るから、君も亦僕の進退を賛成して、福澤は能く引込んで居る、旨いと云て誉めてこそ呉れそうなものだ。夫れを誉めもせずに呼出しに来るとは友達甲斐がないじゃないかと大に論じて、親友の間であるから遠慮会釈もなく刎付けたことがある。学者を誉めるなら豆腐屋も誉めろ夫れから幾ら呼びに来ても政府へはモウ一切出ないと説を極めて居た所が、或日細川潤次郎が私の処へ来たことがある。その時はマダ文部省と云うものゝない時で、何でもこの政府の学校の世話をしろと云う。イヤそれは往けない、自分は何もそんな事はしないと答え、夫れからいろ〳〵の話もあったが、細川の云うに、ドウしても政府に於て只棄てゝ置くと云う理屈はないのだから、政府から君が国家に尽した功労を誉めるようにしなければならぬと云うから、私は自分の説を主張して、誉めるの誉められぬのと全体ソリャ何の事だ、人間が人間当前の仕事をして居るに何も不思議はない、車屋は車を挽き豆腐屋は豆腐を拵えて書生は書を読むと云うのは人間当前の仕事として居るのだ、その仕事をして居る

のを政府が誉めると云うなら、先ず隣の豆腐屋から誉めて貰わなければならぬ、ソンな事は一切止しなさいと云て断たことがある。是れも随分暴論である。

マア斯う云うような調子で、私は酷く政府を嫌うようにあるけれども、その真実の大本を云えば、前に申した通りドウしても今度の明治政府は古風一天張りの攘夷政府と思込んで仕舞たからである。攘夷は私の何より嫌いな事で、コンな始末では仮令い政府は替ても迚も国は持てない、大切な日本国を滅茶苦茶にして仕舞うだろう本当に爾う思た所が、後に至てその政府が段々文明開化の道に進んで今日に及んだと云うのは、実に難有い目出たい次第であるが、その目出たかろうと云うことが私には始めから測量が出来ずに、唯その時に現れた実の有様に値を付けて、コンな古臭い攘夷政府を造て馬鹿な事を働いて居る諸藩の分らず屋は、国を亡ぼし兼ねぬ奴等じゃと思て、身は政府に近づかずに、唯日本に居て何か勉めて見ようと安心決定したことである。

英国王子に潔身の祓私が明治政府を攘夷政府と思たのは、決して空に信じたのではない、自から憂うべき証拠がある。先ず爰に一奇談を申せば、王政維新となって明治元年であったか二年であったか歳は覚えませぬが、英吉利の王子が日本に来遊、東京城に参内することになり、表面は外国の貴賓を接待することであるから固より故障はなけれども、何分にも穢れた外国人を皇城に入れると云うのはドウも不本意だと云うような説が政府部内に行われたものと見えて、王子入城の時に二重橋の上で潔身の祓をして内に入れたことがある、と云うのは夷狄の奴は不

浄の者であるからお祓をして体を清めて入れると云う意味でしょう。所がソレが宜い物笑いの種サ。その時に亜米利加の代理公使にポルトメンと云う人が居まして、毎度ワシントン政府に自分の任所の模様を報知して遣る、けれども余り必要でない事は大統領がその報告書を見ない、此方では又ソレを見て貰うのが公使の名誉としてある。ソコで公使が今度英の王子入城に付き潔身の祓云々の事を探り出して大に悦び、是れは締めた、この大奇談を報告すれば大統領が見て呉れるに違いないと云うので、その表書に即ちエッヂンボルフ王子の清めと云う可笑しな不思議な文字を書て、中の文句はドウかと云うに、この日本は真実、自尊自大の一小鎖国にして、外国人をば畜生同様に取扱うの常なり、既にこの程英吉利の王子入城謁見のとき、城門外に於て潔身の祓を王子の身辺に施したり、抑も潔身の祓とは上古穢れたる者を清めるに灌水法を行いしが、中世、紙の発明以来紙を以て御幣なるものを作り、その御幣を以て人の身体を撫で、水の代用として一切の不浄不潔を払うの故実あり、故に今度英の王子に施したるはその例に由ることにして、日本人の眼を以て見れば王子も亦唯不浄の畜生たるに過ぎず云々とて、筆を巧に事細かに書て遣たことがある。ソレは私が尺振八から詳に聞きました。この尺振八と云う人はその時、亜米利加公使館の通弁をして居たので、尺が私の処に来てこの間是れ〳〵の話、大笑いではないかと云て、その事実もその書面の文句も私に親しく話して聞かせましたが、実に苦々しい事で、私は之を聞て笑い所ではない泣きたく思いました。

米国前の国務卿又日本を評す又その頃、亜米利加の前国務卿シーワルトと云う人が、令嬢と同

伴して日本に来遊したことがある。この人は米国有名の政治家で、彼の南北戦争のとき専ら事に当て、リンコルンの遭難と同時に兇徒に傷けられたこともある。元来英国人とは反りが合わずに、云わば日本贔屓の人でありながら、今度来遊、その日本の実際を見て何分にも贔屓が出来ぬ、こんな根性の人民では気の毒ながら自立は六かしいと断言したこともある。ソコデ私の見る所で、新政府人の挙動は都て儒教の糟粕を嘗め、古学の固陋主義より割出して空威張りするのみ。顧みて外国人の評論を聞けば右の通り。迚も是れは仕方がないと真実落胆したれども、左りとて自分は日本人なり、無為にしては居られず、政治は兎も角も之を成行に任せて、自分は自分にて聊か身に覚えたる洋学を後進生に教え、又根気のあらん限り著書飜訳の事を勉めて、万が一にも斯民を文明に導くの僥倖もあらんかと、便り少なくも独り身構えした事である。子供の行末を思うその時の私の心事は実に淋しい有様で、人に話したことはないが今打明けて懺悔しましょう。維新前後、無茶苦茶の形勢を見て、迚もこの有様では国の独立は六かしい、他年一日外国人から如何なる侮辱を被るかも知れぬ、左ればとて今日全国中の東西南北何れを見ても共に語るべき人はない、自分一人では勿論何事も出来ず亦その勇気もない、実に情ない事であるが、いよ〳〵外人が手を出して跋扈乱暴と云うときには、自分は何とかしてその禍を避けるとするも、行く先きの永い子供は可愛そうだ、一命に掛けても外国人の奴隷にはしたくない、或は耶蘇宗の坊主にして政事人事の外に独立させては如何、自力自食して他人の厄介にならず、その身は宗教の坊主と云えば自から辱しめを免かるゝこともあらんかと、自分に宗教

の信心はなくして、子を思うの心より坊主にしようなどゝ種々無量に考えたことがあるが、三十年の今日より回想すれば恍として夢の如し、唯今日は世運の文明開化を難有く拝するばかりです。

授業料の濫觴扨鉄砲洲の塾を芝の新銭座に移したのは明治元年即ち慶応四年、明治改元の前でありしゆえ、塾の名を時の年号に取て慶應義塾と名づけ、一時散じた生徒も次第に帰来して塾は次第に盛になる。塾が盛になって生徒が多くなれば塾舎の取締も必要になるからして、塾則のようなものを書て、是れも写本は手間が取れると云うので版本にして、一冊ずつ生徒に渡し、ソレには色々箇条のある中に、生徒から毎月金を取ると云うことも慶應義塾が創めた新案である。従前、日本の私塾では支那風を真似たのか、生徒入学の時には束脩を納めて、教授する人を先生と仰ぎ奉り、入学の後も盆暮両度ぐらいに生徒銘々の分に応じて金子なり品物なり熨斗を附けて先生家に進上する習わしでありしが、私共の考えに、迚もこんな事では活溌に働く者はない、教授も矢張り人間の仕事だ、人間が人間の仕事をして金を取るに何の不都合がある、構うことはないから公然価を極めて取るが宜いと云うので、授業料と云う名を作て、生徒一人から毎月金二分ずつ取立て、その生徒には塾中の先進生が教えることにしました。その時塾に眠食する先進長者は、月に金四両あれば喰うことが出来たので、ソコで毎月生徒の持て来た授業料を掻き集めて、教師の頭に四両ずつ行渡れば死はせぬと大本を定めて、その上に尚お余りがあれば塾舎の入用にすることにして居ました。今では授業料なんぞは普通当然のようにある

が、ソレを始めて行うた時は実に天下の耳目を驚かしました。生徒に向て金二分持て来い、水引も要らなければ熨斗も要らない、一両持て来れば釣を遣るぞと云うように触込んでも、ソレでもちゃんと水引を掛けて持て来るものもある。スルとこんな物があると札を検める邪魔になると云て、態と上包を還して遣るなどは随分殺風景なことで、世間の人の驚いたのも無理はないが、今日それが日本国中の風俗習慣になって、何ともなくなったのは面白い。何事に由らず新工風を運らして之を実地に行うと云うのは、その事の大小を問わず余程の無鉄砲でなければ出来たことではない。左る代りに夫れが首尾能く参て、何時の間にか世間一般の風になれば、私の為めには恰も心願成就で、こんな愉快なことはありません。

上野の戦争新銭座の塾は幸に兵火の為めに焼けもせず、教場もどうやらこうやら整理したが、世間は中々喧しい。明治元年の五月、上野に大戦争が始まって、その前後は江戸市中の芝居も寄席も見世物も料理茶屋も皆休んで仕舞て、八百八町は真の闇、何が何やら分らない程の混乱なれども、私はその戦争の日も塾の課業を罷めない。上野ではどん／〃＼鉄砲を打て居る、けれども上野と新銭座とは二里も離れて居て、鉄砲玉の飛で来る気遣はないと云うので、丁度あの時私は英書で経済の講釈をして居ました。大分騒々敷い容子だが烟でも見えるかと云うので、生徒等は面白がって梯子に登て屋根の上から見物する。何でも昼から暮過ぎまでの戦争でしたが、此方に関係がなければ怖い事もない。

日本国中唯慶應義塾のみ此方がこの通りに落付払て居れば、世の中は広いもので又妙なもの

で、兵馬騒乱の中にも西洋の事を知りたいと云う気風は何処かに流行して、上野の騒動が済むと奥州の戦争と為り、その最中にも生徒は続々入学して来て、塾はます〳〵盛になりました。顧みて世間を見れば、徳川の学校は勿論潰れて仕舞い、その教師さえも行衛が分らぬ位、況して維新政府は学校どころの場合でない、日本国中苟も書を読で居る処は唯慶應義塾ばかりと云う有様で、その時に私が塾の者に語たことがある。昔し〳〵拿破翁の乱に和蘭国の運命は断絶して、本国は申すに及ばず印度地方まで悉く取られて仕舞て、国旗を挙げる場所がなくなった。所が、世界中纔に一箇処を遺した。ソレは即ち日本長崎の出島である。出島は年来和蘭人の居留地で、欧洲兵乱の影響も日本には及ばずして、出島の国旗は常に百尺竿頭に飜々して和蘭王国は曾て滅亡したることなしと、今でも和蘭人が誇て居る。シテ見るとこの慶應義塾は日本の洋学の為めには和蘭の出島と同様、世の中に如何なる騒動があっても変乱があっても未だ曾て洋学の命脈を断やしたことはないぞよ、慶應義塾は一日も休業したことはない、この塾のあらん限り大日本は世界の文明国である、世間に頓着するなと申して、大勢の少年を励ましたことがあります。

塾の始末に困る、楽書無用夫れはそれとして又一方から見れば、塾生の始末には誠に骨が折れました。戦争後意外に人の数は増したが、その人はどんな種類の者かと云うに、去年から出陣してさん／〃＼奥州地方で戦て漸く除隊になって、国には帰らずに鉄砲を棄てゝその儘塾に来たと云うような少年生が中々多い。中にも土佐の若武者などは長い朱鞘の大小を挟して、鉄砲

こそ持たないが今にも斬て掛ろうと云うような恐ろしい顔色をして居る。爾うかと思うとその若武者が紅い女の着物を着て居る。是れはドウしたのかと云うと、会津で分捕りした着物だと云て威張て居る。実に血腥い怖い人物で、一見先ず手の着けようがない。ソコデ私は前申す通り新銭座の塾を立てると同時に極めて簡単な塾則を拵えて、塾中金の貸借は一切相成らぬ、寝るときは寝て、起るときは起き、喰うときには定めの時間に食堂に出る、夫れから楽書一切相成らぬ、壁や障子に楽書を禁ずるは勿論、自分所有の行灯にも机にも一切の品物に楽書は相成らぬと云うくらいの箇条で、既に規則を極めた以上はソレを実行しなくてはならぬ。ソコで障子に楽書してあれば私は小刀を以て其処だけ切破て、この部屋に居る者が元の通りに張れと申付ける。夫れから行灯に書てあれば、誰の行灯でも構わぬ、その持主を咎めると、時としてはその者が、「是れは自分でない、人の書たのですと云ても私は許さぬ。人が書たと云うのは云訳けにならぬ、自分の行灯に楽書されてソレを見て居ると云うのは馬鹿だ、馬鹿の罰に早々張替えるが宜しい、楽書した行灯は塾に置かぬ、破るからアトを張て置きなさいと云うようにして、寸毫も仮さない。如何に血腥い若武者が何と云おうとも、そんな事を恐れて居られない。ミシ〳〵遣付けて遣る。名は忘れたが、不図見た所が桐の枕に如何な楽書がしてある。「コリヤ何だ。銘々の私有品でも楽書は一切相成らぬと云たではないか、ドウ云う訳けだ、一句の返答も出来なかろう。この枕は私は削りたいけれども削ることが出来ない、打毀わすから代りを取て来なさいと云て、その枕を取上げて足で踏潰して、サアどうでもしろ、攫み掛て来

るなら相手になろうと云わぬばかりの思惑を示した所で、決して掛らぬ。全体私は骨格は少し大きいが、本当は柔術も何も知らない、生れてから人を打たこともない男だけれども、その権幕はドウも撃ちそうな攫み掛りそうな気色で、口の法螺でなくして身体の法螺で吹倒した。所が皆小さくなって言うことを聞くようになって来て、ソレでマア戦争帰りの血腥い奴も自から静になって塾の治まりが付き、その中には真成な大人しい学者風の少年も多く、至極勉強して ます〳〵塾風を高尚にして、明治四年まで新銭座に居ました。

始めて文部省維新の騒乱も程なく治まって天下太平に向て来たが、新政府はマダマダ跡の片付が容易な事でなくして、明治五、六年までは教育に手を着けることが出来ないで、専ら洋学を教えるは矢張り慶應義塾ばかりであった。何でも廃藩置県の後に至るまでは、慶應義塾ばかりが洋学を専らにして、ソレから文部省と云うものが出来て、政府も大層教育に力を用うることになって来た。義塾は相変らず元の通りに生徒を教えて居て、生徒の数も段々殖えて、塾生の数は常に二百から三百ばかり、教うる所の事は一切英学と定め、英書を読み英語を解するようにとばかり教導して、古来日本に行われる漢学には重きを置かぬと云う風にしたから、その時の生徒の中には漢書を読むことの出来ぬ者が随分あります。漢書を読まずに英語ばかりを勉強するから、英書は何でも読めるが日本の手紙が読めないと云うような少年が出来て来た。物事がアベコベになって、世間では漢書を読でから英書を学ぶと云うのを、此方には英書を学んでから漢書を学ぶと云う者もあった。波多野承五郎などは小供の時から英書ばかり勉強して居た

ので、日本の手紙が読めなかったが、生れ付き文才があり気力のある少年だから、英学の跡で漢書を学べば造作もなく漢学が出来て、今では彼の通り何でも不自由なく立派な学者に成て居ます。

教育の方針は数理と独立畢竟私がこの日本に洋学を盛にして、如何でもして西洋流の文明富強国にしたいと云う熱心で、その趣は慶應義塾を西洋文明の案内者にして、恰も東道の主人と為り、西洋流の一手販売、特別エゼントとでも云うような役を勤めて、外国人に頼まれもせぬ事を遣て居たから、古風な頑固な日本人に嫌われたのも無理はない。元来私の教育主義は自然の原則に重きを置て、数と理とこの二つのものを本にして、人間万事有形の経営は都てソレから割出して行きたい。又一方の道徳論に於ては、人生を万物中の至尊至霊のものなりと認め、自尊自重苟も卑劣な事は出来ない、不品行な事は出来ない、不仁不義、不忠不孝ソンな浅ましい事は誰に頼まれても、何事に切迫しても出来ないと、一身を高尚至極にし所謂独立の点に安心するようにしたいものだと、先ず土台を定めて、一心不乱に唯この主義にのみ心を用いたと云うその訳けは、古来東洋西洋相対してその進歩の前後遅速を見れば、実に大造な相違である。双方共々に道徳の教もあり、経済の議論もあり、文に武においの〳〵長所短所ありながら、扨国勢の大体より見れば富国強兵、最大多数、最大幸福の一段に至れば、東洋国は西洋国の下に居られればならぬ。国勢の如何は果して国民の教育より来るものとすれば、双方の教育法に相違がなくてはならぬ。ソコで東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較して見るに、東洋になきもの

は、有形に於て数理学と、無形に於て独立心と、この二点である。彼の政治家が国事を料理するも、実業家が商売工業を働くも、国民が報国の念に富み、家族が団欒の情に濃なるも、その大本を尋れば自から由来する所が分る。近く論ずれば今の所謂立国の有らん限り、遠く思えば人類のあらん限り、人間万事、数理の外に逸することは叶わず、独立の外に依る所なしと云うべきこの大切なる一義を、我日本国に於ては軽く視て居る。是れでは差向き国を開て西洋諸強国と肩を並べることは出来そうにもしない。全く漢学教育の罪であると深く自から信じて、資本もない不完全な私塾に専門科を設けるなどは迚も及ばぬ事ながら、出来る限りは数理を本にして教育の方針を定め、一方には独立論の主義を唱えて、朝夕一寸した話の端にもその必要を語り、或は演説に説き或は筆記に記しなどしてその方針に導き、又自分にも様々工風して躬行実践を勉め、ます〳〵漢学が不信仰になりました。今日にても本塾の旧生徒が社会の実地に乗出して、その身分職業の如何に拘らず物の数理に迂闊ならず、気品高尚にして能く独立の趣意を全うする者ありと聞けば、是れが老余の一大楽事です。

　右の通り私は唯漢学が不信仰で、漢学に重きを置かぬ計りでない、一歩を進めて所謂腐儒の腐説を一掃して遣ろうと若い時から心掛けました。ソコで尋常一様の洋学者や通詞など云うような者が漢学者の事を悪く云うのは普通の話で、余り毒にもならぬ。所が私は随分漢書を読で居る。読で居ながら知らない風をして毒々敷い事を言うから憎まれずには居られない。他人に対しては真実素人のような風をして居るけれども、漢学者の使う故事などは大抵知て居る、と

云うのは前にも申した通り、少年の時から六かしい経史をやかましい先生に授けられて本当に勉強しました。左国史漢は勿論、詩経、書経のような経義でも、又は老子荘子のような妙な面白いものでも、先生の講義を聞き又自分に研究しました。是れは豊前中津の大儒白石先生の賜である。どの経史の義を知て、知らぬ風をして折々漢学の急処のような所を押えて、話にも書たものにも無遠慮に攻撃するから、是れぞ所謂獅子身中の虫で、漢学の為めには私は実に悪い外道である。斯くまでに私が漢学を敵にしたのは、今の開国の時節に、陳く腐れた漢説が後進少年生の脳中に蟠まっては、迚も西洋の文明は国に入ることが出来ないと飽くまでも信じて疑わず、如何にもして彼等を救出して我が信ずる所に導かんと、有らん限りの力を尽し、私の真面目を申せば、日本国中の漢学者は皆来い、乃公が一人で相手になろうと云うような決心であった。ソコで政府を始め世間一般の有様を見れば、文明の教育稍々普ねしと雖も、中年以上の重なる人は迚も洋学の佳境に這入ることは出来ず、何か事を謀り事を断ずる時には余儀なく漢書を便にして、万事ソレから割出すと云う風潮の中に居て、その大切な霊妙不思議な漢学の大主義を頭から見下して敵にして居るから、私の身の為めには随分危ない事である。

著書飜訳一切独立又維新前後は私が著書飜訳を勉めた時代で、その著訳書の由来は福澤全集の緒言に記してあるから之を略しますが、元来私の著訳は真実私一人の発意で、他人の差図も受けねば他人に相談もせず、自分の思う通りに執筆して、時の漢学者は無論、朋友たる洋学者へ草稿を見せたこともなければ、況して序文題字など頼んだこともない。是れも余り殺風景で、

実は当時の故老先生とか云う人に序文でも書かせた方が宜かったか知れないが、私は夫れが嫌いだ。ソンな事かた／〃＼で、私の著訳書は事実の如何に拘わらず古風な人の気に入る筈はない。ソレでもその書が殊更らに大に流行したのは、文明開国の勢に乗じたことでありましょう。義塾三田に移る慶應義塾が芝の新銭座を去て三田の只今の処に移たのは明治四年、是れも塾の一大改革ですから一通り語りましょう。その前年五月私が酷い熱病に罹り、病後神経が過敏になった所為か、新銭座の地所が何か臭いように鼻に感じる。又事実湿地でもあるから何処かに引移りたいと思い、飯倉の方に相当の売家を捜出して略相談を極めようとするときに、塾の人の申すに、福澤が塾を棄てゝ他に移るなら塾も一緒に移ろうと云う説が起て、その時には東京中に大名屋敷が幾らもあるので、塾の人は毎日のように方々の明屋敷を捜して廻わり、彼処でもない此処でもないと勝手次第に宜さそうな地所を見立てゝ、いよ／＼芝の三田にある島原藩の中屋敷が高燥の地で海浜の眺望も良し、塾には適当だと衆論一決はしたれども、此方の説が決した計りで、その屋敷は他人の屋敷であるから、之を手に入れるには東京府に頼み、政府から島原藩に上地を命じて、改めて福澤に貸渡すと云う趣向にしなければならぬ。ソレには政府の筋に内談して出来るように拵えねばならぬと云うので、時の東京府知事に頼込むは勿論、私の平生知て居る佐野常民その他の人にも事の次第を語りて助力を求め、塾の先進生※掛りにて運動する中に、或日私は岩倉公の家に参り、初めて推参なれども御目に掛りたいと申込んで公に面会、色々塾の事情を話して、詰り島原藩の屋敷を拝借したいと云う事を内願して、是れも

快く引受けて呉れる。何処も此処も至極都合の好い折柄、幸いにも東京府から私に頼む事が出来て来たと云うは、当時東京の取締には邏卒とか何とか云う名を付けて、諸藩の兵士が鉄砲を担いで市中を巡廻して居るその有様の殺風景とも何とも、丸で戦地のように見える。政府も之を宜くないことゝ思い、西洋風にポリスの仕組に改革しようと心付きはしたが、扨そのポリスとは全体ドンなものであるか、概略でも宜しい、取調べて呉れぬかと、役人が私方に来て懇々内談するその様子は、この取調さえ出来れば何か礼をすると云うように見えるから、此方は得たり賢し、お易い御用で御座る、早速取調べて上げましょうが、私の方からも願の筋がある、兼て長官へ内々御話いたしたこともある通り、三田の島原の屋敷地を拝借いたしたい、是れ丈けは厚く御含を願うと云うは、巡査法の取調と屋敷地の拝借と交易にしようと云うような塩梅に持掛けて、役人も否と云わずに黙諾して帰る。ソレから私は色々な原書を集めて警察法に関する部分を飜訳し、綴り合せて一冊に認め早々清書して差出した所が、東京府ではこの飜訳を種にして尚お市中の実際を斟酌し様々に工風して、断然彼の兵士の巡廻を廃し、改めて巡邏と云うものを組織し、後に之を巡査と改名して東京市中に平和穏当の取締法が出来ました。ソコで東京府も私に対して自から義理が出来たような訳けで、屋敷地の一条もスラ〳〵行われて、島原の屋敷を上地させて福澤に拝借と公然命令書が下り、地所一万何千坪は拝借、建物六百何十坪は一坪一円の割合にて所謂大名の御殿二棟、長屋幾棟の代価六百何十円を納めて、いよ〳〵塾を移したのが明治四年の春でした。

敬礼を止める引越して見れば誠に広々とした屋敷で申分なし。御殿を教場にし、長局を書生部屋にして、尚お足らぬ処は諸方諸屋敷の古長屋を安く買取て寄宿舎を作りなどして、俄に大きな学塾に為ると同時に入学生の数も次第に多く、この移転の一挙を以て慶應義塾の面目を新にしました。序ながら一奇談を語りましょう。新銭座入塾から三田に引越し、屋敷地の広さは三十倍にもなり、建物の広大な事も新旧較べものにならぬ。新塾の教場即ち御殿の廊下などは九尺巾もある。私は毎日塾中を見廻り、日曜は殊に掃除日と定めて書生部屋の隅まで一々検め、大小便所の内まで私が自分で戸を明けて細に見ると云うようにして居たから、一日に幾度び廊下を通て幾人の書生に逢うか知れない。所がその行逢う毎に、新入生などは勝手を知らずに、私の顔を見ると丁寧に辞儀をする。先方から丁寧に遣れば、此方も之に応じて辞儀をしなければならぬ。忙しい中にウルサクて堪まらぬ。ソレから先進の教師連に尋ねて、「廊下で書生のお辞儀に困りはせぬか、双方の手間潰だがと云うと、何れも同様、塾が広くなって家の内の御辞儀には閉口と云うから、「よし来た、乃公が広告を掲示して遣ると云て、

　塾中の生徒は長者に対するのみならず相互の間にも粗暴無礼は固より禁ずる所なれども、講堂の廊下その他塾舎の内外往来頻繁の場所にては、仮令い教師先進者に行逢うとも丁寧に辞儀するは無用の沙汰なり、互に相見て互に目礼を以て足るべし。益もなき虚飾に時を費すは学生の本色に非ず。この段心得の為めに掲示す。

と張紙して、生徒のお辞儀を止めた事がある。長者に対して辞儀をするなと云えば、横風にな

れ、礼儀を忘れよと云うように聞えて、奇なように思われるが、その時の事情は決して爾うでない。百千年来圧制の下に養われて官民共に一般の習慣を成したるこの国民の気風を活溌に導かんとするには、お辞儀の廃止も自から一時の方便で、その功能は慥に見えました。今でも塾にはコンな風が遺て、生徒取扱いの法は塾の規則に従い、不法の者があれば会釈なくミシ〳〵遣付けて寸毫も仮さず、生徒に不平があれば皆出て行け、此方は何ともないと、チャンと説を極めて思う様に制御して居れども、教師その他に対して入らざる事に敬礼なんかと云うような田舎らしい事は塾の習慣に於て許さない。左ればとて本塾の生徒に限て粗暴な者が多いでもなし、一方から見て幾分かその気品の高尚にして男らしいのは、虚礼虚飾を脱したその功徳であろうと思われる。

地所払下三田の屋敷は福澤諭吉の拝借地になって、地租もなければ借地料もなし恰も私有地のようではあるが、何分にも拝借と云えば何時立退を命じられるかも知れず、東京市中を見れば私同様官地を拝借して居る者は甚だ多い、孰れも不安心に違いないと推察が出来る。如何かして之を御払下にして貰いたいと様々思案の折柄、当時政府に左院と称して議政局のようなものが立て居て、その左院の議員中に懇意の人があるからその人に面会、何か話の序には拝借地の有名無実なるを説き、等しく官地を使用せしむるならば之を私有地にして銘々に地所保存の謀を為さしむるに若かずと、頻りに利害を論じてその人の建言を促したるは毎度の事で、その他政府の筋の人にさえ逢えば同様の事を語るの常なりしが、明治四年の頃、それかあらぬか、政

府は市中の拝借地をその借地人又は縁故ある者に払下げるとの風聞が聞える。是れは妙なりと大に喜び、その時東京府の課長に福田と云う人が専ら地所の事を取扱うと云う事を聞伝え、早速福田の私宅を尋ねて委細の事実を確かめ、いよ〳〵発令の時には知らして呉れることに約束して、帰宅して日々便りを待て居ると、数日の後に至り、今日発令したと報知が来たから、暫し時も猶予は出来ず、翌朝東京府に代理の者を差出し御払下を願うて、代金を上納せんと金を出した処が、府庁にも昨日発令した計りで出願者は一人もなし、マダ帳簿も出来ず、上納金請取の書式も出来ずと云うから、その正式の請取は後日の事として今日は唯金子丈けの御収納を願うと云て、強いて金を渡して仮り御払下の姿を成し、その後、地所代価収領の本証書も下りて、いよ〳〵私の私有地と為り、地券面本邸の外に附属の町地面を合して一万三千何百坪、本邸の方は千坪に付き価十五円、町地の方は割合に高く、両様共算して五百何十円とは、殆んど無代価と申して宜しい。その代価の事は兎も角もとして、斯く私が事を性急にしたのは、この屋敷に久しく住居すればするほどいよ〳〵ます〳〵宜い屋敷になって来て、実に東京第一、他に匹敵するものはないと自から感心して、塾員と共に満足すると同時に、之を私有地にすると云えば何か故障の起りそうな事だと、俗に云う虫が知らせるような塩梅で、何だか気になるから無暗に急いで埒を明けた所が、果して然り、東京の諸屋敷地を払下げると云う風聞が段々世間に知れ渡たその時に、島原藩士何某が私方に遣て来て、当屋敷は由緒ある拝領屋敷なるゆえ、主人島原藩主より御払下を願う、此方へ御譲渡し下されいと振込んで来たから、私は一切知らず、

この地所のむかしが誰のものでありしや夫れさえ心得て居ない、兎に角に私は東京府から御払の地所を買請けたまでの事なれば、府の命に服従するのみ、何か思召もあらば府庁へ御談じ然るべしと刎付ける。スルと先方も中々渋とい。再三再四遣て来て、とう〳〵仕舞には屋敷を半折して半分ずつ持とうと云うから、是れも不承知。地所の事は島原藩と福澤と直談すべき性質のものでないから御返答は致さぬ、一切万事君夫れ之を東京府に聞けと云う調子に構えて居て、六かしい談判も立消になったのは難有い。今日になって見れば、東京中を尋ね廻ても慶應義塾の地所と甲乙を争う屋敷は一箇所もない。正味一万四千坪、土地は高燥にして平面、海に面して前に遮るものなし、空気清く眺望佳なり、義塾唯一の資産にして、今これを売ろうとしたらば、むかし御払下の原価五百何十円は、百倍でない千倍になりましょう。義塾の慾張り、時節を待て千倍にも二千倍にもして遣ろうと、若い塾員達はリキンで居ます。

教員金の多少を争う右の通り三田の新塾は万事都合能く行われて、塾の資本金こそ皆無なれ、生徒から毎月の授業料を取集めて之を教師に分配して、如何やら斯うやら立行くその中にも、教師は皆本塾の先進生であるから、この塾に居て余計な金を取ろうと云う考はない。第一私が一銭でも塾の金を取らぬのみか、普請の時などには毎度此方から金を出して遣る。教師達もその通りで、外に出れば随分給料の取れるのを取らずに塾の事を勤めるから、是れも私金を出すと同じ事である。凡そコンナ風で無資金の塾も維持が出来たが、その時の真面目を申せば、月末などに金を分配するとき、動もすれば教師の間に議論が起るその議論は即ち金の多少を争う

議論で、僕はコンなに多く取る訳けはない、君の方が少ないと云うと、「イヤ爾うでない、僕は是れで沢山だ、イヤ多い、少ないと、喧嘩のように云てるから、私は側から見て、「ソリや又始まった、大概にして置きなさい、ドウせ足りない金だから宜い加減にして分けて仕舞え、争う程の事でもないと毎度笑て居ました。この通りで慶應義塾の成立は、教師の人々がこの塾を自分のものと思うて勉強したからの事です。決して私一人の力に叶う事ではない。人間万事余り世話をせずに放任主義の方が宜いかと思われます。その後時勢も次第に進歩するに従い、塾の維持金を集め、又大学部の為めにも募り、近来は又重ねて募集金を始めましたが、是れも私は余り深く関係せず、一切の事を塾出身の若い人に任せて居ます。

暗殺の心配

是れまで御話し申した通り、私の言行は有心故造態と敵を求める訳けでは固よりないが、鎖国風の日本に居て一際目立つ様に開国文明論を主張すれば、自然に敵の出来るのも仕方がない。その敵も口で彼是喧しく云うて罵詈する位は何でもないが、唯怖くて堪らぬのは襲撃暗殺の一事です。是れから少しその事を述べましょうが、凡そ世の中に我身に取て好かない、不愉快な、気味の悪い、恐ろしいものは、暗殺が第一番である。この味は狙われた者より外に分るまいと思う。実に何とも口にも言われず筆にも書かれません。是れが病気を煩うとか、痛所がある

とか何とか云えば、家内に相談し朋友に謀ると云う様なこともあるが、暗殺ばかりは家内の者へ云えば当人よりは却て家の者が心配しましょう、心配して呉れてソレが何にも役に立たぬ、ダカラ私はそんな事を家内の者に云た事もなければ親友に告げた事もない。固よりこの身に罪はない、仮令い粗われても恥かしい事ではないと云うことは分切て居ても、人に語て無益の事であるから、心配するのは自分一人である。私が暗殺を心配したのは毎度の事で、或は風声鶴唳にも驚きました。丁度今の狂犬を見たようなもので、おとなしい犬でも気味が悪いと云うような訳けで、どうも人を見ると気味がわるい。

床の下から逃げる積りソレに就ては色々面白い話がある。今この三田の屋敷の門を這入て右の方にある塾の家は、明治初年私の住居で、その普請をするとき、私は大工に命じて家の床を少し高くして、押入の処に揚板を造て置たと云うのは、若し例の奴等に踏込まれた時に、旨く逃げられゝば宜いが、逃げられなければ揚板から床の下に這入て其処から逃出そうと云う私の秘計で、今でも彼処の家は爾うなって居ましょう。

暗殺の歴史その大工に命ずる時に何故と云うことは云われない、又家内の者にも根ッから面白い話でないから何とも云うことが出来ぬ、詰り私独りの苦労で、実に馬鹿気た事ですが、夫れは差置き、私の見る処で、我開国以来世に行われた暗殺の歴史を申さんに、最初は唯新開国の人民が外国人を嫌うと云うまでの事で、深い意味はない。外国人は穢れた者だ、日本の地には足踏みもさせられぬと云うことが国民全体の気風で、その中に武家は双刀を腰にして気力もあ

るから、血気の若武者は折々外国人を暗打にしたこともある。併しその若武者も日本人を憎む訳けはないから、私などが仮令い時の洋学書生であっても災に罹る筈はない。大阪修業中は勿論、江戸に来ても当分は誠に安心、何も心配したことはない。例えば開国の初に、横浜で露西亜人の斬られたことなどは、唯その事変に驚くばかりで自分の身には何とも思わざりしに、その後間もなく外人嫌いの精神は俄に進歩して殺人の法が綿密になり、筋道が分り、区域が広くなり、之に加うるに政治上の意味をも調合して、万延元年、井伊大老の事変後は世上何となく殺気を催して、手塚律蔵、東条礼蔵は洋学者なるが故にとて長州人に襲撃せられ、塙二郎は国学者として不臣なりとて何者かに首を斬られ、江戸市中の唐物屋は外国品を売買して国の損害するとて苦しめらるゝと云うような風潮になって来ました。是れが即ち尊王攘夷の始りで、幕府が王室に対する法は多年来何も相替ることはなけれども、京都の御趣意は攘夷一天張りであるのに、然るに幕府の攘夷論は兎角因循姑息に流れて埒が明かぬ、即ち京都の御趣意に背くものである、尊王の大義を弁えぬものである、外国人に媚びるものである、と斯う云えば、その次には洋学者流を売国奴と云うのも無理はない。サア洋学者も怖くなって来た。殊に私などは同僚親友の手塚東条両人まで侵されたと云うのであるから、怖がらずには居られない。

廻国巡礼を羨む又真実怖い事もある。凡そ維新前、文久二、三年から維新後、明治六、七年の頃まで、十二、三年の間が最も物騒な世の中で、この間私は東京に居て夜分は決して外出せず、余儀なく旅行するときは姓名を偽り、荷物にも福澤と記さず、コソ〳〵して往来するその有様

は、欠落者が人目を忍び、泥坊が逃げて廻わるような風で、誠に面白くない。そのとき途中で廻国巡礼に出逢い、その笠を見れば何の国何都何村の何某と明白に書てある。「扨々羨ましい事だ、乃公もアヽ云う身分になって見たいと、自分の身を思い又世の有様を考えて、妙な心持になって、ソレからその巡礼に銭など与えて、貴様達は夫婦か、故郷に子はないか、親はあるか、など色々話し、問答して別れたことは今に覚えて居ます。

長州室津の心配是れも私が姓名を隠して豊前中津から江戸に帰て来た時の事です。元治元年、私が中津に行て、小幡篤次郎兄弟を始め同藩子弟七、八名に洋学修業を勧めて共に出府するときに、中津から先ず船に乗て出帆すると、二、三日天気が悪くて、風次第で何処の港に入るか知れない、スルと南無三宝、攘夷最中の長州室津と云う港に船が着た。そのとき私は同行少年の名を借りて三輪光五郎（今日は府下目黒のビール会社に居る）と名乗て居たが、一寸上陸して髪結床に行た所が、床の親仁が喋々述べて居る、「幕府を打潰す――毛唐人を追巻くると云い、女子供の唄の文句は忘れたが、「やがて長門は江戸になるとか何とか云うことを面白そうに唄うて居る、そのあたりを見れば兵隊が色々な服装をして鉄砲を担いで威張て居るから、若しも福澤と云う正体が現われては、たった一発と、安い気はしないが、爰が大事と思い態と平気な顔をして、唯順風を祈て船の出られるのを待て居るその間の怖さと云うものは、何の事はない、蹇者が病犬に囲まれたようなものでした。

箱根の心配ソレから船は大阪に着て上陸、東海道をして箱根に掛り、峠の宿の破不屋と云う宿

屋に泊ると、奥の座敷に戸田何某と云う人が江戸の方から来て先きに泊て居る。この人は当時、山陵奉行とか云う京都の御用を勤めて居て、供の者も大勢附て居る様子、問わずと知れた攘夷の一類と推察して気味が悪い、終夜ろくに寝もせず、夜の明ける前に早々宿屋を駈出してコソ〳〵逃げたことがある。

中村栗園先生の門を素通りその時の道中であったか、江州水口、中村栗園先生の門前を素通りしましたが、是れは甚だ気に済まぬ。栗園の事は前にも申す通り私の家と浅からぬ縁のある人で、前年、私が始めて江戸に出るとき水口を通行して其処へ尋ねた所が、先生は非常に喜んで、過ぎし昔の事共を私に話して聞かせ、「お前の御親父の大阪で御不幸の時は、私は直ぐ大阪に行て、ソレからお前達が船に乗て中津に帰るその時には、私がお前を抱いて安治川口の船まで行て別れた。そのときお前は年弱の三つで、何も知らなかろうなどゝ云う話で、私も実にほんとうの親に逢たような心持がして、今晩は是非泊れと云て、中村の家に一泊しました。斯くまでの間柄であるから、今度も是非とも訪問しなければならぬ。所がその前に人の噂を聞けば、水口の中村先生は近来専ら孫子の講釈をして、玄関には具足などが飾てあると云う、問うに及ばず立派な攘夷家である、人情としては是非とも立寄て訪問せねばならぬが、ドウも寄ることが出来ぬ。栗園先生は頼んでも私を害する人ではないが、血気の門弟子が沢山居るから、立寄れば迚も助からぬと思て、不本意ながらその門前を素通りしました。その後先生には面会の機会がなくて、遂に故人になられました。今日に至るまでも甚だ心残りで不愉快に思います、

増田宗太郎に窺わる以上は維新前の事で、直に私の身に害を及ぼしたでもなし、唯無暗に私が怖く思たばかり、所謂世間の風声鶴唳に臆病心を起したのかも知れないが、維新後になっても忌な風聞は絶えず行われて、何分にも不安心のみか、歳月を経て後に聞けば、実際恐るべき事も毎度のことでした。頃は明治三年、私が豊前中津へ老母の迎いに参て、母と姪と両人を守護して東京に帰たことがあります。その時は中津滞留も左まで怖いとも思わず、先ず安心して居ましたが、数年の後に至て実際の話を聞けば、恐ろしいとも何とも、実に命拾いをしたような事です。私の再従弟に増田宗太部と云う男があります。この男は後に九州西南の役に賊軍に投じて城山で死に就た一種の人物で、世間にも名を知られて居ますが、私が中津に行たときはマダ年も若く、私より十三、四歳も下ですから、私は之を子供のように思い、且つ住居の家も近処で朝夕往来して交際は前年の通り、宗さん〳〵と云て親しくして居ましたが、元来この宗太郎の母は神官の家の妹で、その神官の倅即ち宗太郎の従兄に水戸学風の学者があって、宗太郎はその従兄を先生にして勉強したから中々エライ、その上に増田の家は年来堅固なる家風で、封建の武家としては一点も愧る所はない。宗太郎の実父は私の母の従兄ですから、私もその風采を知て居ますが、ソレハソレハ立派な侍と申して宜しい。この父母に養育せられた宗太郎が水戸学国学を勉強したとあれば、所謂尊攘家に違いはあるまい。ソコで私は今度中津に帰ても宗太郎をば乳臭の小児と思い、相替らず宗さん〳〵で待遇して居た処が、何ぞ料らん、この宗さんが胸に一物、恐ろしい事をたくらんで居て、そのニコ〳〵優しい顔をして私方に出入し

たのは全く探偵の為めであったと云う。扨探偵も届いたか、いよ〳〵今夜は福澤を片付けると云うので、忍び〳〵に動静を窺いに来た、田舎の事で外廻りの囲いもなければ戸締りもない、所が丁度その夜は私の処に客があって、その客は服部五郎兵衛と云う私の先進先生、至極磊落な人で、主客相対して酒を飲みながら談論は尽きぬ。その間宗太郎は外に立て居たが、十二時になっても寝そうにもしない、一時になっても寝そうにもしない、何時までも二人差向いで飲んで話をして居るので、余儀なくお罷めになったと云う。是れは私が大酒夜更しの功名ではない。僥倖である。

一夜の危険ソレから家の始末も大抵出来て、いよ〳〵中津の廻米船に乗て神戸まで行き、神戸から東京までの間は外国の郵船に乗る積りで、サア乗船と云う所が、中津の海は浅くて都合が悪い。中津の西一里ばかりの処に鵜ノ島と云う港があって、其処に船が掛って居ると云うから、私はそのとき大病後ではあるし、老人、子供の連れであるから、前日から鵜ノ島に行て一泊して翌朝ゆるりと乗船する趣向にして、その晩鵜ノ島の船宿のような家に泊りましたが、知らぬが仏とは申しながら、後に聞けばこの夜が私の万死一生、恐ろしい時であったと云うは、その船宿の若い主人が例の有志者の仲間であるとは恐ろしい、私の一行は老母と姪とその外に近親今泉の後室と小児（小児は秀太郎六歳）役に立ちそうな男は私一人、是れも病後のヒョロ〳〵と云うその人数を留めて置いて、宿の奴が中津の同志者に使を走らして、「今夜は上都合云々と内通したから堪らない。ソコデ以て中津の有志者即ち暗殺者は、金谷と云う処に集会を催

して、今夜いよ〳〵鵜ノ島に押掛けて福澤を殺すことに議決した、その理由は、福澤が近来奥平の若殿様を誘引して亜米利加に遣ろうなんと云う大反れた計画をして居るのは怪しからぬ、不臣な奴だと云う罪状であるから、満座同音、国賊の誅罰に異論はない。

福澤の運命はいよ〳〵切迫した、老人子供の寝て居る処に血気の壮士が暴れ込んでは迚も助かる道はない、所が爰に不思議とや云わん、天の恵とや云わん、壮士連の中に争論を生じたと云うのは、如何にも今夜は好機会で、行きさえすれば必ず上首尾と極て居るから、功名手柄を争うは武士の習いで、仲間中の両三人が、「乃公が魁すると云えば、又一方の者は、「爾う甘くは行かん、乃公の腕前で遣て見せると言出して、負けず劣らず、とう〳〵仲間喧嘩が始まって、深更に及ぶまで如何しても決しない、余り喧嘩が騒々しく、大きな声が近処まで聞えると、その隣家に中西与太夫と云う人の住居がある、この人は私などより余程年を取て居る、その人が何の事か知らんと行て見た所が、斯う〳〵云う訳けだと云う。中西は流石に老成の士族だけあって、「人を殺すと云うのは宜くない事だ、思止まるが宜いと云うと、壮士等は中々聞入れず、「イヤ思止まらぬと威張る、ヤレ止まれ、イヤ止まらぬと、今度は老人を相手に大議論を始めて、彼れ此れと悶着して居る間に夜が明けて仕舞い、私は何にも知らずにその朝船に乗て海上無事神戸に着きました。

老母の大坂見物も叶わず扨神戸に着た処で、母は天保七年、大阪を去てから三十何年になる、誠に久し振りの事であるから、今度こそ大阪、京都方々を思うさま見物させて悦ばせようと、

中津出帆の時から楽しんで居た処が、神戸に上陸して旅宿に着て見ると、東京の小幡篤次郎から手紙が来てあるその手紙に、昨今京阪の間甚だ穏かならず、少々聞込み事もあれば、神戸に着船したらば成るたけ人に知られぬように注意して、早々郵船にて帰京せよとある。ヤレ〳〵又しても面百くない報だ、左ればとてこんな忌な事を老母の耳に入れるでもなしと思い、何かつまらぬ口実を作て、折角楽しみにした上方見物も罷めにして、空しく東京に帰て来ました。

警戒却て無益なり前の鵜ノ島の話に引替えて、誠に馬鹿々々しい事もあります。明治五年かと思う。私が中津の学校を視察に行き、その時旧藩主に勧めて一家挙って東京に引越し、私が供をして参ると云うことになった。処で藩主が藩地を去るは固より士族の悦ぶことでない。私も能くその情実は知て居るけれども、昔の大名風で藩地に居れば奥平家の維持が出来ない、思切て断行せよと云うので、疾雷耳を掩うに暇あらず、僅か六、七日間の支度で、御隠居様も御姫様も中津の浜から船に乗て馬関に行き、馬関で蒸気船に乗替えて神戸と、都ての用意調い、いよ〳〵中津の船に乗て夕刻沖の方に出掛けた処が生憎風がない、夜中水尾木の処にボチャ〳〵して少しも前に進まない。ソコで私は考えた。「コリヤ大変だ、爰にグヅ〳〵して居ると例の若武者が屹と遣て来るに違いない、来ればその目指す敵は自分一人だ、幸い夜の明けぬ中に船を上て陸行するに若くはなしと決断して、極暑の時であったが、払暁マダ暗い中に中津の城下に引返して、その足で小倉まで駈けて行きました。所が大きに御苦労、後に聞けばこの時

には藩士も至極穏かで何の議論もなかったと云う。此方が邪推を運らして用心する時は何でもなく、ポカンとして居る時は一番危い、実に困たものです。

疑心暗鬼互に走る時は違うが維新前、文久三、四年の頃、江戸深川六軒掘に藤沢志摩守と云う旗本がある。是れは時の陸軍の将官を勤め、極の西洋家で、或日その人の家に集会を催し、客は小出播磨守、成島柳北を始め、その外皆むかしの大家と唱うる蘭学医者、私とも合して七、八名でした。その時の一体の事情を申せば、前に申した通り、私は十二、三年間、夜分外出しないと云う時分で、最も自から警めて、内々刀にも心を用い、能く研がせて斬れるようにして居ます。敢て之を頼みにするではなけれども、集会の話が面白く、ツイ〳〵怖い事を忘れて思わず夜を更かして、十二時にもなった所で、座中みな気が付て、サア帰りが怖い。疳持つ身と云う訳けではないが、いずれも洋学臭い連中だから皆な怖がって、「大分晩うなったが如何だろうと云うと、主人が気を利かして屋根舟を用意し、七、八人の客を乗せて、六軒堀の川岸から市中の川、即ち堀割を通り、行く〳〵成島は柳橋から上り、それから近いもの〳〵と段々に上げて、仕舞に戸塚と云う老医と私と二人になり、新橋の川岸に着て、戸塚は麻布に帰り私は新銭座に帰らねばならぬ。新橋から新銭座まで凡そ十丁もある。時刻はハヤ一時過ぎ、然かもその夜は寒い晩で、冬の月が誠に能く照して何となく物凄い。新橋の川岸へ上って大通りを通り、自から新銭座の方へ行くのだから、此方側即ち大通り東側の方を通て四辺を見れば人は唯の一人も居ない。その頃は浪人者が徘徊して、其処にも此処にも毎夜のように辻斬とて容易

に人を斬ることがあって、物騒とも何とも云うに云われぬ、夫れから袴の股立を取て進退に都合の好いように趣向して、颯々と歩いて行くと丁度源助町の央あたりと思う、向から一人やって来るその男は大層大きく見えた。実は如何だか知らぬが、大男に見えた。「ソリや来た、どうもこれは逃げた所がおっ付ない。今ならば巡査が居るとか人の家に駈込むとか云うこともあるが、如何して〳〵騒々しい時だから不意に人の家に入られるものでない、却て戸を閉て仕舞て、出て加勢しようなんと云うものゝないのは分り切てる。「コリャ困た、今から引返すと却て引身になって追駈けられて後から遣られる、寧そ大胆に此方から進むに若かず、進むからには臆病な風を見せると付上るから、衝当るように遣ろうと決心して、今まで私は往来の左の方を通て居たのを、斯う斜に道の真中へ出掛けると、彼方の奴も斜に出て来た。コリャ大変だと思たが、最う寸歩も後に引かれぬ。いよ〳〵となれば兼て少し居合の心得もあるから、如何して呉れようか、これは一ツ下から刎ねて遣りましょうと云う考で、一生懸命、イザと云えば真実に遣る所存で行くと、先方もノソ〳〵遣って来る。私は実に人を斬と云うことは大嫌い、見るのも嫌いだ、けれども逃げれば斬られる、仕方がない、愈よ先方が抜掛れば背に腹は換えられぬ、此方も抜て先を取らねばならん、その頃は裁判もなければ警察もない、人を斬たからと云て咎められもせぬ、只その場を逃げさえすれば宜しいと覚悟して、段々行くと一歩々々近くなって、到頭すれ違いになった、所が先方の奴も抜かん、此方は勿論抜かん、所で擦違たから、それを拍子に私はドン〳〵逃げた。どの位足が早かったか覚えはない、五、六間先へ行

て振返て見ると、その男もドン〳〵逃げて行く。如何も何とも云われぬ、実に怖かったが、双方逃げた跡で、先ずホッと呼吸をついて安心して可笑しかった。双方共に臆病者と臆病者との出逢い、拵えた芝居のようで、先方の奴の心中も推察が出来る。コンな可笑しい芝居はない。初めから此方は斬る気はない、唯逃げては不味い、屹と殺られると思たから進んだ所が、先方も中々心得て居る、内心怖わ〳〵表面颯々と出て来て、丁度抜きさえすれば切先の届く位すれ〳〵になった処で、身を飜して逃出したのは誠にエライ。こんな処で殺されるのは真実の犬死だから、此方も怖かったが、彼方もさぞ〳〵怖かったろうと思う。今その人は何処に居るやら、三十何年前若い男だから、まだ生きて居られる年だが、生きて居るなら逢うて見たい。その時の怖さ加減を互に話したら面白い事でしょう。

雑記

暗殺の患は政治家の方に廻わる凡そ私共の暗殺を恐れたのは、前に申す通り文久二、三年から明治六、七年頃までのことでしたが、世間の風潮は妙なもので、新政府の組織が次第に整頓して、随て執政者の権力も重きを成して、自から威福の行われるようになると同時に、天下の耳目は政府の一方に集り、私の不平も公衆の苦情も何も蚊もその原因を政府の当局者に帰して、之に加うるに羨望嫉妬の念を以てして、今度は政府の役人達が狙われるようになって来て、洋

学者の方は大に楽になりました。喰違に岩倉公襲撃の頃からソロ〳〵始まって、明治十一年、大久保内務卿の暗殺以来、毎度の兇変は皆政治上の意味を含んで居るから、云わば学者の方は御留主になって、政治家の為めには誠に気の毒で万々推察しますが、私共は人に羨まれる事がないから、先ず以て今日は安心と思います。

剣を棄てゝ剣を揮う私が芝の源助町で人を斬ろうと決心した、居合も少し心得て居るなんて云えば、何か武人めいて刀剣でも大切にするように見えるけれども、その実は全く反対で、爾うではないどころか、日本武士の大小を丸で罷めて仕舞いたいとは私の宿願でした。源助町のときには成程双刀を挟して、刀は金剛兵衛盛高、脇差は備前祐定、先ず相応に切れそうな物であったが、その後、間もなく盛高も祐定も家にある刀剣類はみんな売て仕舞て、短かい脇差のような物を刀にして御印に挟して居たが、是れに就ても話がある。或日、本郷に居る親友高畑五郎を訪問していろ〳〵話をして居る中に、不図気が付て見ると恐ろしい長い刀が床の間に一本飾てあるから、私が高畑に向て、あれは居合刀のようだが何にするのかと問えば、主人の云うに、近来世の中に剣術が盛になって刀剣が行われる、ナニ洋学者だからと云て負けることはない、僕も一本求めたのだとリキンで居るから、私は之を打消し、「ソレは詰らない、君は之を以て威すつもりだろうが、長い刀を家に置て今の浪人者を威そうと云ても、威嚇の道具になりはしない。詰らぬ話だ、止しなさい。僕は家にある刀剣はみんな売て仕舞て、今挟して居るこの大小二本きりしかない。然かもその大の方は長い脇差を刀にしたので、小の方は鰹節小刀

を鞘に蔵めてお飾に挟して居るのだ。ソレに君がこんな大造な長い刀を弄くると云うのは、君に不似合だ、止すが宜い、御願だから止して呉れ。論より証拠、君にはこの刀は抜けないに極て居る、それとも抜くことが出来るか。「ソレは抜くことは出来ない、迚もこんな長い物を。「ソリャ見たことか、抜けもせぬものを飾て置くと云う馬鹿者があるか。僕は一切刀を罷めて居るが、憚りながら抜くことは知て居るぞ、抜て見せようと云て、四尺ばかりもある重い刀を取て庭に下りて、兼て少し覚え居る居合の術で二、三本抜て見せて、「サア見給え、この通りだ。どうだ、君には抜けなかろう。その抜ける者は疾くに刀を売て仕舞たのに、抜けない者が飾て置くとは間違いではないか。是れは独り吾々洋学者ばかりでない、日本国中の刀を皆なうっちゃって仕舞うと云うことにしなければならぬ、だからこんなものは颯々と片付けて仕舞うが宜しい。君も今から廃刀と決心して、いよ〳〵飾りに挟さなければならんと云うなら、小刀でも何でも宜しいと云て、大きに論じた事がある。

扇子から懐剣が出る是れも大抵同時代と思う。幕府の飜訳局に雇れて其処に出て居た時、或人が私に話すに、「近来なか〳〵面白い扇子が流行る。鉄扇と云うものは昔から行われて居たが、今はソレが大に進歩して、唯の扇子と見せて置て、その実はヒョイと抜くと懐剣が出て来る、なか〳〵面白い事を発明したと噂して居る。ソコで私が大にまぜかえして遣た。「扇子の中から懐剣の出るのが何が賞めた話だ。それよりも懐剣として置て、ヒョイト抜くと中から扇子の出るのが本当だ、倒まにしろ、爾うしたら賞めて遣る、そんな馬鹿な殺伐な事をする奴が

あるものか、面白くもないと云て、打毀した事を覚えて居ます。

幕府が倒れると私はスグ帰農して、夫れ切り双刀を廃して丸腰になると、塾の中でも段々廃刀者が出来る。所がこの廃刀と云う事は中々容易な事でない。実を申せば持兇器を罷めるのだから、世間の人は悦びそうなものだが、決して爾うでない。私が始めて腰の物なしで汐留の奥平屋敷に行た所が、同藩士は大に驚き、丸腰で御屋敷に出入するとは殿様に不敬ではないかなどゝ議論する者もありました。又或るとき塾の小幡仁三郎と誰か二、三人で散歩中、その廃刀を何処かの壮士に見咎められて怖い思いをした事もある、けれども私は断然廃刀と決心して、少しも世の中に頓着せず、「文明開国の世の中に難有そうに兇器を腰にして居る奴は馬鹿だ、その刀の長いほど大馬鹿であるから、武家の刀は之を名けて馬鹿メートルと云うが好かろうなどゝ放言して居れば、塾中にも自から同志がある。

和田与四郎壮士を挑む明治四年、新銭座から今の三田に移転した当分の事と思う、或日和田義郎（今は故人になりました）と云う人が、思切た戯をして壮士を驚かしたことがある。この人は後に慶應義塾幼稚舎の舎長として性質極めて温和、大勢の幼稚生を実子のように優しく取扱い、生徒も亦舎長夫婦を実の父母のように思うと云う程の人物であるが、本来は和歌山藩の士族で、少年の時から武芸に志して体格も屈強、殊に柔術は最も得意で、所謂怖いものなしと云う武士であるが、一夕例の丸腰で二、三人連れ、芝の松本町を散歩して行くと、向うから大勢の壮士が長い大小を横たえて大道狭しと遣て来る。スルと和田が小便をしながら往来の真中を

歩いて行く。サアこの小便を避けて左右に道を開くか、何か咎め立てして喰て掛るか、爰が喧嘩の間一髪、いよ〳〵掛て来れば五人でも十人でも投り出して殺して仕舞うと云う意気込が、先方の若武者共に分たか、何にも云わずに避けて通たと云う。大道で小便とは今から考えれば随分乱暴であるが、乱世の時代には何でもない、こんな乱暴が却て塾の独立を保つ為めになりました。

百姓に乗馬を強ゆ相手は壮士ばかりでない、唯の百姓町人に対しても色々試みた事がある。その頃私が子供を連れて江ノ島鎌倉に遊び、七里ケ浜を通るとき、向うから馬に乗て来る百姓があって、私共を見るや否や馬から飛下りたから、私が咎めて、「是れ、貴様は何だと云て、馬の口を押えて止めると、百姓が怖わそうな顔をして頻りに詫るから、私が、「馬鹿云え、爾うじゃない、この馬は貴様の馬だろう「ヘイ「自分の馬に自分が乗たら何だ、馬鹿な事するな、乗て行けと云ても中々乗らない。「乗らなけりゃ打撲るぞ、早く乗て行け、貴様は爾う云う奴だからいけない。今政府の法律では百姓町人、乗馬勝手次第、誰が馬に乗て誰に逢うても構わぬ、早く乗て行けと云て、無理無体に乗せて遣りましたが、その時私の心の中で独り思うに、古来の習慣は恐ろしいものだ、この百姓等が教育のない計りで物が分らずに法律のあることも知らない。下々の人民がこんなでは仕方がないと余計な事を案じた事がある。

路傍の人の硬軟を試る夫れから又斯う云う面白い事がありました。明治四年の頃でした。摂州三田藩の九鬼と云う大名は兼て懇意の間柄で、一度は三田に遊びに来いと云う話もあり、

私もその節病後の身で有馬の温泉にも行て見たし、かた〳〵先ず大阪まで出掛けて、大阪から三田まで凡そ十五里、途中名塩に一泊する積りにして、ソコで大阪に行けば何時でも緒方の家を訪問しないことはない、故先生は居ないでも未亡夫人が私を子のようにして愛して呉れるから、大阪に着くと取敢えず緒方に行て、三田に遊び有馬に行くことなども話しました所が、私は病後でどうも歩けそうにない、駕籠を貸して遣ろうと云われるので、その駕籠をつらせて大阪を出立した。頃は旧暦の三、四月、誠に好い時候で、私はパッチを穿て羽織か何か着て蝙蝠傘を持て、駕籠に乗て行くつもりであったが、少し歩いて見るとなか〳〵歩ける。「コリヤ駕籠は要らぬ、駕籠屋、先へ行け、乃公は一人で行くからと云て、たった一人で供もなければ連れもない、話相手がなくて面白くない所から、何でも人に逢うて言葉を交えて見たいと思い、往来の向うから来る百姓のような男に向て道を聞たら、そのとき私の素振りが何か横風で、むかしの士族の正体が現われて言葉も荒らかったと見える、するとその百姓が誠に丁寧に道を数えて呉れてお辞儀をして行く、こりや面白いと思い、自分の身を見れば持て居るものは蝙蝠傘一本きりで何にもない、も一度遣て見ようと思うて、その次ぎに来る奴に向て怒鳴り付け、「コリや待て、向うに見える村は何と申す村だ、シテ村の家数は凡そ何軒ある、あの瓦屋の大きな家は百姓か町人か、主人の名は何と申すなどゝ下らぬ事をたゝみ掛けて士族丸出しの口調で尋ねると、その奴は道の側に小さくなって恐れながら御答申上げますと云うような様子だ。此方はます〳〵面白くなって、今度は逆に遣て見ようと思付き、又向うから来る奴に向て、

「モシモシ憚りながら一寸ものをお尋ね申しますと云うような口調に出掛けて、相替らず下らぬ問答を始め、私は大阪生れで又大阪にも久しく寄留して居たから、その時には大抵大阪の言葉も知て居たから、都て奴の調子に合せてゴテ〳〵話をすると、奴は私を大阪の町人が掛取にでも行く者と思うたか、中々横風でろくに会釈もせずに颯々と別れて行く、底で今度は又その次ぎの奴に横風をきめ込み、又その次ぎには丁寧に出掛け、一切先方の面色に取捨なく誰でも唯向うから来る人間一匹ずつ一つ置きと極めて遣て見た所が、凡そ三里ばかり歩く間、思う通りに成たが、ソコデ私の心中は甚だ面白くない。如何にも是れは仕様のない奴等だ、誰も彼も小さくなるなら小さくなり、横風ならば横風で可し、斯う何うも先方の人を見て自分の身を伸縮するような事では仕様がない、推して知るべし地方小役人等の威張るのも無理はない、世間に圧制政府と云う説があるが、是れは政府の圧制ではない人民の方から圧制を招くのだ、之を何うして呉れようか、捨てようと云て固より見捨てられる者でない、左ればとて之を導いて俄に教えようもない、如何に百千年来の余弊とは云いながら、無教育の土百姓が唯無闇に人に詫るばかりなら宜しいが、先き次第で驕傲になったり柔和になったり、丸でゴムの人形見るようだ、如何にも頼母しくないと大に落胆したことがあるが、変れば変る世の中で、マアこの節はそのゴム人形も立派な国民と成て学問もすれば商工業も働き、兵士にすれば一命を軽んじて国の為めに水火にも飛込む。福澤が蝙蝠傘一本で如何に士族の仮色を使うても、之に恐るゝ者は全国一人もあるまい。是れぞ文明開化の賜でしょう。

独立敢て新事例を開く私の考は塾に少年を集めて原書を読ませる計りが目的ではない。如何様にもしてこの鎖国の日本を開て西洋流の文明に導き、富国強兵以て世界中に後れを取らぬようにしたい。左りとて唯これを口に言うばかりでなく、近く自分の身より始めて、仮初めにも言行齟齬しては済まぬ事だと、先ず一身の私を慎しみ、一家の生活法を謀り、他人の世話にならぬようにと心掛けて、扨一方に世の中を見て文明改進の為めに施して見たいと思う事があれば、世論に頓着せず思切て試みました。例えば前にも申した通り、学生から授業料の金を取立てる事なり、武士の魂と云う双刀を棄てゝ丸腰になる事なり、演説の新法を人に説て之を実地に施す事なり、又は著訳書に古来の文章法を破て平易なる通俗文を用うる事なり、凡そ是等は当時の古風家に嫌われる事であるが、幸に私の著訳は世間の人気に役じて渇する者に水を与え、大旱に夕立のしたようなもので、その売れたことは実に驚く程の数でした。時節の悪いときに、ドンな文章家ドンな学者が何を著述したって何を飜訳したって、私の出版書のように売れよう訳けはない。畢竟私の才力がエライと云うよりも、時節柄がエラかったのである。又その時代の学者達が筆不調法であったか、馬鹿に青雲熱に浮かされて身の程を知らず時勢を見ることを知らなかったか、マアそのくらいの事だと思われる。兎にも角にも著訳書が私の身を立て家を成す唯一の基本になって、ソレで私塾を開ても、生徒から僅ばかりの授業料を掻集めて私の身に着けるようなケチな事をせずに、全く教師等の所得にすることが出来たその上に、折々私の財嚢から金を出して塾用を弁ずることも出来ました。

所で私の性質は全体放任主義と云おうか、又は小慾にして大無慾とでも云おうか、塾の事に就て朝夕心を用いて一生懸命、些細の事まで種々無量に心配しながら、又一方ではこの塾にブラサガッて居る身ではない、是非とも慶應義塾を永久に遺して置かなければならぬと云う義務もなければ名誉心もないと、初めから安心決定して居るから、随て世の中に怖いものがない。同志の後進生と相談して思う通りに事を行えば、塾中自から独立の気風を生じて世間の反りに合わぬことも多いのと、又一つには私が政治社会に出ることを好まずに在野の身でありながら、口もあれば筆もあるから颯々と言論して、時としてはその言論が政府の癪に障ることもあろう。実を云えば私は政府に対して不平はない、役人達の以前が、無鉄砲な攘夷家であろうとも、人を困らせた奴であろうとも、一切既往を云わず、唯今日の文明主義に変化して開国一偏に国事を経営して呉れゝば遺憾なしと思えども、何かの気まぐれに官民とか朝野とか忌に区別を立てゝ、私塾を疏外し邪魔にして、甚だしきは之を妨げんなんとケチな事をされたのには少々困りました。今これを云えば話も長し言葉も穢くなるから抜きにして、近年帝国議会の開設以来は官辺の風も大に改まりて、余り酷い事はない。何れ遠からぬ中に双方打解けるように成るでしよう。

又私は知る人の為めに尽力したことがあります。是れは唯私の物数寄ばかり、決して政治上の意味を含んで居るのでも何でもない。真実一身の道楽と云おうか、慈悲と云おうか、癇癪と云おうか、マアそんな所から大に働いたことがあります。仙台藩の留守居役を勤めて居た大

童信太夫と云う人があって、旧幕府時代から私はその人と極、懇意にして居ました、と云てその人が蘭学者でもなければ英学者でもない、けれども兎に角に西洋文明の風を好み洋学書生を愛して楽しみにして居る所は、気品の高い名士と申して宜しい。当事諸藩の留守居役でも勤めて居れば、芸者を上げて騒ぐとか、茶屋に集まるとか、相撲を贔屓にするとか云うのが江戸普通の風俗で、大童も大藩の留守居だから随分金廻わりも宜かったろうと思われるに、絶えてそんな馬鹿な遊びをせず、唯何でも書生を養て遣ると云うことが面白くて、書生の世話ばかりして、凡そ当時仙台の書生で大童の家の飯を喰わない者はなかろう。今の富田鉄之助を始め一人として世話にならない者はない。所が幕末の時勢段々切迫して、王政維新の際に仙台は佐幕論に加担して忽ち失敗して、その謀主は但木土佐と云う家老であると定まって、その人は腹を切て仕舞ったその後で、但木土佐が謀主だと云うけれども、その実は謀主の謀主がある、ソレは誰だと云うに大童信太夫、松倉良助の両人だと斯う云う訳けで、維新後その両人は仙台に帰て居た所が、サアその仙台の同藩中の者から妙な事を饒舌り出した、既に政府は朝敵の処分をして事済になっては居るが、内からそんなことを云出して、マダ罪人が幾人もあると訴えたからには、マサか捨てゝも置かれぬと云う所から、久我大納言を勅使として下向を命じた、と云う政府の趣意は甚だ旨い、この時に政府は既に処分済の後だから、成る丈け平穏を主として事を好まぬ。ソコで久我と仙台家とは親類であるから、久我が行けば定めて大目に見るであろう、左すれば怪我人も少ないだろうと云う為めに、態と久我を択んだと云うことは、その時私も窃

に聞きました。政府の略は中々行届いて居る、所が仙台の藩士が有ろうことか有るまいことか、御上使の御下向と聞て景気を催し、生首を七ツとやら持て出たので久我も驚いたと云う、そんな事まで仙台藩士が遣た。その時に松倉も大童も、居れば危ないから脊戸口から駈出して、東京まで逃げて来た、と云うのは両人ともモウちゃんと首を斬られる中に数えられて居たその次第を、誰か告げて呉れる者があって、その儘家を飛出して東京へ来て潜んで居るその中にも、仙台藩の人が在京の同藩人に対して様々残酷な事をして、既に熱海貞爾と云う男は或夜今其処で同藩士に追駈けられたと申して、私方に飛込んで助かった事さえありましたが、この物騒な危ない中にも、大童と松倉はどうやら斯うやら久しく免かれて居て、私は素より懇意だからその居処も知て居れば私の家にも来る。政府の人から見られるのは苦しくない、政府はそんな野暮はしない、そんな者を見ようともしないが、何分にも同藩の者が遣るので誠に危ない。引捕えて、是れが罪人でございと云えば、如何に優しい大目な政府でも唯見ては居られない。実に困た身の有様だと、毎度両人と話す中に、私は両人の為めに同情を表すると云うよりも、寧ろこの仙台藩士の無情残酷と云うことに酷く腹が立ちました。弱武者の意気地のない癖に酷い事をする奴だ、ドウかして呉れたいものだと斯う考えた所で、夫れから私が大童に面会して、ドウか青天白日の身になる工夫がありそうなものだ、私が一つ試みて見よう、何でも是れは一番、藩主を引捕えて談ずるが上策だろうと相談して、私は大きに御苦労な訳けだけれども、日比谷内にある仙台の屋敷に行て、藩主に御目に懸りたいと触込んで、藩主に面会した。ソコで私が

この藩主に向て大に談じられる由縁のあると云うのは、その藩主と云う者は伊達家の分家宇和島藩から養子に来た人で、前年養子になると云うその時に、私が与て大に力がある、と云うのは当時大童が江戸屋敷の留守居で世間の交際が広いと云うので、養子選択の事を一人で担任して居て、或時私に談じて、「お前さんの処（奥平家）の殿様は宇和島から来て居る、その兄さんが国（宇和島）に居る、その人の強弱智愚如何を聞て貰いたいと云うから、早速取調べて返事をして、先ず大童の胸に落ちて、今度は宇和島家の方に相談をして貰いたいと云うので、夫れから又私は麻布竜土の宇和島の屋敷に行て、家老の桜田大炊と云う人に面会してその話をすると、一も二もなく、本家の養子になろうと云うのだから唯難有いとの即答、一切大童と私と二人で周旋して、夫れから表向きになって貰たその人が、その時の藩主になって居るので、ソコで私がその藩主に遇うて、時に尊藩の大童、松倉の両人が、この間仙台から逃げて参たのは、彼方に居れば殺されるから此方に飛出して来たのであるが、彼の両人は今でも見付け出せば藩主に於て本当に殺す気があるのか、但し殺したくないのか、ソレを承りたい。「イヤ決して殺したいなどゝ云う意味はない。「然らばモウ一歩進めて、お前さんはソレを助けると云う工夫をして、ドウかして、命の繋がるようにして遣ては如何で御座る。実はお前さんは大童に向て大に報いなければならぬことがある。知るや知らずや、お前さんが仙台の御家に養子に来たのは斯う云う由来、是れ〳〵の次第であったが、夫れを思うても殺すことは出来まい。屹度御決答を伺いたいと、顔色を正しくして談じた処が、「決して殺す気はないが、是れは大参

事に任かしてあるから、大参事さえ助けると云う気になれば、私には勿論異論はないと云う。マダ若い小供でしたから何事も大参事に任かしてあったのでしょう。「然らばお前さんは確かだな。「確かだ。「ソレならば宜しい、大参事に遇おうと云て、直ぐ側の長屋に居たから其処へ捻込んだ。サア今藩主に話をして来たがドウだ。藩主は大参事次第だと確かに申された。然らば則ち生殺はお前さんの手中にある、殺す気か、殺さぬ気か。仮しや殺す積りで捜し出そうと云ても決して出る気遣いはない。私はちゃんと居処を知て居る、捜せるなら試みに捜して見るが宜い、捕縛すると云うなら私の力の有らん限り隠蔽して見せよう、出来るだけ摘発して見なさい、何時まで経ても無益だ。そんな事をして人を苦しめないでも宜いだろうと、裏表から色々話すと、大参事にも言葉がない。いよ〳〵助ける、助けるけれども薩州辺りから何とか口を添えて呉れると都合が宜いなんて又弱い事を云うから、宜しいと云い棄てゝ、夫れから私は薩州の屋敷に行て、斯う〳〵云う次第柄だから助けて遣て呉れぬかと云うと、大藩とか強藩とか云うので口を出すのは実は迷惑な話だが、何も六かしい事はない、宮内省に弁事と云うものがあるから、その者に就て政府の内意を聞て上げるからと云て、薩摩の公用人が政府の内意を聞て、私の処に報知して呉れたには、兎も角も自訴させるが宜しい、自訴すれば八十日の禁錮ですっかり罪は滅びて仕舞うと云うことが分た。夫れから念の為め私は又仙台の屋敷に行て大参事に面会して、政府の方は自訴すれば八十日と極て居るが、之にお負けが付きはしないか、自訴と云えばこの屋敷に自訴するのであるが、この屋敷で本藩の私を以て八十日を八年にして

遣ろうなんと云うお負けを遣りはしないか、ソレを確かに約束しなければ玉は出されないと、念に念を入れて問答を重ね、最後には若し違約すれば復讐するとまで脅迫して、いよ〳〵大丈夫と安心して、ソレからその翌日両人を連れて日比谷の屋敷に行た、所が屋敷の役所見たような処には罪人、大童、松倉の旧時の属官ばかりが列んで居るだろう、罪人の方が余程エライ、オイ貴様はドウして居るのだと云うような調子で、私は側から見て可笑しかった。夫れから宇田川町の仙台屋敷の長屋の二階に八十日居て、ソレで事が済んで、ソレから二人は晴天白日、外を歩くようになって、その後は今日に至るまでも旧の通りに交際して互に文通して居ます。生涯変らぬ事でしょう。只この事たるや仙台藩の無気力残酷を憤ると同時に、藩中稀有の名士が不幸に陥りたるを気の毒に感じたからのことで、随分彼方此方と歩き廻りましたが、口で云えば何でもないけれども、人力車のある時節ではなし、一切歩いて行かなければならぬから中々骨が折れました。

夫れから榎本（当年の釜次郎、今の武揚）の話をしましょう。前に申す通りに古川節蔵は私の家から脱走したようなもので、後で聞て見れば榎本よりか先きに脱走したそうで、房州鋸山とか何処とかに居た佐幕党の人を長崎丸に乗せて、ソレを箱根山に上げて、ソレで箱根の騒動が起たので、あれは古川節蔵が遣たのだと申します。節蔵が脱走した後で以て、脱走艦は追々函館に行て、夫れから古川の長崎丸と一処に又此方へ侵しに来た、と云うのは官軍方の東艦、即ち私などが亜米利加から持て来た東艦が官軍の船になって居る、ソレを分捕りしようと

云うことを企てゝ、そうして奥州宮古と云う港で散々戦た所が、負けて仕舞て到頭降参して、夫れから東京へ護送せられて、その時は法律も裁判所も何もないときで、糺問所と云う牢屋のようなものがあって、その糺問所の手に掛って古川節蔵と、前年、私が米国に同行した小笠原賢蔵と云う海軍士官と、二人連れで霞ヶ関の芸州の屋敷に監禁されて居る。ソコで私は前には馬鹿をするなと云て止めたのであるけれども、監禁されて居ると云えば可哀想だ。幸い芸州の屋敷に懇意な医者が居るから、その医者の処に行て、ドウかして古川に遇いたいものだが遇わして呉れぬかと云たらば、番人も何も居ないようであったが、その医者の取計いで、遇わして呉れました。夫れから長屋の暗いような処に行て見ると二人がチャンと這入て居るから、私が先ず言葉を掛けて、「ザマア見ろ、何だ、仕様がないじゃないか。止めまいことか、あれ程乃公が止めたじゃないか。今更ら云たって仕方はないが、何しろ喰物が不自由だろう、着物が足りなかろうと云て、夫れから宅に帰て毛布を持て行て遣たり、牛肉の煮たのを持て行て遣たり、戦争中の様子や監禁の苦しさ加減を聞たりした事があるので、私は〔能く〕糺問所の有様を知て居ます。

所が榎本釜次郎だ。釜次郎は節蔵よりか少し遅れて此方に帰て来て同じく糺問所の手に掛て居る。所が頓と音づれが分らない、と云うのは私は榎本と云う男は知て居ることは知て居る、途中で遇て一寸挨拶したぐらいな事はあるが、一緒に相対して共に語り共に論ずると云うような深い交際はない。だから余り気に止めて居なかった。所がこの榎本と云う一体の大本を云う

と、あの阿母さんと云う人は素と一橋家の御馬方で林代次郎と云う日本第一乗馬の名人と云われた大家の娘で、この婦人が幕府の御徒士の榎本円兵衛と云う人に嫁して設けた次男が榎本釜次郎です。ソコでその林の家と私の妻の里の家とは回縁の遠い続合いになって居るから、ソレで前年中は榎本の家内の者も此方に来たことがある。又私の妻も小娘のときには祖母さんに連れられて榎本の家に行たことがあると云うので、少し往来の道筋が通て居て全く知らぬ人でない。所が榎本が今度糺問所の手に掛て居て、その節、榎本の阿母さんも姉さんもお内儀さんも静岡に居るが、一向釜次郎の処から便りがないので大に案じて居ると、丁度その時に榎本の妹の良人に江連加賀守と云う人があって、この人は素と幕府の外国奉行を勤めて居て私は外国方の飜訳方であったから能く知て居る。ソコで江連が静岡から私の処に手紙を寄越して、榎本はこの節どうして居るだろうか、頓と便りがないので母も姉も家内も日夜案じて居る、何でも江戸に来て居ると云う噂は風の便りに聞たけれども、ソレも確めることが出来ない、其れに就て江戸に親戚身寄の者に問合せたけれども、嫌疑を恐れてか只の一度も返辞を寄越した者がない、ソコで君の処に聞きに遣たら何か様子が分るだろうと思うが、ドウぞ知らして呉れぬかと云うことを縷々と書て来ました。所で私はその手紙を見て先ず立腹したと申すは、榎本は兎も角も、その親戚身寄の者が江戸に居ながら嫌疑を恐れて便りをしないとは卑劣な奴だ、薄情な奴だ、実に幕府の人間は皆こんな者だ、好し乃公が一人で引受けて遣ると云う心が頭に浮んで来て、加うるに私は古川節蔵の一件で糺問所の様子を知て居るから、スグ江連の方へ返辞を出

し、榎本は今糺問所に這入て居る、殺されるか助かるかソリャどうも分らない、分らないけれども何しろ煩いもしなければ何もせずに無事に居るので御座る、その事を阿母さん始め皆さんへ伝えて呉れよと云て遣ると、又重ねて手紙を寄越して、老母と姉が東京に出たいと云うが上京しても宜しかろうかと云て来たから、颯々と御出なさい、私方に嫌疑もなんにもない、公然と出て御出でなさいと返辞をすると、間もなく老人と姉さんと母子二人出京して、ソレから糺問所の様子も分り差入物などして居る中に、阿母さんが是非釜次郎に逢いたいと云出した。所が法律も何もない世の中で、何処に訴えて如何しようと云う方角が分らない。ソコで私が一案を工風して、老母から哀願書を差出すことにして、私が認めた案文のその次第は、云々今般倅釜次郎犯罪の儀、誠に以て恐れ入ります、同人事は実父円兵衛存命中斯様々々、至極孝心深き者で、父に事えて平生は云々、又その病中の看病は云々、私は現在ソレを見て居ます、この孝行者にこの不忠を犯す筈はない、彼れに限て悪い根性の者では御在ません、ドウゾ御慈悲に御助けを願います、私はモウ余命もない者で御座るから、いよ〳〵釜次郎を刑罰とならばこの母を身代りとして殺して下さいと云う趣意で、分らない理窟を片言交りにゴテ〳〵厚かましく書て、姉さんのお楽さんに清書をさせて、ソレからお婆さんが杖をついて哀願書を持て糺問所に出掛けた処が、コレは余程監守の人を感動さしたと見え、固よりこんな事で罪人の助かる訳けはないが、とう〳〵仕舞に獄窓を隔てゝ母子面会だけは叶いました。夫れ是れする中に愛に妙な都合の宜い事が出来ましたその次第は、榎本が箱館で降参のとき、自分が嘗て和蘭在留中

学び得たる航海術の講義筆記を秘蔵して居るその筆記の蘭文の書を、国の為めにとて官軍に贈て、その書が官軍の将官黒田良助（黒田清隆）の手にあると云うことを聞きました。所で人は誰か忘れたが、或日その書を私方に持参して、何の書だか分らぬがこの蘭文を飜訳して貰いたいと云うから、之を見れば兼て噂に聞た榎本の講義筆記に違いない。是れは面白いと思い、蘭文飜訳は易いことであるのを、私は先方に気を揉ませる積りで態と手を着けない。初めの方四、五枚だけ丁寧に分るように飜訳して、原本に添えて返して遣て、是れは如何にも航海にはなくてはならぬ有益な書に違いない、巻初の四、五枚を見ても分る、所が版本の原書なれば飜訳も出来るが、講義筆記であるからその講義を聴聞した本人でなければ何分にも分り兼ねる、誠に可惜い宝書で御座ると云て、私は榎本の筆記と知りながら知らぬ風をして唯飜訳の云々で気を揉まして、自然に榎本の命の助かるように、云わば伏線の計略を運らした積りである。又その時代には黒田も私方に来れば、私も黒田の家に行たこともある。何時か何処か時も処も忘れましたが、払が黒田に写真を贈たことがあるその写真は、亜米利加の南北戦争、南部敗北のとき、南部の大統領か大将か何でも有名の人が婦人の着物を着て逃げ掛けて居る写真で、私がその前年、亜米利加から持て帰て一枚あったから黒田に贈て、是れは亜米利加の南部の何と云う人で、逃げる時に斯う云う姿で逃げたと云う、敢て命を惜むでもなかろうけれども、又一方から云えば命は大切な者だ、何としても助かろうと思えば斯く見苦しい姿をしても逃げるのが当然の道である。人間と云うものは一度び命を取れば後で幾ら後悔しても取返しが付かない。ドウも

榎本は大変な騒ぎをした男であるが、命だけは取らぬようにした方が得じゃないか、何しろこの写真を進上するから御覧なさいと云て、濃に話したこともある。爾うした所で、ドウやら斯うやらする間にいよ〳〵助かることになった、けれどもその助かると云うのは固より私の周旋したばかりで助かったと云う訳けではない、その時の真実内情の噂を聞けば長州勢はドウも榎本等を殺すような勢があった、ソコで薩州の藩士がソレを助けようと云う意味があったと云うから、長州勢に任かせたら或は殺されたかも知れぬ。何れ大西郷などがリキンでとう〳〵助かるようになったのでしょう。是れは私の為めには大童信太夫よりか余程骨の折れた仕事でした。彼れ此れする中に私が煩い付て、その事は病後まで引張て居て、病気全快に及ぶと云うときだから、明治三年にいよ〳〵放免になりましたが、唯残念で気の毒なのは、阿母さんは愛子の出獄前に病死しました。

　所が前申す通り榎本釜次郎と私とは刎頸の交と云う訳けではなし、何もそんなに力を入れる程の親切のあろう訳けもない、只仙台藩士の腰抜けを憤ったと同じ事で、幕府の奴の如何にも無気力不人情と云うことが癪に障たので、ソコでどうでも斯うでも助けて遣ろうと思て駈廻わりましたが、その節、毎度妻と話をして今でも覚えて居ます、私の申すに、扨榎本の為めに今日はこの通りに骨を折て居るが、是れは唯人間一人の命を助けるばかりの志で外になんにも趣意はない、元来榎本と云う男は深く知らないが随分何かの役に立つ人物に違いはない、少し気色の変た男ではあるが、何分にも出身が幕府の御家人だから殿様好きだ、今こそ牢に這入て居

るけれども、是れが助かって出るようになれば、後日或は役人になるかも知れぬ、その時は例の通りの殿様風でぴん〳〵するような事があるかも知れない、その時になって殿様のぴん〳〵を見たり聞たりして、ヤレ昔を忘れて厚かましいだの可笑しいだのと云う念が兎の毛ほども腹の底にあっては、是れは榎本の悪いのでなく此方の卑劣と云うものだから、そんな事なら私は今日唯今から一切の周旋を止めるがドウだと妻に語れば、妻も私と同説で、左様な浅ましい卑しい了簡は決してないと申して、夫妻固く約束したことがあるが、後日に至て私の云た通りになったのが面白い。榎本が段々立身して公使になったり大臣になったりして立派な殿様になったのは、私が占八卦の名人のようだけれども、私の処にはチャント説が極まって居て、一切の事情を知る者は私と妻と両人より外にないから、榎本がドウなろうと私の家で噂をする者もない、子供などは今度のこの速記録を見て始めて合点するでしょう。

一身一家経済の由来

頼母子の金弐朱を返す是れから私が一身一家の経済の事を陳べましょう。凡そ世の中に何が怖いと云ても、暗殺は別にして、借金ぐらい怖いものはない。他人に対して金銭の不義理は相済まぬ事と決定すれば、借金はます〳〵怖くなります。私共の兄弟姉妹は幼少の時から貧乏の味を嘗め尽して、母の苦労した様子を見ても生涯忘れられません。貧小士族の衣食住その艱難

の中に、母の精神を以て自から私共を感化した事の数々あるその一例を申せば、私が十三、四歳のとき母に云付けられて金子返済の使をしたことがあります。その次第柄は斯う云うことです。天保七年、大阪に於て私共が亡父の不幸で母に従て故郷の中津に帰りましたとき、家の普請をするとか何とか云うに、勝手向は勿論不如意ですから、人の世話で頼母子講を拵えて一口金二朱ずつで何両とやら纏まった金が出来て一時の用を弁じて、その後、毎年幾度か講中が二朱ずつの金を持寄り、鬮引にて満座に至りて皆済になる仕組であるが、大家の人は二朱計りの金の為めに何年もこんな事に関係して居るのは面倒だと云う所から、一時二朱の掛金を出したまゝに手を引く者がある。之を掛棄と云います。その実は講主が人に金を唯貰うような事なれども、一般の風俗で左まで世間に怪しむ者もない。所が福澤の頼母子に大阪屋五郎兵衛と云う廻船屋が一口二朱を掛棄にしたそうです。勿論私の三、四歳頃か幼少の時の事で何も知りませんでしたが、十三、四歳のとき或日母が私に申すに、「お前は何も知らぬ事だが、十年前に斯う〳〵云う事があって大阪屋が掛棄にして、福澤の家は大阪屋に金二朱を貰うたようなものだ。誠に気に済まぬ。武家が町人から金を恵まれて夫れを唯貰うて黙て居ることは出来ません。疾うから返したい〳〵と思ては居たがドウも爾う行かずに、ヤツと今年は少し融通が付いたから、この二朱のお金を大阪屋に持て行て厚う礼を述べて返して来いと申して、その金を紙に包んで私に渡しました。ソレから私は大阪屋に参て金の包みを出すと、先方では意外に思うたか、「御返済など却て痛入ります。最早や古い事です。決してそんな御心配には及びませんと云て

頻りに辞退すれども、私は母の云うことを聞て居るから、是非渡さねばならぬと、互に押し返して口喧嘩のように争うて、金を置て帰たことがあります。今はハヤ五十二、三年も過ぎてむかし〳〵の事であるが、そのとき母に云付けられた口上も、先方の大阪屋の事も、チャンと記憶に存して忘れません。年月日は覚えないが何でも朝のことゝ思う、豊前中津下小路の西南の角屋敷、大阪屋五郎兵衛の家に行て主人五郎兵衛は留守で、弟の源七に金を渡したと云うことまで覚えて居ます。こんなことが少年の時から私の脳中に遺て居るから、金銭の事に就ては何としても大胆な横着な挙動は出来られません。

金がなければ出来る時まで待つソレから段々成長して、中津に居る間は漢学修業の傍に内職のような事をして多少でも家の活計を助け、畑もすれば米も搗き飯も炊き、鄙事多能、あらん限りの辛苦して貧小士族の家に居り、年二十一のとき始めて長崎に行て、勿論学費のあろう訳けもない、寺の留守番をしたり砲術家の食客になったりして、不自由ながら蘭学を学んで、その後大阪に出て、大阪の緒方先生の塾に修業中も、相替らず金の事は恐ろしくて唯の一度でも他人に借りたことはない。人に借用すれば必ず返済せねばならぬ。当然のことで分り切て居るから、その返済する金が出来る位ならば、出来る時節まで待て居て借金はしないと、斯う覚悟を極めて、ソコで二朱や一分は扨置き、百文の銭でも人に借りたことはない。チャンと自分の金の出来るまで待て居る。夫れから又私は質に置たことがない。着物は塾に居るときも故郷の母が夏冬手織木綿の品を送て呉れましたが、ソレを質に置くと云えば何時か一度は請還さ

なければならぬ。請還す金があるならその金の出来るまで待て居るが宜いと斯う思うから、金の入用はあっても只の一度も質に入れたことがない。けれどもいよ〳〵金に迫て如何してもなくてならぬと云うときか、恥かしい事だが酒が飲みたくて堪らないと云うようなことがあれば、思切てその着物を売て仕舞います。例えばその時に浴衣一枚を質に入れゝば弐朱貸して呉れる、之を手離して売ると云えば弐朱と弐百文になるから売ることにすると云うような経済法にして、且つ又私は写本で銭を取ることもしない。大事な修業の身を以て銭の為めに時を費すは勿体ない、吾身の為めには一刻千金の時である、金がなければ唯使わぬと覚悟を定めて、大阪に居る間とう〳〵一銭の金も借用したことなくして、その後江戸に来ても同様、仮初にも人に借用したことはない。折節自分で想像しては唯怖くて堪らない、借金が出来て人から催促されたら如何だろう、世間の人、朋友の中にも毎度ある話だ、借金が出来て返さなければならぬと云て、此方から借りては彼方に返し、又彼方から借りては此方に返すと云う者があるが、私は少しも感服しない。誠に気の済まぬ話で、金を借りて返さなくてならぬなんて嘸忙しい事であろう、能くもアレで一日でも半日でも安んじて居られたものだと思うて、殆んど推量が出来ない。一口に云えば私は借金の事に就て大の臆病者で、少しも勇気がない。人に金を借用してその催促に逢うて返すことが出来ないと云うときの心配は、恰も白刃を以て後ろから追蒐けられるような心地がするだろうと思います。

駕籠に乗らず下駄、傘を買うソコで私が金を大事にする心掛けの事実に現われた例を申せば、

江戸に参てから下谷練塀小路の大槻俊斎先生の塾に朋友があって、私はその時鉄砲洲に居たが、その朋友の処へ話に行て、夜になって練塀小路を出掛けて、和泉橋の処に来ると雨が降出した。こりやドウも困たことが出来た、迚も鉄砲洲までは行かれないと思うと、和泉橋の側に辻駕籠が居たから、その駕籠屋に鉄砲洲まで幾らで行くかと聞たら、三朱だと云う。ドウも三朱と云う金を出してこの駕籠に乗るは無益だ、此方は足がある。ソレは乗らぬことにして、その少し先きに下駄屋が見えるから、下駄屋へ寄て下駄一足に傘一本買て両方で二朱余り、三朱出ない。夫れから雪駄を懐に入れて、下駄を穿て傘をさして鉄砲洲まで帰て来た。デその途中私は独り首肯き、この下駄と傘が又役に立つ、駕籠に乗たって何も後に残るものはない、こんな処が慎むべきことだと思たことがあります、マアその位に注意して居たから、外は推して知るべし、一切無駄な金を使たことがない。紙入に金を入れて置く、ソレは二分か三分か入れてある、入れてあるけれども何時まで経てもその金のなくなったことがない。酒は固より好きだから朋友と酒を飲みに行くことはある、ソンな時には金も入りますが、唯独りでブラリと料理茶屋に這入て酒を飲むなぞと云うことは仮初にもしたことがない。ソレ程に私が金を大事にするから、又同時に人の金も決して貪らない。ソリャ以前奥平家に対して朝鮮人を気取たのは別な話にして、その外と云うのは決して金は貪らないと、自身独立、自力自活と覚悟を極めました。

事変の当日、約束の金を渡すソコで以て慶応三年、即ち王政維新の前年の冬、芝新銭座に有馬

家（大名）の中屋敷が四百坪ばかりあるその屋敷を私が買いました。徳川の昔からの法律に依ると、武家屋敷は換え屋敷を許しても売買は許さないと云うのが掟であった。所が徳川もその末年になると様々な根本的改革と云うような事が行われて、武家屋敷でも代金を以て売買勝手次第と云うことになって、新銭座の有馬の中屋敷が売物になると人の話を聞て、同じ新銭座住居の木村摂津守の用人大橋栄次と云う人に周旋を頼んで、その有馬屋敷を買うことに約束して、価は三百五十五両、その時の事だから買うと云た所が、武家と武家との間で手金だの証書取換せなどゝ云うことのあろう訳けはない、唯売りましょう然らば則ち買いましょうと云う丈けの話で約束が出来て、その金の受取渡しは何時だと云うと、十二月二十五日に金を相渡し申す、請取ろうと、チャンと約束が出来て居て、夫れから私はその前日、三百五十五両の金を揃えて風呂敷に包んで、翌早朝新銭座の木村の屋敷に行て見ると、門が締て潜戸まで鎖してある。夫れから門番に、此処を明けて呉れ、何で締めて置くかと云うと、「イーエ此処は明けられません。「明けられませんたって福澤だと云うのは、私は亜米利加行の由縁で、木村家には常に出入して家の者のようにして居たから、門番も福澤と聞て潜戸を明けて呉れたは呉れたが、何だか門前が騒々しい、ドタバタ遣て居る。何事か知らんと思て南の方を見ると、真黒な煙が立て居る。ソレで木村の玄関に上て大橋に遇て、大変騒々しいが何だと云うと、大橋がヒソ〳〵して、「お前さんは何も知らぬか、大変な事が出来ました、大騒動だ、酒井の人数が三田の薩州の屋敷を焼払おうと云う、ドウもそりや大騒動、戦争で御座ると云うから、私も驚いて、ソ

リャ少しも知らなかった、成程ドウも容易ならぬ形勢だが、夫れは夫れとして、時にあの屋敷の金を持て来たから渡してお呉んなさいと云うと、大橋が、途方もない、屋敷どころの話じゃない、何の事だ、モウこりゃ江戸中の屋敷が一銭の価なしだ、ソレを屋敷を買うなんてソンな馬鹿らしい事は一切罷めだ、マアそんな事を為なさるなと云て取合ぬから、私は不承知だ。ソリャ爾うでない、今日渡と云う約束だからこの金は渡さなくてはならぬと云うと、大橋は脇の方に向て、「約束したからと云て時勢に依たものだ、この大変な騒動中に屋敷を買うと云うような馬鹿気たことがあるものか。仮令い今買えばと云ても、三百五十五両を半価にしろと云えば半価にするに違いない、只の百両でも悦んで売るだろう、兎に角に見合せだ、罷めだ〳〵と云て相手にならぬから、私は押返して、「イヤそれは出来ません。大橋さん、能くお聞きなさい。先達これを有馬から買おうと云うときに、何と貴方は約束なすったか、只十二月の廿五日即ち今日、金を渡そう、受取ろうと、ソレより外に何にも約束はなかった。若し万が一、世の中に変乱があれば破約する、その価を半分にすると云う言葉が、約束の中にあるかないかと云うに、そんな約束はないではないか。仮令い約条書がなかろうと、人と人と話したのが何寄の証拠だ、売買の約束をした以上は当然に金を払わぬこそ大きな間近いだ、何でも払わんければならぬ。加之ならず、マダ私が云うことがある。若し大橋さんの言う通りにこの三百五十五両を半価にせよとか百両にせよとか云えば、時節柄有馬家では承知するであろう。ソコで私が三百五十五両の物を百両に買たと斯うした所で、この変乱がどんなになるか分らない。今あ

の通り酒井の人数が三田の薩州屋敷を焼払て居るが、是れが何でもない事で天下泰平、安全の世の中になるまいものでもない。扨いよ〳〵天下泰平になって、私が彼の買屋敷の内に住込んで居る。スルと有馬の家来も大勢あるから、私の処の門前を通る度に睨んで通るだろう、彼の屋敷は三百五十五両の約束をしたが、金の請取渡しのその日に三田に大変乱があったその為めに百両で売た、福澤は二百五十五両得をして、有馬家では二百五十五両損をしたと、通る度に睨んで通るに違いない。口に言わないでも心に爾う思て忌な顔をするに極て居る。私はソンな不愉快な屋敷に住もうと思わない。何は扨置き、構うことはない、ドウぞこの金を渡して下ださい。皆無損をしても宜しい。この金を唯渡した計りで、その屋敷に住まうどころではない、逃出して行くと云うような大騒動があるかも知れない。有ればあった時の話だ。人間世界の事は何が何やら分らない、確かに生きて居ると思う人が死んだりする。矧んや金だ、渡さなければならぬと捩くれ込んで、到頭持て行て貰いました。爾う云う訳けで誠に私が金と云うことに就て極めて律義に正しく遣て居たと云うのは、是れは矢張り昔の武家根性で、金銭の損得に心を動かすは卑劣だ、気が餒えると云うような事を思たものと見えます。

子供の学資金を謝絶すそれに又似寄たことがある。明治の初年に横浜の或る豪商が学校を拵えて、この慶應義塾の若い人を教師に頼んでその学校の始末をして居ました。爾うするとその主人は私に親から新塾に出張して監督をして貰いたいと云う意があるように見える。私の家にはそのとき男子が二人、娘が一人あって、兄が七歳に弟が五歳ぐらい。是れも追々成長するに違

いない、成長すれば外国に遊学させたいと思て居る、所が世間一般の風を見るに、学者とか役人とか云う人が動もすれば政府に依頼して、自分の子を官費生にして外国に修業させることを祈て、ドウやら斯うやら周旋が行届て目的を達すると獲物でもあったように悦ぶ者が多い。嗚呼見苦しい事だ、自分の産んだ子ならば学問修業の為めに洋行させるも宜しいが、貧乏で出来なければ為せぬが宜しい、夫れを乞食のように人に泣付て修業をさせて貰うとは扨も〳〵意気地のない奴共だと、心窃に之を愍笑して居ながら、私にも男子が二人ある、この子が十八、九歳にもなれば是非とも外国に遣らなければならぬが、先だつものは金だ、どうかしてその金を造り出したいと思えども、前途甚だ遥なり、二人遣て何年間の学費は中々の大金、自分の腕で出来ようか如何だろうか誠に覚束ない、困たことだと常に心に思て居るから、敢て愧ることでもなし、颯々と人に話して、金が欲しい、金が欲しい、ドウかして洋行をさせたい、今この子が七歳だ五歳だと云うけれども、モウ十年経てば仕度をしなければならぬ、ドウもソレまでに金が出来れば宜いがと、人に話して居ると、誰かこの話を例の豪商にも告げた者があるか、或日私の処に来て商人の云うに、お前さんに彼の学校の監督をお頼み申したい、斯く申すのは月に何百円とかその月給を上げるでもない、態々月給と云ては取りもしなかろうが、茲に一案があります、外ではない、お前さんの小供両人、彼のお坊ッちゃん両人を外国に遣るその修業金になるべきものを今お渡し申すが如何だろう、此処で今五千円か一万円ばかりの金をお前さんに渡す、所で今要らない金だからソレを何処へか預けて置く、預けて置く中に小供衆が成長

する、成長して外国に行こうと云うときには、その金も利倍増長して確かに立派な学費になって、不自由なく修業が出来ましょう、この御相談は如何で御座ると云い出した。成程是れは宜い話で、此方はモウ実に金に焦れて居るその最中に、二人の子供の洋行費が天から降て来たようなもので、即刻応と返辞をしなければならぬ処だが、私は考えました。待て霎時、どうも爾うでない、抑も乃公が彼の学校の監督をしないと云うものは、為ない所以があって為ないとチャンと説を極めて居る。ソコで今金の話が出て来て、その金の声を聞き前説を変じて学校監督の需に応じようと云えば、前に之を謝絶したのが間違いか、ソレが間違いでなければ今その金を請取るのが間違いである。金の為めに変説と云えば、金さえ見れば何でもすると斯う成らなければならぬ。是れは出来ない。且つ又今日金の欲しいと云うのは何の為めに欲しいかと云えば、小供の為めだ。小供を外国で修業させて役に立つように為よう、学者に為ようと云う目的であるが、子を学者にすると云う事が果して親の義務であるかないか、是れも考えて見なければならぬ。家に在る子は親の子に違いない。違いないが、衣食を授けて親の力相応の教育を授けて、ソレで沢山だ。如何あっても最良の教育を授けなければ親たる者の義務を果さないと云う理窟はない。親が自分に自から信じて心に決して居るその説を、子の為めに変じて進退すると云ては、所謂独立心の居処が分らなくなる。親子だと云ても、親は親、子は子だ。その子の為めに節を屈して子に奉公しなければならぬと云うことはない。宜しい、今後若し乃公の子が金のない為めに十分の教育を受けることが出来なければ、是れはその子の運命だ。幸にして金

が出来れば教育して遣る、出来なければ無学文盲のまゝにして打遣て置くと、私の心に決断して、扨先方の人は誠に厚意を以て話して呉れたので、固より私の心事を知る訳けもないから、体能く礼を述べて断りましたが、その問答応接の間、私は眼前に子供を見てその行末を思い、又顧みて自分の身を思い、一進一退これを決断するには随分心を悩ましました。その話は相済み、その後も相替らず真面目に家を治めて著書飜訳の事を勉めて居ると、存外に利益が多くて、マダその二人の小供が外国行の年頃にならぬ先きに金の方が出来たから、小供を後廻しにして中上川彦次郎を英国に遣りました。彦次郎は私の為めに只た一人の甥で、彼方も亦只た一人の叔父さんで外に叔父はない、私も亦彦次郎の外に甥はないから、先ず親子のようなものです。彼れが三、四年も英国に居る間には随分金も費しましたが、ソレでも後の小供を修業に遣ると云う金はチャンと用意が出来て、二人とも亜米利加に六年ばかり遣て置きました。私は今思い出しても誠に宜い心持がします。能くあの時に金を貰わなかった、貰えば生涯気掛りだが、宜い事をしたと、今日までも折々思い出して、大事な玉に瑾を付けなかったような心持がします。乗船切符を偽らず右様な大金の話でない、極々些細の事でも一寸と胡麻化して貪るようなことは私の虫が好かない。明治九年の春、私が長男一太郎と次男捨次郎と両人を連れて上方見物に行くとき、一は十二歳余り、捨は十歳余り、父子三人従者も何もなしに、横浜から三菱会社の郵便船に乗り、船賃は上等にて十円か十五円、規則の通りに払うて神戸に着船、金場小平次と云う兼て懇意の問屋に一泊、ソレから大阪、京都、奈良等、諸所見物して神戸に帰て来て、復

た三菱の船に乗込むとき、問屋の番頭に頼んで乗船切符を買い、サア乗込みと云うときにその切符を請取て見れば、大人の切符が一枚と子供の半札が二枚あるから、番頭を呼んで、「先刻申した通り切符は大人が二枚、小供が一枚の筈だ、何かの間違いであろう、替えて貰いたいと云うと、番頭は落付払い、「ナーニ間違いはありません。大きいお坊ッちゃんの御年も御誕生も聞きました。正味十二と二、三ヶ月、半札は当然です。規則には満十二歳以上なんて書てありますが、満十三、四歳まで大人の船賃を払う者は一人もありはしませんと云うから、私は承知しない。「二、三ヶ月でも二、三日でも規則は規則だ、是非規則通りに払うと云うと、番頭も中々剛情で、ソンな馬鹿な事は致しませんと云て議論のように威張るから、「何でも宜しい。乃公は乃公の金を出して払うものを払い、貴様には唯その周旋を頼む丈けだ。何も云わずに呉れろと申して、何円か金を渡して、乗船前、忙しい処に切符を取替えた事がある。是れは何も珍らしくない、買物の代を当然に払うまでの事だから、世間の人も左様であろうと思うけれども、今日例えば汽車に乗て見ると、青い切符を以て一寸と上等に乗込む人もあるようだ。過日も横浜から例の青札を以て上等に飛込み神奈川に上った奴がある。私は箱根帰りに丁度その列車に乗て居て、ソット奴の手に握てる中等切符を見て、扨々賤しい人物だと思いました。本藩の扶持米を辞退す是れまで申した所では何だか私が潔白な男のように見えるが、中々爾うでない。この潔白な男が本藩の政庁に対しては不潔白とも卑劣とも名状すべからざる挙動をして居ました。話は少々長いが、私が金銭の事に付き数年の間に豹変したその由来を語りまし

よう。王政維新のその時に、幕府から幕臣一般に三ヶ条の下問を発し、第一、王臣になるか、第二、幕臣になって静岡に行くか、第三、帰農して平に民になるかと云て来たから、私は無論帰農しますと答えて、その時から大小を棄てゝ丸腰になって仕舞い、ソコで是れまで幕府の家来になって居るとは云いながら、奥平からも扶持米を貰て居たので、幕臣でありながら半ばは奥平家の藩臣である。然るに今度いよ〳〵帰農と云えば、勿論幕府の物を貰う訳けもないから、同時に奥平家の方から貰て居る六人扶持か八人扶持の米も、御辞退申すと云て返して仕舞いました、と申すはその時に私の生活はカツ〳〵出来るか出来ないかと云う位であるが、併しドウかしたなら出来ないことはないと大凡その見込が付て居ました。前にも云う通り私は一体金の要らない男で、一方では多少の著訳書を売て利益を収め、又一方では頓と無駄な金を使わないから多少の貯蓄も出来て、赤貧ではない。是れから先き無病堅固にさえあれば、他人の世話にならずに衣食して行かれると考を定めて、ソレで男らしく奥平家に対しても扶持方を辞退しました。スルと奥平の役人達は却て之を面白く思わぬ。「ソンナにしなくても宜い、是れまで通り遣ろうと云て、その押問答がなか〳〵喧ましい。妙なもので、此方が貰おうと云うときには容易に呉れぬものだが、要らないと云うと向うが頻りに強うる。ソレで仕舞には、ドウもお前は不親切だ、モウ一歩進めると藩主に対して薄情不忠な奴だと云うまでになって来た。夫れから此方も意地になって、「ソレなら戴きましょう。戴きましょうだが、毎月その扶持米を精げて貰いたい。モ一つ序でにその米を飯か粥に焚て貰いたい。イヤ毎月と云わずに毎日貰い

たい。都ての失費は皆米の内で償いさえすれば宜いから爾うして貰いたい。ソレでドウだと申すに、御扶持を貰わなければ不親切不忠と云われる、不忠の罪を犯すまでにして御辞退申す程の考はないから慎んで戴きます。願の通りその御扶持米が飯か粥になって来れば、私は新銭座私宅近処の乞食に触を出して、毎朝来い、喰わして遣ると申して、私が殿様から戴いた物を、私宅の門前に於て難渋者共に戴かせます積りですと云うような乱暴な激論で、役人達も困たと見え、とう〳〵私の云う通りに奥平藩の縁も切れて仕舞いました。

本藩に対してはその卑劣朝鮮人の如し斯う云えば私が如何にも高尚廉潔の君子のように見えるが、この君子の前後を丸出しにすると実は大笑いの話だ。是れは私一人でない、同藩士も同じことだ。イヤ同藩士ばかりでない、日本国中の大名の家来は大抵皆同じことであろう。藩主から物を貰えば拝領と云て、之に返礼する気はない。馳走になれば御酒下されなんと云て、気の毒にも思わず唯難有いと御辞儀をするばかりで、その実は人間相互いの附合いと思わぬから、金銭の事に就ても亦その通りでなければならぬ。私が中津藩に対する筆法は、金の辞退どころか唯取ること計り考えて、何でも構わぬ、取れる丈け取れと云う気で、一両でも十両でも旨く取出せば、何だか猟に行て獲物のあったような心持がする。拝借と云て金を借りた以上は此方のもので、返すと云う念は万々ない。仮初にも自分の手に握れば、借りた金も貰た金も同じことで、後の事は少しも思わず、義理も廉恥もないその有様は、今の朝鮮人が金を貪ると何にも変たことはない。嘘も吐けば媚も献じ、散々なことをして、藩の物を只取ろう〳〵とばかり

考えて居たのは可笑しい。

百五十両を掠め去るその二、三ヶ条を云えば、小幡その外の人が江戸に来て居て、私が一切引受けて世話をして居るときに、藩から勿論ソレに立行く丈けの金を呉れよう訳けはない。ドウやら斯うやら種々様々に、私が有らん限りの才覚をして金を造た。例えば当時横浜に今のような欧字新聞がある、一週に一度ずつの発行、その新聞を取寄せて、ソレを飜訳しては、佐賀藩の留守居とか仙台藩の留守居とか、その外一、二藩もありました、ソンな人に話を付けて、ドウぞ飜訳を買て貰いたいと云て多少の金にするような工風をしたり、又は私が外国から持て帰た原書の中の不用物を売たりして金策をして居ましたが、何分大勢の書生の世話だからその位の事では迚も追付く訳けのものでない。所でその時江戸の藩邸に金のあることを聞込んだから、即案に宜い加減な事を書立て、何月何日頃何の事で自分の手に金の這入る約束があると云うような嘘を拵えて、誠めかしく家老の処に行て、散々御辞儀をして、斯う〳〵云う訳けですから暫時百五十両丈けの御振替を願いますと極手軽に話をすると、家老は逸見志摩と云う誠に正しい気の宜い人で、暫時のことならば拝借仰付けられても宜かろうと云うような曖昧な答をしたから、その答を聞くや否やすぐにその次の元締役の奉行の処に行て、今御家老志摩殿に斯う云う話をした所が、貸して苦しくないと御聞済になったから、今日その御金を請取りたいと云うと、奉行は不審を抱き、ソレは何時の事だか知らぬがマダその筋から御沙汰にならぬと妙な顔色して居るから、仮令い御沙汰にならぬでもモウ事は済んで居ます、唯金をさえ渡して下され

ば宜しい、何も六かしい事はないと段々説た、所が家老衆が爾う云えば、御金のないことはない、余り不都合でもなかろうとその答も曖昧であったが、此方はモウ済んだ事にして仕舞て、その足で又その下役の元締小吟味、是れが真実その金庫の鍵を持て居る人であるその小吟味方の処へ行て、只今金を出して貰いたい、斯う〳〵云う次第で決してお前さんの落度になりはしない、正当な手順で、僅か三ヶ月経てば私の手にちゃんと金が出来るからすぐに返上すると云て、何の事はない、疾雷耳を掩うに違あらず、役人と役人と評議相談のない間に、百五十両と云う大金を掠めて持て来たその時は、恰も手に竜宮の珠を握りたるが如くにして、且つその握た珠を竜宮へ返えそうなんと云う念は毛頭ない。誠に不埒な奴さ。夫れで以て一年ばかり大に楽をしたことがあります。

原書を名にして金を貪る又或る時、家老奥平壱岐の処に原書を持参して、御買上を願うと持込んだ所が、この家老は中々黒人、その原書を見て云うに、是れは宜い原書だ、大層高価のものだろうと頻りに賞めるから、此方はチャンと向うの腹を知て居る、有益な本で実価は安いなどと威張て出掛けると、ソレじゃ外へ持て行けと云うに極て居るから、一番、その裏を掻て、「左様です、原書は誠に必要な原書ですが、之を私が奥平様にお買上げを願うと云うのは、この代金を私が請取て、その金は私が使て、爾うしてその御買上げになった原書を私が拝借しようと斯う云うので、正味を申せば私がマア金を唯貰おうと云う策略でござる。斯くの通り平たく心の実を明らさまに申上げるのだから、ドウかこの原書を名にして金を下さい。一口に申せ

ば私は体の宜い乞食、お貰い見たようなものでござると打付けた所が、家老も仕方がない、その訳けは、家老が以前に自分の持て居る原書一冊を奥平藩に二十何両かで売付けたことがあるその事を聞込んだから私が行たので、若しも否めばお前さんはドウだと暴れて遣ろうと云う強身の伏線がある、丸で脅迫手段だから、家老も仕方なしに承知して、私も矢張りその原書を名にして先例に由り二十何両かの金を取て、その内十五両を故郷の母の方に送て一時の窮を凌ぎました。

人間は社会の虫なりと云うような次第で、ソレはソレは卑劣とも何とも実に云いようのない悪い事をして一寸とも愧じない。仮初にも是れはドウも有間敷事だなんと思たことがない。取らないのは損だとばかり、猟に行けば雀を撃たより雁を取た方がエライと云う位の了簡で、旨く大金を掠め取れば心窃に誇て居るとは、実に浅ましい事であるのみならず、本来私の性質がソレ程卑劣とも思わない、随分家風の悪くない家に生れて、幼少の時から心正しき母に育てられて、苟も人に交て貪ることはしないと説を立てゝ居る者が、何故に藩庁に対してばかり斯くまでに破廉恥なりしや、頓と訳けが分らぬ。シテ見ると人間と云う者はコリャ社会の虫に違いない。社会の時候が有りのまゝに続けば、その虫が虫を産んで際限のない所に、この蛆虫即ち習慣の奴隷が、不図面目を改めると云うには、社会全体に大なる変革激動がなければならぬと思われる。ソコで三百年の幕府が潰れたと云えば、是れは日本社会の大変革で、随分私の一身も始めて夢が醒めて、藩庁に対する挙動も改まらなければならぬ。是れまで自分が藩庁に向て愧

ずべき事を犯したのは、畢竟藩の殿様など云う者を崇め奉って、その極度はその人を人間以上の人と思い、その財産を天然の公共物と思い、知らず識らず自から鄙劣に陥りしことなるが、是れからは藩主も平等の人間なりと一念こゝに発起して、この平等の主義からして物を貪るは男子の事に非ずと云う考えが浮かんだのだろうと思われる。その時には特に考えたこともない、説を付けたこともないが、私の心の変化は恐ろしい。何故に以前藩に対してあれほど卑劣な男が後に至ては折角呉れようと云う扶持方をも一酷に辞退したか、辞退しなくっても世間に笑う者もないのに、打て変た人物になって、この間まで丸で朝鮮人見たような奴が、恐ろしい権幕を以て呉れる物を刎返して、伯夷、叔斉のような高潔の士人に変化したとは、何と激変ではあるまいか。他人の話ではない、私が自分で自分を怪しむことであるが、畢竟封建制度の中央政府を倒してその倒るゝと共に個人の奴隷心を一掃したと云わなければならぬ。

支那の文明、望むべからず之を大きく論ずれば、彼の支那の事だ、支那の今日の有様を見るに、何としても満清政府をあの儘に存じて置て、支那人を文明開化に導くなんと云うことは、コリや真実無益な話だ。何は扨置き老大政府を根絶やしにして仕舞て、ソレから組立てたらば人心こゝに一変することもあろう。政府に如何なるエライ人物が出ようとも、百の李鴻章が出て来たって何にも出来はしない。その人心を新にして国を文明にしようとならば、何は兎もあれ、試みに中央政所を潰すより外に妙策はなかろう。之を潰して果して日本の王政維新のように旨く参るか参らぬか、屹と請合は難けれども、一国独立の為めとあれば試みにも政府を倒すに会

釈はあるまい、国の政府か、政府の国か、このくらいの事は支那人にも分る筈と思う。旧藩の平穏は自から原因あり私の経済話から段々枝がさいて長くなりましたが、序ながら中津藩の事に就て、モ少し云う事があります。前に申す通り私は勤王佐幕など云う天下の政治論に少しも関係しないのみならず、奥平藩の藩政にまでも至極淡泊にあったと云うその為めに、茲に随分心に快いことがある、と云うのはあの王政維新の改革が行われたときに、諸藩の事情を察するに、勤王佐幕の議論が盛で、動もすれば旧大臣等に腹を切らせるとか、大英断を以て藩政改革とか云う為めに、一藩中に争論が起り、党派が分れて血を流すと云うようなことは、何れの藩も十中八、九、皆ソレであったその時に、若し私に政治上の功名心があって、藩に行て佐幕とか勤王とか何か云出せば、必ず一騒動を起すに違いない。所が私は黙て居て一寸も発言せず、人が噂をすれば、爾う喧しく云わんでも宜い、棄てゝ置きなさいと云うように、極淡泊にして居たから、中津の藩中が誠に静で、人殺しも何もなかったのはソレが為めだろうと思います。人殺しどころか人を黜陟したと云うこともなかった。

藩の重役に因循姑息説を説くソコで私が明治三年、中津に母を迎えに行たことがある、所がその時は藩政も大いに変て居まして、福澤が東京から来たから話を聞こうではないかと云うようなことになって、家老の邸に呼ばれて行た、所が藩の役人と云う有らん限りの役人重役が皆其処に出て居る。案ずるに、私が行たらば嘸ドウも大変な事を云うだろうと待受けて居たに違いない。夫れから私が其処に出席すると、重役達の云うに、藩はドウしたら宜かろうか、方向に

迷て五里霧中なんかんと、何か心配そうに話すから、私は之に答えて、イヤもう是れはドウするにも及ばぬことだ、能く諸藩では或は禄を平均すると云うような事で大分騒々しいが、私の考えでは何にもせずに今日のこの儘で、千石取て居る人は千石、百石取て居る人は百石、大平無事に悠々として居るが上策だと、その説を詳に陳べると、列座の役人は大層驚くと同時に、是れは〳〵穏かなことを云うもの哉と云わぬばかりの趣で、大分顔色が宜い。

武器売却を勧む夫れから段々話が進んで来た所で、私は一つ注文を出した。今云う通り禄も身分も元の通りにして置くが宜かろう、ソレは宜しいが、茲に一つ忠告したいことがある。今この中津藩には小銃もあれば大砲もあり、武を以て国を立てようと云うその趣はチャンと見えて居るが、併し今の藩士とこの藩に在る武器で以て果して戦争が出来るかドウか、私はドウも出来なかろうと思う、左れば今日只今長州の人がズッと暴れ込めば長州に従わなければならぬ、又薩州の兵が攻来れば之にも抵抗することが出来ないから薩州に従わなければならぬ、誠に心配な話である、之を私が言葉を設けて評すれば、弱藩罪なし武器災をなすと云わねばならぬ、ダカラ寧そこの鉄砲を皆売て仕舞いたい、見れば大砲は何れもクルップだ、これを売れば三千五千或は一万円になるかも知れぬから、一切売て仕舞て昔の琉球見たようになって仕舞うが宜い、爾うして置て長州から政めて来たら、ヘイ〳〵、又薩摩から遣て来たら、ヘイ〳〵、斯う為ようとか、アヽ為ようとか云えば、ドウか長州に行て直に話をして下さい、又長州ならドウか薩州に行て直談を頼むと云て、一切の面倒を他に嫁して、此方はドウでも宜いと、斯う云う

仕向けが宜かろう、そうした所で殺しもしなければ捕縛して行きもしないから爾う云うようにしたい、そうして一方に於てはドウしてもこの世の中は文明開化になるに極てるから、学校を拵えて文明開化の何物たるを藩中の少年子弟に知らせると云う方針を執るが一番大事である、扨爾う云う方針を執るとして、武器を廃して仕舞えば、余り割合が宜過ぎるようだが、ソコには斯う云うことがある、今私は東京の事情を察するに、新政府は陸海軍を大に改革しようとして金がなくて困て居る、ソコで一片の願書なり届書なり認めて出して見るが宜しい、その次第はこの中津藩は武備を廃したる為めに年々何万円と云う余計な金がある、この金を納めましょうから政府の方でドウでも為すって下さいと斯う云えば、海陸軍では大に悦ぶ、政府の身になって見れば、この諸藩三百の大名が各々色変りの武器を作り色変りの兵を備えて置くその始末に堪まるものじゃない、ドウしたッて一様にしたいと云うのは、コリャ政府の政略に於て有るに極た訳けではないか、然るに此処ではクルップの鉄砲だ、隣ではアームストロングの大砲だ、イヤ彼処では仏蘭西の小銃、此方は和蘭から昔し輸入したゲベルを持て居ると云うような、日本国中千種万様の兵備では、政府に於てイザ事と云ても戦争が出来そうにもしない、ソレよりかその金を納むるが宜い、爾うすれば独り政府が悦ぶのみならずして、中津藩も誠に安楽になる、所謂一挙両全の策であるから爾う遣りなさいと云た。

武士の丸腰所がソレには大反対さ。兵事係の役人が三人も四人も居る中で、菅沼新五右衛門と云う人などは大反対、満坐一致で、ソレは出来ませぬ、何の事はない、武士に向て丸腰になれ

と云うような説で、ソレ計りは何としても出来ないと云うから、私は深く論じもせず、出来なければ為なさるな、ドウでも宜しい、御勝手になさい、只私は爾うしたらば便利だと思う丈けの話だからと云て、ソレ切り罷めになって仕舞いましたが、併し私はその政治論に熱しなかったと云う為めに、中津の藩士が怪我を為なかったと云うことは、是れは事実に於て間違いないことで、自から藩の為めに功徳になって居ましょう。その上に中津藩では減禄をしないのみならず、平均した所で加増した者がある。何でも大変に割合が宜かった。例えば私の妻の里などは二百五十石取て居て三千円ばかりの公債証書を貰い、今泉（秀太郎氏なり）は私の妻の姉の家で三百五十石か取て居たが四千円も貰いましたろう。けれども藩士の禄券と云うものは悪銭身に付かずと云うような訳けで、終にはなくして仕舞って何もありはしない。兎に角に中津藩の穏かであったと云うことは間違いない話です。

商売の実地を知らず話は以前に立還て復た経済を語りましょう。私は金銭の事を至極大切にするが、商売は甚だ不得手である、その不得手とは敢て商売の趣意を知らぬではない、その道理は一通り心得て居る積りだが、自分に手を着けて売買貸借は何分ウルサクて面倒臭くて遣る気がない。且つむかしの士族書生の気風として、利を貪るは君子の事に非ずなんと云うことが脳に染込んで、商売は愧かしいような心持がして、是れも自から身に着き纏うて居るでしょう。既に江戸に始めて来たとき、同藩の先輩岡見彦曹と云う人が、和蘭辞書の原書を飜刻して一冊の代価五両、その時には安いもので随分望む人もある中に、私が世話をして朋友に一冊買

わせて、その代金五両を岡見に持て行くと、主人が金一分、紙に包んで呉れたから驚いた、是れは何の事か少しも分らん、本の世話をして売たその礼とは呆れた話だ、畢竟主人が少年書生と見縊て金を恵む了簡であろう、無礼な事をするもの哉と少し心に立腹して、真面目になって争う事があると云うような次第で、物の売買に手数料などゝ云うことは町人共の話として、書生の身には夢ほども知らない。

火斗を買て貨幣法の間違いを知る左れども是等は唯書生の一身に直接して然るのみ。扨経済の理窟に於ては当時町人共の知らぬ処に考の届くことがある。或るとき私が鍛冶橋外の金物屋に行て台火斗を買て、価が十二匁と云うその時、どう云う訳けだか供の者に銭を持たせて、十二匁なれば凡そ一貫二、三百文になるから、その銭を店の者に渡したときに、私が不図心付た。この銭の目方は凡そ七、八百目から一貫目もある、然るに銭の代りに請取た台火斗は二、三百目しかない、銭も火斗も同じ銅でありながら、通用の貨幣は安くて売買の品は高い、是れこそ経済法の大間違いだ、こんな事が永く続けば銭を鋳潰して台火斗を作るが利益だ、何としても日本の銭の価は騰貴するに違いないと説を定めて、一歩を進めて金貨と銀貨との目方、性合を比較して見て、西洋の金一銀十五の割合にすれば、日本の貨幣法は間違いも間違いか大間違いで、私が首唱して云うにも及ばず、外国の商人は開国その時から大判小判の輸出で利を占めて居るとの風聞。ソレから私も知て居る金持の人に頻りに勧めて金貨を買わせた事があるが、是れも唯人に話をする計りで自分には何にも為ようとも思付かぬ。唯私の覚えて居るのは安政六

年の冬、米国行の前、或人に金銀の話をして、翌年夏、帰国して見れば、その人が大に利益を得た様子で、御礼に進上すると云て、一朱銀の数も計えず私の片手に山盛り一杯金を呉れたから、深く礼を云うにも及ばず、何は扨置き早速朋友を連れて築地の料理茶屋に行て、思うさま酒を飲ませたことがある。

簿記法を飜訳して簿記を見るに面倒なり先ずこの位なことで、その癖私は維新後早く帳合之法と云う簿記法の書を飜訳して、今日世の中にある簿記の書は皆私の訳例に倣うて書たものである。ダカラ私は簿記の黒人でなければならぬ、所が読書家の考と商売人の考とは別のものと見えて、私はこの簿記法を実地に活用することが出来ぬのみか、他人の記した帳簿を見ても甚だ受取が悪い。ウンと考えれば固より分らぬことはない、屹と分るけれども、唯面倒臭くてソンな事をして居る気がないから、塾の会計とか新聞社の勘定とか、何か入組んだ金の事はみんな人任せにして、自分は唯その総体の締て何々と云う数を見る計り。こんな事で商売の出来ないのは私も知て居る。例えば塾の書生などが学費金を持て来て、毎月入用だけ請取りたいから預けて置きたいと云う者がある。今の貴族院議員の滝口吉良なども、先年書生の時はその中の一人で、何百円か私の処に預けてあったが、私はその金をチャンと箪笥の袖斗に入れて置て、毎月取りに来れば十円でも十五円でも入用だけ渡して、その残りは又紙に包んで仕舞て置く。その金を銀行に預けて如何すれば便利だと云うことを知るまい事か、百も承知で心に知て居ながら、手で為ることが出来ない。銀行に預けるは扨置き、その預た紙幣の大小を一寸私に取替え

て本の姿を変えることも気が済まない。如何でも是れは持て生れた藩士の根性か、然らざれば書生の机の抽斗の会計法でしょう。

借用証書があらば百万円遣ろうソコで或時例の金融家のエライ人が私方に来て、何か金の話になって、千種万様、実に目に染みるような混雑な事を云うから、扨て〳〵如何もウルサイ事だ、この金を彼方に向けて、彼の金は此方に返えすと云う話であるが、人に貸す金があれば借りなくても宜さそうなものだ、商売人は人の金を借りて商売すると云うことは私も能く知て居るが、苟も人に金を貸すと云うことは余た金があるから貸すのだ、仮令い商売人でも貸す金があるなら成る丈けソレを自分に運転して、他人の金をば成る丈け借用しないようにするのが本意ではないか、然るに自分に資本を持て居ながら、態々人に借用とは入らざる事をしたものだ、余計な苦労を求めるようなものだと云うと、その人が大に笑て、迂闊千万、途方もない事を云う、商売人と云うものは入組んで〳〵滅茶々々になったと云うその間に、又種々様々の面白いことのあるもので、そんな馬鹿な事が出来るものか、啻に商売人に眼らず、凡そ人の金を借用せずに世の中を渡ると云うことが出来るものか、ソンな人が何処に在るかと云て私を冷却するから、私はその時始めてヒョイと思付た。今御話を聞けば、世の中に借金しない者が何処に在るかと云うが、その人は今こゝに居ます。私は是れまで只の一度も人の金を借りたことがない。「そんな馬鹿な事を云いなさるな。「イヤ如何してもない。生れて五十年（是れは十四、五年前の話）人の金を一銭でも借りたことはない。ソレが嘘ならば、試に私の印形の据て居るものとは

云わない、反古でも何でも宜しい、ソレを捜して持て来て御覧。私が百万円で買おう。ドウしたってありはしない。日本国中に福澤の書た借用証文と云うものはソレこそ有る気遣いはないが如何だ、と云うような訳けで、その時に私も始めて思い出したが、私は生れてこの方遂ぞ金を借りたことがない。是れはマア私の眼から見れば尋常一様の事と思うけれども、世間の人が見たらば甚だ尋常一様でないのかも知れぬ。

金を預けるも面倒なりソレで私は今でも多少の財産を持て居る、持て居たけれども私ところの会計と云うものは至極簡単で、少しも入込んだことはない。この金を誰に返えさなければならぬ、之を此方に振向けなければならぬと云うような事は絶えてない。ソレで僅かばかり二百円とか三百円とか云う金が、手元にあってもなくても構わない、ソレを銀行に預けて、必要のとき小切手で払いをすれば利息が徳になると云う、ソレは私も能く知て居て、世間一体そう云う風になりたいとは思えども、扨自分には小面倒臭い、ソンな事にドタバタするよりか、金は金で仕舞て置て、払うときにはその紙幣を計えて渡して遣ると、斯う云う趣向にして、私も家内もその通りな考えで、真実封建武士の机の抽斗の会計と云うことになって、その話になると丸で別世界のようで、文明流の金融法は私の家に這入りません。

仮初にも愚痴を云わず夫れからして、世間の人が私に対して推察する所を、私が又推察して見るに、ドウも世人の思う所は決して無理でない、と云うのは私が若い時から困たと云うことを一言でも云うたことがない、誠に家事多端で金の入用が多くて困るとか、今歳は斯う云う不時

な事があって困却致すとか云うような事を、仮初にも口外したことがない、私の眼には世間が可笑しく見える、世間多数の人が動もすれば貧乏で困る、金が不自由だ、無力だ、不如意だ、なんかんと愚痴をこぼすのは、或は金を貸して貰いたいと云うような意味で言うのか、但しは洒落に言うのか、飾りに言うのか、私の眼から見れば何の事だか少しも訳けが分らない、自分の身に金があろうとなかろうと敢て他人に関係したことでない、自分一身の利害を下らなく人に語るのは独語を言うようなもので、こんな馬鹿気た事はない、私の流儀にすれば金がなければ使わない、有ても無駄に使わない、多く使うも、少なく使うも、一切世間の人のお世話に相成らぬ、使いたくなければ使わぬ、使いたければ使う、嘗て人に相談しようとも思わなければ、人に喙を容れさせようとも思わぬ、貧富苦楽、共に独立独歩、ドンな事があっても、一寸でも困たなんて泣言を云わずに何時も悠々として居るから、凡俗世界ではその様子を見て、コリャ何でも金持だと測量する人もありましょう。所が私は又その測量者があろうとなかろうと、その推測が中ろうと中るまいと、少しも頓着なしに相替らず悠々として居ます。既に先年、所得税法の始めて発布せられた時などは可笑しい、区内の所得税掛りとか何とか云う人が、私の家には財産が凡そ七十万円あるその割合で税を取ると、内々云て来た者があるから、私がその者に云うに、何卒その言葉を忘れて呉れるな、見て居る前で福澤の一家残らず裸体になって出て行くから、七十万で買て貰いたい、財産は帳面のまゝ渡して、家も倉も衣服も諸道具も鍋も釜も皆遣るから、ソックリ買取て七十万円の金に易えたい、唯漠然たる評価は迷惑だ、現金

で売買したい、爾うなれば生来始めての大儲けで、生涯さぞ安楽であろうと云て、大笑いしたことがあります。

他人に私事を語らず私が経済上に堅固を守て臆病で大胆な事の出来ないのは、先天の性質であるか、抑も亦身の境遇に駈られて遂に堅く凝り固まったものでしょう。本年六十五歳になりますが、二十一歳のとき家を去て以来、自から一身の謀を為し、二十三歳、家兄を喪いしより後は、老母と姪と二人の身の上を引受け、二十八歳にして妻を娶り子を生み、一家の責任を自分一身に担うて、今年に至るまで四十五年のその間、二十三歳の冬大阪緒方先生に身の貧困を訴えて大恩に浴したるのみ、その他は仮初にも身事家事の私を他人に相談したこともなければ又依頼したこともない。人の智恵を借りようとも思わず、人の差図を受けようとも思わず、人間万事天運に在りと覚悟して、勉めることは飽くまでも根気能く勉めて、種々様々の方便を運らし、交際を広くして愛憎の念を絶ち、人に勧め又人の同意を求めるなどは十人並に遣りながら、ソレでも思う事の叶わぬときは、尚おそれ以上に進んで哀願はしない、唯元に立戻て独り静に思止るのみ。詰る所、他人の熱に依らぬと云うのが私の本願で、この一義は私が何時発起したやら、自分にも是れと云う覚えはないが、少年の時からソンな心掛け、イヤ心掛けと云よりもソンな癖があったと思われます。

按摩を学ぶ中津に居て十六、七歳のとき、白石と云う漢学先生の塾に修業中、同塾生の医者か坊主か二人、至極の貧生で、二人とも按摩をして凌いで居る者がある。その時、私は如何でも

して国を飛出そうと思て居るから、之を見て大に心を動かし、コリャ面白い、一文なしに国を出て、罷り違えば按摩をしても喰うことは出来ると思て、ソレから二人の者に按摩の法を習い、頻りに稽古して随分上達しました。幸にその後按摩の芸が身を助ける程の不仕合もなしに済みましたが、習うた芸は忘れぬもので、今でも普通の田舎按摩よりかエライ。湯治などに行て家内子供を揉んで遣て笑わせる事があります。こんな事がマア私の常に云う自力自活の姿とでも云うべきものか、是れが故人の伝を書くとか何とか云えば、何々氏夙に独立の大志あり、年何歳その学塾に在るや按摩法を学んで云々なんと、鹿爪らしく文字を並べるであろうが、私などは十六、七のとき大志も何もありはせぬ、唯貧乏でその癖、学問修業はしたい、人に話しても世話をして呉れる気遣いなし、しょうことなしに自分で按摩と思付た事です。凡そ人の志はその身の成行次第に由て大きくもなり又小さくもなるもので、子供の時に何を言おうと何を行おうと、その言行が必ずしも生涯の抵当になるものではない、唯先天の遺伝、現在の教育に従て、根気能く勉めて迷わぬ者が勝を占めることでしょう。

一大投機私が商売に不案内とは申しながら、生涯の中で大きな投機のようなことを試みて、首尾能く出来た事があります。ソレは幕府時代から著書飜訳を勉めて、その製本売捌の事をば都て書林に任してある。所が江戸の書林が必ずしも不正の者ばかりでもないが、兎角人を馬鹿にする風がある。出版物の草稿が出来ると、その版下を書くにも、版木版摺の職人を雇うにも、亦その製本の紙を買入るゝにも、都て書林の引受けで、その高いも安いも云うがまゝにして、

大本の著訳者は当合扶持を授けられると云うのが年来の習慣である。ソコで私の出版物を見ると中々大層なもので、之を人仕せにして不利益は分て居る。書林の奴等に何程の智恵もありはしない、高の知れた町人だ、何でも一切の権力を取揚げて此方のものにして遣ろうと説を定めた。定めたは宜いが実は望洋の歎で、少しも取付端がない。第一番の必要と云うのが職人を集めなければならぬ。今までは書林が中に挟まって居て、一切の職人と云う者は著訳者の御直参でなく、向う河岸に居るようなものだから、彼れを此方の直轄にしなければならぬと云うのが差向きの必要。ソコで私は一策を案じたその次第は、当時、明治の初年で余程金もあり、之を掻集めて千両ばかり出来たから、夫れから数寄屋町の鹿島と云う大きな紙問屋に人を遣て、紙の話をして、土佐半紙を百何十俵、代金千両余りの品を即金で一度に買うことに約束をした。その時に千両の紙と云うものは実に人の耳目を驚かす。如何なる大書林と雖も、百五十両か二百両の紙を買うのがヤットの話で、ソコへ持て来て千両現金、直ぐに渡して遣ると云うのだから、値も安くする、品物も宜い物を寄越すに極てる。高かったか安かったか知らないが、百何十俵の半紙を一時に新銭座に引取て、土蔵一杯積込んで、ソレから書林に話して版摺の職人を貸して呉れと云うことにして、何十人と云う大勢の職人を集め、旧同藩の士族二人を監督に置て仕事をさせて居る中に、職人が朝夕紙の出入れをするから、蔵に這入てその紙を見て大に驚き、大変なものだ、途方もないものだ、この家に製本を始めたが、このくらい紙があれば仕事は永続するに違いないと先ず信仰して、且つ此方では払いをキリ〳〵して遣ると云うような訳

けで、是れが端緒になって、職人共は問わず語りに色々な事を皆白状して仕舞う。此方の監督者は利いた風をして居るが、その実は全くの素人でありながら、職人に教わるようなもので、段々巧者になって、ソレから版木師も製本仕立師も次第々々に手に附けて、是れまで書林の為すべき事は都て此方の直轄にして、書林には唯出版物の売捌を命じて手数料を取らせる計りのことにしたのは、是れは著訳社会の大変革でしたが、唯この事ばかりが私の商売を試みた一例です。

品行家風

莫逆の友なし経済の事は右の如くにして、私は私の流義を守て生涯このまゝ替えずに終ることであろうと思いますが、ソレから又自分の一身の行状は如何であったか、家を成した後に家の有様は如何かと云うことに付て、有りのまゝの次第を語りましょう。扨私の若い時は如何だと申すに、中津に居たとき子供の時分から成年に至るまで、何としても同藩の人と打解けて真実に交わることが出来ない、本当に朋友になって共々に心事を語る所謂莫逆の友と云うような人は一人もない、世間にないのみならず親類中にもない、と云て私が偏窟者で人と交際が出来ないと云うではない。ソリャ男子に接しても婦人に逢うても快く話をして、ドチラかと云えばお饒舌りの方であったが、本当を云うと表面ばかりで、実はこの人の真似をして見たい、彼の人

のように成りたいとも思わず、人に誉められて嬉しくもなく、悪く云われて怖くもなく、都て無頓着で、悪く評すれば人を馬鹿にして居たようなもので、仮初にも争う気がないその証拠には、同年輩の子供と喧嘩をしたことがない、喧嘩をしなければ怪我もしない、友達と喧嘩をして泣て家に帰て阿母さんに言告けると云うようなことは唯の一度もない。口先き計り達者で内実は無難無事な子でした。

大言壮語の中、忌むべきを忌むソレから国を去て長崎に行き大阪に出てその修業中も、ワイ〳〵朋友と共に笑い共に語て浮々して居るようにあるけれども、身の行状を慎み品行を正しくすると云うことは、努めずして自然にソレが私の体に備て居ると云ても宜しい。モウそれはさん〳〵〳〵な乱暴な話をして、大言壮語、至らざる所なしと云う中にも、嫌らしい汚ない話と云うことは一寸とでも為たことがない。同窓生の話に能くある事で、昨夜、北の新地に遊んでなんと云うような事を云出そうとすると、私は態と其処を去らずに大箕坐をかいてワイ〳〵とその話を打消し、「馬鹿野郎、余計なことを口走るな、と云うような調子で雑ぜ返して仕舞う。ソレから江戸に出て来ても相替らずその通り、朋友も多い事だから相互に往来するのは不断の事で、頻りに飛廻て居たけれども、扨例の吉原とか深川とか云う事になると、朋友共が私に話をすることが出来ない。その癖私は能く事情を知て居る。誠に事細に知て居るその訳けは、小本なんぞ読むにも及ばず、近く朋友共が馬鹿話に浮かれて饒舌るのを、黙て聞て居れば容易に分る。六かしい事も何にもない、チャンと呑込んで知て居るけれども、如何なこと、左様な

事を思出したこともないのみならず、吉原深川は扨置き、上野の花見に行たこともない。始めて上野、向島を見る私は安政三年、江戸に出て来て、只酒が好きだから所謂口腹の奴隷で、家にない時は飲みに行かなければならぬ、朋友相会すれば飲みに行くと云うような事は、ソリヤ為て居るけれども、遂ぞ花見遊山はしない。文久三年六月、緒方先生不幸のとき、下谷の自宅出棺、駒込の寺に葬式執行のその時、上野山内を通行して、始めて上野と云う処を見た。即ち私が江戸に来てから六年目である。「成る程これが上野か、花の咲く処かと、通行しながら見物しました。向島もその通りで、江戸に来てから毎度人の話には聞くが一度も見たことがない。所で明治三年酷い腸窒扶斯を煩い、病後の運動には馬に乗るのが最も宜しいと、医者も勧め朋友も勧めたので、その歳の冬から馬に乗て諸方を乗廻り、向島と云う処も始めて見れば、玉川辺にも遊び、市中内外、行かれる処だけは何処でも乗廻わして、東京の方角も大抵分りました。その時に向島は景色もよし道もよし、毎度馬を試みて、向島を廻って上野の方に帰て来るとき、何でも土手のような処を通りながら、アヽ彼処が吉原かと心付て、ソレではこのまゝ馬に乗て吉原見物を為ようじゃないかと云出したら、連騎の者が場所柄に騎馬では余り風が悪いと止めて、ソレ切りになって未だに私は吉原と云う処を見たことがない。

小僧に盃を差す斯う云うような次第で、一寸と人が考えると私は奇人偏窟者のように思われましょうが、決して爾うでない。私の性質は人に附合いして愛憎のない積りで、貴賤貧富、君子も小人も平等一様、芸妓に逢うても女郎を見ても塵も埃も之を見て何とも思わぬ。何とも思わ

ぬから困ることもない。此奴は穢れた動物だ、同席は出来ないなんて、妙な渋い顔色して内実プリ〳〵怒ると云うような事は決してない。古いむかしの事であるが、四十余年前、長崎に居るとき、光永寺と云う真宗寺に同藩の家老が滞留中、或日市中の芸妓か女郎か五、六人も変な女を集めて酒宴の愉快、私はその時酒を禁じて居るけれども陪席御相伴を仰せ付けられ、一座杯盤狼藉の最中、家老が私に杯をさして、「この酒を飲んで、その杯を座中の誰でも宜しい、足下の一番好いてる者へさすが宜かろうと云うのは、実は其処に美人が幾人も居る、私はその杯を美人にさしても可笑しい、態と避けてさゝなくても可笑しい、屹と困るであろうと嬲るのはチャント分て居る。所が私は少しも困らない。杯をグイと干して、大夫さんの命に従い一番好いた人に上げます、ソレ高さん、と云て杯をさしたのは、六、七歳ばかりの寺の末子で、私が瀉蛙々々として笑て居たから家老殿も興にならぬ。既に今年春ジャパン・タイムス社の山田季治が長崎へ行くと聞き、不図光永寺の事を思出して、あの時は如何なってるか、高さんと云う小僧があった筈だが、如何して居るか尋ねて見たいと申したら、山田の返事に、寺は旧の通り焼けもせず、高さんも無事息災、今は五十一歳の老僧で隠居して居るとて写真など寄送しましたが、右の一件も私の二十一歳の時だから、計えて見ると高さんは七歳でしたろうに、恐ろしい古い話です。

嫌疑を憚らず左様いう訳けで私は若い時から婦人に対して仮初にも無礼はしない。仮令い酒に酔ても謹しむ所は屹と謹しみ、女の忌がるような禁句を口外したことはない。上戸本性で、謹

みながら女を相手に話もすれば笑いもして談笑自在、何時も慣れ〳〵しくして、その極は世間で云う嫌疑と云うような事を何とも思わぬ。血に交わりて赤くならぬこそ男子たる者の本領であると、チャンと自分に説を極めてあるから、男女夜行くときは灯を照らすとか、物を受授するに手より手にせずとか、アンな古めかしい教訓は、私の眼から見ると唯可笑しいばかり。扨も〳〵卑怯なる哉、ソンな窮窟な事で人間世界が渡れるものか、世間の人が妙な処に用心するのはサゾ忙しいことであろう、自分は古人の教に縛れる気はないと、自から自分の身を信じて颯々と人の家に出入して、其処にお嬢さんが居ようと、若い内君が独り留守して居ようと、又は杯盤狼藉の常に芸妓とか何とか云う者が騒いで居ようと、少しも遠慮はしない。酒を飲で大きな声をしてドン〳〵話をして、酔えば面白くなって戯れて居ると云うような風であるから、或は人が見たらば変に思うこともありましょう。

醜声外聞の評判却て名誉ソコで或時奥平藩の家老が態々私を呼びによこして、扨云うよう、足下は近来某々の家などに毎度出入して、例の如く夜分晩くまで酒を飲で居るとの風聞、某家には娘もあり、某家は何時も芸妓など出入して家風が宜しくない、足下がそんな処に近づいて醜声外聞とは残念だ、君子は瓜田に履を結ばず、李下に冠を正さずと云うことがある、年若い大事な身体である、少し注意致したら宜かろうと、真面目になって忠告したから、私はその時少しも謝らない。左様で御在ますか、コリャ面白い。私は今まで随分太平楽を云たとか、恐ろしい声高に話をして居たとか云て、毎度人から嫌がられたこともありましょうが、併し艶男と

云われたのは今日が生れてから始めて。コリャ私の名誉で、至極面白い話だから私は罷めますまい。相替らずその家に出入しましょう。此処で御注意を蒙て夫れで前非を改めて罷めるなんて、ソンな弱い男ではござらぬ。但し御親切は難有い、御礼は申上げましょうが、実は私は何とも思わぬ。却て面白いから、モッと評判を立てゝ貰いたいと云て、冷かして帰た事があります。

始めて東京の芝居を観る前に申す通り、私は江戸に来て六年目に始めて上野と云う処を見て、十四年目に始めて向島を見たと云うくらいの野暮だから、勿論芝居などを見物したことはない。少年のとき旧藩中津で、藩主が城内の能舞台で田舎の役者共を呼出して芝居を催し、藩士ばかりに陪観させる例があって、その時に一度見物して、その後大阪修業中、今の市川団十郎の実父海老蔵が道頓堀の興行中、或る夜同窓生が今から道頓堀の芝居に行くから一緒に行こう、酒もあると云うから、私は酒と聞て応と答え、ソレから行く道で酒を一升買て、徳利を携えて二、三人連れで芝居に這入り、夜分二幕か三幕見たのが生来二度自の見物。ソレから江戸に来て、江戸が東京となっても、芝居見物の事は思出しもせず、又その機会もなくして居る中に、今を去ること凡そ十五、六年前、不図した事で始めて東京の芝居を見て、その時戯れに、

誰道名優伎絶倫
先生遊戯事尤新
春風五十独醒客

　却作梨園一酔人

と云う詩が出来ました。之を見ると私が変人のようにあるが、実は鳴物は甚だ好きで、女の子には娘にも孫にも琴、三味線を初め、又運動半分に踊の稽古もさせて老余唯一の楽みにして居ます。

不風流の由来元来私は生れ付き殺風景でもあるまい、人間の天性に必ず無芸殺風景と約束があるでもなかろうと思うが、何分私の性質と云うよりも少年の時から様々の事情がコンな男にして仕舞たのでしょう。先ず第一に私は幼少の時から教育の世話をして呉れる者がないので、ロクに手習をせずに成長したから、今でも書が出来ない。成長の後でも自分で手本を習たら宜さそうなものだが、その時は既に洋学の門に入て天下の儒者流を目の敵にして、儒者のすることなら一から十まで皆気に入らぬ、就中その行状が好かない。口に仁義忠孝など饒舌りながら、サアと云うときには夫れ程に意気地はない。殊に不品行で酒を飲で詩を作て書が旨いと云えば評判が宜い。都て気に喰わぬ。よし〳〵洋学流の吾々は反対に出掛けて遣ろうと云う気になって、恰も江戸の剣術全盛の時代に刀剣を売払て仕舞い、兼て嗜きな居合も罷めて知らぬ風をして居たような塩梅式に、儒者の奴等が詩を作ると云えば此方は態と作らずに見せよう、奴等が書を善くすると云えば此方は殊更らに等閑にして善く書かずに見せようと、飛だ処に力身込で手習をしなかったのが生涯の失策。私の家の遺伝を云えば、父も兄も文人で、殊に兄は書も善くし、画も出来、篆刻も出来る程の多芸な人に、その弟はこの通りな無芸無能、書画は扨置き

骨董も美術品も一切無頓着、住居の家も大工任せ、庭園の木石も植木屋次第、衣服の流行など何が何やら少しも知らず又知ろうとも思わず、唯人の着せて呉れるものを着て居る。或時家内の留守に急用が出来て外出のとき、着物を着替えようと思い、箪笥の引出しを明けて一番上にある着物を着て出て、帰宅の上、家内の者が私の着て居るのを見て、ソレは下着だと云て大に笑われたことがある。殺風景も些と念入の殺風景で、決して誉めた話でない。畢竟少年の時から種々様々の事情に逐われてコンな事に成行き、生涯これで終るのでしょう。兎角世間の人の悦んで居るような事は、私には楽みにならぬ、誠に損な性分です。ダカラ近来は芝居を見物したり、又は宅に芸人など呼ぶこともあるが、是れとて無上の快楽事とも思われず、マア〳〵児孫を集めて共に戯れ、色々な芸をさせたり嗜きな物を馳走したりして、一家内の長少睦しく互に打解けて談り笑うその談笑の声を一種の音楽として、老余の楽みにして居ます。

妻を娶て九子を生むソレから私方の家事家風を語りましょう。文久元年、旧同藩士の媒妁を以て同藩士族江戸定府士岐太郎八の次女を娶り、是れが今の老妻です。結婚の時私は二十八歳、妻は十七歳、藩制の身分を申せば妻の方は上流士族、私は小士族、少し不釣合のようにあるが、血統は両人共頗る宜しく、往古はイザ知らず、凡そ五世以降双方の家に遺伝病質もなければ忌むべき病に罹りたる先人もなし。妻は無論、私の身に悪疾のあるべきようもなく、夫妻無病。文久三年に生れたのが一太郎、その次は捨次郎と、次第に誕生して四男五女、合して九人の子供になり、幸にして九人とも生れたまゝ皆無事で一人も欠けない。九人の内五人までは母の乳

で養い、以下四人は多産の母の身体衛生の為めに乳母を雇うて育てました。

子供の活動を妨げず養育法は着物よりも食物の方に心を用い、粗服はさせても滋養物は屹と与えるようにして、九人とも幼少の時から体養に不足はない。又その躾方は温和と活溌とを旨とし、大抵の処までは子供の自由に任せる。例えば風呂の湯を熱くして無理に入れるような事はせず、据風呂の側に大きな水桶を置て、子供の勝手次第に、ぬるくも熱くもさせる。全く自由自在のようなれども、左ればとて食物を勝手に任せて何品でも喰い次第にすると云う訳ではない。又子供の身体の活溌を祈れば室内の装飾などは迚も手に及ばぬ事と覚悟して、障子唐紙を破り諸道具に疵付けても先ず見逃がしにして、大抵な乱暴には大きな声をして叱ることはない。酷く剛情を張るような事があれば、父母の顔色を穴かしくして睨む位が頂上で、如何なる場合にも手を下して打たことは一度もない。又親が実子に向ても嫁に接しても、又兄姉が弟妹に対しても名を呼棄にせず、家の中に厳父慈母の区別なく、厳と云えば父母共に厳なり、慈と云えば父母共に慈なり、一家の中は丸で朋友のようで、今でも小さい孫などは、阿母さんはどうかすると怖いけれども、お祖父さんが一番怖くないと云て居る。世間並にすると少し甘いように見えるが、ソレでも私方の孫子に限て別段に我儘でもなし、長少戯れながら長者の真面目に言う事は能く聞て逆う者もないから、余り厳重にせぬ方が利益かと思われる。

家に秘密事なし又家の中に秘密事なしと云うのが私方の家風で夫婦親子の間に隠す事はない、ドンな事でも云われないことはない。子供が段々成長して、是れは彼の子に話して此の子には

内証なんて、ソンな事は絶えてない。親が子供の不行届を咎めて遣れば、子供も亦親の失策を笑うと云うような次第で、古風な目を以て見ると一寸と尊卑の礼儀がないように見えましょう。礼儀足らざるが如しその礼儀の事に就て申せば、家の主人が出入するとき家内の者が玄関まで送迎して御辞儀をすると云うような事が能く世間にあるが、私の処では絶えてソンな事がない。私の外出するには玄関からも出れば台所からも出る。帰るときもその通りで唯足の向た方に這入て来る。或は車に乗て帰て来た時に、車夫又別当共へ、玄関の処で御帰りなんて余計な事を云て呉れるな、と云う訳けであるから、幾ら玄関で怒鳴ても出て来る人はない。その一点になると世間の人じゃない近くは内の御祖母さんが怪んで居ましょう。この老人は土岐家の後室、本年七十七歳、むかしは奥平藩士の奥様で、武家の礼儀作法を大事に勤めた身であるから、今日の福澤の家風を見て、何分不作法で善くない、左ればとて是れが悪いと云う箇条もない、妙な事だと思て居るだろうと、私は窃に推察します。

子女の間に軽重なしソレから又私に九人の子供があるが、その九人の中に軽重愛憎と云うことは真実一寸ともない。又四男五女のその男の子と女の子と違いのあられよう訳けもない。世間では男子が生れると大造目出度がり、女の子でも無病なれば先〳〵目出度いなんて、自から軽重があるようだが、コンな馬鹿気た事はない。娘の子なれば何が悪いか、私は九人の子がみんな娘だって少しも残念と思わぬ。唯今日では男の子が四人、女の子が五人、宜い塩梅に振分けになってると思うばかり、男女長少、腹の底から之を愛して兎の毛ほども分隔てはない。

道徳学者は動もすると世界中の人を相手にして一視同仁なんて大きな事を云てるではないか。況して自分の生んだ子供の取扱いに、一視同仁が出来ぬと云うような浅ましい事があられるものか。唯私の考に、総領もその他の子供も同じとは云いながら、私が死ねば総領が相続する、相続すれば自から中心になるから、財産を分配するにも、外の子に比較して一段手厚くして、又何か物があって、兄弟中誰にも遣りようがない、唯一つしかないと云うような物は、総領の一太郎が取て宜かろうと云うくらいな事で、その外には何も変ることはない。例えば斯う云う事がある。明治十四、五年の頃、月日は忘れたが、私が日本橋の知る人の家に行て見ると、その座敷に金屏風だの蒔絵だの花活だのゴテ〳〵一杯に列べてある。コリャ何だと聞て見れば、亜米利加に輸出する品だと云う。夫れから私が不図した出来心で、この品を一目見渡して私の欲しいものは一品でもない、皆不用品だが、又入用と云えば一品も残さず皆入用だ、兎に角に之を亜米利加に積出して幾らの金になれば宜いのかソレは知らぬけれども、売ると云えば皆買うが如何だ、買たからと云てソレを又儲けて売ろうと云うのではない、家に仕舞込んで置くのだと云うと、その主人も唯の素町人でない、成程爾うだな、コリャ名古屋から来た物であるが、亜米利加に遣て仕舞えば是れ丈けの品がなくなる、お前さんの処に遣れば失くならずにあるから売りましょう、ソンなら皆買うと云て、二千二、三百円かで、何百品あるか碌に品も見ないで皆買て仕舞たが、夫れから私がその品を見て楽むではなし、品柄も能く知らず数も覚えず、唯邪魔になるばかりだから、五、六年前の事でした、九人の小供に分けて取て仕舞えと申して、

小供がワイ〳〵寄て、その品を九に分けて、ソレを籤で取て、今では皆小供が銘々に引受けて、家を持て居る者は家に持て行く者もあり、マダ私のところの土蔵の中に入れてあるのもある、と云うのが凡そ私の財産分配法で、如何にもその子に厚薄と云うものは一寸ともないのですから、小供の中に不平があろうたッて有られた訳けのものでないと思て居ます。

西洋流の遺言法に感服せず近来遺言も書きました。遺言の事に就ては、能く西洋の話にある主人の死んだ後で遺言書を明けて見てワッと驚いたなんて云う事は毎度聞てるが、私は甚だ感服しない。死後に見せることを生前に言うことが出来ないとは可笑しい。畢竟西洋人が習慣に迷うて馬鹿をして居るのだ、乃公はソンな馬鹿の真似はしないぞと云て、家内子供に遺言の書付を見せて、この遺言書は箪笥のこの抽斗に這入て居るから皆能く見て置け、又説が変れば又書替えて又見せるから、能く見て置て、乃父の死んだ後で争うような卑劣な事をするなよと申して笑て居ます。

体育を先にす扨又子供の教育法に就ては、私は専ら身体の方を大事にして、幼少の時から強いて読書などさせない。先ず獣身を成して後に人心を養うと云うのが私の主義であるから、生れて三歳五歳まではいろはの字も見せず、七、八歳にもなれば手習をさせたりさせなかったり、マダ読書はさせない。夫れまでは唯暴れ次第に暴れさせて、唯衣食には能く気を付けて遣り、又子供ながらも卑劣な事をしたり賤しい言葉を真似たりすれば之を咎るのみ、その外は一切投遣りにして自由自在にして置くその有様は、犬猫の子を育てると変わることはない。即ち是れ

が先ず獣身を成すの法にして、幸に犬猫のように長成して無事無病、八、九歳か十歳にもなればソコで始めて教育の門に入れて、本当に毎日時を定めて修業をさせる。尚おその時にも身体の事は決して等閑にしない。世間の交母は動もすると勉強々々と云て、子供が静にして読書すれば之を賞める者が多いが、私方の子供は読書勉強して遂ぞ賞められたことはないのみか、私は反対に之を止めて居る。小供は既に通り過ぎて今は幼少な孫の世話をして居るが、矢張り同様で、年齢不似合に遠足したとか、柔術体操がエラクなったとか云えば、褒美でも与えて賞めて遣るけれども、本を能く読むと云て賞めたことはない。既に二十年前の事です。長男一太郎と次男捨次郎と両人を帝国大学の予備門に入れて修学させて居た処が兎角胃が悪くなる。ソレから宅に呼返して色々手当すると次第に宜くなる。宜くなるから又入れると又悪くなる。到頭三度入れて三度失敗した。その時には田中不二麿と云う人が文部の長官をして居たから、田中にも毎度話をしました。私方の小供を予備門に入れて実際の実験があるが、文部学校の教授法をこのまゝにして遣て行けば、生徒を殺すに極て居る。殺さなければ気狂いになるか、然らざれば身心共に衰弱して半死半生の片輪者になって仕舞うに違いない。丁度この予備門の修業が三、四年かゝる、その間に大学の法が改まるだろうと思て、ソレを便りに子供を予備門に入れて置くが、早く改正して貰いたい。この儘で置くならば東京大学は少年の健康屠殺場と命名して宜しい。早々教授法を改めて貰いたいと、懇意の間柄で遠慮なく話はしたが、何分埒が明かず、子供は相替らず三ヶ月遣て置けば三ヶ月引かして置かなければならぬと云うような訳け

で、何としても予備門の修業に堪えず、私も遂に断念して仕舞うて、夫れから此方の塾（慶應義塾なり）に入れて普通の学科を卒業させて、亜米利加に遣て彼の大学校の世話になりました。私は日本大学の教科を悪いと云うのではない、けれども教育の仕様が余り厳重で、荷物が重過ぎるのを恐れて文部大学を避けたのです。その通りで今でも説は変えない、何としても身体が大事だと思います。

子女幼時の記事又私の考に、人間は成長して後に自分の幼年の時の有様を知りたいもので、他人はイザ知らず私が自分で左様思うから、筆まめな事だが私は小供の生立の模様を書て置きました。この子は何年何月何日何分に産れ、産の難易は云々、幼少の時の健康は斯く〳〵、気質の強弱、生付きの癖など、ザッと荒増し記してあれば、幼少の時の写真を見ると同様、この書たものを見れば成長の後、第一面白いに違いない、自から又心得になる事もありましょう。私などは不幸にして実父の面も知らず、画像に写したものもなし、又私がドンな子供であったか母に聞たばかりで書たものはない。少年の時から長老の人がソンな話をすると耳を傾けて聞て、唯残念にばかり思うて、独り身の不幸を悲んで居たから、今度は私の番になってこの通りに自分の伝を記して子供の為めにし、又先年小供の生立の事をも認めて置たから先ず遺憾はない積りです。

三百何十通の手紙又親子の間は愛情一偏で、何ほど年を取ても互に理窟らしい議論は無用の沙汰である。是れは私も妻も全く同説で、親子の間を成る丈け離れぬようにする計り。例えば先

年、長男次男が六年の間亜米利加に行て居ましたその時には、亜米利加の郵船が一週間に大抵一度、時としては二週間に一度と云う位の往復でしたが、小供両人の在米中、私は何か要用のときは勿論、仮令い用事がなくても毎便必ず手紙を遣らない事はない。六年の間何でも三百何十通と云う手紙を書きましたが、私が手紙を書放にして家内が校合方になって封じて遣るから、両親の親筆に相違ない。彼方の小供両人も飛脚船の来る度に必ず手紙を寄越す。この事は両人出発の節堅く申付て、「留学中手紙は毎便必ず〳〵出せ、用がなければ用がないと云て寄越せ、又学問を勉強して不死半生の色の青い大学者になって帰て来るより、筋骨逞しき無学文盲なものになって帰て来い、その方が余程悦しい。仮初にも無法な事をして勉強し過ぎるな。倹約は何処までも倹約しろ、けれども健康に係わると云うほどの病気か何かの事に付き、金次第で如何にもなると云うことならば思い切て金を使え、少しも構わぬからと斯う云うのが私の命令で、ソンな事で六年の間学んで二人とも無事に帰て来ました。

一身の品行、亦自から効力あり又私の内が夫婦親子睦じくて私の行状が正しいからと云て、特に誉める程の事でもない。世の中に品行方正の君子は幾らもある。私も亦、これが人間唯一の目的で一身の品行修まりて能事終るなんて自慢をするような馬鹿でもないと自から信じて居るが、扨又これが妙なもので、社会の交際に関係する所は甚だ広くて、意外の辺に力を及ぼすことがあるその一例を申せば、旧藩の奥平家に対して私は如何なる者ぞと尋ぬるに、見る影もなき貧小士族が、洋学など修業して異様な説を唱え、或は外国に行き、又或は外国の書を飜訳し

て大言を吐散らし、剰さえ儒流を軽蔑して憚る所を知らずと云えば、是れは所謂異端外道に違いない。同藩一般の見る所でこの通りなれば、藩主の奥なんぞにはドンな報告が這入て居るか知れない。兎に角に福澤諭吉は大変な奴だと折紙が付て居たに違いない。所が物換り星移り、段々時勢が変遷して王政維新の世の中になって見れば、藩論も自から面目を改め、世間一般西洋流の喧ましい今日、福澤もマンザラでなし、或は之を近づけて何かの役に立つこともあろうと云うような説がチラホラと涌て来たその時に、嶋津祐太郎と云う奥平家の元老は、頗る事の能く分る、云わば卓識の君子で、時勢の緩急を視察して、コリャ福澤を疏外するは不利であると云うことに着眼して居る折柄、奥平家の大奥に芳蓮院様と云う女隠居がある、この貴婦人は一橋家から奥平家に下て来た由緒ある身分で、最早や余程の老年でもあり、一家無上の御方様と崇められて居る。ソコで嶋津が先ずその御隠居様に対して色々西洋の話をする中に、彼の国には文学武備、富国強兵、医術も精しく航海術も巧なり、その中には随分日本の風俗習慣に違た事も数々ありますが、爰に西洋流義に不思議なるは男女の間柄で、男女相互に軽重なく、如何なる身分の人でも一夫一婦に限て居ます、是れ丈けは西洋の特色で御座ると云う所を持込んだ所が、その御隠居様も若い時には直接に身に覚えがある。この話を聞て心を動かさずには居られない。恰も豁然発明した様子で、ソレから福澤を近づける気になって、次第々々に奥向の方に出入の道が開けて、御隠居様を始め所謂御上通りの人に逢うて見れば、福澤の外道も唯の人間で、角も生えて居なければ尻尾のある者でもない、至極穏かな人間だと云う所からして、

段々懇親になったと云うその話は、程経て後に内々嶋津から聞きました。シテ見ると一夫一婦の説も隠然の中には随分勢力のあるもので、就ては今の世に多妻の悪弊を除て文明風にするなんと論ずるは野暮だと云うような説があるけれども、畢竟負借みの苦しい遁げ口上で取るに足らない。一夫一婦の正論決して野暮でない、世間の多数は同主義で、殊に上流の婦人は悉く此方の味方であるから、私の身がこの先き何時まで生きて居るか知れぬけれども、有らん限りの力を尽して、前後左右を顧みずドンな奴を敵にしても構わぬ、多妻法を取締めて、少しでもこの人間社会の表面だけでも見られるような風にして遣ろうと思て居ます。

老余の半生

仕官を嫌う由縁私の生涯は終始替ることなく、少年時代の辛苦、老後の安楽、何も珍らしいことはない。今の世界に人間普通の苦楽を嘗めて、今日に至るまで大に愧ることもなく大に後悔することもなく、心静に月日を送りしは、先ず以て身の仕合せと云わねばならぬ。所で世間は広し、私の苦楽を遠方から見て色々に評論し色々に疑う者もありましょう。就中私がマンザラの馬鹿でもなく政治の事も随分知て居ながら、遂に政府の役人にならぬと云うは可笑しい、日本社会の十人は十人、百人は百人、皆立身出世を求めて役人にこそなりたがるその処に、福澤が一人これをいやがるのは不審だと、蔭で窃に評論する訳りでない、現に直接に私に向て質

問する者もある。啻に日本人ばかりでない、知己の外国人も私の進退を疑い、何故政府に出て仕事をせぬか、政府の好地位に立て思う事を行えば、名誉にも為り金にも為り、面白いではないかと、米国人などは毎度勧めに来たことがあるけれども、私は唯笑て取合わぬ。ソコで維新の当分は政府の連中が私を評して佐幕家の一人と認め、彼れは旧幕府に操を立てゝ新政府に仕官せぬ者である、将軍政治を悦んで王政を嫌う者である、古来、革命の歴史に前朝の遺臣と云う者があるが、福澤もその遺臣を気取て、物外に飄然として居ながら心中無限の不平を抱いて居るに違いない、心に不平があれば新政府の為めに宜いことは考えない、油断のならぬ奴だなんて、種々様々な想像を運らして居る者の多いのは、私も大抵知て居る。所が斯く評せらるゝ前朝の遺臣殿は、久しい以前から前朝の門閥制度、鎖国主義に愛想をつかして、維新の際に幕府の忠臣義士が盛んに忠義論を論じて佐幕の気焔を吐て脱走まですする時に、私は強て議論もせず、脱走連中に知て居る者があれば、余計な事をするな、負けるから罷にしろと云て止めて居た位だから、福澤を評するに前朝の遺臣論も勘定が合わぬ。前朝の遺臣と云えば維新の時に幕府の忠臣義士こそ丁度適当の嵌役なれども、この忠臣義士は前朝に忠義の一役を勤めて何時の間にか早替り、第二の忠義役を勤めて第二の忠臣義士となって居るから、是れも遺臣と云われぬ。その遺臣論は姑く擱き、私の身の進退は、前に申す通り、維新の際に幕府の門閥制度、鎖国主義が腹の底から嫌だから佐幕の気がない。左ればとて勤王家の挙動を見れば、幕府に較べてお釣りの出る程の鎖国攘夷、固よりコンな連中に加勢しようと思いも寄らず、唯ジッと中

立独立と説を極めて居ると、今度の新政府は開国に豹変した様子で立派な命令は出たけれども、開国の名義中、鎖攘タップリ、何が何やら少しも信ずるに足らず、東西南北何れを見ても共に語るべき人は一人もなし、唯独りで身に叶う丈けの事を勤めて開国一偏、西洋文明の一天張りでリキンで居る内に、政府の開国論が次第々々に真成のものになって来て、一切万事改進ならざるはなし、所謂文明駸々乎として進歩するの世の中になったこそ実に有り難い仕合せで、実に不思議な事で、云わば私の大願も成就したようなものだから、最早や一点の不平は云われない。

問題更らに起るソコで私の身の進退に就ても更らに問題が起る。是れまで新政府に出身しなかったのは、政府が鎖国攘夷の主義であるから之を嫌うたのだ、仮令い開国と触出してもその内実は鎖攘の根性、信ずるに足らずと見縊たのである、然るに政府の方針がいよ〳〵開国文明と決して着々事実に顕わるゝに於ては、官界に力を尽して政府人と共に文明の国事を経営するこそ本意ではないかと世間の人の思うのは、一寸と尤ものように見えるが、この一段になってもマダ私に動く気がない。

殻威張の群に入るべからず従前曾て人に語らず、又語る必要もないから黙て居て、内の妻子も本当に知りますまいが、私の本心に於て何としても仕官が出来られないその真面目を丸出しに申せば、第一、政府がその方針を開国文明と決定して大に国事を改革すると同時に、役人達が国民に対して無暗に威張る、その威張るのも行政上の威厳と云えば自から理由もあるが、実際

は爾うでない、唯殻威張をして喜んで居る。例えば位記などは王政維新、文明の政治と共に罷めそうなことを罷めずに、人間の身に妙な金箔を着けるような事をして、日本国中いらざる処に上下貴賤の区別を立てゝ、役人と人民と人種の違うような細工をして居る。既に政府が貴いと云えば政府に入る人も自然に貴くなる、貴くなれば自然に威張るようになる、その威張りは即ち殻威張で、誠に宜しくないと知りながら、何も蚊も自然の勢で、役人の仲間になれば何時の間にか共に殻威張を遣るように成り行く。然かのみならず、自分より下に向て威張れば上に向ては威張られる。鼬こっこ鼠こっこ、実に馬鹿らしくて面白くない。政府に這入りさえせねば馬鹿者の威張るのを唯見物して唯笑て居る計りなれども、今の日本の風潮で、役人の仲間になれば、仮令い最上の好地位に居ても兎に角に殻威張と名づくる醜体を犯さねばならぬ。是れが私の性質に於て出来ない。

身の不品行は人種を殊にするが如し之を第一として、第二には甚だ申し憎いことだが、役人全体の風儀を見るに気品が高くない。その平生美衣美食、大きな邸宅に住居して散財の法も奇麗で、万事万端思切りが能くて、世に処し政を料理するにも卑劣でない、至極面白い気風であるが、何分にも支那流の磊落を気取て一身の私を慎しむことに気が付かぬ。動もすれば酒を飲んで婦人に戯れ、肉慾を以て無上の快楽事として居るように見える。家の内外に妾などを飼うて、多妻の罪を犯しながら恥かしいとも思わず、その悪事を隠そうともせずに横風な顔をして居るのは、一方に西洋文明の新事業を行い、他の一方には和漢の旧醜体を学ぶものと云わねばなら

ぬ。ダカラ外の事を差置てこの一点に就て見れば、何だか一段下た下等人種のように見える。是れも世の中の流俗として遠方から眺めて居れば左まで憎らしくもなく又咎めようとも思わぬ、時に往来して用事も語り談笑妨げなけれども、扨いよ〳〵この人種の仲間になって一つ竈の飯を喰い本当に親しく近くなろうと云うには、何処となく穢ないように汚れたように思われてツイ嫌になる。是れは私の潔癖とでも云うようなもので、全体を申せば度量の狭いのでしょうが、何分にも生れつきの性質とあれば仕方がない。

忠臣義士の浮薄を厭う第三、幕末に勤王佐幕の二派が東西に立分れて居るその時に、私は唯古来の門閥制度が嫌い、鎖国攘夷が嫌いばかりで、固より幕府に感服せぬのみか、コンな政府は潰して仕舞うが宜いと不断気焔を吐て居たが、左ればとて勤王連の様を見れば、鎖攘論は幕府に較べて一段も二段も劇しいから、固よりコンな連中に心を寄せる筈はない。唯黙って傍観して居る中に維新の騒動になって、徳川将軍は逃げて帰て来た。スルと幕府の人は勿論、諸方の佐幕連が中々喧しくなって議論百出、東照神君三百年の遺業は一朝にして棄つべからず、三百年の君恩は臣子の身として忘るべからず、薩長何者ぞ、唯是れ関ヶ原の降参武士のみ、常々たる三河譜代の八万騎、何の面目あれば彼の降参武士に膝を屈すべきやなんて、大造な剣幕で、薩長の賊軍を東海道に邀え撃んとする者もあれば、軍艦を以て脱走する者もあり、策士論客は将軍に謁して一戦の奮発を促がし、諫争の極、声を放て号泣するなんぞは、如何にもエライ有様で、忠臣義士の共進会であったが、その忠義論もトウ〳〵行われずに幕府がいよ〳〵解散に

なると、忠臣義士は軍艦に乗て箱館に居る者もあれば、陸兵を指揮して東北地方に戦う者もあり、又はプリ〳〵立腹して静岡の方に行く者もあるその中で、忠義心の堅い者は東京を賊地と云て、東京で出来た物は菓子も喰わぬ、夜分寝る時にも東京の方は頭にせぬ、東京の話をすれば口が汚れる、話を聞けば耳が汚れると云う塩梅式は、丸で今世の伯夷、叔斉、静岡は恰も明治初年の首陽山であったのは凄まじい。所が一年立ち二年立つ中に、その伯夷、叔斉殿が首陽山に蕨の乏しいのを感じたか、ソロ〳〵山の麓に下りて、賊地の方にノツソリ首を出すのみか、身体を丸出にして新政府に出身、海陸の脱走人も静岡行の伯夷、叔斉も、猫も杓子も政府の辺に群れ集て、以前の賊徒今の官員衆に謁見、是れは初めて御目に掛るとも云われまい、兼て御存じの日本臣民で御座ると云うような調子で、君子は既往を語らず、前言前行は唯戯れのみと、双方打解けて波風なく治まりの付たのは誠に目出度い、何も咎立てするにも及ばぬようだが、私には少し説がある。抑も王政維新の争が、政治主義の異同から起て、例えば勤王家は鎖国攘夷を主張し、佐幕家は開国改進を唱えて、遂に幕府の敗北と為り、その後に至て勤王家も大に悟りて開国主義に変じ、恰も佐幕家の宿論に投ずるが故に、之と共に爾後の方針を与にすると云えば至極尤もに聞ゆれども、当時の争に開鎖など云う主義の沙汰は少しもない。佐幕家の進退は一切万事、君臣の名分から割出して、徳川三百年の天下云々と争いながら、その天下が無くなったら争の点も無くなって平気の平左衛門とは可笑しい。ソレも理窟の分らぬ小輩ならば固より宜しいが、争論の発起人で頻りに忠義論を唱えて伯夷叔斉を気取り、又はその

身躬から脱走して世の中を騒がした人達の気が知れない。勝負は時の運に由る、負けても恥かしいことはない、議論が中らなかっても構わないが、遺傷なったらその身の不運と諦らめて、山に引込むか、寺の坊主にでもなって、生涯を送れば宜いと思えども、中々以て坊主どころか、洒蛙々々と高い役人になって嬉しがって居るのが私の気に喰わぬ。扨々忠臣義士も当てにならぬ、君臣主従の名分論も浮気なものだ、コンな薄べらな人間と伍を為すよりも独りで居る方が心持が宜いと説を極めて、初一念を守り、政治の事は一切人に任せて、自分は自分だけの事を勉めるように身構えをしました。実は私の身の上に何も縁のないことで、入らざるお世話のようだが、前後の事情を能く知て居るから、忠臣義士の成行を見るとツイ気の毒になって、意気地なしのように腰抜のように、思うまいと思ても思われて堪らない。全く私の癇癪でしょうが、是れも自然に私の功名心を淡泊にさせた原因であろうと思われます。

独立の手本を示さんとす第四には、勤王佐幕など云う喧しい議論は差置き、維新政府の基礎が定まると、日本国中の士族は無論、百姓の子も町人の弟も、少しばかり文字でも分る奴は皆役人になりたいと云う。仮令い役人にならぬでも、兎に角に政府に近づいて何か金儲でもしようと云う熱心で、その有様は臭い物に蠅のたかるようだ。全国の人民、政府に依らねば身を立てる処のないように思うて、一身独立と云う考は少しもない。偶ま外国修業の書生などが帰て来て、僕は畢生独立の覚悟で政府仕官は思いも寄らぬ、なんかんと鹿爪らしく私方へ来て満腹の気焔を吐く者は幾らもある。私は最初から当てにせずに宜い加減に聞流して居ると、その独立

先生が久しく見えぬ。スルと後に聞けばその男はチャンと何省の書記官に為り、運の好い奴は地方官になって居ると云うような風で、何も之を咎めるではない、人々の進退はその人の自由自在なれども、全国の人が唯政府の一方を目的にして外に立身の道なしと思込んで居るのは、畢竟漢学教育の余弊で、所謂宿昔青雲の志と云うことが先祖以来の遺伝に存して居る一種の迷である。今この迷を醒まして文明独立の本義を知らせようとするには、天下一人でもその真実の手本を見せたい、亦自からその方針に向う者もあるだろう、一国の独立は国民の独立心から湧て出てることだ、国中を挙げて古風の奴隷根性では迚も国が持てない、出来ることか出来ないことかソンな事に躊躇せず、自分がその手本になって見ようと思付き、人間万事無頓着と覚悟を定めて、唯独立独歩と安心決定したから、政府に依りすがる気もない、役人達に頼む気もない。貧乏すれば金を使わない、金が出来れば自分の勝手に使う。人に交わるには出来る丈けの誠を尽して交わる、ソレでも忌と云えば交わって呉れなくても宜しい。客を招待すれば此方の家風の通りに心を用いて饗応する、その風が嫌いなら来て呉れなくても苦しうない。此方の身に叶う丈けを尽して、ソレから上は先方の領分だ。誉めるなり譏るなり喜ぶなり怒るなり勝手次第にしろ、誉められて左まで歓びもせず、譏られて左まで腹も立てず、いよ〳〵気が合わねば遠くに離れて附合わぬ計りだ。一切万事、人にも物にもぶら下らずに、云わば捨身になって世の中を渡るとチャンと説を定めて居るから、何としても政府へ仕官などは出来ない。この流儀が果して世の中の手本になって宜い事か、悪い事か、ソレも無頓着だ、宜ければ甚だ

宜しい、悪るければソレまでの事だ、その先きまで責任を脊負い込もうとは思いません。

右の通り条目を並べて第一から第四まで述立てゝ見れば、私の政府に出ないのは初めからチャンと理窟を定めて箇様々々と自から自分を束縛してあるように見えるが、実はソレホド窮窟な訳けではない、ソレホド六かしい事でもない。唯今日これを筆記して人に分るようにしようとするには、話に順序がなくては叶わぬ。ソコで久しい前年から今日に至るまで、物に触れ事に当り、人と談論した事などを思出して、彼の時はアゝであった、この時は斯うであったと、記憶中に往来するものを取集めて見ると、前に記した通りになる。詰る所、私は政治の事を軽く見て熱心でないのが政界に近づかぬ原因でしょう。喩えば人の性質に下戸上戸があって、下戸は酒屋に入らず上戸は餅屋に近づかぬと云う位のもので、政府が酒屋なら私は政事の下戸でしょう。

政治の診察医にして開業医に非ずとは云うものゝ、私が政治の事を全く知らぬではない、口に談論もすれば紙に書きもする。但し談論書記する計りで、自からその事に当ろうと思わぬその趣は、恰も診察医が病を診断してその病を療治しようとも思わず、又事実に於て療治する腕もないようなものでしょうが、病床の療治は皆無素人でも、時としては診察医も役に立つことがある。ダカラ世間の人も私の政治診断書を見て、是れは本当の開業医で療治が出来るだろう、病家を求めるだろうと推察するのは大間違いの沙汰です。

明治十四年の政変この事に就て一寸と語りますが、明治十四年の頃、日本の政治社会に大騒動

が起て、私の身にも大笑いな珍事が出来ました。明治十三年の冬、時の執政大隈、伊藤、井上の三人から私方に何か申して参て、或る処に面会して見ると、何か公報のような官報のような新聞紙を起すから私に担任して呉れろと云う。一向趣意が分らぬから先ず御免と申して去ると、その後度々人の往復を重ねて話が濃くなり、とう〳〵仕舞に、政府はいよ〳〵国会を開く積りでその用意の為めに新聞紙も起す事であると秘密を明かしたから、是れは近頃面白い話だ、ソンな事なら考え直して新聞紙も引受けようと凡そ約束は出来たが、マダ何時からと云う期日は定まらずに、そのまゝに年も明けて明治十四年と為り、十四年も春去秋来、頓と埒の明かぬ様子なれども、此方も左まで急ぐ事でないから打遣て置く中に、何か政府中に議論が生じたと見え、以前至極同主義でありし隈伊井の三人が漸く不和になって、その果ては大隈が辞職することになりました。扨大隈の辞職は左まで驚くに足らず、大臣の進退は毎度珍らしくもない事であるが、この辞職の一条が福澤にまで影響して来たのが大笑いだ。当時の政府の騒ぎは中々一通りでない。政府が動けば政界の小輩も皆動揺して、随て又種々様々の風聞を製造する者も多いその風聞の一、二を申せば、全体大隈と云うは専横な男で、様々に事を企てるその後には、福澤が居て謀主になってるその上に、三菱の岩崎弥太郎が金主になって既に三十万円の大金を出したそうだなんて、馬鹿な茶番狂言の筋書見たような事を触廻わして、ソレから大隈の辞職と共に政府の大方針が定まり、国会開設は明治二十三年と予約して色々の改革を施す中にも、従前の教育法を改めて所謂儒教主義を復活せしめ、文部省も一時妙な風になって来て、その風

が全国の隅々までも靡かして、十何年後の今日に至るまで政府の人もその始末に当惑して居るでしょう。凡そ当時の政変は政府人の発狂とでも云うような有様で、私はその後岩倉から度々呼びに来て、ソッと裏の茶室のような処で面会、主人公は何かエライ心配な様子で、この度の一件は政府中、実に容易ならぬ動揺である、西南戦争の時にも随分苦労したが、今度の始末はソレよりも六かしいなんかんと話すのを聞けば、余程騒いだものと察しられる。実に馬鹿気たことで、政府は明治二十三年、国会開設と国民に約束して、十年後には饗応すると云て案内状を出したようなものだ、所がその十年の間に客人の気に入らぬ事ばかり仕向けて、人を捕えて牢に入れたり東京の外に逐出したり、マダ夫れでも足らずに、役人達はむかしの大名公卿の真似をして華族になって、是れ見よがしに殻威張を遣て居るから、天下の人はます〳〵腹を立てゝ暴れ廻わる。何の事はない饗応の主人と客とマダ顔も合わせぬ先きに角突合いになって居るから可笑しい。十四年の真面目の事実は、私が詳に記して家に蔵めてあるけれども、今更ら人の忌がる事を公けにするでもなし黙て居ますが、そのとき私は寺島と極懇意だから何も蚊も話して聞かせて、「ドウダイ僕が今、口まめに饒舌って廻ると政府の中に随分困る奴が出来るがと云うと、寺島も始めて聞て驚き、「成程そうだ、政治上の魂胆は随分穢いものとは云いながら、是れはアンマリ酷い。少し涙くって遣ても宜いじゃないかと、態と勧めるような風であったけれども、私は夫れ程に思わぬ、「御同前に年はモウ四十以上ではないか、先ず〳〵ソンナ無益な殺生は罷にしようと云て、笑て分れたことがある。

保安条例コンな訳で、私は十四年の政変のその時から、何も実際に関係はない、俗界に云う政治上の野心など思も寄らぬ事だから誠に平気で、唯他人のドタバタするのを見物して居るけれども、政府の目を以てこの見物人を見れば、又不思議なもので、色々な姿に写ると見える。明治何年か保安条例の出たとき、私もこの条例の科人になって東京を逐出されると云う風聞。ソレはその時塾に居た小野友次郎が警視庁に懇意の人があって、極内々その事を聞出して、私と同時に後藤象次郎も共に放逐と確に云うから、「ナニ殺されるではなし、イザと云えば川崎辺まで出て行けば宜いと申して居る中、その翌日か翌々日か小野が又来て、前の事は取消しになったと云うので事は済みました。又その後明治二十年頃かと思う、井上角五郎が朝鮮で何とやらしたと云うので捕えられて、その時の騒動と云うものは大変で、警察の役人が来て私方の家捜しサ。夫から井上が何か吟味に逢うて、福澤諭吉に証人になって出て来いと云て、私を態々裁判所に呼出して、タワイもない事を散々尋て、ドウかしたら福澤も科人の仲間にしたいと云うような風が見えました。都てコンな事は唯大間違で、私の身には何ともない。却て世の中の人心の動くその運動の方向緩急を視察して面白く思て居るが、又一歩を進めて虚心平気に考うれば、私が兎角政界の人に疑われると云うのも全く無理はない。第一私は何としても役人になる気がない、是れは世間に例の少ない事で、仕官流行、熱中奔走の世の中に、独りこれが嫌いと云えば、一寸と見て不審を起さねばならぬ。ソレもいよ〳〵官途に気がないとならば田舎にでも引込んで仕舞えば宜いに、都会の真中に居て然かも多くの人に交際して、口も達者に筆も

まめに、洒蛙々々と饒舌たり書たりするから、世間の目に触れ易く、随て人に不審を懐かせるのも自然の勢である。

一片の論説能く天下の人心を動かす之を第一として、モ一つ本当の事を云うと、私の言論を以て政治社会に多少の影響を及ぼしたこともありましょう。例えば是れまで頓と人の知らぬ事で面白い話がある。明治十年、西南の戦争も片付て後、世の中は静になって、人間が却て無事に苦しむと云うとき、私が不図思付て、是れは国会論を論じたら天下に応ずる者もあろう、随分面白かろうと思て、ソレからその論説を起草して、マダその時には時事新報と云うものはなかったから、報知新聞の主筆藤田茂吉、箕浦勝人にその草稿を見せて、「この論説は新聞の社説として出されるなら出して見なさい、屹と世間の人が悦ぶに違いない。但しこの草稿のまゝに印刷すると、文章の癖が見えて福澤の筆と云うことが分るから、文章の趣意は無論、字句までも原稿の通りにして、唯意味のない妨げにならぬ処をお前達の思う通りに直して、試みに出して御覧。世間で何と受けるか、面白いではないかと云うと、年の若い元気の宜い藤田、箕浦だから、大に悦んで草稿を持て帰て、早速報知新聞の社説に戴せました。当時、世の中にマダ国会論の勢力のない時ですから、この社説が果して人気に投ずるやら、又は何でもない事になって仕舞うやら、頓と見込みが付かぬ。凡そ一週間ばかり毎日のように社説欄内を填めて、又藤田、箕浦が筆を加えて東京の同業者を煽動するように書立てゝ、世間の形勢如何と見て居た所が、不思議なる哉、凡そ二、三ヶ月も経つと、東京市中の諸新聞は無論、田舎の方にも段々議

論が喧しくなって来て、遂には例の地方の有志者が国会開設請願なんて東京に出て来るような騒ぎになって来たのは、面白くもあれば、又ヒョイと考直して見れば、仮令い文明進歩の方針とは云いながら、直に自分の身に必要がなければ物数寄と云わねばならぬその物数寄な政治論を吐て、図らずも天下の大騒ぎになって、サア留めどころがない、恰も秋の枯野に自分が火を付けて自分で当惑するようなものだと、少し怖くなりました。併し国会論の種は維新の時から蒔てあって、明治の初年にも民選議院云々の説もあり、その後とても毎度同様の主義を唱えた人も多い。ソンな事が深い永い原因に違いはないけれども、不図した事で私が筆を執て、事の必要なる理由を論じて喋々喃々数千言、噛んでくゝめるように言て聞かせた跡で、間もなく天下の輿論が一時に持上て来たから、如何しても報知新聞の論説が一寸と導火になって居ましょう、その社説の年月を忘れたから先達箕浦に面会、昔話をして新聞の事を尋ねて見れば、同人もチャンと覚えて居て、その後古い報知新聞を貸して呉れて、中を見ると明治十二年の七月二十九日から八月十日頃まで長々と書並べて、一寸と辻褄が合て居ます。是れが今の帝国議会を開く為めの加勢になったかと思えば自分でも可笑しい。シテ見ると先きの明治十四年の騒動に、福澤が政治に関係するなんかんと云われて、その後も兎角私の身に目を着ける者が多くて色々に怪しまれたのも、直接に身に覚えのない事とは云いながら、間接には自から因縁のないではない。国会開設、改進々歩が国の為めに利益なればこそ善けれ、是れが実際の不利益ならば、私は現世の罪は免かれても死後閻魔の庁で酷い目に逢う筈でしょう。報知新聞の

一件ばかりでない、政治上に就て私の言行は都てコンな塩梅式で、自分の身の私に利害はない所謂診察医の考で、政府の地位を占めて自から政権を振廻わして大下の治療をしようと云う了簡はないが、如何でもして国民一般を文明開化の門に入れて、この日本国を兵力の強い商売繁昌する大国にして見たいと計り、夫れが大本願で、自分独り自分の身に叶う丈けの事をして、政界の人に交際すればとて、誰に逢うても何ともない、別段に頼むこともなければ相談することもない、貧富苦楽、独り分に安んじて平気で居るから、考の違う役人達が私の平生を見たり聞たりして変に思うたのも決して無理でない、けれども真実に於て私は政府に対して少しも怨はない、役人達にも悪い人と思う者は一人もない、是れが封建門閥の時代に私の流儀にして居たらば、ソレコソ如何なる憂き目に逢て居るか知れない。今日安全に寿命を永くして居るのは明治政府の法律の賜と思て喜んで居ます。

時事新報ソレから明治十五年に時事新報と云う新聞紙を発起しました。丁度十四年政府変動の後で、慶應義塾先進の人達が私方に来て頻りにこの事を勧める。私も亦自分で考えて見るに、世の中の形勢は次第に変化して、政治の事も商売の事も日々夜々運動の最中、相互に敵味方が出来て議論は次第に喧しくなるに違いない。既に前年の政変も孰れが是か非かソレは差置き、双方主義の相違で喧嘩をしたことである。政治上に喧嘩が起れば経済商売上にも同様の事が起らねばならぬ。今後はいよ〳〵ます〳〵甚だしい事になるであろう。この時に当て必要なるは所謂不偏不党の説であるが、扨その不偏不党とは口でこそ言え、口に言いながら心に偏する所

があって一身の利害に引かれては迚も公平の説を立てる事が出来ない。ソコで今全国中に聊かながら独立の生計を成して多少の文思もありながら、その身は政治上にも商売上にも野心なくして恰も物外に超然たる者は、※呼がましくも自分の外に適当の人物が少なかろうと心の中に自問自答して、遂に決心して新事業に着手したものが即ち時事新報です。既に決断した上は友人中これを止める者もありしが、一切取合わず、新聞紙の発売数が多かろうと少なかろうと他人の世話になろうと思わず、この事を起すも自力なれば倒すも自力なり、仮令い失敗して廃刊しても一身一家の生計を変ずるに非ず、又自分の不名誉とも思わず、起すと同時に倒すの覚悟を以て、世間の風潮に頓着なしに今日までも首尾能く遣て来たことですが、畢竟私の安心決定とは申しながら、その実は私の朋友には正直有為の君子が多くて、何事を打任せても間違いなど云う忌な心配は聊かもない。発行の当分、何年の間は中上川彦次郎が引受け、その後は伊藤欽亮、今は次男の捨次郎が之に任じ、会計は本山彦一、次で坂田実、今は戸張志智之助等が専ら担任して居ますが、私の性質として金銭出納の細目を聞たこともなく、見たこともなく、その人々のするがまゝに任せて置て、曾て一度も変な間違いの出来たことはない。誠に安心気楽なものです。コンな事が新聞事業の永続する訳けでしょう。又編輯の方に就て申せば、私の持論に、執筆者は勇を鼓して自由自在に書くべし、他人の事を論じ他人の身を評するには、自分とその人と両々相対して直接に語られるような事に限りて、それ以外に逸すべからず、如何なる劇論、如何なる大言壮語も苦しからねど、新聞紙に之を記すのみにて、扨その相

手の人に面会したとき自分の良心に愧じて率直に陳べることの叶わぬ事を書て居ながら、遠方から知らぬ風をして恰も逃げて廻わるようなものは、之を名づけて蔭弁慶の筆と云う、その蔭弁慶こそ無責任の空論と為り、罵言讒謗の毒筆と為る、君子の愧ずべき所なりと常に警しめて居ます。併し私も次第に年をとり、何時までもコンな事に勉強するでもなし、老余は成る丈け閑静に日を送る積りで、新聞紙の事も若い者に譲り渡して段々遠くなって、紙上の論説なども石河幹明、北川礼弼、堀江帰一などが専ら執筆して、私は時々立案してその出来た文章を見て一寸々々加筆する位にして居ます。

事を為すに極端を想像す扨これまで長々と話を続けて、私の一身の事、又私に関係した世の中の事をも語りましたが、私の生涯中に一番骨を折たのは著書飜訳の事業で、是れには中々話が多いが、その次第は本年再版した福澤全集の緒言に記してあれば之を略し、著訳の事を別にして、元来私が家に居り世に処するの法を一括して手短に申せば、都て事の極端を想像して覚悟を定め、マサカの時に狼狽せぬように後悔せぬようにと計り考えて居ます。生きて居る身はいつ何時死ぬかも知れぬから、その死ぬ時に落付て静にしようと云うのは誰も考えて居ましょう。夫れと同様に、例えば私が自身自家の経済に就ては、何としても他人に対して不義理はせぬと心に決定して居るから、危い事を犯すことが出来ない。斯うすれば利益がある、爾うすれば金が出来るなど云ても、危険を犯して失敗したときには必ず狼狽することがあろう、後悔することがあろうと思て、手を出すことが出来ない。金を得て金を使うよりも、金がなければ使わ

ずに居る。按摩按腹をしても餓えて死ぬ気遣いはない、粗衣粗食などに閉口する男でないと力身込んで居るような訳けで、私が経済上に不活溌なのは失敗の極端を恐れて鈍くして居るのですが、その外直接に一身の不義理にならぬ事に就ては必ずしも不活溌でない。トバの詰り遺傷なっても自身独立の主義に妨げのない限りは颯々と遣ります。例えば慶應義塾を開いて何十年来様々変化は多い。時としては生徒の減ることもあれば増ることもある。唯生徒ばかりでない、会計上からして教員の不足することも度々でしたが、ソンな時にも払は少しも狼狽しない。生徒が散ずれば散ずるまゝにして置け、教員が出て行くなら行くまゝにして留めるな、生徒散じ教員去て塾が空屋になれば、残る者は乃公一人だ、ソコで一人の根気で教えられる丈けの生徒を相手に自分が教授して遣る、ソレも生徒がなければ強いて教授しようとは云わぬ、福澤諭吉は大塾を開て天下の子弟を教えねばならぬと人に約束したことはない、塾の盛衰に気を揉むような馬鹿はせぬと、腹の底に極端の覚悟を定めて、塾を開たその時から、何時でもこの塾を潰して仕舞うと始終考えて居るから、少しも怖いものはない。平生は塾務を大切にして一生懸命に勉強もすれば心配もすれども、本当に私の心事の真面目を申せば、この勉強心配は浮世の戯れ、仮りの相ですから、勉めながらも誠に安気です。近日は又慶應義塾の維持の為めとて、本塾出身の先進輩が頻りに資金を募集して居ます。是れが出来れば斯道の為めに誠に有益な事で、私も大に喜びますが、果して出来るか出来ないか、私は唯静にして見て居ます。又時事新報の事も同様、最初から是非とも永続させねばならぬと誓を立てた訳けでもなし、或は倒れること

もあろう、その時に後悔せぬようにと覚悟をして居るから、是れも左までの心配にならぬ。又私の著訳書に他人の序文を求めたことのないのも矢張り同じ趣意であると申すは、人の序文題字などを以て出版書の信用を増すは自から名誉でもあろうが、内実は発売を多くせんとするの計略と云ても宜しい。所が私の考は左様でない。自分の著訳書が世間に流行すれば宜いと固より心の中に願いながらも、又一方から考えて是れが全く売れなくても後悔はしないと、例の極端を覚悟して居るから、実際の役にも立たぬ余計な文字を人に書て貰たことはない。又他人に交わるの法もこの筆法に従い、私は若い時からドチラかと云えば出しゃばる方で、交際の広い癖に、遂ぞ人と喧嘩をしたこともない。親友も甚だ多いが、この交際に就ても矢張り極端説は忘れない。今日までこの通りに仲好く附合はして居るが、先方の人がいつ何時変心せぬと云う請合は六かしい。若し左様なれば交際は罷めなければならぬ。交際を罷めても此方の身に害を加えぬ限りは相手の人を憎むには及ばぬ、唯近づかぬようにする計りだ。コンな事で朋友が一人なくなり二人なくなり次第に淋しくなって、自分独り孤立するようになっても苦しうない、決して後悔しない、自分の節を屈して好かぬ交際は求めずと、少年の時から今に至るまでチャンと説は極めてありながら、扨実際には頓とソンな必要はない。生来六十余年の間に、知る人の数は何千も何万もあるその中で、誰と喧嘩したことも義絶したこともないのが面白い。都て斯う云う塩梅式で、私の流儀は仕事をするにも朋友に交わるにも、最初から棄身になって取て掛り、仮令い失敗しても苦しからずと、浮世の事を軽く視ると同時に一身の独立を重んじ、人

間万事、停滞せぬようにと心の養生をして参れば、世を渡るに左までの困難もなく、安気に今日まで消光して来ました。

身体の養生扨又心の養生法は右の如しとして、身の養生は如何だと申すに、私の身に極めて宜しくない極めて赤面すべき悪癖は、幼少の時から酒を好む一条で、然かも図抜けの大酒、世間には大酒をしても必ずしも酒が旨いとは思わず、飲んでも飲まなくても宜いと云う人があるが、私は左様でない。私の口には酒が旨くて多く飲みたいその上に、上等の銘酒を好んで、酒の良否が誠に能く分る。先年中一樽の価七、八円のとき、上下五十銭も相違すれば、先ず価を聞かずにチャンとその風味を飲み分けると云うような黒人で、その上等の酒をウンと飲んで、肴も良い肴を沢山喰い、満腹飲食した跡で飯もドッサリ給べて残す所なしと云う、誠に意地の穢ない所謂牛飲馬食とも云うべき男である。尚おその上に、この賤しむべき男が酒に酔て酔狂でもすれば自から警めると云うこともあろうが、大酒の癖に酒の上が決して悪くない。酔えば唯大きな声をして饒舌るばかり、遂ぞ人の気になるような忌がるような根性の悪いことを云て喧嘩をしたこともなければ、上戸本性真面目になって議論したこともないから、人に邪魔にされない。是れが却て不幸で、本人は宜い気になって、酒とさえ云えば一番先きに罷出て、人の一倍も二倍も三倍も飲んで天下に敵なしなんて得意がって居たのは、返す〳〵も愧かしい事であるが、酒の事を除てその外になれば、私は少年の時から宜い加減な摂生家と云ても宜しい。何も別段に摂生をしようなんてソンな六かしい考のあろうようもないが、日に三度の食事の外にメ

ツタに物を食わない。或は母が給べさせなかったのか知らぬが、幼少から癖になって間の食物が欲しくない。殊に晩食の後、夜になれば如何なる好物があっても口に入れることが出来ない。例えば親類の不幸に通夜するとか、又は近火の騒ぎに夜を更かすとかして、自然に其処に食物が出て来ても食う気にならぬ。是れは母に仕込まれた習慣が生涯残て居るのでしょう。摂生の為めには最も宜しい習慣です。又私は随分気の長い方でない、何事もテキパキ早く遣ると云う風で、時としては人に笑われるような事も多い。所が三度の食事となると丸で別人のように変化して、何としても早く食うことが出来ない。子供の時に早飯と何とやらは武士の嗜なんと云て、人に悪く云われた事もあり、又自分でも早く食いたいと思て居たが、何分にも頬張て生噛にして食うことが出来ない。その後西洋流の書を読んで生噛の宜しくない事を知て、始めて是れは却て自分の悪い癖が宜い事になったと合点して大きに悦び、爾来憚る所もなくゆる〳〵食事をして、凡そ人の一、二倍も時を費します。是れも摂生の為めに甚だ宜しい。

漸く酒を節すソレカラ又酒の話になって、私が生得酒を好んでも、郷里に居るとき少年の身として自由に飲まれるものでもなし、長崎では一年の間、禁酒を守り、大阪に出てから随分自由に飲むことは飲んだが、兎角銭に窮して思うように行かず、年二十五歳のとき江戸に来て以来、嚢中も少し温かになって酒を買う位の事は出来るようになったから、勉強の傍ら飲むことを第一の楽みにして、朋友の家に行けば飲み、知る人が来ればスグに酒を命じて、客に勧めるよりも主人の方が嬉しがって飲むと云うような訳けで、朝でも昼でも晩でも時を嫌わず能く

も飲みました。夫れから三十二、三歳の頃と思う。独り大に発明して、斯う飲んでは迚も寿命を全くすることは叶わぬ、左ればとて断然禁酒は、以前に覚えがある、唯一時の事で永続きが出来ぬ、詰り生涯の根気でそろ〳〵自から節するの外に道なしと決断したのは、支那人が阿片を罷めるようなもので随分苦しいが、先ず第一に朝酒を廃し、暫くして次ぎに昼酒を禁じたが、客のあるときは矢張り客来を名にして飲んで居たのを、漸く我慢して、後にはその客ばかりに進めて自分は一杯も飲まぬことにして、是れ丈けは如何やら斯うやら首尾能く出来て、サア今度は晩酌の一段になって、その全廃は迚も行われないから、そろ〳〵量を減ずることにしようと方針を定め、口では飲みたい、心では許さず、口と心と相反して喧嘩をするように争いながら、次第々々に減量して、稍や穏になるまでには三年も掛りました、と云うのは私が三十七歳のとき酷い熱病に罹て、万死一生の幸を得たそのとき、友医の説に、是れが以前のような大酒では迚も助かる道はないが、幸に今度の全快は近年節酒の賜に相違ないと云たのを覚えて居るから、私が生涯鯨飲の全盛は凡そ十年間と思われる。その後酒量は減ずるばかりで増すことはない。初めの間は自から制するようにして居たが、自然に減じて飲みたくも飲めなくなったのは、道徳上の謹慎と云うよりも年齢老却の所為でしょう。兎に角に人間が四十にも五十にもなって酒量が段々強くなって、遂には唯の清酒は利きが鈍いなんてブランデーだのウヰスキーだの飲む者があるが、アレは宜くない。苦しかろうが罷めるが上策だ。私の身に覚えがある。私のような無法な大酒家でも、三十四、五歳のときトウ〳〵酒慾を征伐して勝利を得たから、況

して今の大酒家と云ても私より以上の者は先ず少ない、高の知れた酒客の葉武者だ、そろ〳〵遣れば節酒も禁酒も屹と出来ましょう。

身体運動ソレから私の身体運動は如何だとその話もしましょう。幼年の時から貧家に生れて身体の運動はイヤでもしなければならぬ。ソレが習慣になって生涯身体を動かして居ます。少年のとき荒仕事ばかりして、冬になると※が切れて血が出る、スルと木綿糸で　の切口を縫て熱油を滴らして手療治をして居た事を覚えて居る。江戸に来てから自然ソンナことが無くなったから、或る時、

鄙事多能年少春
立身自笑却壊身
浴余閑坐肌全浄
曾是綿糸縫　人

と云う詩のようなものを記した事がある。又藩中に居て武芸をせねば人でないように風が悪いから、中村庄兵衛と云う居合の先生に就て少し稽古したから、その後、洋学修業に出ては、国に居るときのように荒い仕事をしないから、始終居合刀を所持して、大阪の藩の倉屋敷に居るとき、又緒方の塾でも、折節はドタバタ遣て居ました。夫れから江戸に来て世間に攘夷論が盛になってから居合は罷めにして、兼て腕に覚えのある米搗を始めて、折々遣て居た所が、明治三年、大病を煩うて、病後何分にも旧のようにならぬ。その年か翌年か岩倉大使が欧行に付き、

親友の長与専斎も随行を命ぜられ、近々出立とて私方に告別に参り、キニーネ一オンスのビンを懐中から出して、「君の大病全快はしたが、来年その時節に為ると何か故障を生じて薬品の必要があるに違いない。是れは塩酸キニーネ最上の品で、薬店などにはない。之を遺るから大事に貯えて置け。僕の留守中に思当ることがあろうと云うのは実に朋友の親切なれども、私は却て喜ばぬ。「馬鹿なことを云て呉れるな。病気全快の僕の身に薬なんぞ要るものか。面白くもない。僕は貰わないと云うと、長与が笑て、「知らぬ事を云うな。屹と役に立つことがあるから黙て取て置けと云て、その薬を私に渡して別れた所が、果して然り、長与の外行留主中、毎度発熱して、夫れキニーネ又キニーネとて、トウ〳〵一オンスの品を飲み尽したと云うような容体で、何分にも力が回復しない。

病に媚びず横浜の女医ドクトル・シモンズの説に、何でも肌に着くものはフラネルにせよと云うから、シャツも股引もフラネルで拵え、足袋の裏にもフラネルを着けさせて全身を纏うて居た所が、頓と効能が見えぬ。ドウかすると風を引て悪寒を催して熱が昇る。毎度の事で、凡そ二年余り三年になっても同様であるから、或日私が大に奮発して、是れは医師の命令に従い、余り病気を大切にして、云わば病に媚るようなものだ。此方から媚るから病は段々付揚る。自分の身体には自分の覚えがある。真実の病中には固より医命に服することなれども、今日は病後の摂生より外に要はないから、自分で摂生を試みましょう。抑も自分の本は田舎士族で、少年のとき如何なる生活して居たかと云えば、麦飯を喰い唐茄子の味噌汁を啜り、衣服は手織木

綿のツンツルテンを着て、フラネルなんぞ目に見たこともない。この田舎者が開国の風潮に連れ東京に住居して、当世流に摂生も可笑しい。田舎者の身体の方が驚いて仕舞う。即ち今日風を引たり熱が出たりしてグヅ〳〵して居るのは摂生法の上等に過る誤であるから、直に前非を改めると申して、その日からフラネルのシャツも股引も脱ぎ棄てゝ仕舞て、唯の木綿の襦袢に取替え、ストーブも余りに焚かぬようにして、洋服は馬に乗る時計り、騎馬の服と定めて、不断は純粋の日本の着物を着て、寒い風が吹通しても構わず家にも居れば外にも出る。唯食物ばかりを西洋流に真似て好き品を用い、その他は一切むかしの田舎士族に復古して、ソレから運動には例の米搗薪割に身を入れて、少年時代の貧乏世帯と同じようにして毎日汗を出して働いて居る中に、次第に身体が丈夫になって、風も引かず発熱もせぬようになって来ました。私の身の丈けは五尺七寸三、四分、体量は十八貫目足らず。年の頃十八、九の時から六十前後まで増減なし、十八貫を出たこともなければ十七貫に下たこともない。随分調子の宜しいその身体が、病後は十五貫目にまで減じて二、三年悩んだが、この田舎流の摂生法でチャンと旧の通りに復して、その後六十五歳の今日に至り今でも十七貫五百目より少なくはない。扨私が考えるに右の田舎摂生が果して実効を奏したのか、又は病の回復期が自然に来た処で偶然にも摂生法を改めたのか、ソレは何とも判断が付かぬ。兎に角に生理上必要の処に少し注意さえすれば、田舎風の生活も悪くないと云うこと丈けは確かに分る。但し肌に寒風の吹通しが有益であるか、又は外の摂生を以て体力が強くなって、実際害に為るべき寒風にも能く抵抗して之に堪うるの

であるか、即ち寒風その物は薬に非ず、寒風をも犯して無頓着と云うその全般の生活法が有益であるか、凡そこの種の関係は医学の研究すべき問題と思います。ソレは扨置き、私の摂生は明治三年、三十七歳大病の時から一面目を改め、書生時代の乱暴無茶苦茶、殊に十年間鯨飲の悪習を廃して、今日に至るまで前後凡そ四十年になりますが、この四十年の間にも初期は文事勉強の余暇を偸んで運動摂生したものが、次第に老却するに従い今は摂生を本務にしてその余暇に文を勉めることにしました。

居合、米搗今でも宵は早く寝て朝早く起き、食事前に一里半ばかり芝の三光から麻布古川辺の野外を少年生徒と共に散歩して、午後になれば居合を抜たり米を搗たり、一時間を費して晩の食事も、チャンと規則のようにして、雨が降ても雪が降ても年中一日も欠かしたことはない。去年の晩秋戯れに、

一点寒鐘声遠伝
半輪残月影猶鮮
草鞋竹策侵秋暁
歩自三光渡古川

なんて詩を作りましたが、この運動摂生が何時まで続くことやら、自分で自分の体質の強弱、根気の有無を見て居ます。

行路変化多し回顧すれば六十何年、人生既往を想えば恍として夢の如しとは毎度聞く所である

が、私の夢は至極変化の多い賑かな夢でした。旧小藩の小士族、窮屈な小さい箱の中に詰込まれて、藩政の楊枝を以て重箱の隅をほじくるその楊枝の先きに掛た少年が、ヒョイと外に飛出して故郷を見捨るのみか、生来教育された漢学流の教をも打遣て西洋学の門に入り、以前に変た書を読み、以前に変った人に交わり、自由自在に運動して、二度も三度も外国に往来すれば考は段々広くなって、旧藩は扨置き日本が挟く見えるようになって来たのは、何と賑かな事で大きな変化ではあるまいか。或はその間に艱難辛苦など述立てれば大造のようだが、咽元通れば熱さ忘れると云うその通りで、艱難辛苦も過ぎて仕舞えば何ともない。貧乏は苦しいに違いないが、その貧乏が過ぎ去た後で昔の貧苦を思出して何が苦しいか、却て面白いくらいだから、私は洋学を修めて、その後ドウやら斯うやら人に不義理をせず頭を下げぬようにして、衣食さえ出来れば大願成就と思て居た処に、又図らずも王政維新、いよ〳〵日本国を開て本当の開国となったのは難有い。幕府時代に私の著わした西洋事情なんぞ、出版の時の考には、天下にコンなものを読む人が有るか無いか夫れも分らず、仮令い読んだからとて之を日本の実際に試みるなんて固より思いも寄らぬことで、一口に申せば西洋の小説、夢物語の戯作くらいに自から認めて居たものが、世間に流行して実際の役に立つのみか、新政府の勇気は西洋事情の類でない、一段も二段も先きに進んで思切た事を断行して、アベコベに著述者を驚かす程のことも折々見えるから、ソコで私も亦以前の大願成就に安んじて居られない。コリャ面白い、この勢に乗じて更に大に西洋文明の空気を吹込み、全国の人心を根底から転覆して、絶遠の東洋に一新

文明国を開き、東に日本、西に英国と、相対して後れを取らぬようになられないものでもないと、茲に第二の誓願を起して、扨身に叶う仕事は三寸の舌、一本の筆より外に何もないから、身体の健康を頼みにして専ら塾務を務め、又筆を弄び、種々様々の事を書き散らしたのが西洋事情以後の著訳です。一方には大勢の学生を教育し、又演説などして所思を伝え、又一方には著書飜訳、随分忙しい事でしたが、是れも所謂万分一を勉める気でしょう。所で顧みて世の中を見れば堪え難いことも多いようだが、一国全体の大勢は改進々歩の一方で、次第々々に上進して、数年の後その形に顕われたるは、日清戦争など官民一致の勝利、愉快とも難有いとも云いようがない。命あればこそコンな事を見聞するのだ、前に死んだ同志の朋友が不幸だ、アヽ見せて遣りたいと、毎度私は泣きました。実を申せば日清戦争何でもない。唯是れ日本の外交の序開きでこそあれ、ソレほど喜ぶ訳けもないが、その時の情に迫まれば夢中にならずには居られない。凡そコンな訳けで、その原因は何処に在るかと云えば、新日本の文明富強は都て先人遺伝の功徳に由来し、吾々共は丁度都合の宜い時代に生れて祖先の賜を唯貰うたようなものに違いはないが、兎に角に自分の願に掛けて居たその願が、天の恵み、祖先の余徳に由て首尾能く叶うたことなれば、私の為めには第二の大願成就と云わねばならぬ。

人間の慾に際限なし左れば私は自分の既往を顧みれば遺憾なきのみか愉快な事ばかりであるが、扨人間の慾には際限のないもので、不平を云わすればマダ〳〵幾らもある。外国交際又は内国の憲法政治などに就て其れ是れと云う議論は政治家の事として差置き、私の生涯の中に出来し

て見たいと思う所は、全国男女の気品を次第々々に高尚に導いて真実文明の名に愧かしくないようにする事と、仏法にても耶蘇教にても孰れにても宜しい、之を引立てゝ多数の民心を和らげるようにする事と、大に金を役じて有形無形、高尚なる学理を研究させるようにする事と、凡そこの三ヶ条です。人は老しても無病なる限りは唯安閑としては居られず、私も今の通りに健全なる間は身に叶う丈けの力を尽す積です。

福翁自伝　終

青空文庫情報

底本：「福澤諭吉著作集　第12巻　福翁自伝　福澤全集緒言」慶應義塾大学出版会
　　2003（平成15）年11月17日初版第1刷発行
底本の親本：「福翁自傳」時事新報社
　　1899（明治32）年6月15日発行
初出：「時事新報」時事新報社
　　1898（明治31）年7月1日号～1899（明治32）年2月16日号
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、次の箇所では、大振りにつくっています。
「長崎遊学中の逸事」の「三ケ寺」
「兄弟中津に帰る」の「二ケ年」
「小石川に通う」の「護持院《ごじいん》ケ一原《はら》」
「女尊男卑の風俗に驚」の「安達《あだち》ケ一原《はら》」
「不在中桜田の事変」の「六ケ年」
「松木、五代、埼玉郡に潜む」の「六ケ月」
「下ノ関の攘夷」の「英仏蘭米四ケ国」

「剣術の全盛」の「関ヶ原合戦」
「発狂病人一条米国より帰来」の「一ヶ条」
※「翻」と「飜」、「子供」と「小供」、「煙草」と「烟草」、「普魯西」と「普魯士」、「華盛頓」と「華聖頓」、「大阪」と「大坂」、「函館」と「箱館」、「気※［＃「火＋稲のつくり」、第4水準2-79-87］」と「気焔」、「免《まぬか》れ」と「免《まぬ》かれ」、「一寸《ちよい》と」と「一寸《ちょいと》」と「一寸《ちょっと》」、「積《つも》り」と「積《つもり》」の混在は、底本通りです。
※底本の編者による語注は省略しました。
※窓見出しは、自筆草稿にある書き入れに従って底本編集時に追加されたもので、文章の途中に挿入されているものもあります。本テキストでは富田正文校注「福翁自伝」慶應義塾大学出版会、2003（平成15）年4月1日発行を参考に該当箇所に近い文章の切れ目に挿入しました。
※底本では正誤訂正を〔　〕に入れてルビのように示していますが。補遺は自筆草稿に従って〔　〕に入れて示しています。
※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。
入力：田中哲郎
校正：りゅうぞう
2017年5月17日作成

2017年7月21日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

福翁自伝
福翁自伝

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　福澤諭吉
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/